九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—34—

朝倉郡朝倉町所在長島遺跡の調査Ⅰ
（C地区）

1995

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

— 34 —

朝倉郡朝倉町所在長島遺跡の調査Ⅰ
（C地区）

a　長島遺跡　C地区航空写真

b　長島遺跡　C地区の調査

a　鋼製丸鞆の出土状況

b　鋼　製　丸　鞆

序

本書は，福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて，昭和54年度から実施している九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書であります。

今回の報告書は，昭和58年度に行った朝倉郡朝倉町所在の長島遺跡についてのもので，その第1冊目にあたります。長島遺跡の調査は昭和62年度，その他の九州横断自動車道関係の発掘調査も昭和63年度で完了しており，今後もその調査結果の報告書を，順次刊行していく予定であります。

調査に際しましては，地元の方々をはじめ関係各位のご協力をいただき，多大な成果をあげることができました。深く感謝いたします。

なお，本書が文化財愛護思想の普及，学術研究に役立てば幸甚です。

平成7年3月31日

福岡県教育委員会

教育長　光安　常喜

例　言

1．本書は昭和58年度と昭和62年度に福岡県教育委員会が，日本道路公団から委託を受けて，九州横断自動車道建設に伴って破壊される埋蔵文化財を発掘調査した長島遺跡の報告書の1冊目の報告書であり，九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告の34冊目にあたる。

2．本書の執筆は，栗原和彦・小池史哲・小田和利が分担した。

3．掲載の写真のうち，遺構は栗原と小池が，遺物は九州歴史資料館の石丸洋の指導のもとに北岡伸一と小池が撮影した。また，図版1の航空写真は国土地理院提供の写真を使用した。

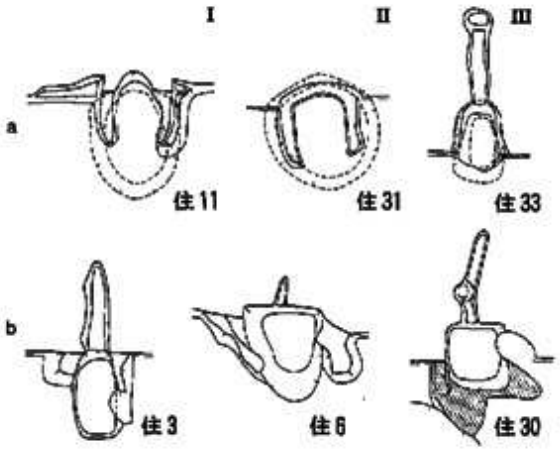
4．遺構図は，栗原・小池・小田のほかに木下修・高田一弘・日高正幸・高山浩一・東典子が実測した。また，遺物は小池と高瀬照美が実測した。なお，図面の浄書は小池と高瀬・塩足里美・近藤美恵子・秋吉邦子があたった。

5．出土遺物の整理にあたっては，九州歴史資料館の横田義章と岩瀬正信の協力を得た。

6．挿図で使用する方位は，座標北に統一している。

7．カマドについては以下のように分類した。

Ⅰ類は住居壁に袖部を直接貼付したタイプ（作り付け型）で，下部掘り込みを有するものをａとし，火床面が床面より一段下がるものをｂとした。Ⅱ・Ⅲ類は住居壁をコ字形に掘り込んで袖部を貼付したもので，突出度が弱いものをⅡ類，強いものをⅢ類とし，Ⅰ類同様にａ・ｂに細分した。煙道には先端にピットを有するものと素掘りのものとがある。



8．本書の編集は，小池史哲が担当した。

本 文 目 次

長島遺跡の調査（C地区）

Ⅰ　調査の経過 …… 1

Ⅱ　位置と環境 …… 8

Ⅲ　遺構と遺物 …… 11

1．住居跡 …… 11
2．掘立柱建物跡 …… 126
3．古　墳 …… 136
4．土壙墓 …… 139
5．通路状遺構 …… 146
6．その他の遺構と遺物 …… 148
1）甕棺墓 …… 148
2）縄文・弥生時代の遺物 …… 149
3）不整形土坑 …… 158
4）落ち込み遺構 …… 163
5）柱穴状ピット出土遺物 …… 166
6）包含層出土の遺物 …… 171
7）表採遺物 …… 178

Ⅳ　おわりに …… 181

図 版 目 次

巻頭図版1　a　長島遺跡C地区航空写真

　　b　長島遺跡C地区の調査

　2　a　銅製丸鞆の出土状況

　　b　銅製丸鞆

本文対照頁

図　版　1　　長島遺跡周辺航空写真（国土地理院提供　KU-76-2X C11-35）…… 1

　2－1　長島遺跡全景航空写真（南西上空から）…… 8

　　－2　長島遺跡C地区航空写真（北上空から）…… 8

　3－1　調査区全景航空写真（東上空から）…… 11

　　－2　調査区全景航空写真（西上空から）…… 11

　4－1　調査区東部（西から）…… 11

　　－2　調査区東端部（西から）…… 11

　5－1　1号住居跡（南から）…… 11

　　－2　2号住居跡（南から）…… 15

　6－1　3号住居跡カマド（東から）…… 20

　　－2　8号住居跡カマド（南から）…… 32

　　－3　完掘後の8号住居跡カマド…… 32

　7－1　11号住居跡カマド（東から）…… 37

　　－2　22号住居跡カマド（東から）…… 59

　8－1　13・17号住居跡カマド（南から）…… 42

　　－2　16号住居跡カマド（東から）…… 47

　　－3　18号住居跡カマド（南から）…… 54

　9－1　19号住居跡カマド（東から）…… 56

　　－2　23号住居跡東カマド（西から）…… 63

　　－3　23号住居跡遺物出土状況…… 63

　10－1　24号住居跡（南から）…… 66

　　－2　24号住居跡カマド（南から）…… 68

　　－3　銙帯出土状況…… 69

　11－1　25号住居跡（南から）…… 69

　　－2　25号住居跡カマド（南から）…… 69

図　版　12－1　26・27号住居跡（南から）……73
－2　26号住居跡カマド（南から）……73
13－1　28号住居跡（南から）……79
－2　29号住居跡（南から）……80
－3　30号住居跡（南から）……80
14－1　31号住居跡（南から）……81
－2　31号住居跡カマド（南から）……82
15－1　32号住居跡（南から）……82
－2　32号住居跡カマド（南から）……83
16－1　33号住居跡（南から）……85
－2　33号住居跡カマド（南から）……85
17－1　34号住居跡（南から）……87
－2　34号住居跡カマド（南から）……89
18－1　35号住居跡（南から）……90
－2　35号住居跡カマド（南から）……91
－3　35号住居跡カマド（下部）……91
19－1　36号住居跡（南から）……94
－2　36号住居跡カマド（南から）……94
－3　37号住居跡（南から）……98
20－1　37号住居跡カマド（南から）……98
－2　38号住居跡（南から）……99
－3　38号住居跡カマド（南から）……100
21－1　39号住居跡（南から）……101
－2　39号住居跡カマド（南から）……103
22－1　41～45号住居跡（東から）……104
－2　41号住居跡カマド（南から）……104
23－1　42号住居跡（東から）……105
－2　44号住居跡（東から）……109
24－1　42号住居跡カマド（東から）……107
－2　44号住居跡カマド（東から）……109
－3　44号住居跡カマド（東から）……109
25－1　46号住居跡（南から）……114
－2　46号住居跡カマド（南から）……114

図　版　25－3　47号住居跡（南から）……114
26－1　48号住居跡（南から）……116
－2　48号住居跡カマド（南から）……117
27－1　49～51号住居跡（南から）……117
－2　49号住居跡（東から）……117
－3　49号住居跡カマド（東から）……120
28－1　50・51号住居跡（南から）……121
－2　50号住居跡カマド（南から）……121
－3　51号住居跡カマド（南から）……125
29－1　1・2号掘立柱建物（南から）……126
－2　7号掘立柱建物（東から）……132
30－1　9号掘立柱建物（南から）……132
－2　9号掘立柱建物（東から）……132
－3　10号掘立柱建物（東から）……133
31－1　1号墳全景（南から）……137
－2　周溝堆積状況1……137
－3　周溝堆積状況2……137
－4　周溝堆積状況3……137
32－1　3号土壙墓（北西から）……141
－2　3号土壙墓遺物出土状況……141
－3　10号土壙墓（北から）……143
33－1　東端調査区全景と道路状遺構（西から）……148
－2　道路状遺構……146
34－1　調査区北壁土層堆積状況1……163
－2　調査区北壁土層堆積状況2……163
－3　縄文時代甕棺墓（東から）……148
35　住居跡出土土器1……13
36　住居跡出土土器2……42
37　住居跡出土土器3……69
38　住居跡出土土器4……93
39　住居跡・土壙墓・古墳出土土器……117
40　縄文土器1……149
41　縄文土器2……149

図 版 42 縄文時代の石器・土製品 ……155
43 不整形土壙・落ち込み出土土器 ……159
44 柱穴状ピット出土土器 ……166
45 包含層出土土器 ……171
46 表採等の土器 ……178
47 住居跡等出土土製品・鉄製品1・銅製品・玉類 …… 15
48 出土石器・鉄製品2・線刻文様 …… 73

挿 図 目 次

第 1 図 九州横断自動車関係道路線図（1/780,00） …… 2
第 2 図 長島遺跡周辺地形図（1/10,000） …… 6
第 3 図 長島遺跡周辺遺跡分布図（1/50,000，朝倉町管内図を改変） …… 9
第 4 図 長島遺跡地形図（1/2,000） ……折込み
第 5 図 C地区遺構配置概略図（1/1,000） …… 11
第 6 図 1号住居跡実測図（1/60） …… 12
第 7 図 1号住居跡カマド実測図（1/30） …… 12
第 8 図 1号住居跡出土土器実測図1（1/3） …… 13
第 9 図 1号住居跡出土土器実測図2（1/3） …… 14
第 10 図 2号住居跡実測図（1/60） …… 16
第 11 図 2号住居跡カマド実測図（1/30） …… 16
第 12 図 出土土製品実測図（1/2） …… 17
第 13 図 2～4号住居跡出土土器実測図（1/3） …… 18
第 14 図 3号住居跡実測図（1/60） …… 19
第 15 図 3号住居跡カマド実測図（1/30） …… 20
第 16 図 4号住居跡実測図（1/60） …… 22
第 17 図 5号住居跡実測図（1/60） …… 23
第 18 図 5号住居跡カマド実測図（1/30） …… 23
第 19 図 5・6号住居跡出土土器実測図（1/3） …… 25
第 20 図 6号住居跡実測図（1/60） …… 26
第 21 図 6号住居跡カマド実測図（1/30） …… 27

第 22 図　7号住居跡実測図（1/60）…… 28
第 23 図　7号住居跡カマド実測図（1/30）…… 29
第 24 図　7・8号住居跡出土土器実測図（1/3）…… 30
第 25 図　8号住居跡実測図（1/60）…… 31
第 26 図　8号住居跡カマド実測図（1/30）…… 32
第 27 図　9号住居跡実測図（1/60）…… 34
第 28 図　9号住居跡カマド実測図（1/30）…… 34
第 29 図　9～11号住居跡出土土器実測図（1/3）…… 35
第 30 図　10・11号住居跡実測図（1/60）…… 37
第 31 図　11号住居跡カマド実測図（1/30）…… 38
第 32 図　12号住居跡実測図（1/60）…… 39
第 33 図　12号住居跡カマド実測図（1/30）…… 39
第 34 図　12号住居跡出土土器実測図（1/3）…… 40
第 35 図　13・14・17号住居跡実測図（1/60）…… 41
第 36 図　13・17号住居跡カマド実測図（1/30）…… 42
第 37 図　13号住居跡出土土器実測図（1/3）…… 43
第 38 図　14～16号住居跡出土土器実測図（1/3）…… 44
第 39 図　15号住居跡実測図（1/60）…… 46
第 40 図　16号住居跡実測図（1/60）…… 47
第 41 図　16号住居跡カマド実測図（1/30）…… 48
第 42 図　16号住居跡出土土器実測図2（1/3）…… 49
第 43 図　9～15号住居跡付近出土土器実測図（1/3）…… 51
第 44 図　18～20号住居跡実測図（1/60）…… 53
第 45 図　18号住居跡カマド実測図（1/30）…… 54
第 46 図　18～21号住居跡出土土器実測図（1/3）…… 55
第 47 図　19号住居跡カマド実測図（1/30）…… 56
第 48 図　21・22号住居跡実測図（1/60）…… 58
第 49 図　22号住居跡カマド実測図（1/30）…… 59
第 50 図　22・23号住居跡出土土器実測図（1/3）…… 60
第 51 図　23号住居跡実測図（1/60）…… 61
第 52 図　23号住居跡北カマド実測図（1/30）…… 62
第 53 図　23号住居跡東カマド実測図（1/30）…… 62
第 54 図　18～23号住居跡付近出土土器実測図（1/3）…… 64

第 55 図　24号住居跡実測図（1 / 60）…… 65
第 56 図　24号住居跡カマド実測図（1 / 30）…… 66
第 57 図　24号住居跡出土土器実測図（1 / 3）…… 67
第 58 図　出土銅製品実測図（1 / 2）…… 69
第 59 図　25号住居跡実測図（1 / 60）…… 70
第 60 図　25号住居跡カマド実測図（1 / 30）…… 71
第 61 図　25号住居跡出土土器実測図（1 / 3）…… 71
第 62 図　出土鉄製品実測図 1（1 / 2）…… 72
第 63 図　26・27号住居跡実測図（1 / 60）…… 74
第 64 図　26号住居跡カマド実測図（1 / 30）…… 74
第 65 図　26号住居跡出土土器実測図（1 / 3）…… 75
第 66 図　出土石器実測図（1 / 3）…… 76
第 67 図　27～29・31号住居跡出土土器実測図（1 / 3）…… 78
第 68 図　28・29号住居跡実測図（1 / 60）…… 79
第 69 図　30号住居跡実測図（1 / 60）…… 79
第 70 図　30号住居跡カマド実測図（1 / 30）…… 80
第 71 図　31号住居跡実測図（1 / 60）…… 81
第 72 図　31号住居跡カマド実測図（1 / 30）…… 82
第 73 図　32号住居跡実測図（1 / 60）…… 83
第 74 図　32号住居跡カマド実測図（1 / 30）…… 83
第 75 図　32号住居跡出土土器実測図（1 / 3）…… 84
第 76 図　33・34号住居跡実測図（1 / 60）…… 86
第 77 図　33号住居跡カマド実測図（1 / 30）…… 87
第 78 図　34号住居跡カマド実測図（1 / 30）…… 87
第 79 図　33・34号住居跡出土土器実測図（1 / 3）…… 88
第 80 図　出土玉類実測図（1/1）…… 90
第 81 図　35号住居跡実測図（1 / 60）…… 90
第 82 図　35号住居跡カマド実測図（1 / 30）…… 91
第 83 図　35号住居跡出土土器実測図 1（1 / 3）…… 92
第 84 図　35号住居跡出土土器実測図 2（1 / 3）…… 93
第 85 図　36・37号住居跡実測図（1 / 60）…… 95
第 86 図　36号住居跡カマド実測図（1 / 30）…… 96
第 87 図　37号住居跡カマド実測図（1 / 30）…… 96

第 88 図　36・37号住居跡出土土器実測図（1/3）……97
第 89 図　38号住居跡実測図（1/60）……99
第 90 図　38号住居跡カマド実測図（1/30）……100
第 91 図　38・39号住居跡出土土器実測図（1/3）……101
第 92 図　39号住居跡実測図（1/60）……102
第 93 図　39号住居跡カマド実測図（1/30）……102
第 94 図　40号住居跡実測図（1/60）……103
第 95 図　41・42号住居跡実測図（1/60）……104
第 96 図　41号住居跡カマド実測図（1/30）……105
第 97 図　41～43号住居跡出土土器実測図（1/3）……106
第 98 図　42号住居跡カマド実測図（1/30）……107
第 99 図　43～45号住居跡実測図（1/60）……108
第 100 図　44号住居跡カマド実測図（1/30）……110
第 101 図　44～47号住居跡出土土器実測図（1/3）……111
第 102 図　46・47号住居跡実測図（1/60）……113
第 103 図　46号住居跡カマド実測図（1/30）……114
第 104 図　48号住居跡実測図（1/60）……115
第 105 図　48号住居跡カマド実測図（1/30）……116
第 106 図　48・49号住居跡出土土器実測図（1/3）……118
第 107 図　49～51号住居跡実測図（1/60）……119
第 108 図　49号住居跡カマド実測図（1/30）……120
第 109 図　50号住居跡カマド実測図（1/30）……121
第 110 図　50号住居跡出土土器実測図1（1/3）……122
第 111 図　50・51号住居跡出土土器実測図（1/3）……123
第 112 図　51号住居跡カマド実測図（1/30）……125
第 113 図　1号建物跡実測図（1/60）……126
第 114 図　2号建物跡実測図（1/60）……127
第 115 図　3・11号建物跡実測図（1/60）……128
第 116 図　4・5号建物跡実測図（1/60）……129
第 117 図　6号建物跡実測図（1/60）……130
第 118 図　7号建物跡実測図（1/60）……131
第 119 図　8号建物跡実測図（1/60）……133
第 120 図　9号建物跡実測図（1/60）……134

第121図　10号建物跡実測図（1/60）……135
第122図　1号墳墳丘・周溝実測図（1/100）……136
第123図　1号墳周溝断面実測図（1/60）……136
第124図　1号墳出土土器実測図（1/3）……137
第125図　1号墳南方斜面出土土器実測図（1/3）……138
第126図　1・3号土壙墓出土土器実測図（1/3）……139
第127図　1～3号土壙墓実測図（1/30）……140
第128図　4～6号土壙墓実測図（1/30）……142
第129図　7～10号土壙墓実測図（1/30）……144
第130図　11～14号土壙墓実測図（1/30）……145
第131図　通路状遺構実測図（1/100）……147
第132図　道路状遺構実測図（1/120）……147
第133図　甕棺墓実測図（1/30）……148
第134図　出土縄文土器実測図1（1/3）……150
第135図　出土縄文土器実測図2（1/3）……151
第136図　出土縄文土器実測図3（1/3）……152
第137図　出土縄文土器実測図4（1/3）……154
第138図　出土縄文時代石器実測図1（1/2）……155
第139図　出土縄文時代石器実測図2（1/3）……156
第140図　出土縄文時代土製品実測図（1/3）……158
第141図　出土弥生土器実測図（1/4）……158
第142図　不整形土坑実測図（1/60）……159
第143図　不整形土坑出土土器実測図1（1/3）……160
第144図　不整形土坑出土土器実測図2（1/3）……161
第145図　不整形土坑出土土器実測図3（1/3）……162
第146図　落ち込み遺構実測図（1/80）……164
第147図　落ち込み遺構出土土器実測図（1/3）……165
第148図　出土鉄製品実測図2（1/2）……166
第149図　建物跡柱穴・柱穴状ピット出土土器実測図1（1/3）……167
第150図　柱穴状ピット出土土器実測図2（1/3）……168
第151図　柱穴状ピット出土土器実測図3（1/3）……170
第152図　包含層出土土器実測図1（1/3）……171
第153図　包含層出土土器実測図2（1/3）……172

第154図　包含層出土土器実測図3（1/3）……174
第155図　包含層出土土器実測図4（1/3）……175
第156図　包含層出土土器実測図5（1/3）……177
第157図　表採土器実測図（1/3）……179
第158図　区外採集石器実測図（1/3）……180
第159図　伝長島遺跡出土土器実測図（1/3）……181

表目次

表1　1号住居跡出土土錘一覧表……15

付図目次

付図1　長島遺跡遺構配置図（1/300）
付図2　長島遺跡C地区遺構配置図（1/200）

I 調査の経過

発掘調査の経過

長島遺跡の最初の調査は，昭和57年９月１日から昭和58年10月18日まで実施した。

９月１日（水）から，石山が担当して，ユンボを用いて，試掘および表土剥ぎを実施した。

10月１日（金）から石山と小池が担当し，２日までの間に器材を搬入し，テントを設営する。

10月４日（月）からはＢ地区で，遺構検出作業を始めたが，検出面の土が乾燥して硬く，作業員も初めて文化財発掘調査に携わって不慣れなために難航するが，溝状遺構などを検出した。この溝状遺構内には一部中世遺物の混入がみられたものの，弥生終末期頃の土器類が多数出土していた。また周辺からは土壙などの遺構も検出された。

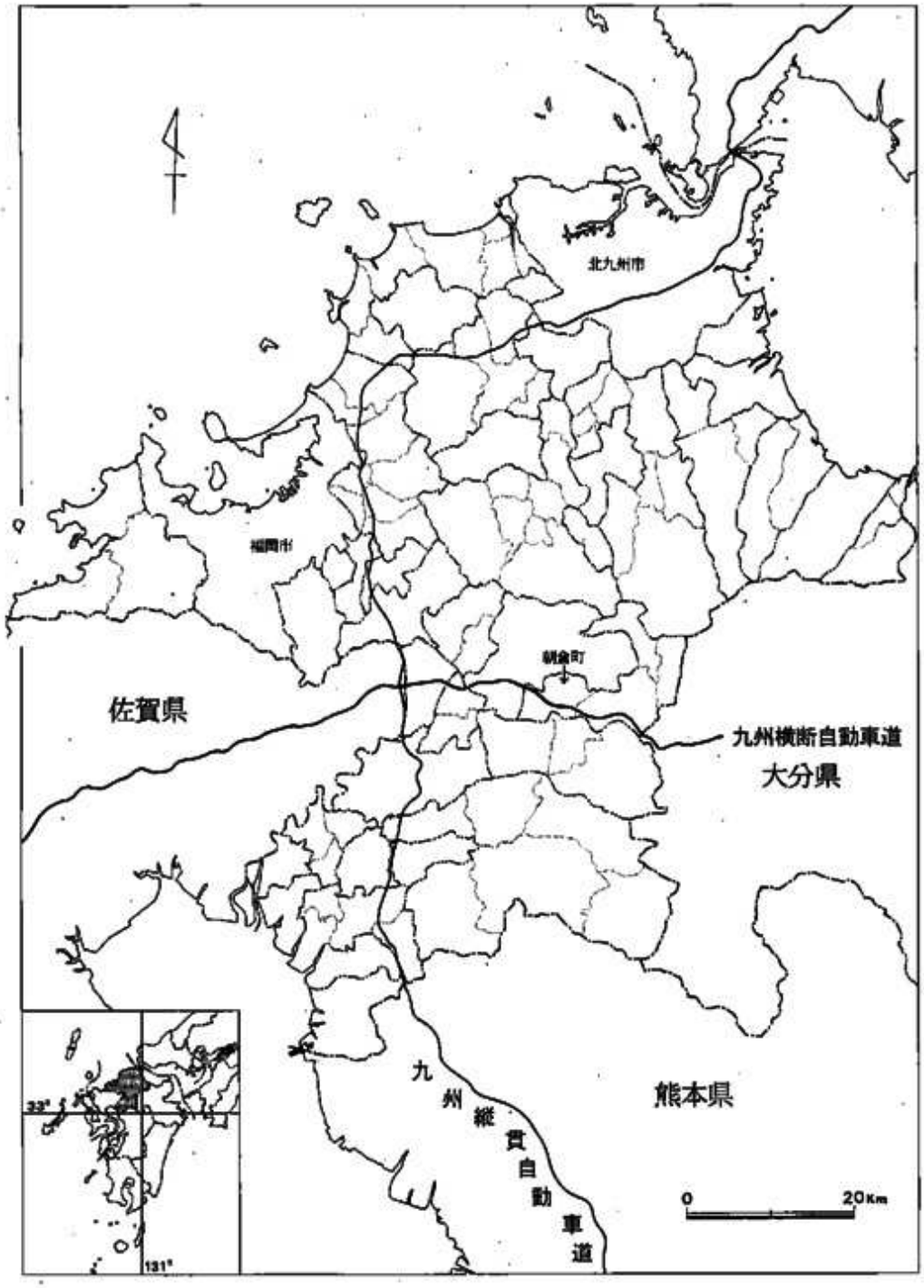
長島遺跡では，まず北側パイロット道路（山田採土場から本線区内の盛土工事用の土砂を搬出する工事専用仮設道路）分の調査が急がれていたが，路線外の畑地への進入路を確保する必要があり，農道敷部分と，各畑地区画への取り付き部分については，発掘しえず，谷が迫るＢ地区西よりでは排土置き場にも制限があって，充分な調査範囲を得ていない状況であった。このような理由から，Ｂ地区では仮にＢ－３地区あるいはＢ－４地区という呼称で，Ｂ－12区までの小区画に分けた調査であった。またＣ地区にもパイロット道路分の調査が急がれた。Ｃ地区では路線幅での平坦部が広く，また排土を調査の終了したＢ地区側に置くには農道の問題で不都合があったので，Ｃ地区東南側に排土を寄せて積み上げることになり，10月下旬からＣ地区の表土を除去し始めたが，排土の移動にかなりの時間を要することとなった。

Ｂ地区の１次調査は12月18日（土）で終了し，小池は他遺跡の報告書作成業務に従事することになった。また石山は山田採土場までのパイロット用地内の試掘調査を担当した。

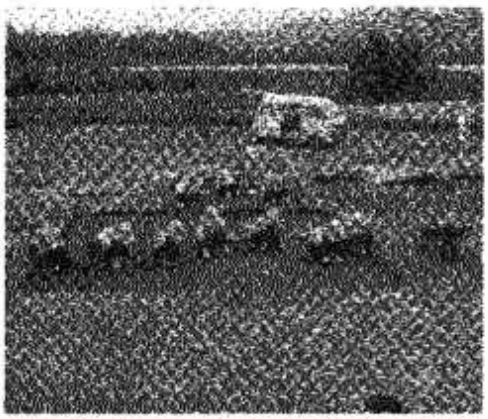
昭和58年１月からの長島遺跡の調査は，栗原が担当し，Ｃ地区北側半分の調査に入った。Ｃ地区北側から中央部西半分では，住居跡が重複していて，その前後関係の判定は難しく，かなりの時間を要することとなった。谷部分との比高差があって，調査区域に水田・水路がなく，降雨がなければ乾燥したままという状況が，要因の一つでもある。

６月１日（水）から，再度担当に小池が加わった。長島遺跡の東側にある中妙見遺跡部分ではパイロット部分は試掘後削られたが，残された部分に遺構の存在が予想されたので，表土剥ぎを実施し，住居跡などを発見した。このため長島遺跡と並行して発掘調査を実施し，６月８日までに終了した。

７月１日（金）これまで排土搬出に８輪ダンプを使用していたが，遺構面を痛めるので，電



第1図　九州横断自動車道関係路線図（1／780,000）



調査風景

動ベルトコンベアを導入して連結する。従前の発動機付きベルコンと違って，大型発電機の騒音以外，作業場所では静かである。

7月18日（月）各大学とも夏休みに入る頃で，この日から別府大学の学生が2名参加する。この参加者を歓迎するかのように，24号住居跡から青銅製の丸鞆が出土する。

7月26日（火）九州大学・皇学館大学の学生も調査に加わる。15日の降雨以来曇の日はあるが降雨は久しく無い。晴れた時の陽射しは強い。29日昼休みに申し訳程度のにわか雨が降るが，期待外れに終わる。

8月9日（火）午後にわか雨が久しぶりに降り，夕方まで遺構検出作業を集中して実施する。

8月16日（火）事務処理などで外れていた栗原が再度山田採土場の試掘・表土剥ぎ調査を担当する。パイロット道路の工事中に鏡塚西遺跡が発見され，工事施工業者と協議して，工事を19日まで中断させて，他地点調査中の作業員の来援も得て急きょ発掘調査を実施する。

8月31日（水）ベルトコンベアを取り外し，写真撮影のための清掃作業を行う。

9月7日（水）第29地点（源の東遺跡）の発掘作業を開始する。

9月8日（木）パイロット道路工事中に農道取り付け部分から石棺蓋が露出したと，工事施工業者から連絡を受ける（小松原・堤古墳）。

9月9日（金）ヘリコプターに小池と伊崎が搭乗して写真撮影する。天候不良。

9月13日（火）小松原・堤古墳の調査に入る。人骨3体が埋葬され，鉄刀・鉄鏃先などが副葬されていたが，調査は並行して実施し22日まで要した。

9月15日（木）長島遺跡C地区は中央部から東側を明け渡し，削平工事が始まる。

10月3日（月）実測図の補足と51号・52号住居跡の写真撮影を行ない，全ての作業を終了した。

長島遺跡のB地区1次調査と，C地区の調査は，ほぼ1年の歳月を要した。この間に出土した遺物は，パンコンテナ200箱以上に及ぶ。

遺物の整理

長島遺跡の出土遺物整理は，土器・石器類を福岡県教育庁文化課甘木事務所，鉄製品等を九州歴史資料館において昭和61年度以降に実施したが，報告書の作成年度は諸般の事情で平成6年度以降ということになった。今回はこのうちC地区で実施したものについて報告する。

調査関係者

昭和57・58年度と昭和62年度の調査関係者は下記のとおりである。

	57	58	62
日本道路公団福岡建設局			
局　長	持永竜一郎	今村　浩三	杉田　美昭
次　長			菱刈　庄二
総務部長	田代　勝重	落合　一彦	安元　富次
管理課長	布川　堯	梅田　道人	森　宏之
管理課長代理	野口　利夫	野口　利夫	三野　徳博
日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所			
所　長	江口　正一	乗松　紀三	風間　徹
副所長	矢野　浩司	西田　功	西田　功
〃（技術担当）	中村　義治	中村　義治	友田　義則
庶務課長	森本　太助	松下　幸男	徳永　登
用地課長	溝口　荻男	岩下　剛	松尾　伸夫
工務課長	深町　貞光	山口　宗雄	後藤二郎彦
小郡工事区工事長	田口　裕	友田　義則	
甘木工事区工事長	瀬戸　邦雄	猪狩　宗雄	
朝倉工事区工事長	吉永　英一	平沢　正	上野　満
杷木工事区工事長		前田　雄一	小沢　公共
福岡県教育委員会			
教育長	友野　隆	友野　隆	竹井　宏
教育次長	守屋　尚	安倍　徹	大鶴　英雄
管理部長	森　英俊	伊藤　博之	
指導第二部長			大平　岩男
文化課長	藤井　功	藤井　功	窯田　康徳
〃　課長補佐	中村　一世	中村　一世	平　聖峰
課長技術補佐			宮小路賀宏
〃　庶務係長	内山　孝之	松尾　満	加藤　俊一
〃　事務主査	三島　洋輝	長谷川伸弘	竹内　洋征
〃　主任主事	長谷川伸弘		

	57	58	62
調　査			
文化課調査第2係長	栗原　和彦	栗原　和彦	
調査班総括			柳田　康雄
技術主査			井上　裕弘
〃			木下　修
〃　主任技師	石山　勲	児玉　真一	中間　研志
〃	浜田　信也	新原　正典	佐々木隆彦
〃	児玉　真一	中間　研志	伊崎　俊秋
〃	新原　正典	佐々木隆彦	
〃	中間　研志	小池　史哲	
〃	小池　史哲		
〃　技　師			小田　和利
〃　文化財専門員			木村幾多郎
〃　臨時職員			日高　正幸
調査補助員	高田　一弘	高田　一弘	高田　一弘
	日高　正幸	日高　正幸	武田　光正
	高山　浩一	小田　和利	
		高山　浩一	

長島遺跡に係わる昭和57・58年度の発掘調査は，栗原と石山・小池が担当し，高田・日高・小田・高山が補助した。一方昭和62年度の発掘調査は木下・小田が担当した。

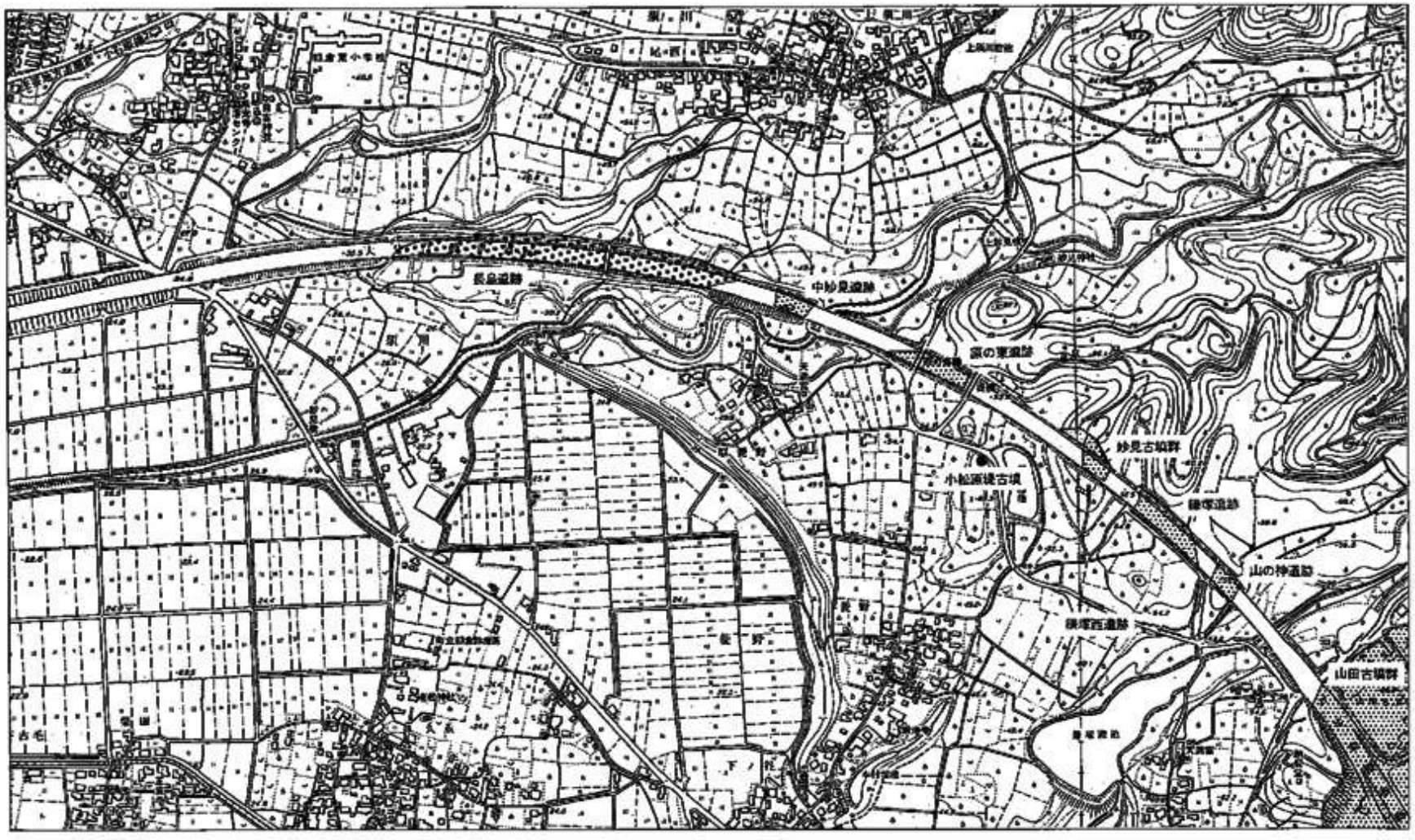
昭和57・58年度の発掘作業には次の方々が参加された。

天野ヨシエ・岩下キヨ子・岩下シノブ・岩下スミ子・岩下タマエ・岩下チヅ子・岩下テル子・岩下トミ子・岩下陽子・岩下ヨシ子・岩下ヤナエ・半田久子・半田松子・星野ミエ子・星野美代子・星野百合子・星野瞳子・松尾テル子・池田和博・東典子・藤村卓・安部登喜義・奥村貴由美・吉村昌代

また，朝倉町役場建設課の古賀隆信氏。工事施工業者の塩見組からは種々の協力を得た。

報告書作成時の関係者

本書作成に係わる，平成6年度の関係者は次のとおりである。



第2図　長島遺跡周辺地形図（1／10,000）

日本道路公団福岡建設局

	局　長	倉沢　真也
	次　長	三重野堅二
	総務部長	水田　章佳
	管理課長	三根　敬正
	管理課長代理	岡　芳則

福岡県教育委員会

総　括	教育長	光安　常喜
	教育次長	松枝　功
	指導第二部長	丸林　茂夫
	文化課長	松尾　正俊
	〃課長補佐	清水　圭輔
	〃文化財保護室長	柳田　康雄
	〃室長補佐	井上　裕弘
	〃調査班総括	橋口　達也
庶　務	文化課管理係長	杉光　誠
	〃管理係主任主事	高田　裕康
整　理	九州歴史資料館調査課長	栗原　和彦（執筆担当）
	文化課文化財保護室技術主査	小池　史哲（　〃　）
	九州歴史資料館主任技師	小田　和利（　〃　）
	文化課整理指導員	岩瀬　正信
	〃	北岡　伸一

出土遺物の整理は，文化課甘木事務所で行なったが，土器類の水洗・接合・復原には小島佐枝子・中塩屋リツ子・石井紀美子・藤井カオル，土器類の実測作業には高瀬照美，遺構図の整理・浄書には塩足里美・渡辺輝子・高瀬照美・近藤美恵子・秋吉邦子，鉄製品の保存処理には九州歴史資料館の横田義章参事補佐などの協力を得た。このほかにも発掘作業・報告書作成作業を通じて，多くの方々の協力を得ることができた。感謝に耐えない。（小池）

Ⅱ　位置と環境

長島（Nagashima）遺跡は，福岡県朝倉郡朝倉町大字須川字長島1943～1954・1960～1968・1990・1991・1996～2014に所在し，字長島の大半が調査対象範囲である。遺跡の東南側は字下妙見との境にもなる町道文塚・下妙見線が丘陵上面と崖との境目部分を通っている。また北西側では丘陵端の崖下に字西鶴との境にもなる町道長島・金町線が通っている。そして東西の距離は約550mにわたる。

遺跡は，朝倉山塊から派生する中位段丘の先端部に立地していて，西側先端での標高40.6m，北東側で標高51.6mを測る。遺跡の南側は筑後川が形成した段丘崖であり，眼下に筑後川の平坦面と国道386号線を望むことができる。ところが遺跡の南側のみならず東南側・北西側も崖である。東側の山坂谷から流下する妙見川の浸蝕による開析谷との比高は約15mにも達し，北西側の上須川の開析谷との比高も10mを越している。

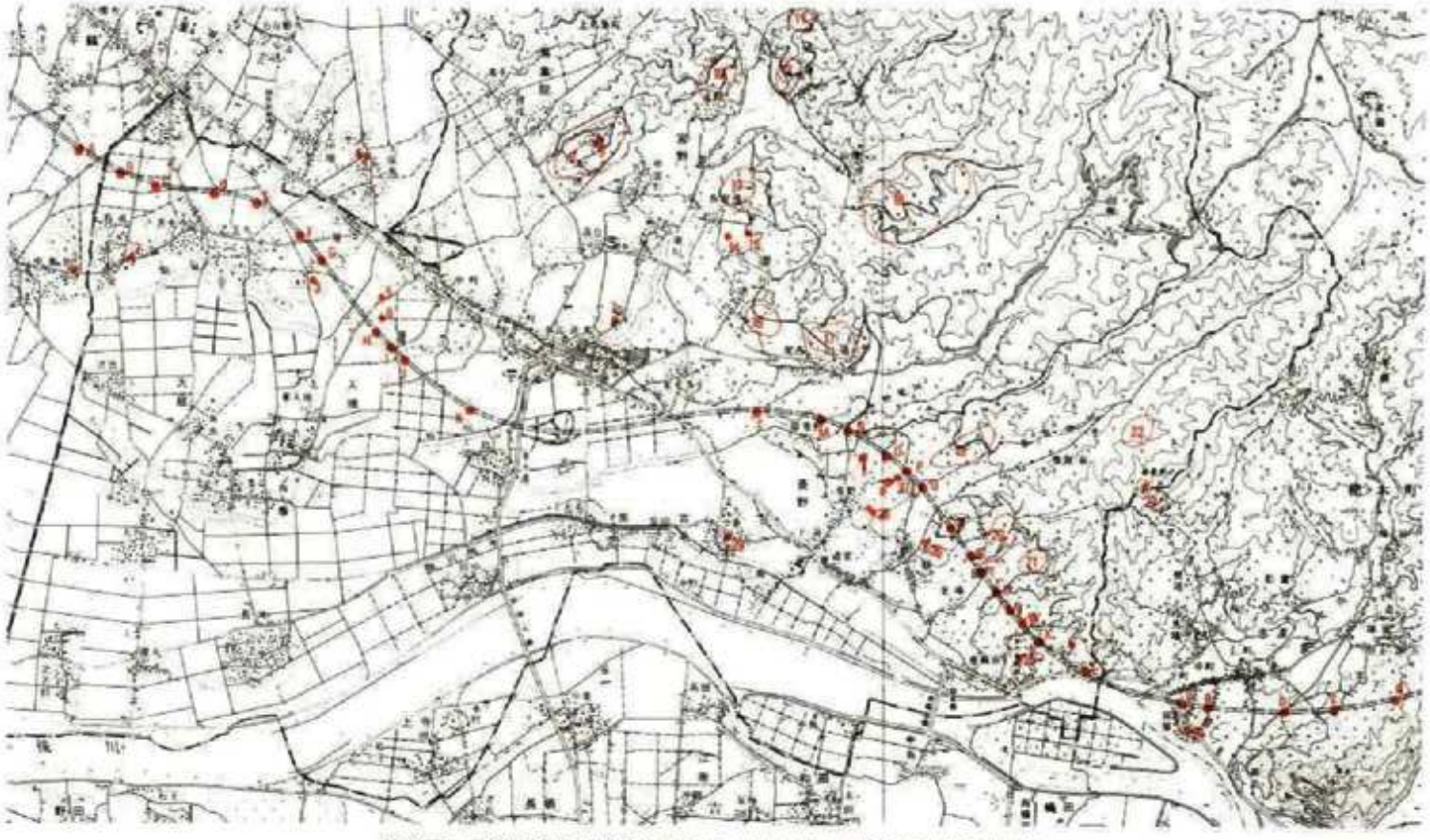
以前はこの崖の縁などに櫨の木が多数植えられていたといわれるが，調査時には南側崖部分で栗・銀杏の木など，開析谷側の崖では孟宗竹がめだち，遺跡部分の平坦面では柿栽培と早生キャベツなどの蔬菜栽培が盛んであった。

歴史的環境

朝倉町周辺では，斉明天皇の朝倉橘広庭宮推定地の問題などから古代遺跡に対する関心は高く，古くから遺跡・遺物が注目・紹介されてきた。加えて，九州横断自動車道建設に伴う発掘調査は，長大な範囲での遺跡・遺物群を露出させることとなった。さらに，道路交通網の整備などから派生した種々の開発に伴う発掘調査も増加している。これらを資料をもとに周辺の歴史的環境についてみることにしよう。

旧石器時代遺跡は，長島遺跡と妙見川を挟んで位置する原の東遺跡でナイフ形石器などの出土する包含層が検出されている。朝倉町山ノ神遺跡・上ノ宿遺跡でもナイフ形石器が出土し，約21000年前のＡＴ火山灰の降下の痕跡もある。

縄文時代では，原の東遺跡・金場遺跡・上ノ宿遺跡で早期の石組炉跡・集石遺構が発見されている。押型文土器などの出土は甘木市・朝倉町・杷木町の路線内遺跡の過半数でみとめられるような状況であり，筑後川対岸の水縄山麓部の遺跡からも出土している。前期の遺構・遺物は金場遺跡・上ノ宿遺跡・稗畑遺跡・外之隈遺跡・杷木町天園遺跡などから，中期は上ノ宿遺跡・稗畑遺跡などでみられる。後期の例は上ノ宿遺跡・稗畑遺跡・杷木町中町裏遺跡・上池田



第3図　長島遺跡周辺遺跡分布図（1/50,000，朝倉町管内図を改変）

A　塔ノ上遺跡　B　大瀬端遺跡　C　石成久保遺跡　D　中道遺跡　E　西法寺遺跡　F　大庭久保遺跡　G　上の原遺跡
H　狐塚南遺跡　I　治部ノ上遺跡　J　座禅寺遺跡　K　才田遺跡　L　長島遺跡　M　中妙見遺跡　N　原の東遺跡　O　妙見古墳群
P　鎌塚遺跡　Q　山ノ神遺跡　R　山田遺跡群　S　長田遺跡　T　金場遺跡　U　上ノ宿遺跡　V　恵蘇山遺跡　W　稗畑遺跡
X　大迫遺跡　Y　外之際遺跡　Z　杷木宮原遺跡　a　中町裏遺跡　b　志波桑ノ本遺跡　c　志波岡本遺跡　d　江栗遺跡
e　鎌塚西遺跡　f　小松原堤古墳　1　金川中島田遺跡　2　石成古墳　3　上原遺跡　4　久保島遺跡　5　宇土ノ上遺跡
6　狐塚古墳　7　八並遺跡　8　宮地嶽古墳群　9　宮地嶽前方後円墳　10　立野古墳群　11　宮野A古墳群　12　宮野B古墳群
13　長安寺古墳群　14　朝倉橘廣庭宮推定地　15　長安寺廃寺　16　小隈古墳群　17　上須川古墳群　18　山後山古墳群　19　山ノ神古墳群
20　山田古墳群　21　山田柳古墳群　22　奈良ヶ谷古墳群　23　麻底良城跡　24　志波宝満宮古墳　25　恵蘇八幡宮古墳群
26　山田ウラ山遺跡　27　鎌塚古墳　28　剣塚古墳　29　古毛遺跡

遺跡や，浮羽町柳瀬遺跡など水縄山麓部の遺跡や吉井町月岡古墳周辺からの出土がある。晩期の遺物も路線内の遺跡の多くから発見され，水縄山麓部の遺跡・吉井町塚堂遺跡など筑後川自然堤防上の遺跡からも出土している。

弥生時代には，初期の遺跡として支石墓4基や竪穴住居跡群などが発見された杷木町畑田遺跡がある。前期から後期の住居跡・貯蔵穴群は，中道遺跡・上の原遺跡・長島遺跡・原の東遺跡・鎌塚遺跡・長田遺跡・杷木宮原遺跡・中町裏遺跡・吉井町大聖遺跡・鷹取五反田遺跡などで調査されているが，近年話題になった甘木市平塚川添遺跡は筑後川支流小石原川の氾濫原の微高地に立地する旧河川流路を利用した環壕遺跡だとされる。墓地では中期初頭～前半の木棺墓・甕棺墓が，大庭久保遺跡・上の原遺跡・原の東遺跡・上ノ宿遺跡・杷木宮原遺跡・中町裏遺跡などで調査され，後期末前後の墓地の調査も，長島遺跡・外之隈遺跡・狐塚南遺跡・宇土ノ上遺跡などで実施された。

古墳時代では，朝倉町座禅寺遺跡・治部ノ上遺跡などで方形周溝墓で調査され，前期の墓地が中位段丘上に占地する。中期の大型古墳や前方後円墳は筑後川対岸の微高地などに，月岡古墳・塚堂古墳・日岡古墳などが築かれている。後期古墳は高位段丘縁などで古墳群を形成している。朝倉町山後山古墳群も最近調査された。

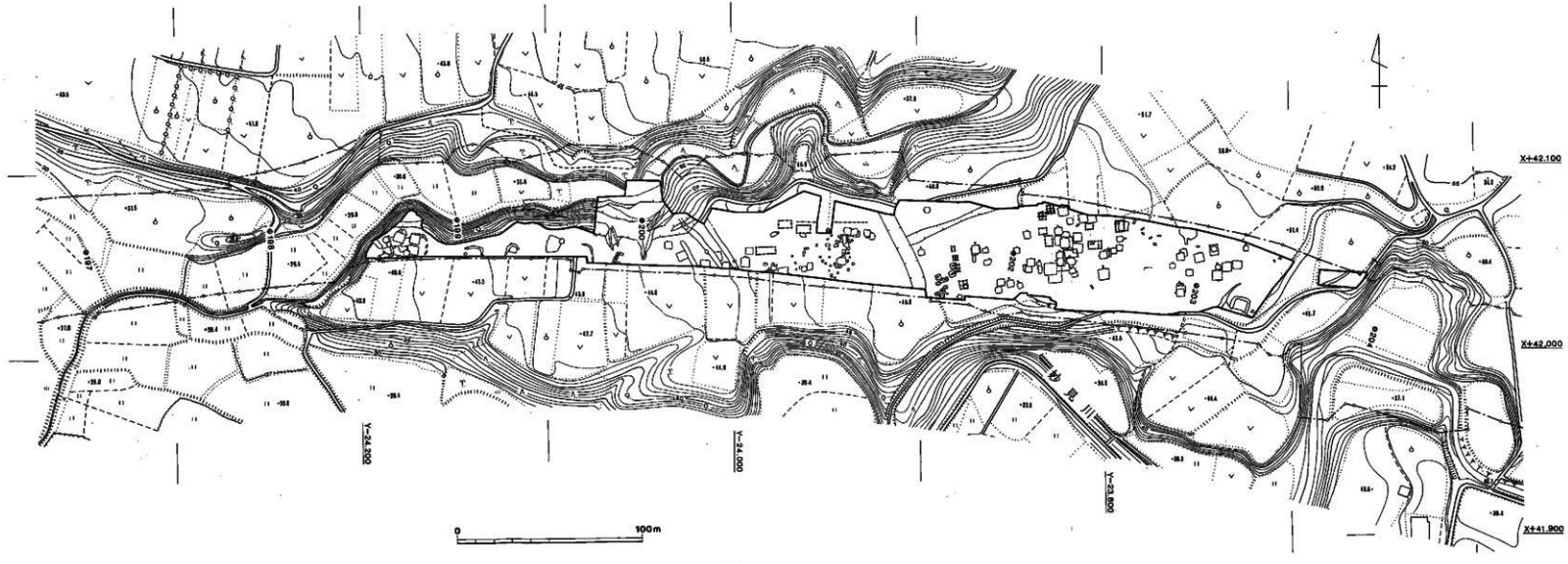
奈良・平安時代の集落は，筑後川右岸の中位段丘上の平坦面に位置する中道遺跡・大庭久保遺跡・上の原遺跡・長島遺跡・鎌塚遺跡・長田遺跡などで調査された。大迫遺跡・杷木宮原遺跡・志波桑ノ本遺跡・志波岡本遺跡では同一規模で主軸方向の共通する大型掘立柱建物跡群がみられ，朝倉橘廣庭宮に関わる可能性が考えられる。

中世の遺構では狐塚南遺跡・才田遺跡・長島遺跡・志波桑ノ本遺跡などがある。才田遺跡の土壙からは舶載陶磁器が出土している。

長島遺跡の位置とA～C地区

長島遺跡の位置は，新平面直角座標系IIのX＝42.020，Y＝23.660地点から西側に広がり，X＝42.050，Y＝24.200地点までの，東西約540mに亘り，路線幅50～60mが対象範囲で，横断道基点からのSTA№198＋50～203＋80の区間でもある。このうちでA地区をY＝24.085付近の南北に向く農道を境に西側の部分，C地区をY＝23.845付近の畑地境より東側の部分として，両者の間をB地区と，便宜上区分した。

C地区の西端部はSTA№202＋10付近でもあり，C地区の範囲は約170mの距離の路線幅が対象範囲であった。この辺りは，経緯度では，東経130°44′40″，北緯33°22′45″付近に相当する。（小池）



第4図　長島遺跡地形図（1／2000）

Ⅲ 遺構と遺物

長島遺跡C地区では，古墳時代～古代の住居跡51軒，掘立柱建物跡10棟，古墳1基，土壙墓14基と，不整形土坑1基，通路状遺構1条，道路状遺構1条，甕棺墓1基，落ち込み1ヶ所を含む遺物包含層などを検出した。(第5図)

1．住居跡

1号住居跡（図版5－1，第6図）

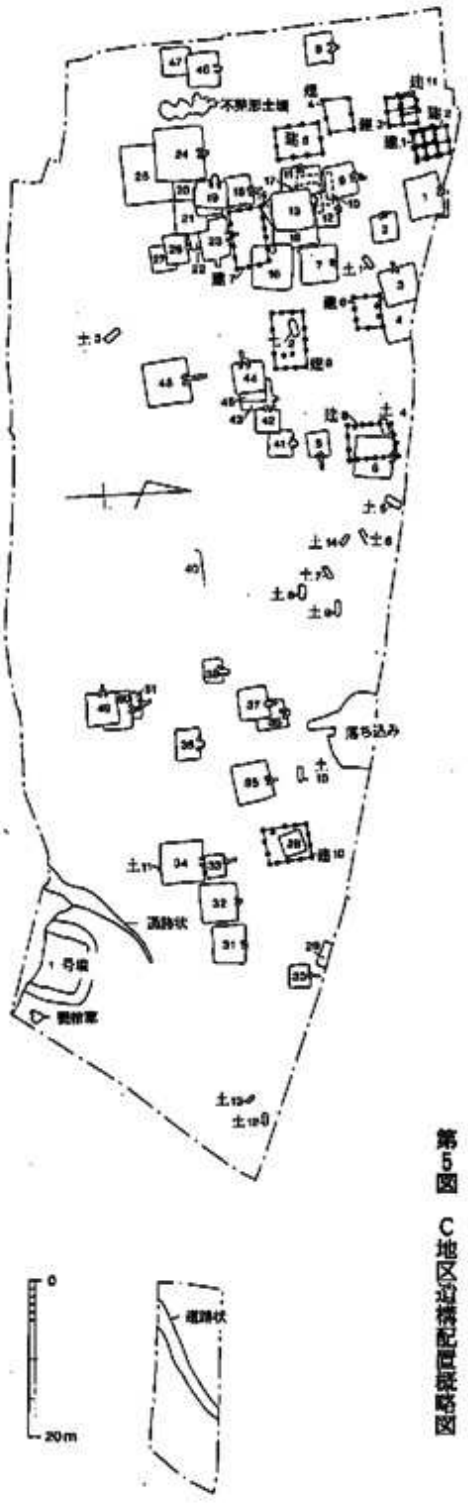
調査区北西部で発見された竪穴住居跡である。主軸方向をN82°Eにとり，東西方向がやや長めの長方形プランを呈して，長辺5.1～5.3m，短辺4.5～4.6m，深さ0.1～0.2mの規模である。北側の壁に接してカマドが設けられている。床面はやや堅緻で，床面を掘り込むピットのうちp1～4が主柱穴と推定される。柱間はp1－2とp3－4が約2.5m，p2－3が3.3m，p1－4が約3.7mを測る。

標高50.1m前後の床面にほぼ接した状態で，土錘と須恵器杯蓋・杯身や土師器杯などが散在し，北側壁際から鉄製品片なども出土した。

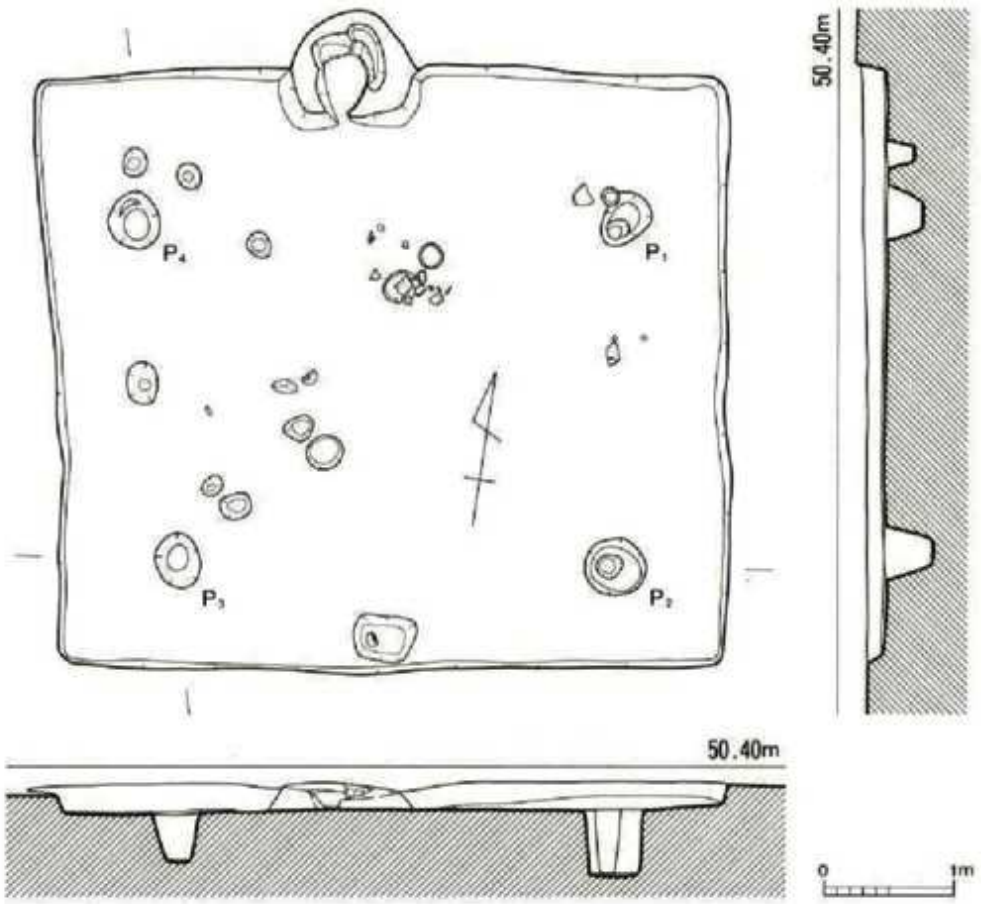
(小池)

カマド（第7図）

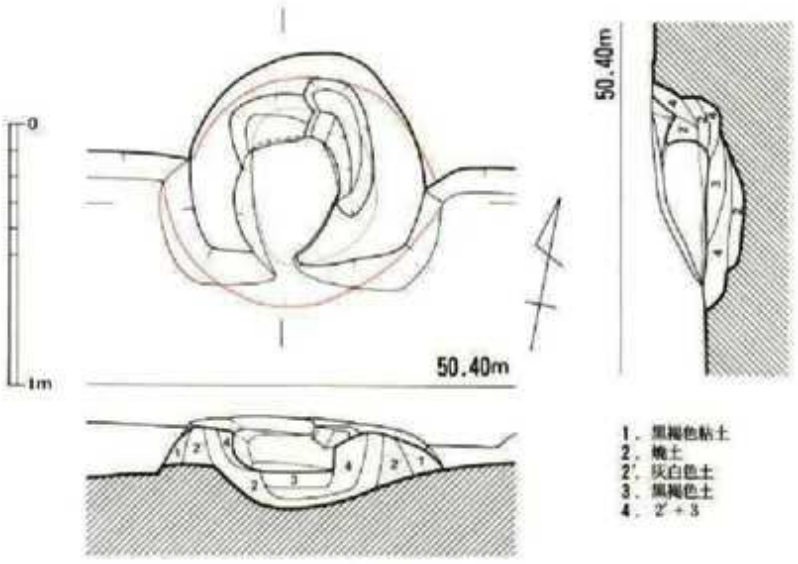
Ⅲa類で，北壁中央に付設する。カマドの構築方法は住居壁に径88cmの坑を掘り込み，黒褐色土・灰白色土を貼付し，壁体・袖部を築く。右袖は残存長33cm，基底部幅41cm，残高14cmで，左袖は残存長40cm，基底部幅36cm，残高14cmを



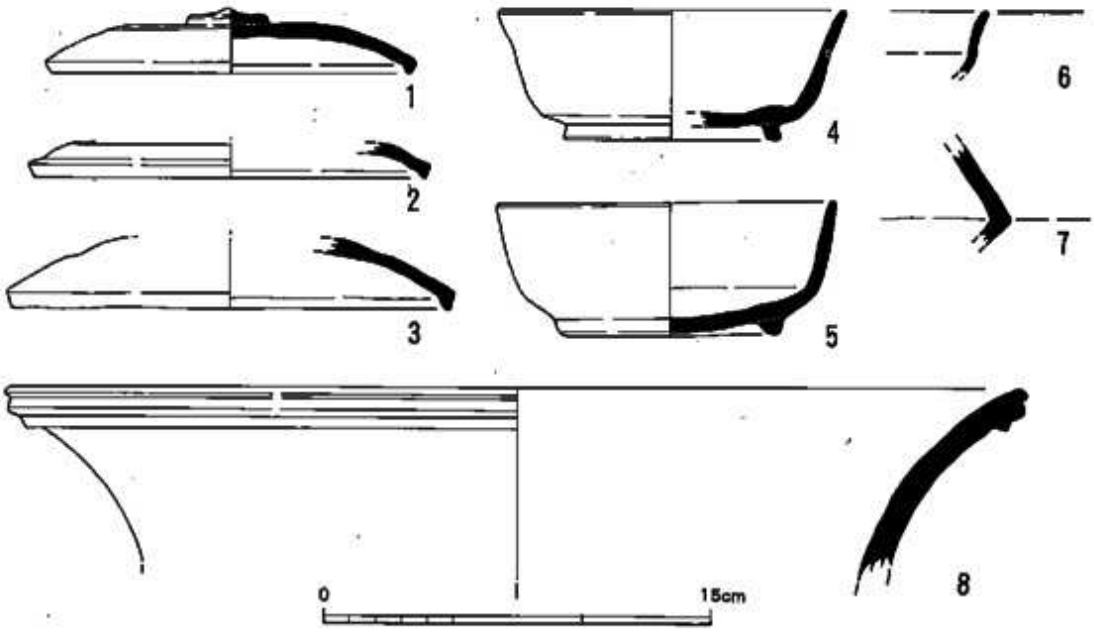
第5図 C地区遺構配置概略図



第6図　1号住居跡実測図（1/60）



第7図　1号住居跡カマド実測図（1/30）



第8図　1号住居跡出土土器実測図1（1/3）

測る。煙道は削平され遺存していない。支脚も不明。（小田）

出土遺物（図版35・47，第8・9・12・62図）

土　器（第8・9図）

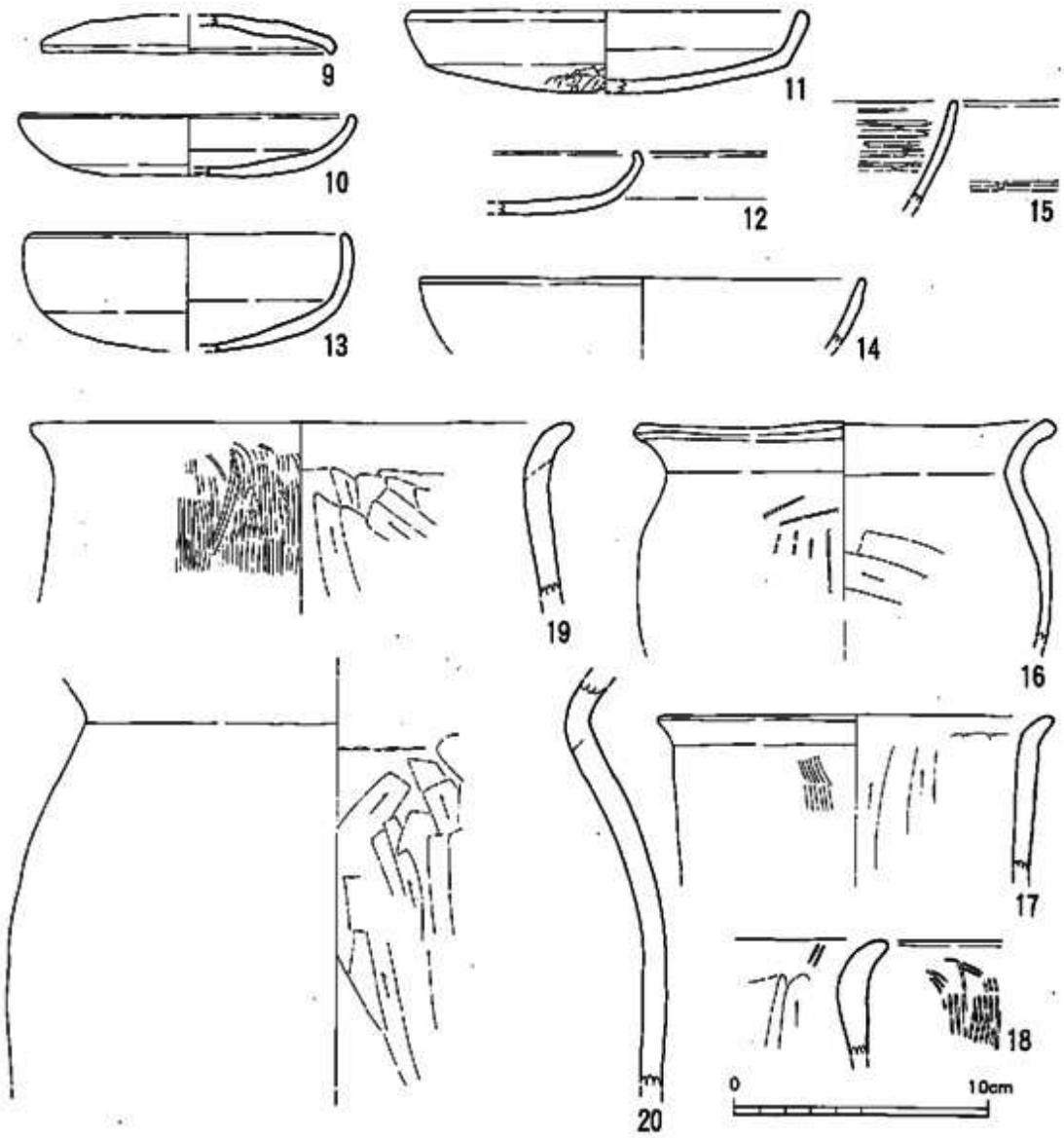
須恵器杯蓋（1～3）1は身受けのかえりが鳥嘴状をなし，外天井に扁平な宝珠状つまみが付く杯蓋で，復原口径14.2cm，器高2.5cmの大きさ。つまみの径は3.2cmとやや広い。外天井は回転ヘラ削りされ，内天井は不定方向にナデられている。胎土に石英粒などの砂粒を含み，青灰色ないし暗灰色に焼成されている。2・3は天井部を欠く破片だが，やはり口縁端部に鳥嘴状のかえりを有する杯蓋である。3は焼成があまく褐色味のある色調を呈する。

須恵器杯身（4～6）体部がわずかに開いて立上がる杯身で，踏ん張り気味に開く高台を有する4と肉太の高台を有する5の例がある。4・6の口縁部は外反するが，5は直線的にのびる。4は復原口径13.4cm，器高5.0cmの大きさで，やや焼成があまく，淡緑灰色を呈する。6は口径13.1cm，器高5.1cmの大きさでやや焼成があまく，淡灰色の色調を呈する。

須恵器壺（7）　稜をもって屈曲する体部破片で，算盤玉状の体部を有する長頸壺であろう。器面は磨滅して調整手法は不明。石英・角閃石・雲母を胎土に含み，暗橙色の色調を有する。

須恵器甕（8）　復原口径39.4cmの大きさの外反する口縁部破片で，口縁端部に断面M字形の凸帯を有している。胎土に石英粒などの砂粒を含み，灰色に焼成されている。

土師器杯蓋（9）　口縁端部が鈍く鳥嘴状に折れて，身受けのかえりをなす杯蓋で，器面は磨滅して器面調整は不明。石英・赤褐色粒を胎土に含み淡橙色に焼成されている。



第9図　1号住居跡出土土器実測図2（1/3）

土師器杯（11～15）　10・12は底部から口縁部が内彎して立上がるもので，やや浅い器形である。外底面はヘラ削りされている。10は復原口径13.4cm，器高2.4cmの大きさで，胎土に石英・雲母を含み暗橙色に焼成されている。11は底部から口縁部の立上がりに稜をもち，外底面はヘラ削りされ，ヨコナデ調整される口縁端部は厚めの器壁である。復原口径16.0cm，器高3.2cmの大きさで，胎土に白色粒・雲母・赤褐色粒を含み淡茶色ないし暗橙色に焼成されている。13～15は体部の深い杯で，13・14の口縁部はヨコナデ調整されるが，15の口縁部内面はヘ

ラ磨きがみられる。13は口縁部がやや内彎し，復原口径12.9cm，器高4.6cmの大きさ。胎土に雲母・赤褐色粒を含み，淡褐色ないし暗橙色に焼成されている。

土師器甕（16～20） 16は口径と胴部最大径がほぼ同じ大きさの甕で，口縁部は如意状に開き，胴部は膨らむ。復原口径16.6cmの大きさで，胴部外面には板小口の痕跡がみられる。胎土に雲母などを含み，淡褐色ないし茶褐色に焼成されている。17～19は口縁部が如意状に開くが短く外反して，胴部はあまり膨らまない。胴部外面は縦方向のハケ目，内面は縦方向にヘラ削りされている。17は復原口径15.6cmの大きさで，石英・赤褐色粒を含み，褐色に焼成されている。19は復原口径21.5cmの大きさで，石英・雲母・赤褐色粒を含み，淡褐色ないし暗橙色に焼成されている。20は口縁端部を欠くが，如意状口縁で胴部が膨らむ器形を呈し，胴最大径26.2cmの大きさ。胴部外面は磨滅して調整は不明。胎土に石英・雲母を含み，淡褐色ないし淡黄褐色に焼成されている。

土製品（第12図）

管状土錘（1～10） 10点出土し，いずれも中程が膨らむ形である。1～9は細長い形状で長さ4.3～6.8cm，外径1.3cm前後，内径0.3～0.4cm，重量6.0g以下の大きさ。成形時に付着した指ナデ痕や指頭の凹凸が残り，指紋のみられる例もある。10は肉太の形状でナデ調整のあとにヘラ状工具で両端部分を削っている。長さ7.7cm，外径3.0cm，内径0.8cm，重量58.7gの大きさ。胎土は，精良で雲母・褐色粒を若干含む。

表1　1号住居跡出土土錘一覧表　（単位mm，g）

No.	長さ	外径	孔径	重さ	遺存状況	胎　土	色　調
1	6.3	1.3	0.4	8.0	一部欠損	精良・細砂粒	暗灰茶褐色
2	6.8	1.3	0.3	7.6	〃	〃　雲母	淡明黄灰色
3	6.5	1.2	0.3	8.7	完　形	〃　〃	淡明褐色
4	(6.2)	1.3	0.3	7.2	一部欠損	細砂粒・雲母・褐色粒	淡明灰色
5	(4.7)	1.4	0.4	6.1	¾程度	精良・細砂粒	暗黄褐色
6	(4.8)	1.3	0.4	5.7	〃	〃　褐色粒	〃
7	4.3	1.1	0.3	4.2	一部欠損	〃　〃	明褐色
8	(3.7)	1.1	0.3	3.0	¾程度	〃　雲母・褐色粒	淡明褐色
9	(6.2)	1.3	0.4	7.9	一部欠損	細砂粒・雲母	〃
10	7.7	3.0	0.8	58.7	一部欠損	細砂粒・褐色粒	〃

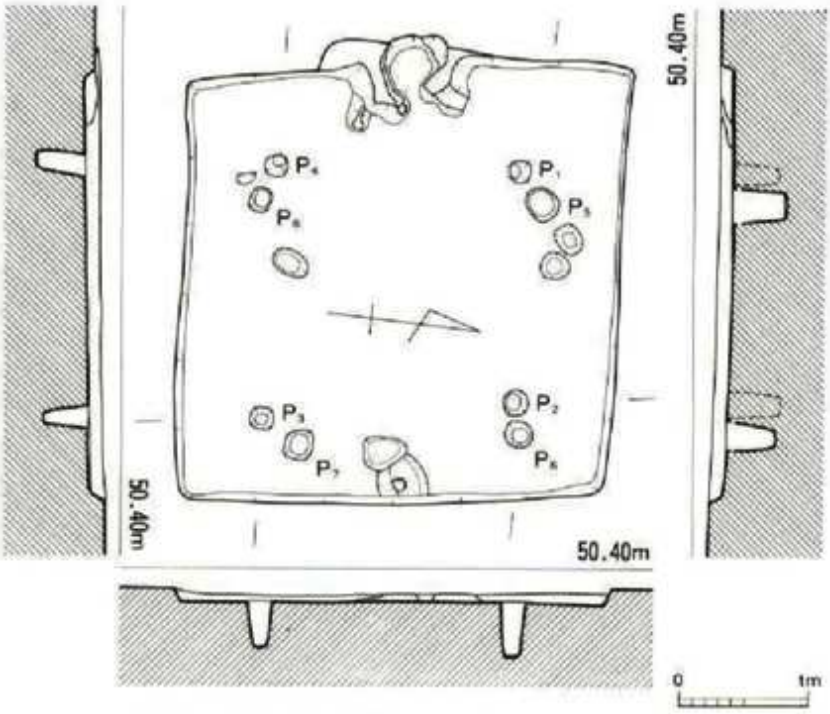
鉄製品（第62図）

不明鉄製品（1） 現存長3.3cm，幅1.0cm，厚さ0.8cmの大きさで，厚みのある端側は鈍く尖る。欠損する端部では幅0.8cm弱，厚さ0.4cm強に細くなるが，本来の形状は不明である。

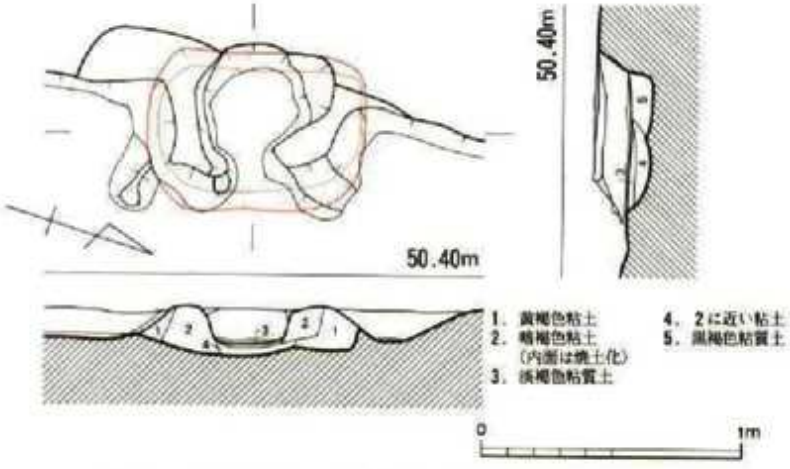
出土土器のうち，須恵器杯蓋・杯身の特徴は8世紀前半に近い時期に考えらる。

2号住居跡（図版5－2，第10図）

調査区北西部で発見された竪穴住居跡で，1号住居跡の南東側に近接する。主軸方向をN9°

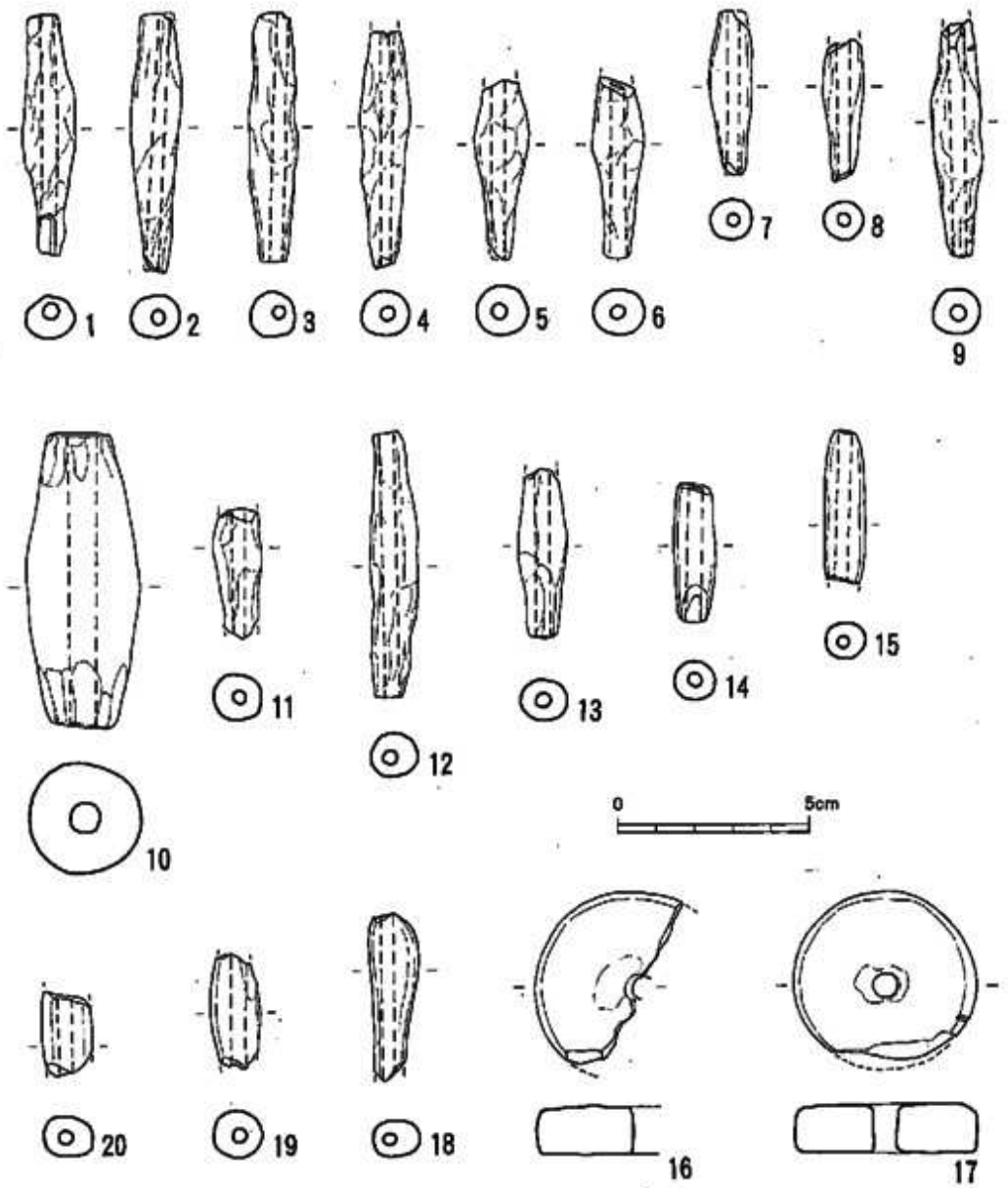


第10図　2号住居跡実測図（1/60）



第11図　2号住居跡カマド実測図（1/30）

Wにとり，南北方向が僅かに長めの不整方形プランを呈し，長辺3.3～3.4m，短辺3.2～3.3m，深さ0.1m前後の規模である。西側の壁に接してカマドが設けられている。床面はやや堅緻で，床面を掘り込むピットのうちp1～4が主柱穴と推定されるが，p5～8も対応しそうである。

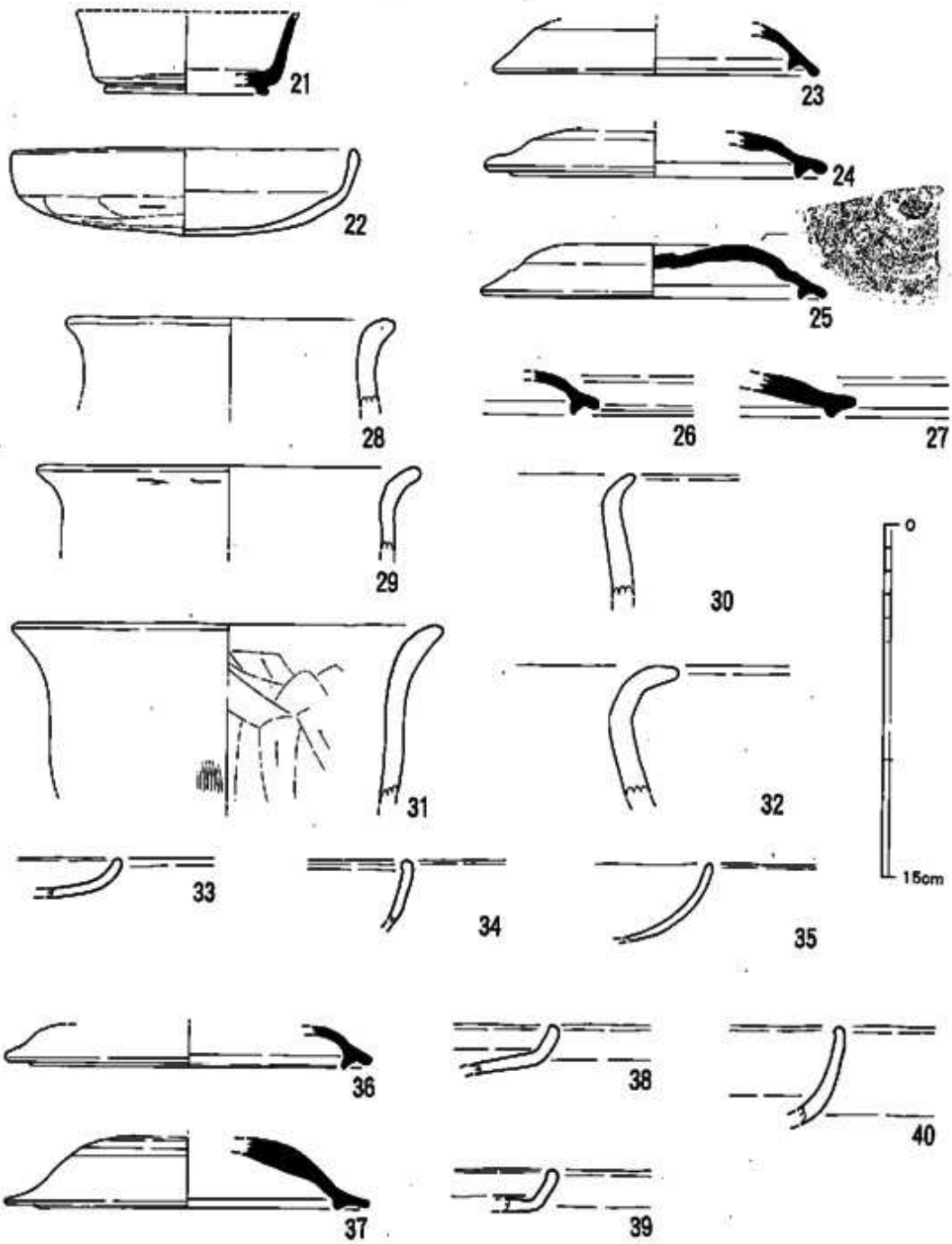


第12図　出土土製品実測図（1/2）

柱間はp1～4が1.8m～2.0m，　p6～8もp6－8がやや長いもののほぼ同様の距離を測る。標高50.1m強の床面ではカマドと反対側の壁際にもピットがみられる。（小池）

カマド（第11図）

下部掘り込みを有するⅡa類で，西壁中央に付設する。カマドの構築方法は住居壁際を84cm



第13図　2～4号住居跡出土土器実測図（1/3）

×61cmの長方形に掘り込み，黄褐色粘土・暗褐色粘土を住居壁に貼付し，袖部を築く。右袖は

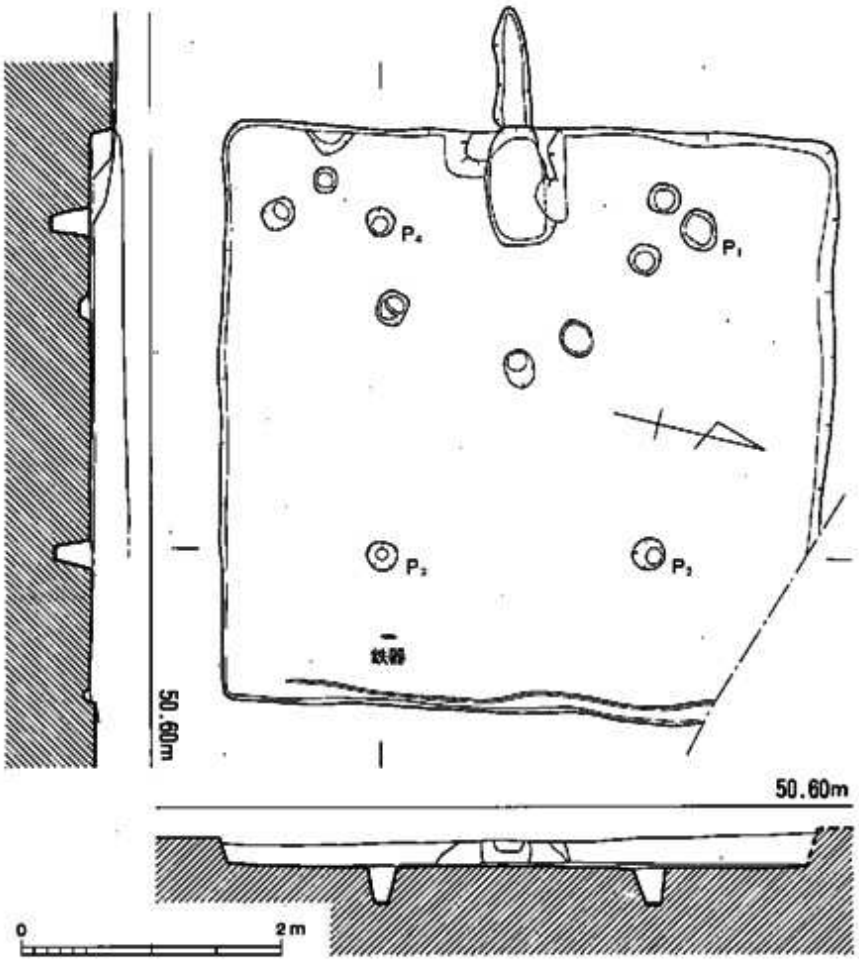
残存長53cm，基底部幅30cm，残高13cmで，左袖は残存長63cm，基底部幅32cm，残高11cmを測る。焚口幅が10cmと狭いのは袖部と崩落した粘土との区別が判然としなかったことによる。煙道は遺存しておらず，支脚も不明。（小田）

出土遺物（図版35・47，第12・13図）

土　器（第13図）

須恵器杯身（21）　高台を有する小形の杯身で，復原口径10.5cm，器高3.5cm，高台径7.0cmの大きさ。外底部に回転ヘラ削りの痕がみられる。胎土に細砂粒を含み，暗灰色に焼成されている。

土師器杯（22）　復原口径14.9cm，器高3.7cmの大きさの杯で，外底面が静止ヘラ削りされて，体部中途に明瞭な稜線がみられる。ヨコナデ調整される口縁部は僅かに内彎気味である。胎土



第14図　3号住居跡実測図（1/60）

に角閃石・雲母・赤褐色粒を含み，橙色に焼成されている。

土製品（第12図）

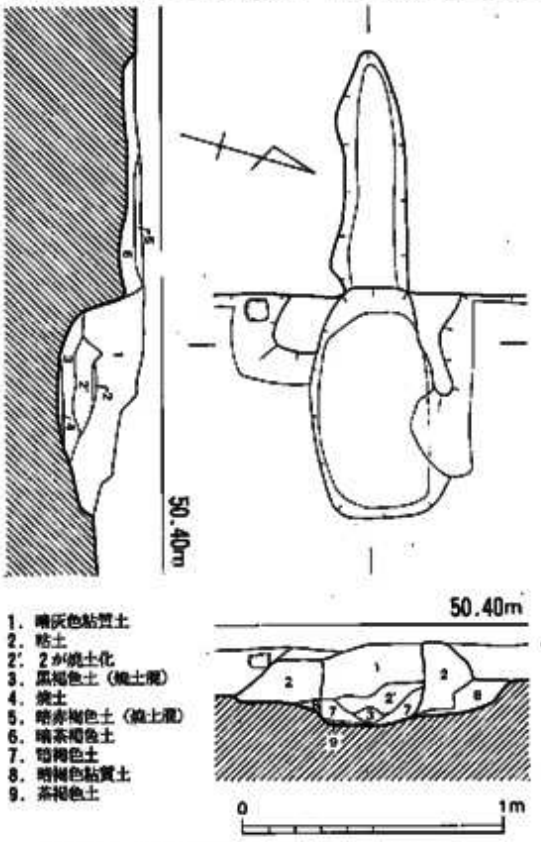
管状土錘（11） 両端部を欠失して，現存長3.3cm，外径1.2cm，内径0.3cm，重量4.2ｇを測るが，胎土に砂粒を含み，黄褐色に焼成されている。カマド内堆積土から出土した。

須恵器杯身の特徴などからみて８世紀第一四半期頃の時期があたえられよう。

３号住居跡（第14図，旧12Ａ住）

調査区北部で発見された竪穴住居跡で，２号住居跡の東側に近接し，東側で重複する４号住居跡を切る。主軸方向をN76°Ｅにとり，北東隅部が調査区域外に続く。東西方向がごく僅かに長めの不整方形プランを呈して，長辺4.6～4.7m，短辺4.4～4.6m，深さ0.25m前後の規模である。西側の壁に接してカマドが設けられている。中央部の床面は堅緻で，周辺部はそれほど堅緻ではない。床面を掘り込むピットのうちｐ１～４が主柱穴と推定される。柱穴は直径20～30cmで，深さ30cm前後の規模であり，柱間はｐ１～４が2.1m～2.5mの距離を測る。

標高50.1m強の床面ではカマドと反対側の壁際に沿う小溝が検出され，ｐ３と小溝の間の床面より１cm強浮いた位置で鉄製品が出土した。（小池）



第15図　３号住居跡カマド実測図（１/30）

カマド（図版６－１，第15図）

火床面が床面より一段下がるＩｂ類で，西壁中央に付設する。平面図には図示されていないが，下部掘り込み（幅106cm）を有する。壁体幅42cm，奥行き80cmで，火床は良く焼けていたが，支脚は不明。右袖は残存長72cm，基底部幅18cm，残高13cmで，左袖は残存長35cm，基底部幅34cm，残高13cmを測る。煙道は長さ90cm，幅25cmで，先端ピットは掘り込まれていない。（小田）

出土遺物（図版45，第13・62図）

土　器（第13図）

須恵器杯蓋（23～27） 身受けのかえりを有する杯蓋で，天井部の残る25では外天井につまみが付かず，ヘラ切り離し時の凹凸と３本線のヘラ記号がみられる。

27は器壁が厚めで，かえりの突起が鈍い。23～25の復原口径は14.0cm，14.6cm，14.8cm，25の器高は2.3cmである。23の焼成はややあまいが，24～27は堅緻な焼成で暗灰色の色調を呈している。

土師器甕（28～32） 28～31は如意状に口縁部が僅かに外反して開く甕で，胴部の膨らみが小さく，口縁部より窄まるか，ほぼ同じ径になるもの。32は如意状に強く外反する口縁部をもち，胴部が膨らむもと思われるもの。いずれも胴部外面は磨滅するが，30の外面にヘラ削りの痕跡がみとめられ，31にはハケ目が一部みられる。また28～30は復原口径が14.2cm，16.4cm，18.4cmと小型だが，32は口径が大きくなるものと思われる。いずれも胎土に石英などの砂粒を含み，暗褐色，暗橙色などの色調に焼成されている。

土師器杯（33～35） いずれも小破片で口径の復原もし難いが，内彎気味に口縁部が立ち上がる。胎土に石英・雲母などを含み，黄橙色，暗橙色などの色調を呈するしっかりとした焼成である。器面の風化した部分もあるが，33では底部側にヘラ削りの痕がみられる。

鉄製品（第62図）

不明鉄製品（2） 少なくても2点のやや扁平な板状のものが錆着しているようである。1点は現存長6.4cm，幅0.4～0.8cm以上，厚さ0.3cm前後の大きさで，刀子の基部の可能性もあろう。あとの1点は錆膨れが進んで不明確だが，幅0.8～1.4cm，厚さ0.4cm程の棒状で，長さ7.3cm残っている。

須恵器杯蓋の形状などから7世紀後半頃に考えられよう。

4号住居跡（第16図，旧12B住）

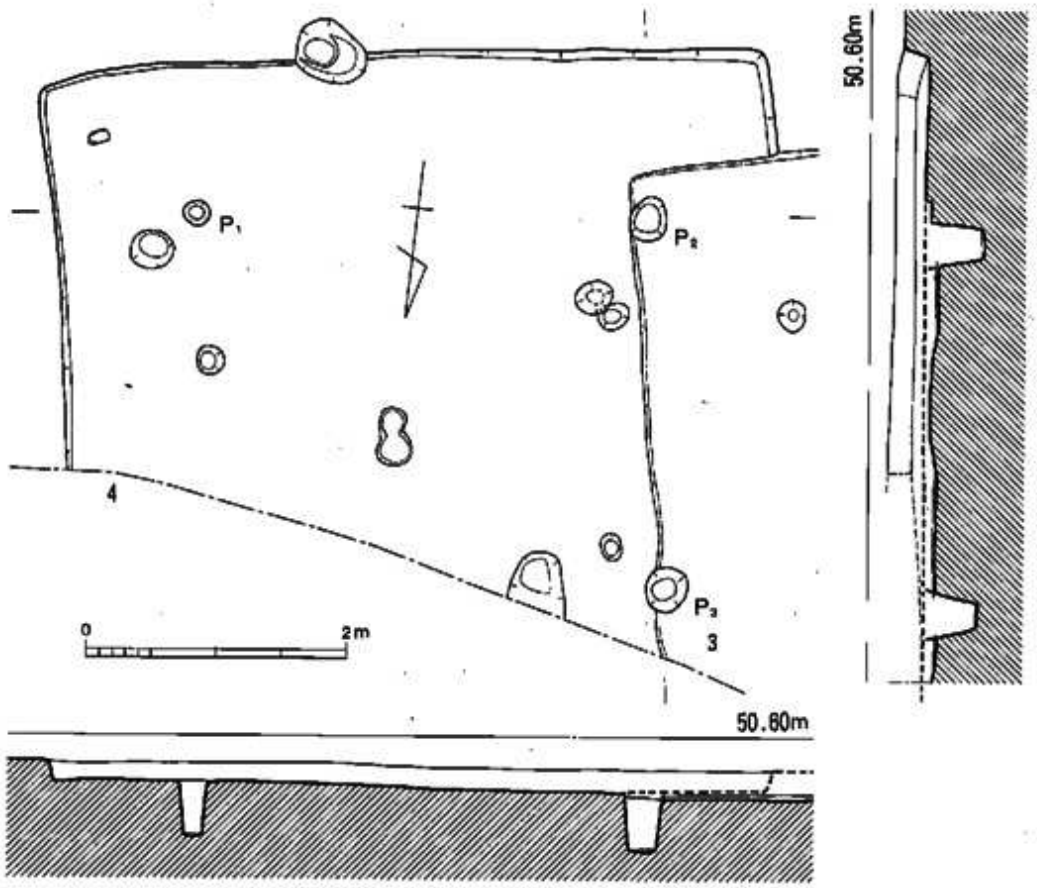
調査区北部で発見された竪穴住居跡で，3号住居跡の東側に重複して，3号住居跡に切られる。北部が調査区域外に続くこともあり，全体の規模は詳らかでないが，不整方形状のプランであろう。南側辺5.6m，南北4.6m以上の広さで，深さ0.15m前後の規模である。主軸方向をN81°Eないしこれに直交する方向にとり，カマドの位置や有無は分からない。中央部の床面はやや堅緻で，周辺部はそれほど堅緻ではない。床面を掘り込むピットのうちp1と，3号住居跡の東側壁沿いの小溝と重複するp2・3が主柱穴と推定される。柱穴は直径20～35cmで，深さ40cm前後の規模であり，柱間はp1－2が3.5m，p2－3が2.9mを測る。

標高50.2m前後の床面では東側壁に近い床面より3cm程浮いた位置で鉄製品が出土した。

出土遺物（図版47，第13・62図）

土´器（第13図）

須恵器杯蓋（36・37） 身受けのかえりを有する杯蓋で，天井部の残る37では外天井に回転ヘラ削り調整がみられる。36に比して37は器壁がやや厚めでかえりは鈍い。復原口径は15.6cm，15.7cmで，17の器高は3.0cmである。また36の焼成はあまいが，37は堅緻な焼成で暗灰色の色



第16図　4号住居跡実測図（1/60）

調を呈している。

土師器杯（38～40）　いずれも小破片で口径の復原もし難いが，内彎気味に口縁部が立上がり，38・39は稜をなして底部に屈曲し，浅めだが，40は屈曲が緩やかで深めの器形を呈する。胎土に石英・雲母などを含み，39では褐色粒，40では角閃石を含む。いずれも良好な焼成で淡橙色，暗橙色の色調を呈する。

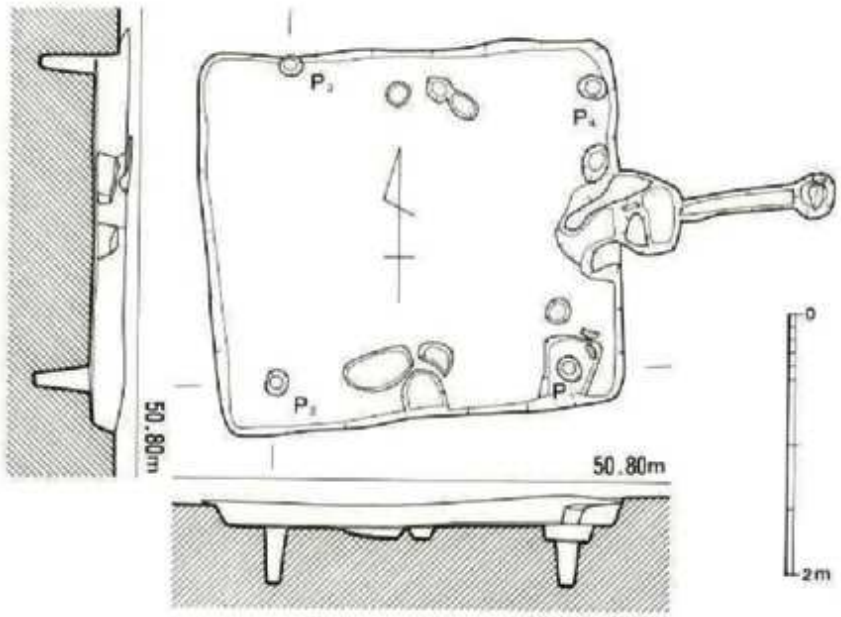
鉄製品（第62図）

鉄刀子（3）　刃部側を欠失するが，現存長3.2cm，幅0.7cm強，厚さ0.2cmの大きさの基部片であろう。扁平な板状をなし，基部端にかけて細くなっている。

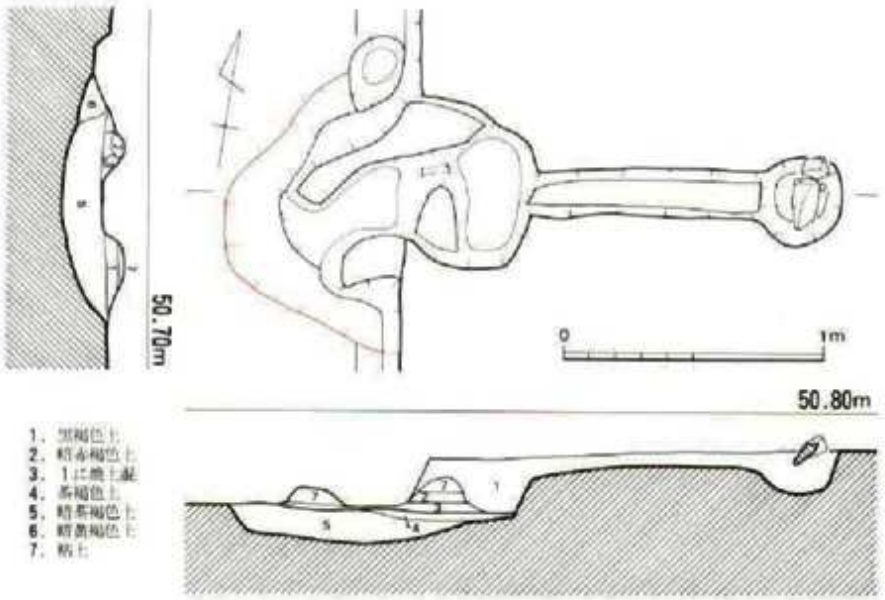
須恵器杯蓋の形状などからは7世紀後半頃に考えられ，3号住居跡の土器と大差はみられない。

5号住居跡（第17図）

調査区中央部北側で発見された竪穴住居跡で，北側に6号住居跡，南側に41号住居跡が位置



第17図　5号住居跡実測図（1/60）



第18図　5号住居跡カマド実測図（1/30）

する。主軸方向をN85°30′Eの方向にとり，東側壁中央にカマドが設置される不整方形プランの住居跡である。南北2.7～2.9m，東西3.1～3.2m，深さ0.15～0.25mの規模で小型だが，カマドは約1mの煙道を伴う。中央部の床面は堅緻で，周辺部はそれほど堅緻ではない。床面を掘り込むピットのうち四隅にあるp1～4が主柱穴と推定される。柱穴は直径20cm前後，深さ40～50cmの規模であり，柱間は2.3m～2.5mを測る。

標高50.5m前後の床面ではカマドの右側で土師器杯が出土した。(小池)

カマド（第18図）

下部掘り込みを有するⅢa類で，東壁中央に付設する。下部掘り込みは1m程の扁円形を呈し，暗茶褐色土で埋めていた。壁体は幅65cm，奥行き50cmの方形を呈する。右袖は残存長31cm，基底部幅33cm，残高7cmで，左袖は残存長52cm，基底部幅24cm，残高8cmを測り，黒褐色土を盛っていた。火床はさほど焼けておらず，支脚は不明。壁体の遺存状態は悪いが，煙道は良好で，長さ119cm，幅19cm，深さ5cmを測る。先端には径35cm，深さ16cmの煙出しのピットを有し，角礫2個が落ち込んだ状態で出土した。(小田)

出土遺物（図版47，第12・19図）

土　器（第19図）

須恵器杯身（41～43）　蓋受けのかえりを有さない杯身で，破片資料ばかりだが，41・42は口縁部が外反気味に立ち上がり，43は内彎気味に立ち上がる。41・42の復原口径は13.4cm，11.0cmで，3点ともに堅緻な焼成具合である。

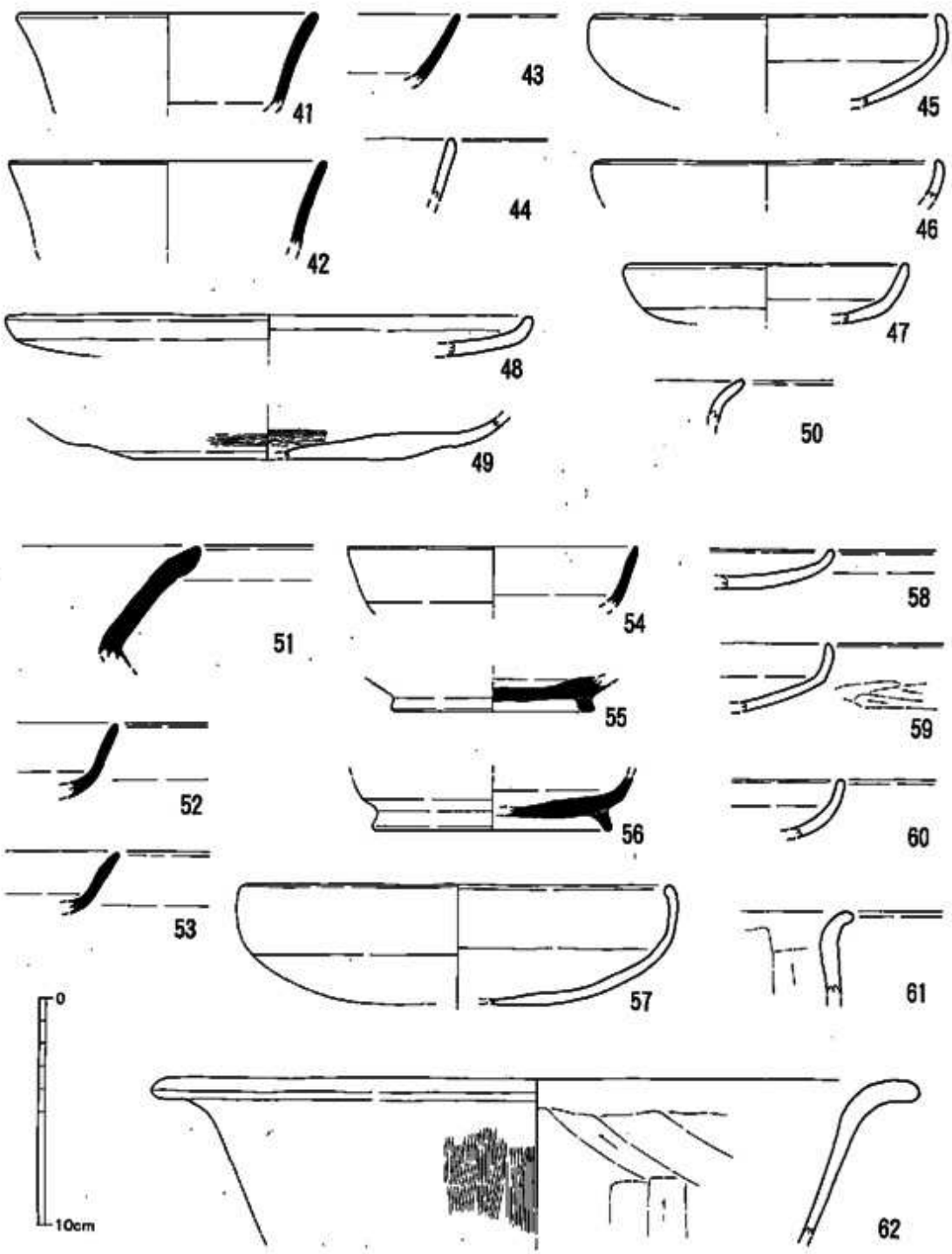
土師器杯（44～47）　44は小破片で口径の復原もし難いが，45～47は内彎気味に口縁部が立ち上がり，復原口径16.0cm，15.5cm，12.6cmの大きさ。47はやや稜をなして底部に屈曲し浅めだが，45は屈曲がやや緩やかめの器形を呈する。胎土に雲母・赤褐色粒などを含む。いずれも良好な焼成で淡橙色，淡褐色の色調を呈する。

土師器皿（48・49）　破片資料のため全体の器形は分からないが，48は復原口径23.4cmの大きさである。内外面の器面が磨滅して調整手法は不明であるが，胎土に雲母・赤褐色粒を含み，淡褐色に焼成されている。49は底部破片だが48とは別個体である。内外面ともにヘラ磨きの痕跡がみられ，やや段をもつ外底面には回転ヘラ削りのような痕跡がみられる。胎土に雲母・角閃石を含み，淡褐色に焼成されている。

土師器甕（50）　小破片だが，緩やかに外反する口縁部を有し，器壁は薄い。胎土に雲母を含み，淡橙色に焼成されている。

土製品（第12図）

管状土錘（12）　床面に接して1点のみ出土した管状土錘で，長さ6.9cm，外径1.3cm，内径0.4cm，重量7.9gを測る。中膨らみの管状で，成形時の指圧痕が明瞭に残る。褐色粒を胎土に含むが精良な胎土で，淡黄灰褐色に焼成されている。



第19図　5・6号住居跡出土土器実測図（1/3）

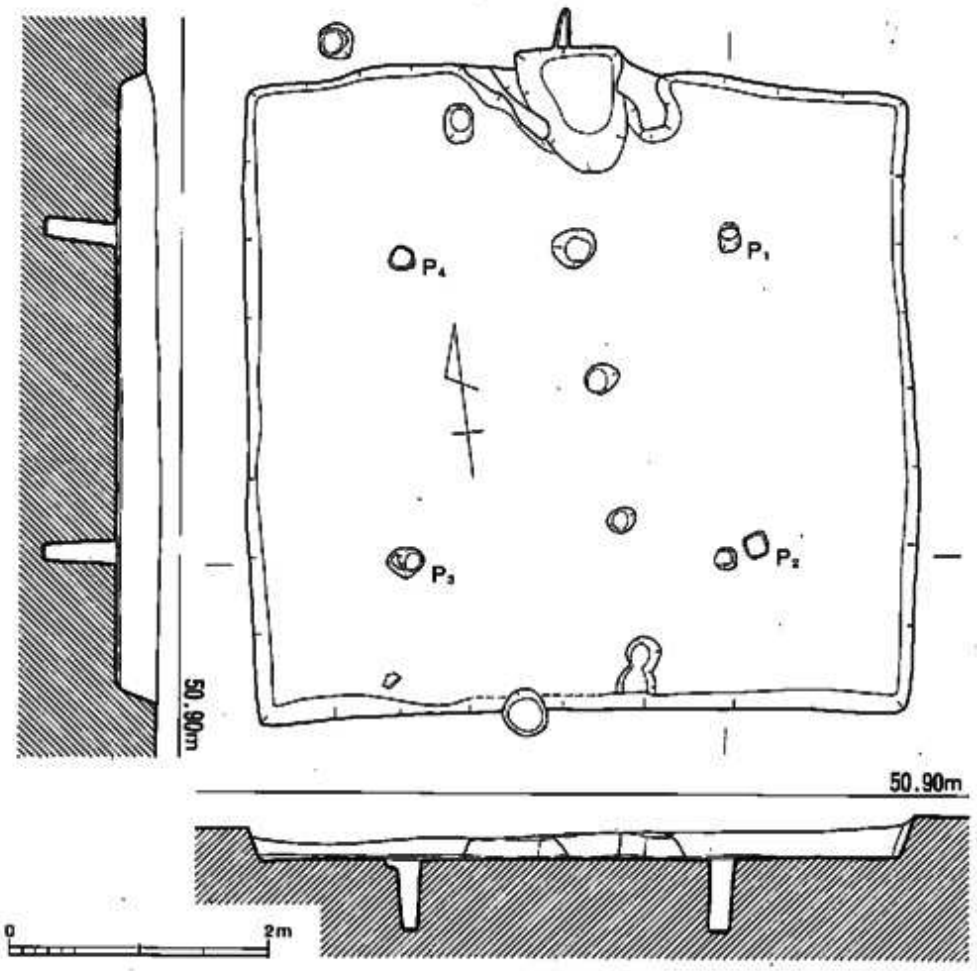
出土土器に全体の形状が分かる例が無く，明確ではないが，7世紀後半以降に考えられよう。

6号住居跡（第20図）

調査区中央部北側で発見された竪穴住居跡で，5号住居跡の北側に位置する。主軸方向をN7°Eの方向にとり，北側壁中央にカマドが設置される不整方形プランの住居跡である。南北4.8～5.0m，東西5.0～5.1m，深さ0.10～0.35mの規模である。中央部の床面は堅緻で，周辺部はそれほど堅緻ではない。標高50.4m前後の床面を掘り込むピットのうちp1～4が主柱穴と推定される。柱穴は直径15cm前後，深さ55cm前後の規模であり，柱間は2.4m～2.5mを測る。（小池）

カマド（第21図）

火床面が床面より一段下がるⅡb類で，北壁中央に付設する。平面図に図示されていないが，



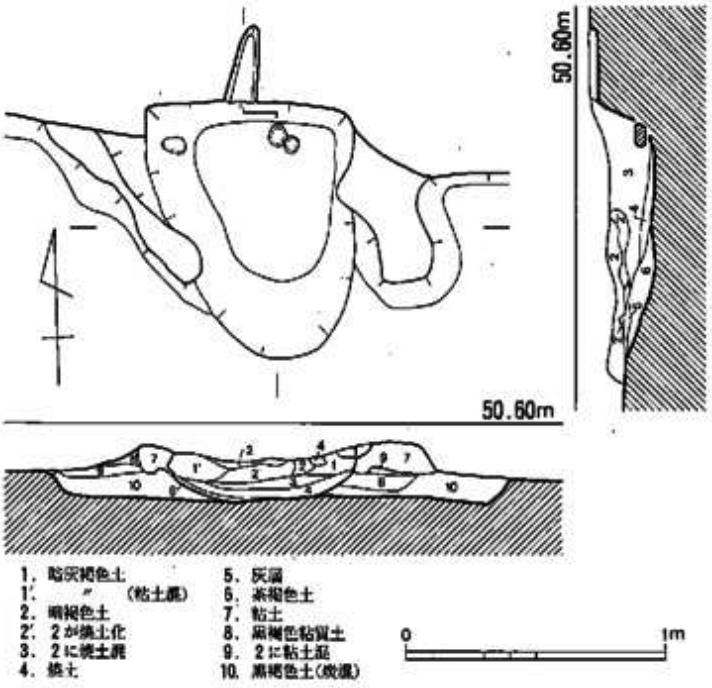
第20図　6号住居跡実測図（1/60）

当カマドも下部掘り込み（幅180cm）を有する。壁体幅は80cmで，焼土・暗褐色土が交互に堆積していた。右袖は残存長50cm，基底部幅41cm，残高11cmで，左袖は残存長56cm，基底部幅30cm，残高7cmを測る。煙道は僅かに遺存しており，長さ30cm，幅11cm，深さ3cmを測る。（小田）

出土遺物（図版47，第12・19・62図）

土　器（第19図）

須恵器甕（51）　短く直線的に開く口縁部小破片で，口縁端部が僅かに屈曲する。胎土に砂粒を若干含み，黒灰色に堅く焼成されている。



第21図　6号住居跡カマド実測図（1/30）

須恵器杯身（52～56）　蓋受けのかえりを有さない杯身で，破片資料ばかりだが，52～54の口縁部は外反気味に立ち上がり，55・56の底部には高台が付く。54の復原口径は12.9cm，55の復原高台径9.0cm，56の復原高台径10.6cmを測る。いずれも胎土に砂粒を含み，56の焼成があまく白灰色の色調を呈する他は，4点ともに堅緻に焼成され，青灰色ないし黒灰色の色調を呈している。

土師器杯（57～60）　57はむしろ椀に含めるべきであろうか。復原口径19.4cm，器高5.3cmの大きさで，口縁部は内彎して内に傾く。胎土に雲母・赤褐色粒を含み，暗橙色に焼成されている。58～60は小破片で口径の復原もし難いが，内彎気味に口縁部が立ち上がり，58は皿のように浅い器形であろう。いずれも胎土に雲母・赤褐色粒を含み，淡褐色ないし暗橙色に焼成されている。

土師器甕（61）　破片資料のため全体の器形は分からないが，口縁部は薄く如意状に外反する。胴部が膨らまない小型の甕であろう。

土師器鍋（62）　復原口径34.0cmの大きさで，口縁部はあまり肥厚せずに外反する。胎土に石英・雲母を含み，褐色ないし淡褐色に焼成されている。

土製品（第12図）

管状土錘（13） 一方の端部を欠くが，現存長4.4cm，外径1.3cm，内径0.4cm，重量4.5gを測る。やや扁平で中膨らみな管状で，成形時の指圧痕が明瞭に残る。褐色粒を含むが精良な胎土で，淡黄灰褐色に焼成されている。

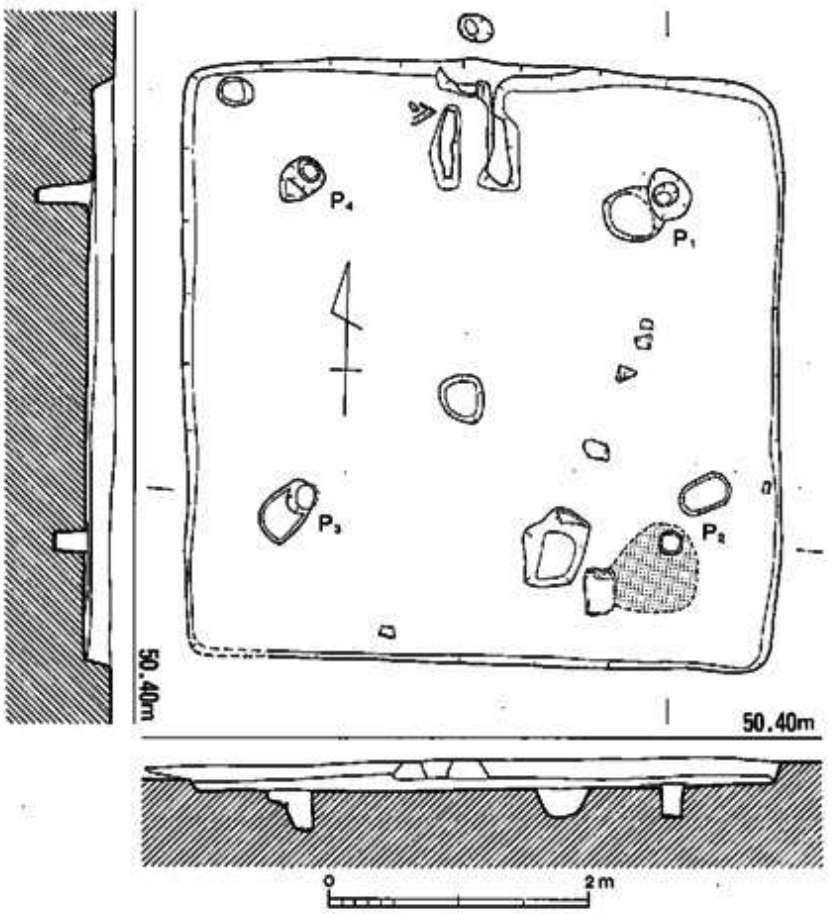
鉄製品（第62図）

不明鉄製品（4） カマドの焚き口付近で出土した。茎部破片であろう。現存長3.2cm，幅・厚み0.5cmの大きさで，木質はみられない。

出土土器に全体の形状が分かる例が少ないが，須恵器杯身の高台からみて，8世紀初頭以降に考えられよう。

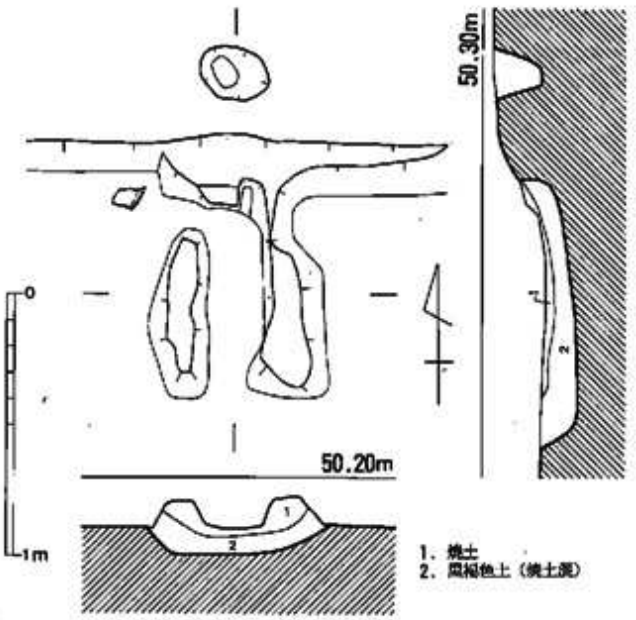
7号住居跡（第22図，旧10住）

調査区西寄りで発見された竪穴住居跡で，2号・3号住居跡の南側に位置している。主軸方向をN1°Wにとる方形プランの住居跡である。南北・東西方向とも4.5～4.6m，深さ0.1～0.2



第22図 7号住居跡実測図（1/60）

mの規模に残る。カマドは北側壁の中央に設けられている。床面は標高50.0m強で，カマド前面にあたる中央部は堅緻な床がみられる。床面を掘り込むピットのうちp1～4が主柱穴と推定されるが，柱穴は直径20～30cm，深さ25～40cmの規模で，柱間は2.5～2.8mを測る。（小池）



第23図　7号住居跡カマド実測図（1/30）

カマド（第23図）

平面図には図示されていないが，下部掘り込みを有するIa類のカマドで，北壁中央に付設する。下部掘り込みは幅70cmで，焼土混じりの黒褐色土で埋めていた。袖部は残存長74cm，基底部幅23cmのU字形に遺存するものの積み土の大半が焼土であり，原形を留めているとは考え難い。また，カマドの30cm北側にはピットが存するものの煙道先端ピットではない。（小田）

出土遺物（図版35，第24図）

土　器（第24図）

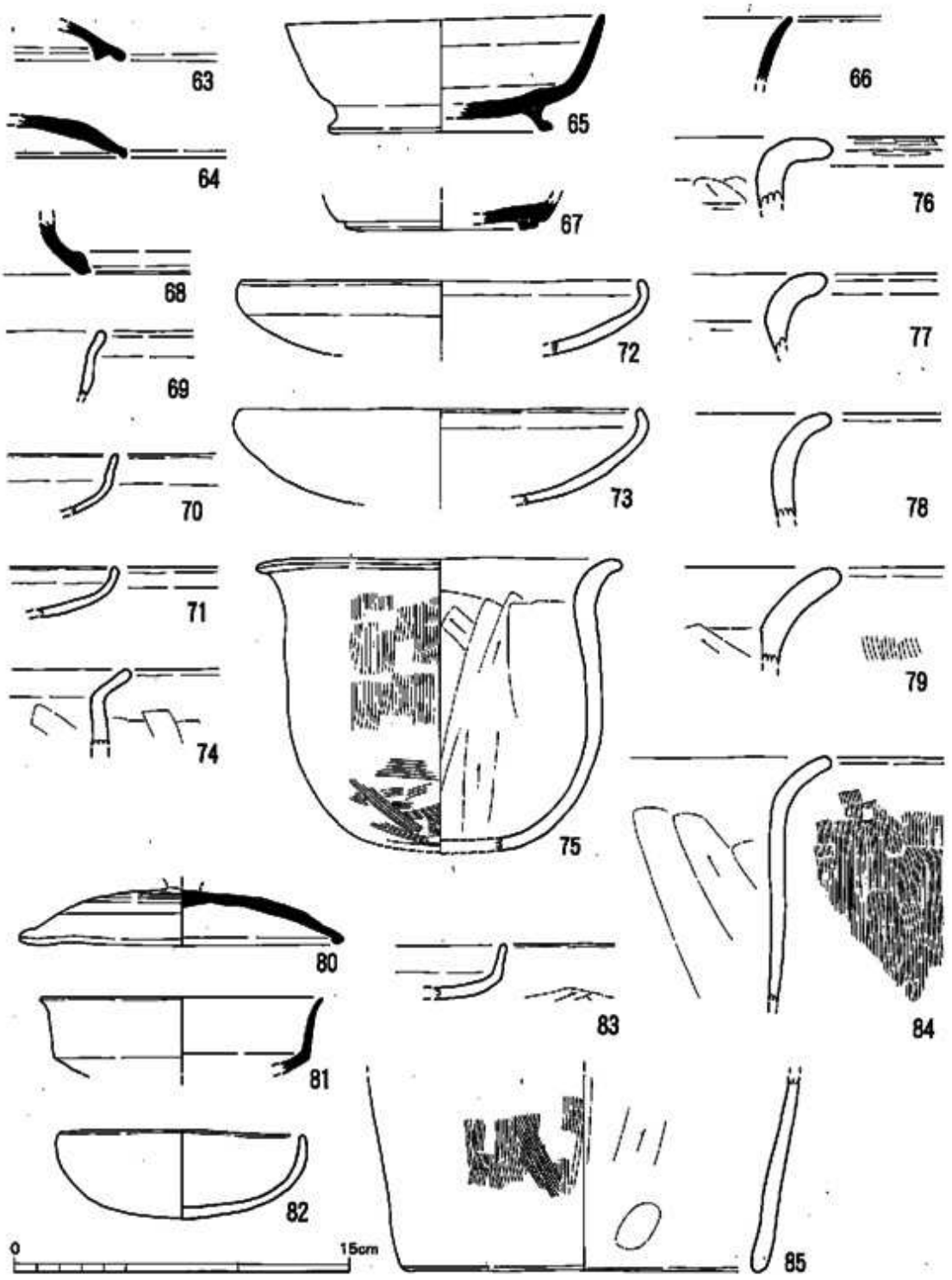
須恵器杯蓋（63・64）　小破片だが，63は身受けのかえりを有する杯蓋，64は鳥嘴状の退化した身受けを有する杯蓋で，口径は復原しえない。やや堅めの焼成で淡緑灰色を呈している。

須恵器杯身（55～62・65～67）　蓋受けのかえりを有さない杯身で，65は口径14.2cm，器高5.0cm，高台外径10.0cmの大きさで，口縁部は直線的に開き，高台は踏ん張るように開く。66の口縁部は外反する。67は口縁部を欠くが底部に低平な高台が付く。いずれも焼成は良好である。

須恵器脚台（68）　裾端部外面が蒲鉾形に肥厚する台部破片である。焼成良好で暗灰色を呈する。

土師器杯（69～73）　小破片だが，69・70は口縁部が直に立ち上がり口縁端部が外反するもの，71～73は皿状に開いて口縁端部が内彎するもの。72・73は復原口径18.2cmに推定できる。いずれも器面が磨滅しているものの，外面にヘラ削りらしい痕跡がみられる。胎土に雲母・赤褐色粒を含み，茶褐色・淡橙色などの色調に焼成されている。

土師器甕（74～79）　75を除いて全て小破片のため口径も復原しえない。74は口縁部が薄く如意状に外反して，胴部が膨らまない小形の甕であろう。石英・赤褐色粒を胎土に含み，淡褐



第24図　7・8号住居跡出土土器実測図（1/3）

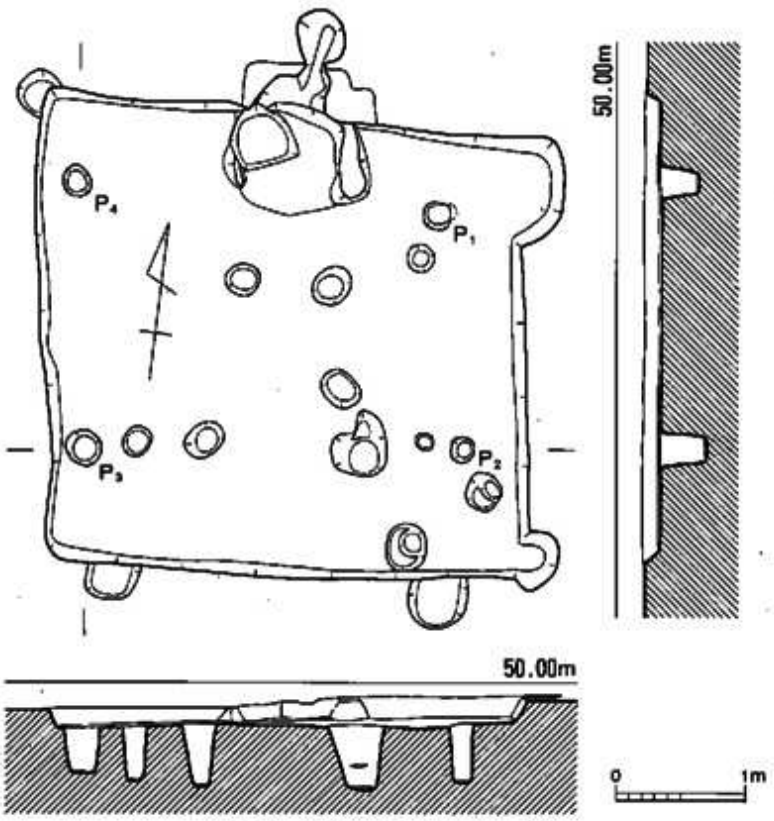
色に焼成されている。75は復原口径16.3cm，残存器高18.1cmの大きさの小型甕で，口縁部はあまり肥厚せずに如意状に外反し，胴部は最大径14.0cmとほとんど膨らまない。外面の頸部より下に煤が付着する。胎土に石英などの粒を含み，淡褐色ないし暗橙色に焼成されている。76・77は口縁部がさほど肥厚せずに外反し，胴部内面にヘラ削り痕がみられる。78は薄く緩やかに外反し，79は僅かに肥厚気味だが外開きで，胴部内面にヘラ削り痕がみられる。鍋の可能性もあろう。

その他に焼成された粘土塊1点と黒曜石剥片2点が出土した。粘土塊は掌の中で握り固めたような形状である。

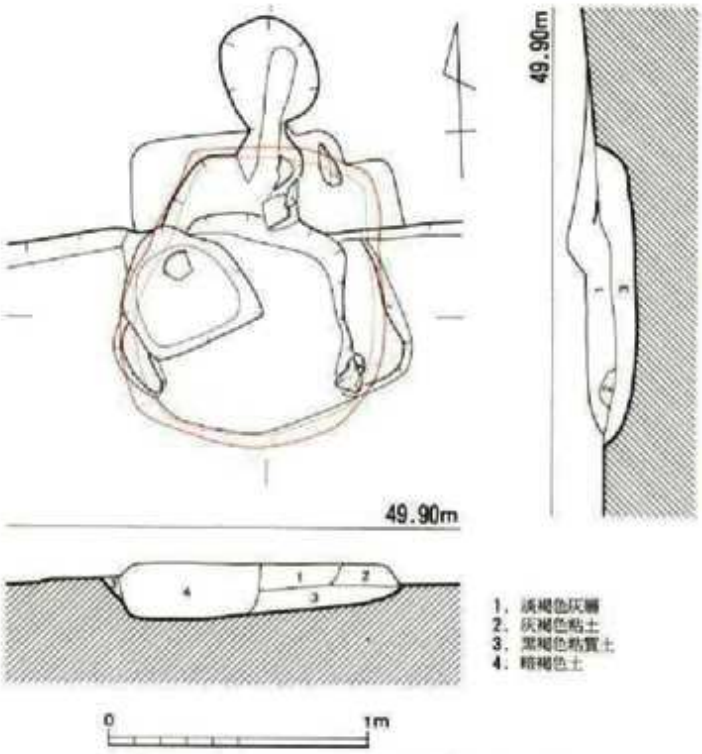
出土土器に全体の形状が分かる例が少ないが，須恵器杯蓋・杯身の特徴では7世紀後半と8世紀前半以降の2時期のものがみられる。

8号住居跡（第25図）

調査区西端部で発見された竪穴住居跡で，主軸方向をN6°Eの方向にとり，北側壁中央にカマドが設置される不整方形プランの住居跡である。南北3.4～3.6m，東西3.7m前後，深さ0.1



第25図　8号住居跡実測図（1/60）



第26図　8号住居跡カマド実測図（1/30）

～0.2m強の規模で，カマドは僅かに煙道を伴う。中央部の床面は堅緻で，周辺部はさほど堅緻でない。標高49.7m前後の床面を掘り込むピットのうち四隅に近いp1～4が主柱穴と推定される。柱穴は直径20～30cm深さ30～45cmの規模で，柱間は1.9m～2.9mを測る。（小池）

カマド（図版6－2・3，第26図）

下部掘り込みを有するIIa類で，北壁中央に付設する。下部掘り込みは住居壁を若干掘り込んだもので，長さ116cm×幅102cmの方形を呈し，暗褐色粘質土で埋めていた。袖部には灰褐色粘土を盛っており，右袖は残存長61cm，基底部幅24cm，残高8cmで，先端には円礫がみられた。左袖はピットに切られるものの残存長63cm，基底部幅14cm，残高6cmを測る。焚口幅は65cmで，火床面・支脚は留めていない。煙道は辛うじて遺存しており，径42cmのピット状を呈する。（小田）

出土遺物（図版35，第24図）

土　器（第24図）

須恵器杯蓋（80）　約1/4の破片だが，復原口径14.6cmの大きさで，回転ヘラ削り調整される外天井に付いていたつまみは剥落している。口縁端部は鳥嘴状の鈍いかえりをなす。胎土に石英などの粒を含み，淡緑灰色に焼成されている。

須恵器杯身（81）　蓋受けのかえりを有さない杯身で，復原口径12.6cmの大きさ。底部から稜をなして口縁部が立ち上がり口縁端部は薄く外反する。胎土に石英などの粒を含み，黒灰色に焼成されている。

土師器杯（82・83）　82は口縁部が内彎しながら立ち上がる杯で，口径11.1cm，器高4.9cmの大きさ。外面の大半はヘラ削りされる。胎土に雲母・赤褐色粒を含み，淡褐色に焼成されている。83は底部と口縁部の境目に稜をもつ杯で，外底面はヘラ削りされている。胎土に雲母・赤

褐色粒を含み，淡橙色に焼成されている。

土師器甕（84） 小破片のため口径は復原しえない。口縁部が薄く如意状に外反し，胴部は膨らまない。石英粒を胎土に含み，暗褐色ないし橙色に焼成されている。

土師器甑（85） 復原底部径16.4cmの大きさで，口縁側に向かって直線的に僅かに開く。胎土に石英・雲母・赤褐色粒を含み淡褐色に焼成されている。

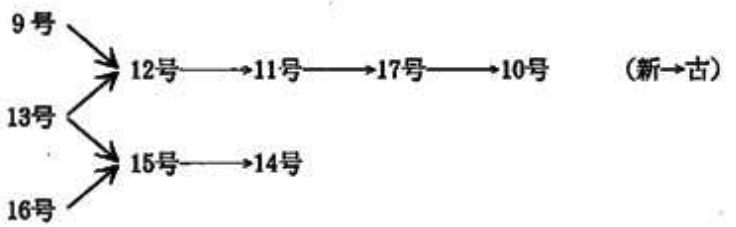
その他にカマド部分から黒曜石剥片3点が出土した。

出土土器では，須恵器杯蓋・杯身の特徴から8世紀前半頃とみられる。

9号住居跡（第27図，旧9A住）

9号住居跡から17号住居跡まで9つの住居跡が重複して調査されている。また，この9つの住居跡の南側でもほぼ同程度の住居跡が重複して調査されているが，長島遺跡のなかでは，最も数多い住居跡が重なって調査された場所である。この場所が長島遺跡では標高50m前後の高所にあることや同じ場所に数度にわたって建て替えられていることを考え合わせると，集落のなかでも特別な意味がこの場所の竪穴式住居跡にあったことを予想させる。竪穴式住居跡それぞれの規模や形状，出土遺物のありかたからは，とりたててそれを裏付け出来るような状況を見いだすことは出来ないが，この場所にこだわって竪穴住居を営んだことは事実である。

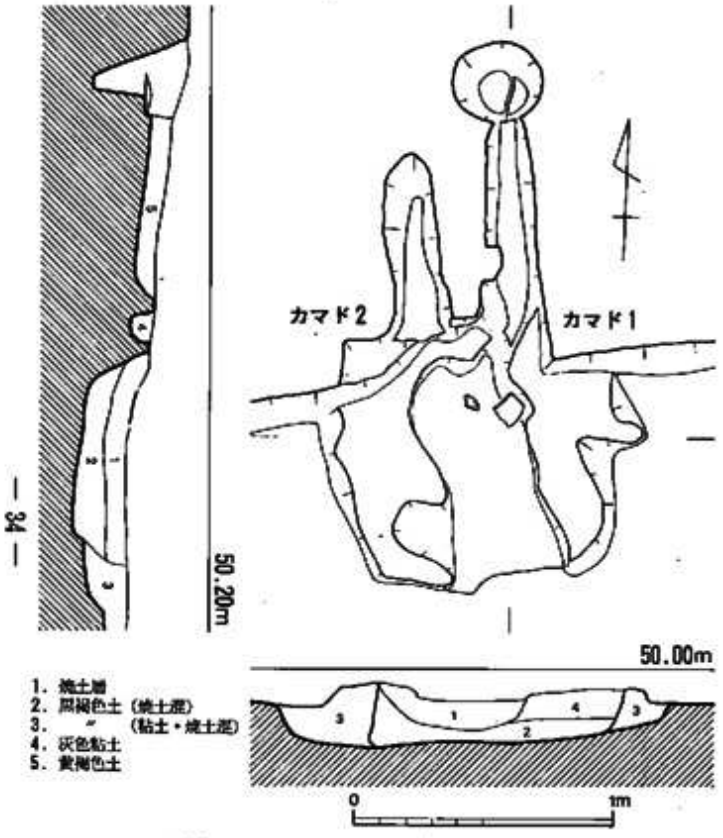
9号住居跡から17号住居跡の切り合い関係は以下のように整理される。



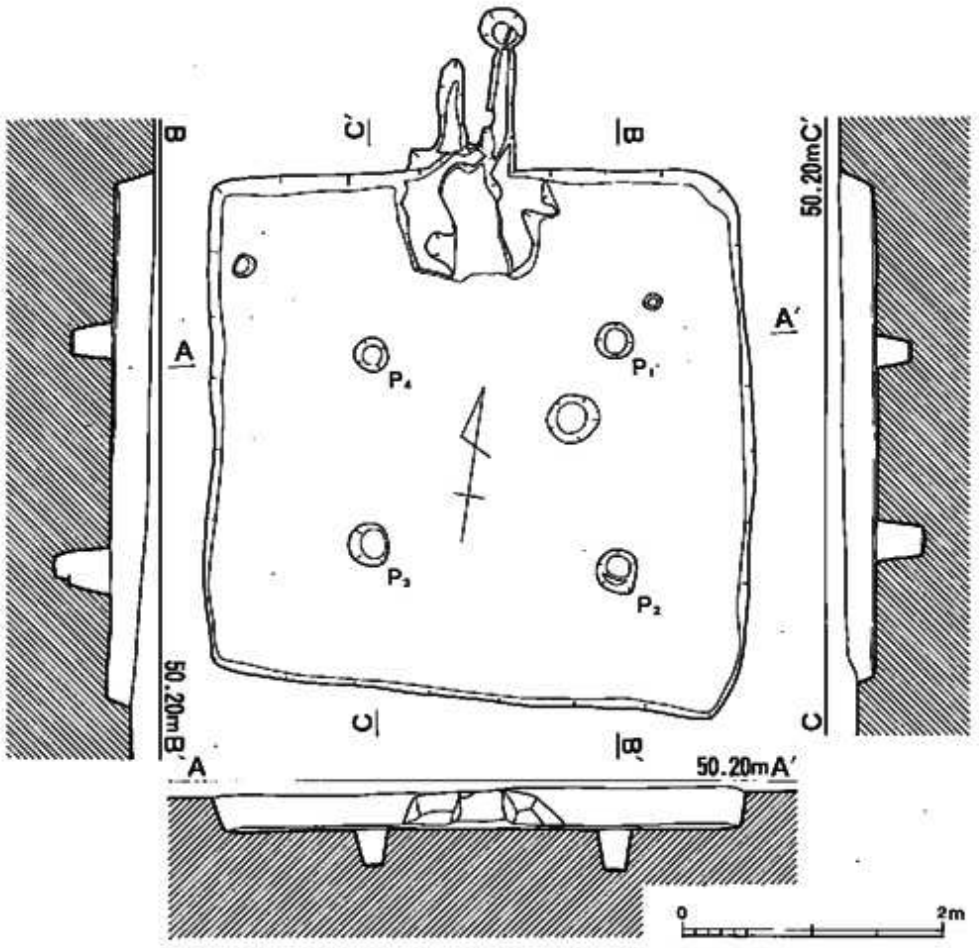
この結果から見ると，9号・13号・16号住居跡が共存する可能性を持つことになるが，それぞれの竪穴住居跡の間隔が2m弱であるから，3者が共存する状況は考えがたい。また，住居跡出土遺物も，住居跡それぞれにこれだけの重なりがあると，カマド跡出土の土器などを除けば，確実にその住居跡に伴った土器と言い切れるものは極く少ない。

9号住居跡は最も北側で調査された。10号・12号住居跡を切って造られている。一辺3.7～4.0m程の不整方形の住居跡である。床までの深さは15cm前後である。南側で10号住居跡を，東南隅で12号住居跡を切っている。柱穴は4ヶ所。直径25～30cmの掘り方のものである。北側の柱穴2つがやや南によって設定されているのはカマドを北壁に築いたためであろう。カマドは築き直しをしたため煙道が2つ見つかっている。（栗原）

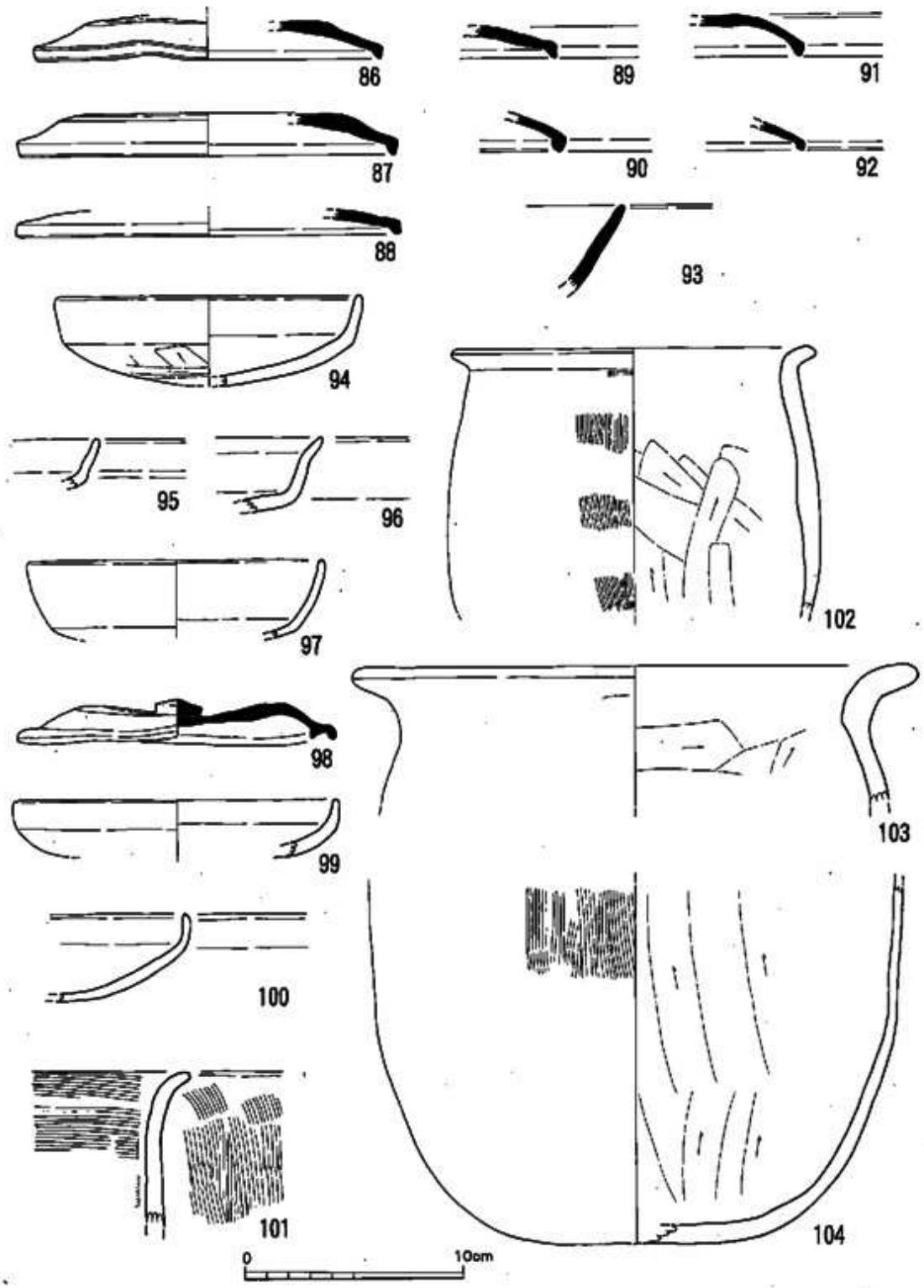
第一カマド（第28図）



第28図　9号住居跡カマド実測図（1/30）



第27図　9号住居跡実測図（1/60）



第29図　9～11号住居跡出土土器実測図（1/3）

平面図には図示されていないが，下部掘り込みを有するⅠａ類で，北壁中央に付設する。また，第二カマドを切る。袖部は灰色粘土・黒褐色土で構築されており，右袖は長さ84cm，基底部幅33cm，残高６cmで，左袖は長さ84cm，基底部幅37cm，残高13cmを測り，壁面は良く焼けていた。焚口幅は42cmを測り，火床は加熱により赤変していた。支脚は不明。煙道は長さ121cm，幅26cm，深さ８cmを測る。先端には煙出しのピットを掘っているが，煙道底から22cmと深い。

第二カマド（第28図）

第一カマドに切られ，左側壁体コーナー部と煙道を残す程度であり，詳細は不明。煙道は長さ71cm，幅23cm，深さ６cmを測る。先端にピットを掘り込まないタイプのものである。（小田）

出土遺物（図版35・47，第29・62図）

土　器（第29図）

須恵器杯蓋（86～92）　いずれも小破片だが，86～88は復原口径15.8～17.6cmの大きさ。86・87・88・91の外天井には回転ヘラ削りの痕がみられる。鳥嘴状のかえりを有すが，90～92は端部のかえりが鈍く丸い。87の焼成があまい他はいずれも堅緻な焼成具合いである。

須恵器杯身（93）　蓋受けのかえりを有さない杯身で，小破片のため口径は復原できない。口縁部はやや厚めで直線的に開く。焼成がややあまく淡灰色を呈している。

土師器杯（94～96）　94は底部からやや稜をなして口縁部が内彎気味に立ち上がる杯で，復原口径14.2cm，器高4.2cmの大きさ。底部外面はヘラ削りされている。胎土に雲母・赤褐色粒を含み，淡褐色に焼成されている。95・96は底部と口縁部の境目に稜をもち，口縁端部が外反する杯で口径は復原しえない。胎土に雲母を含み，淡褐色に焼成されている。

鉄製品（第62図）

鉄　鏃（5）　広根圭頭の鏃で，長さ10.1cm，身部幅2.1cm，厚さ0.1cm，関部幅1.2cm，厚さ0.5cm，茎部径0.4～0.5cmの大きさ。先端は丸みをもっている。

出土土器では，須恵器杯蓋の特徴から８世紀前半頃とみられる。

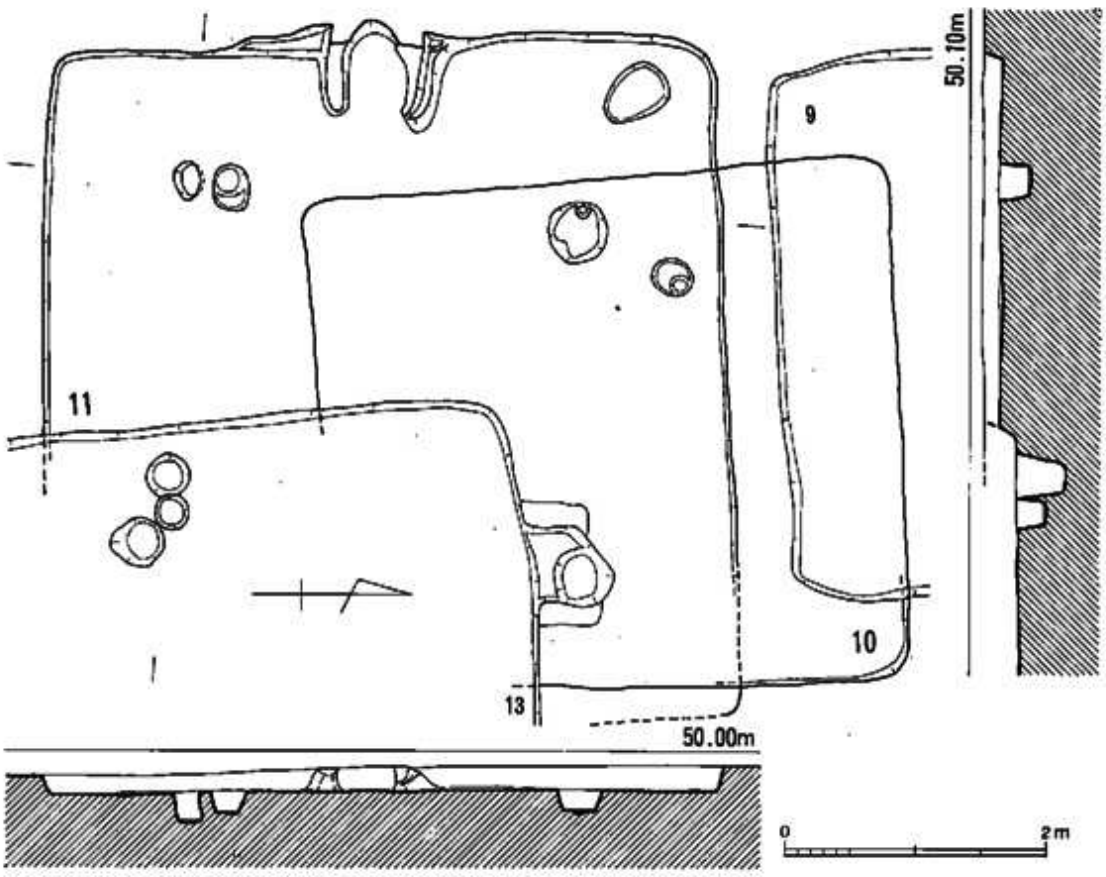
10号住居跡（第30図，旧９Ｂ住）

西壁の一部が９号・11号住居跡の間で残っていたのと，東北隅がわずかに残っていた。このことから一辺４m 前後の方形の住居跡と考えられる。９号・11号・12号・13号・17号住居跡に切られている。カマドや柱穴の痕跡も10号住居跡のものとはっきりしているものは見つかっていない。（栗原）

出土遺物（第29図）

土　器（第29図）

土師器杯（97）　底部からやや稜をなして口縁部が内彎気味に立ち上がる杯で，復原口径13.8cm，残存器高3.6cmの大きさ。底部外面は磨滅して調整手法は不明である。胎土に雲母・



第30図　10・11号住居跡実測図（1／60）

赤褐色粒を含み，淡褐色ないし淡橙色に焼成されている。

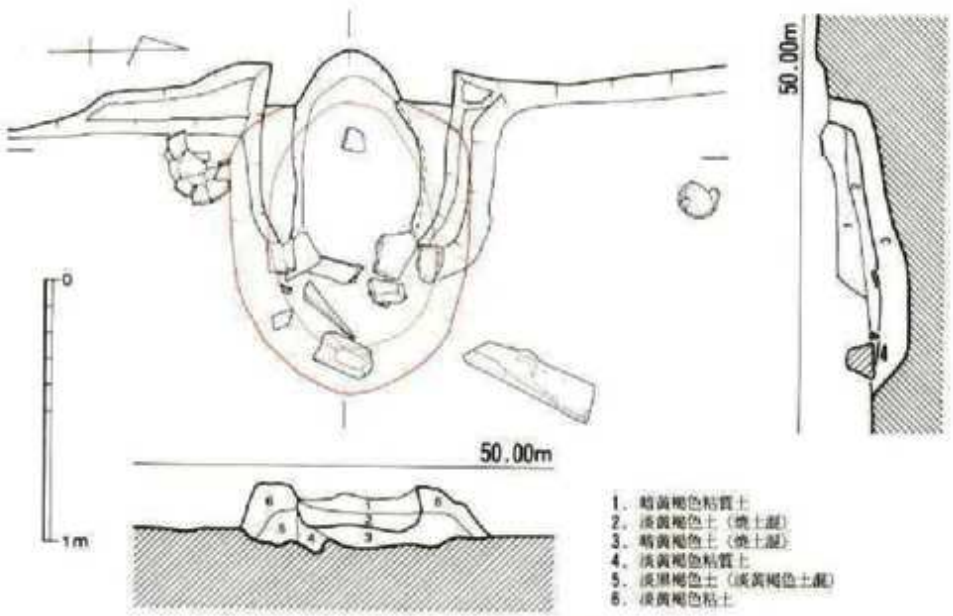
土師器杯の特徴は9号住居跡出土の94の杯と大差がみられず，8世紀前半頃であろう。

11号住居跡（第30図，旧9C住）

住居跡の東側を12号・13号住居跡に切りとられているが，西半部が残っていた。西壁で5mを測るから，一辺5m程の方形住居跡と考えた。床までの深さ10cm前後と浅い。柱穴は4つと思われるが，東北の柱穴は13号住居跡のカマドと重なって未調査のままである。カマドは西壁中央にとりつけられている。（栗原）

カマド（図版7－1，第31図）

下部掘り込みを有するⅠa類で，西壁中央に付設する。下部掘り込みは117cm×92cmの長円径を呈し，暗黄褐色土で埋めていた。袖部は淡黒褐色土・淡黄褐色粘土で構築しており，先端には片岩の割石を立てて補強している。右袖は長さ70cm，基底部幅28cm，残高18cmで，左袖は



第31図　11号住居跡カマド実測図（1／30）

長さ64cm，基底部幅24cm，残高17cmを測る。また，右袖の東側には長さ53cm，幅13cmの片岩があり，掛口部の補強材として使用していたと思われる。焚口幅は40cmで，火床は加熱を受けていたが，支脚については不明。煙道は長さ20cmを留めるに過ぎない。左袖のすぐ左側から土師器甕が出土した。（小田）

出土遺物（図版35，第29図）

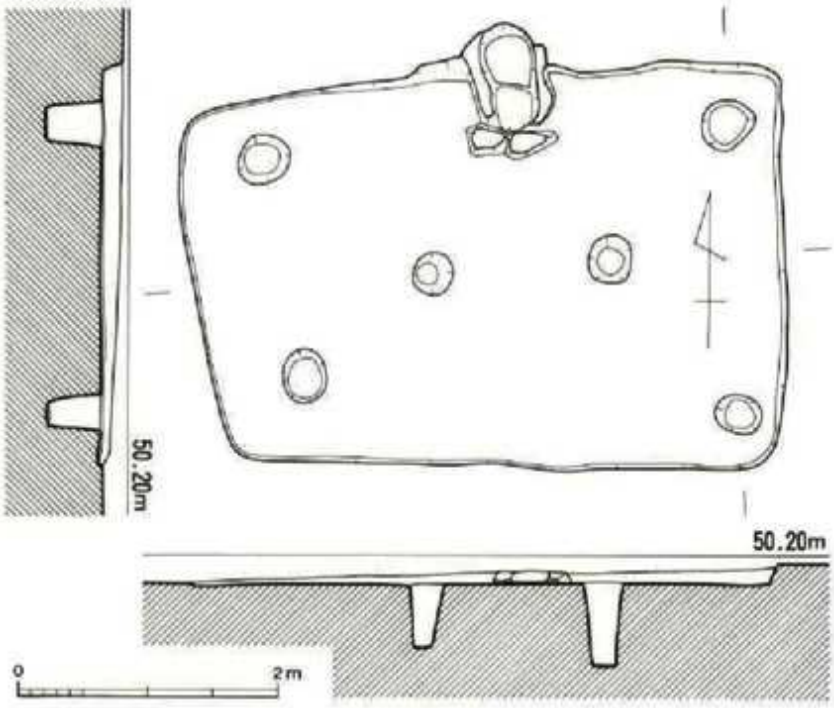
土　器（第29図）

須恵器杯蓋（98）　身受けのかえりを有する杯蓋で，回転ヘラ削り調整される外天井に扁平な宝珠形つまみが付く。やや歪んでいるが，口径14.7cm，器高2.1cmの大きさである。胎土に石英粒を含み，青灰色ないし黒灰色の色調に堅く焼成されている。

土師器杯（99・100）　口縁部が内彎気味に立ち上がる杯で，99は復原口径14.8cmだが，100はやや大きめである。底部側内外面はナデ調整されている。99は胎土に角閃石を含み，100は雲母・赤褐色粒を含む。色調はいずれも淡褐色を呈している。100はカマド内から出土した。

土師器甕（101～104）　103以外の3点はカマド部から出土した。101～103の口縁部はいずれも如意状に外反するが，101は薄く緩やかに反るもので甑の口縁部の可能性もあろう。103の口縁部は肥厚してやや強めに外反するが，102の外反は短い。102～104の胴部内面はヘラ削りされ，104の器壁は薄い。いずれも胎土に雲母・赤褐色粒を含み，淡橙色・淡褐色あるいは淡茶褐色に焼成されているが，102は二次的な火熱を受けてかなり赤変している。

出土土器のうち，須恵器杯蓋の特徴は7世紀後半頃とみられる。



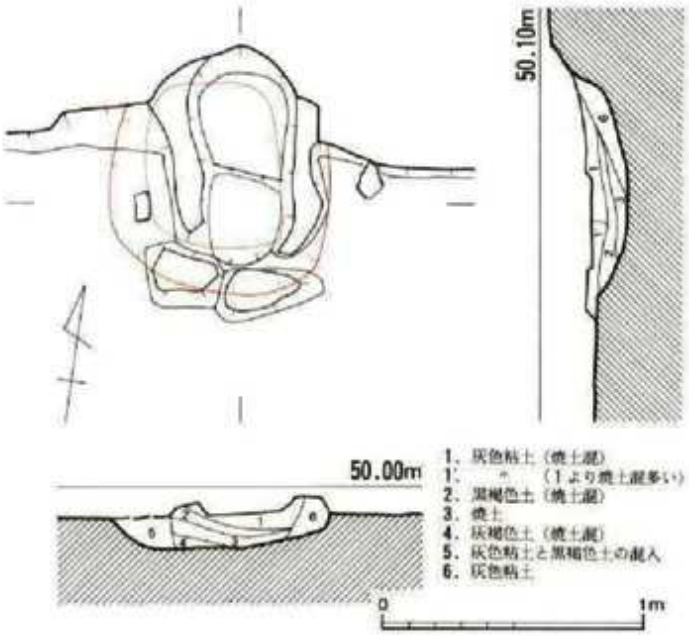
第32図　12号住居跡実測図（1／60）

12号住居跡

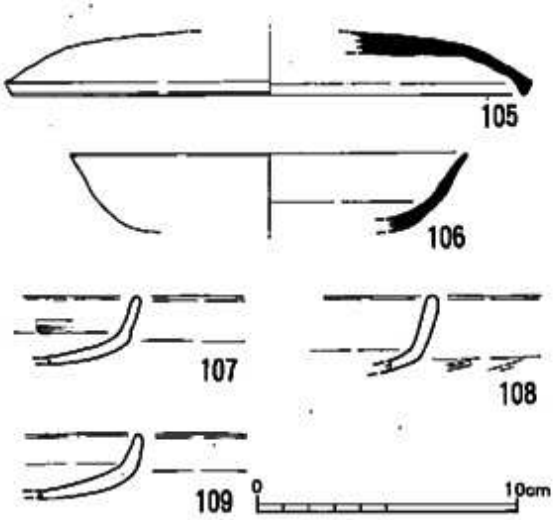
（第32図，旧9D住）

北壁で4.5m，東壁で3.0mの平面長方形の小形の住居跡である。西北隅を9号住居跡に切られ，西南隅では13号住居跡のカマドが後に築かれ，10号・11号・17号住居跡を切って造られている。床までの深さは比較的残りの良い東壁近くでも10cm以下と浅い。柱穴は，北壁中央に築かれたカマドを挟むように住居跡中央に2つと四隅に配置され入母屋構造の上屋が想定される。

（栗原）



第33図　12号住居跡カマド実測図（1／30）



第34図　12号住居跡出土土器実測図（1/3）

カマド（第33図）

下部掘り込みを有するⅡa類で，北壁のやや東寄りに付設する。下部掘り込みは86cm×85cmの隅丸方形を呈し，住居壁を30cmほど掘り込む。右袖は残存長62cm，基底部幅12cm，残高6cmで，下部掘り込みから灰色粘土を盛って構築している。平面図に示した左袖は本来の袖部ではなく，断面図の⑤層から立ち上がるものと考えられる。煙道は遺存しないが，奥壁が若干抉れている。また，カマドの前面には灰・焼土が広がっており，壁体の大半は何らかの理由により破壊されたのであろう。

（小田）

出土遺物（図版47，第34・36，62図）

土　器（第34図）

須恵器杯蓋（105）　身受けのかえりが鳥嘴状を呈する杯蓋で，外天井は回転ヘラ削り調整されるが中央部を失い，つまみは不明。復原口径20.0cmの大きさで，口縁端部は三角に尖る。胎土に石英粒を含み，淡青灰色に堅く焼成されている。

須恵器杯身（106）　口縁部が緩やかに外反しながら開く杯身で，底部を失うため高台の形状は不明。胎土に石英粒を含み，暗灰色に堅く焼成されている。

土師器杯（107～109）　底部と口縁部の境がやや稜をもって屈曲する杯で，107の屈曲は段状をなし，内面に板状工具によるナデ調整痕がある。いずれも小破片のため口径は復原しえない。胎土に角閃石・赤褐色粒などを含み，淡褐色に焼成されている。

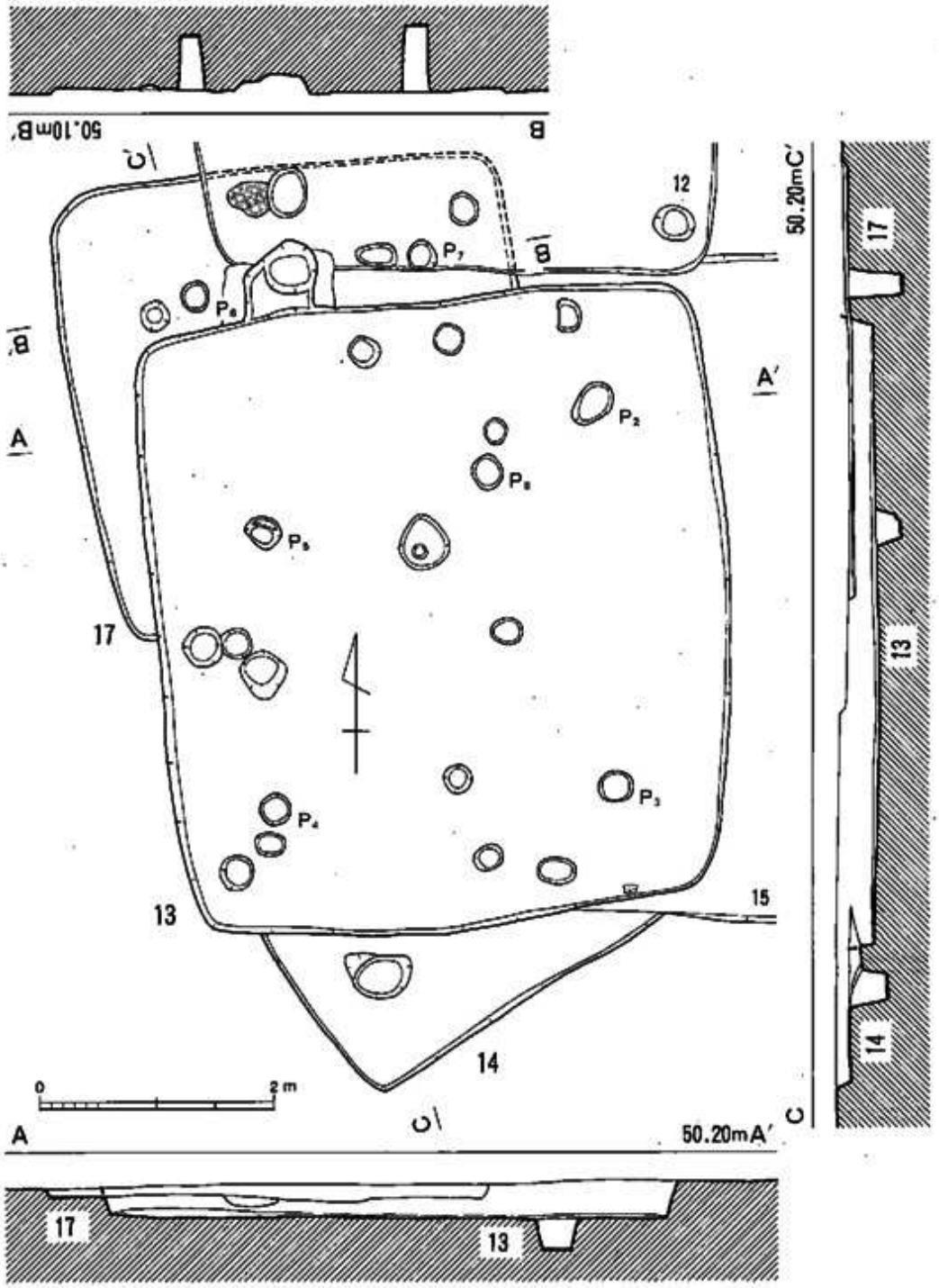
鉄製品（第62図）

鉄　鏃？（6）　接合しないが同一個体とみれる破片で，幅0.5cm，厚さ0.3cmの，やや扁平な棒状である。両端ともに欠損していて確実ではないが，鏃の茎部であろうか。

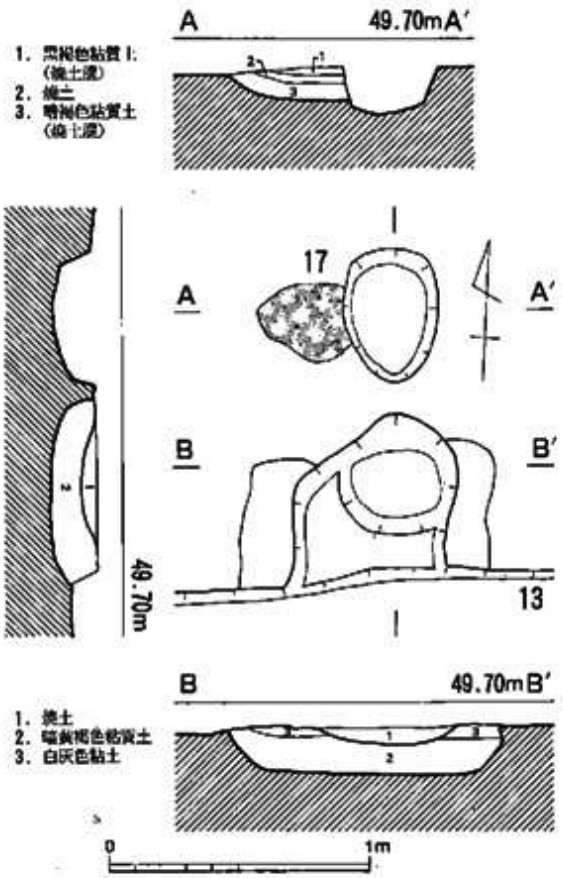
出土土器のうち，須恵器杯蓋の特徴は8世紀半ば以降とみられる。

13号住居跡（第35図，旧9E住）

12号住居跡のすぐ南で，一辺5m程の方形プランの住居跡である。10号・11号・14号・15号・17号住居跡を切って造られている。柱穴は直径25～30cmのものを3ヶ所検出しているが，



第35図　13・14・17号住居跡実測図(1/60)



第36図　13・17号住居跡カマド実測図（1/30）

西北隅の1つは調査出来ていない。カマドは北壁やや西寄りに築いている。9号～16号住居跡の重なりのなかでは，比較的残りの良い方で床面まで20cm程の深さがあった。（栗原）

カマド（図版8－1，第36図）

平面図には図示されていないが，下部掘り込みを有するⅢa類で，北壁の西寄りに付設する。袖部は下部掘り込み（幅105cm）を一旦埋めた後，粘土を盛っている。右袖は残存長50cm，基底部幅22cm，左袖は残存長50cm，基底部幅26cmを測る。床面から奥壁にかけて強く赤変している。煙道は遺存しておらず，支脚については不明。（小田）

出土遺物

（図版35・36・47，第12・37図）

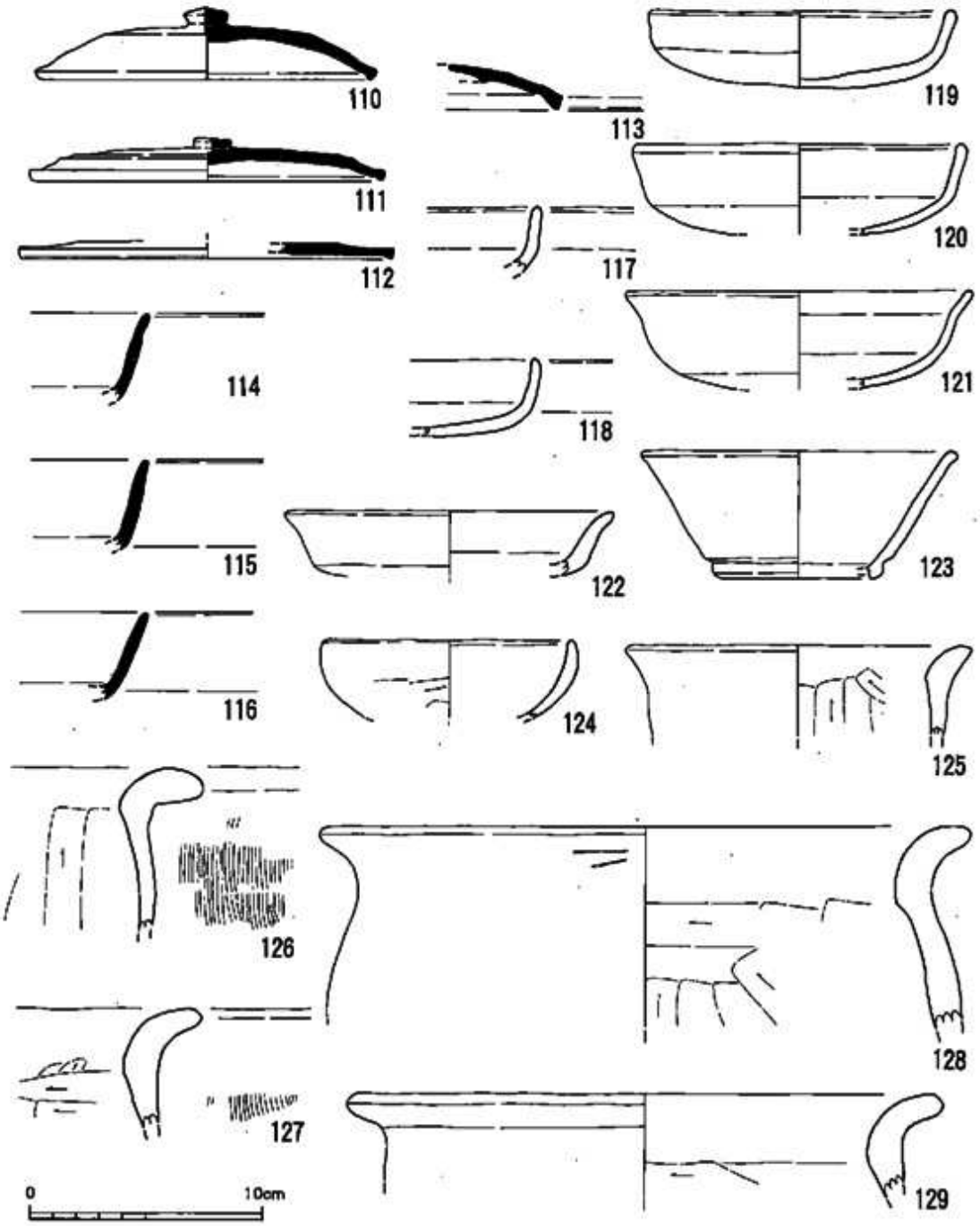
土　器（第37図）

須恵器杯蓋（110～113）　身受けのかえりが鳥嘴状を呈する杯蓋で，110・111では外天井に小さめの宝珠形つまみが付く。110は復原口径14.7cm，器高3.1cmの大きさ。111は復原口径15.2cm，器高1.9cmの大きさで112とともに扁平な器形をなし，口縁端部のかえりも低い。いずれも堅く焼成され，灰色ないし，淡青灰色に焼成されている。111と112はカマド付近から出土した。

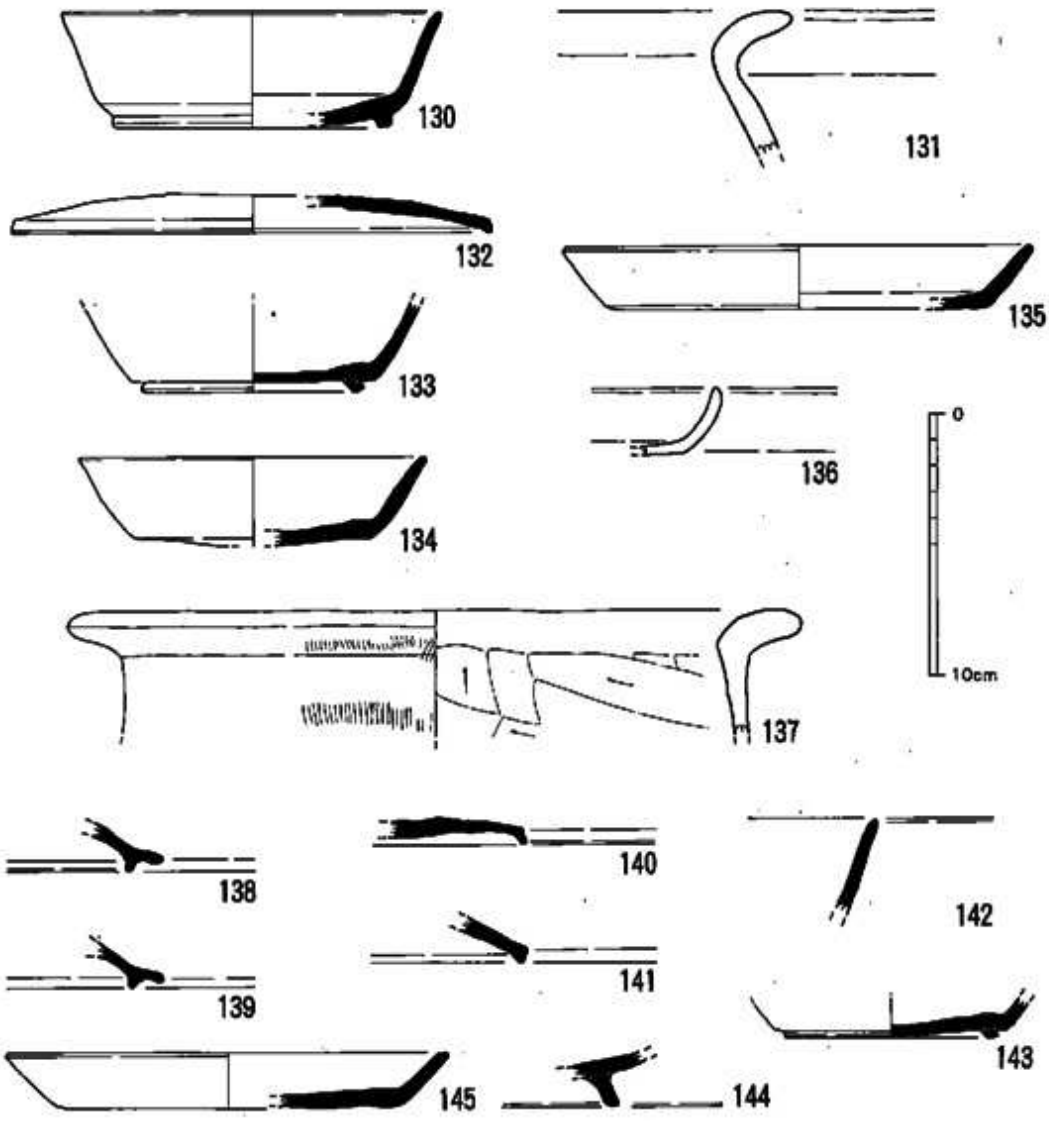
須恵器杯身（114～116）　いずれも口縁部小破片で，やや開いて立ち上がるが，114・115の口縁端部はやや外反する。底部を失うため高台の形状は不明。胎土に石英粒を含み，115の焼成はややあまいが他の2点は堅く焼成されている。115はカマド付近から出土した。

土師器杯（117～124）　117～120は底部と口縁部の屈曲にわずかな稜をもち，口縁端部が若干内彎気味に立ちあがる杯。121は口縁端部が外反する杯で，122は底部側の器壁が厚めで屈曲して，口縁が短く外反する。磨滅するがナデ調整痕のみられるものが多い。119～122の復原口径は13.2cm，14.5cm，15.0cm，14.1cmである。123は高台をもつ須恵器杯を模倣したタイプで，底部から口縁部が直線的に開くが，復原口径13.7cm，器高5.5cmの大きさで，深い器形である。胎土に石英・雲母を含み，淡褐色に焼成されている。124は口縁部が内彎して立ち上がる杯で，

復原口径13.0cmの大きさ。石英・雲母を胎土に含み，淡褐色に焼成されている。



第37図　13号住居跡出土土器実測図(1/3)



第38図　14～16号住居跡出土土器実測図（1/3）

土師器甕（125～129）　125は口縁部が肥厚して短く外反する小型の甕で，復原口径15.0cmの大きさ。126は口縁部が肥厚して強く外反するが，胴部がほとんど膨らまない。127～129は口縁部がさほど肥厚しないが，胴部が膨らむ甕である。肩部内面に横方向のヘラ削り痕がみられる。128・129の復原口径は28.2cm，25.8cmである。いずれも胎土に石英・雲母や赤褐色粒などを含み，淡褐色ないし淡茶褐色の色調に焼成されていて，129の頸部外面には煤が付着している。

土製品（第12図）

管状土錘（14） 両端部を欠損する破片で，残存長3.6cm，外径1.1cm，内径0.3cm，重量4.0gを測る。成形時にナデ調整されているが，赤褐色粒を胎土に含み，淡黄灰褐色に焼成されている。

出土土器のうち，須恵器杯蓋の特徴は8世紀半ば頃とみられる。

14号住居跡（第35図，旧9F住）

他の住居跡群がほぼ南北ないしは東西に棟方向をとるのに対し，北から西に棟方向を30°近く振った住居跡である。住居跡の大半を13号・15号住居跡によって切りとられ，南隅の1ヶ所が調査出来たのみである。床面までの深さも6cm程と浅い。（栗原）

出土遺物（第38図）

土　器（第38図）

須恵器杯身（130） 高台を有する杯身で，口縁部は緩やかに外反し，高台は底部の端近くに断面コ字形に付く。復原口径14.7cm，器高4.5cmの大きさ。ややあまい焼成で淡灰色を呈する。

土師器甕（131） 口縁部はさほど肥厚しないが，胴部が膨らむ甕である。器面が磨滅して調整手法は不明。胎土に石英・雲母を含み，暗橙色に焼成されている。

須恵器杯身の特徴からは8世紀半前半に考えられよう。（小池）

15号住居跡（第39図，旧9G住）

東南隅を16号に，西半部を13号に，北西部を12号住居跡に切られる。南西部では14号住居跡を切って造られていた。東半部の壁と柱穴の配置状況から一辺5.8m程の方形プランの住居跡である。

床面までの深さは残りの良い部分で20cm程である。柱穴は掘り方が20～30cm程，深さ40cm程のもの4ヶ所を考えている。西北の柱穴がやや位置的に内側である。カマドは西壁に築かれていただろう。（栗原）

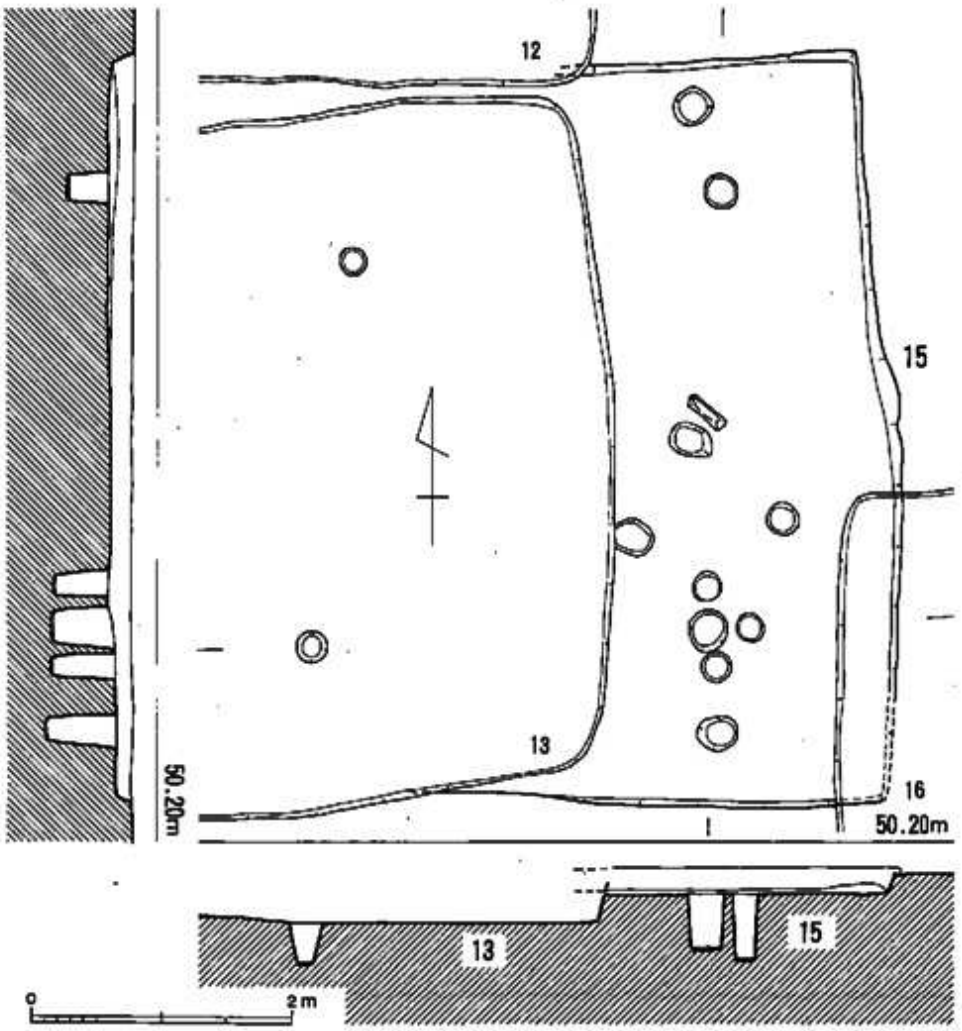
出土遺物（図版36，第38図）

土　器（第38図）

須恵器杯蓋（132） 口縁端部に鈍い鳥嘴状のかえりをもつ杯蓋で，外天井部のつまみの有無は分からない。復原口径18.7cmの大きさで，暗灰色に堅く焼成されている。

須恵器杯身（133・134） 133は踏ん張るような形状の高台を有する杯身で，口縁端部を欠く。134は高台を有さない杯で，外底面はナデ調整されている。復原口径13.3cm，器高3.4cmの大きさ。胎土に若干砂粒を含み，堅い焼成で淡緑灰色を呈する。

須恵器皿（135） 平らな底部から口縁が開く皿で，復原口径18.2cm，器高2.5cmの大きさ。細砂粒を胎土に含み，あまい焼成で灰色を呈する。



第39図　15号住居跡実測図（1／60）

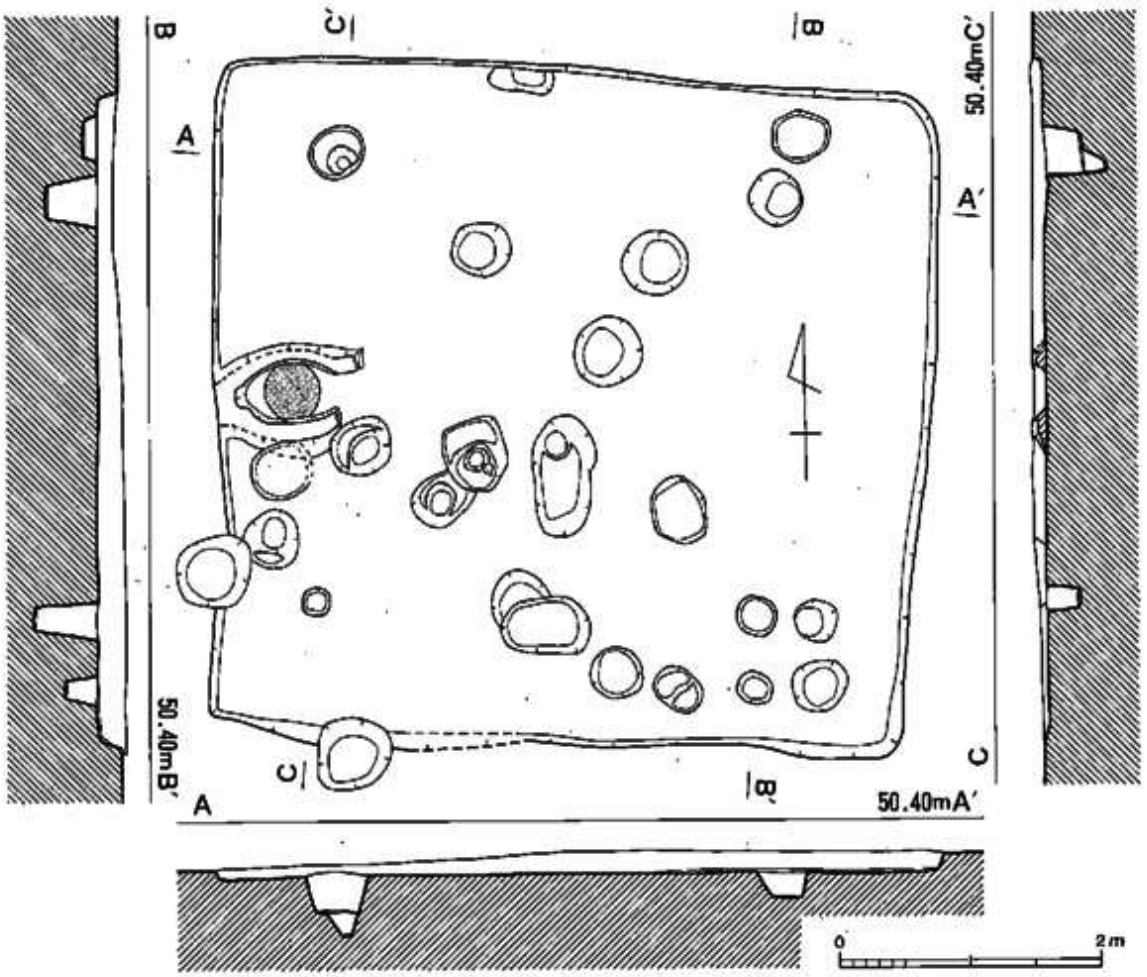
土師器杯（136）　底部から稜をなして口縁部が立ち上がり，端部が内彎気味になる杯である。胎土に赤褐色粒を含み，淡褐色に焼成されている。

土師器甕（137）　口縁部はやや肥厚して強く外反するが，胴部の膨らまない甕である。復原口径28.3cmの大きさ。胎土に石英・雲母などを含み，暗橙色に焼成されている。

須恵器杯身の特徴からは8世紀半初頭頃に考えられよう。（小池）

16号住居跡（第40図，旧9H・I住）

西北隅で15号住居跡を切って造られている。一辺5.2m程の方形の住居跡である。柱穴の掘方は直径20～40cm，深さ20～50cmと不揃いであるが，4本を想定した。床面までの深さは15cm



第40図　16号住居跡実測図（1/60）

程。カマドは西壁に築かれていた。7号掘立柱建物と西南隅で重なっている。（栗原）

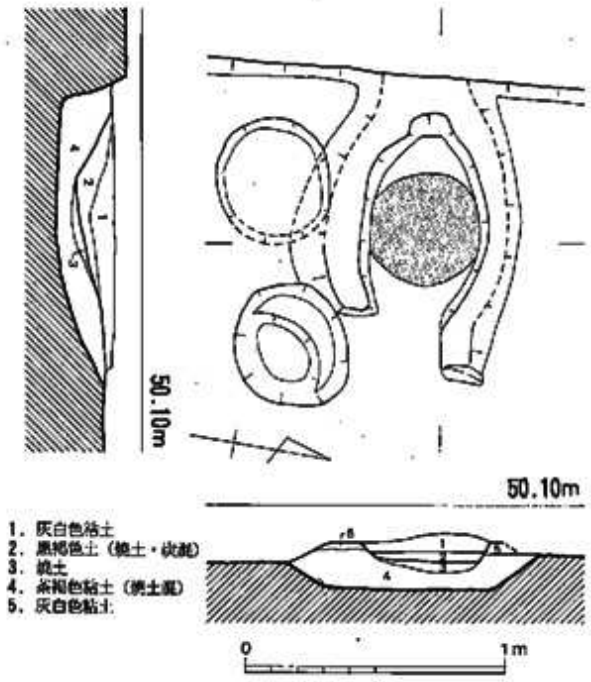
カマド（図版8－2，第41図）

当カマドも下部掘り込みを有するⅠa類で，西壁中央に付設する。袖部は下部掘り込み（幅96cm）を茶褐色粘土で一旦埋めた後，灰白色粘土で構築している。右袖は115cmと長いが，先端には焚口の補強石を有する。基底部幅は20cmを測るが，残高は8cmと削平が著しい。左袖は先端部をやや欠くが，焚口部の幅は25cm程と思われる。火床は43cmの範囲で良く焼けていたが，支脚については不明。煙道は奥壁側の立ち上がり部を10cm程留めるに過ぎない。（小田）

出土遺物（図版36，第38・42図）

土　器（第38・42図）

須恵器杯蓋（138～141）　138・139は小破片だが，口縁端部に身受けのかえりを有する杯蓋。



第41図　16号住居跡カマド実測図（1/30）

139のかえりは鈍い。138は暗緑灰色，139は茶灰色に堅く焼成されている。139はカマド付近から出土した。

140・141は鳥嘴状のかえりをもつ杯蓋で，つまみの有無は分からない。140の口縁端部は薄く尖り気味だが，141は鈍く屈折する。

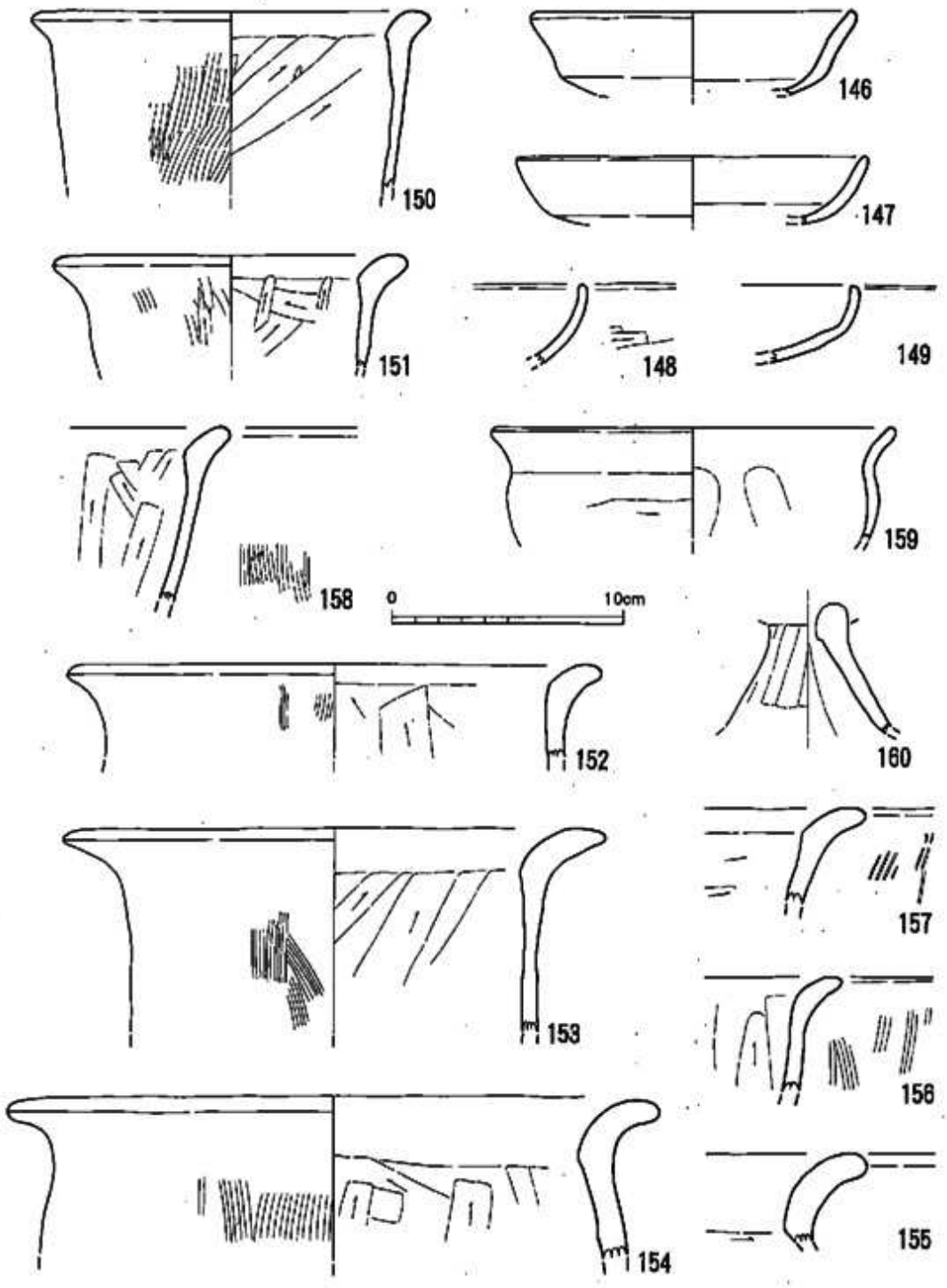
胎土に砂粒を若干含み，淡青灰色・緑灰色に堅く焼成されている。

須恵器杯身（142～144）　142は直線的に開いて立ち上がる口縁部破片。143は低い高台を有す杯底部破片で，外底面はナデ調整されている。いずれも淡灰色に堅く焼成されている。144は高台部分の破片で，高台が高めであり，あるいは壺などの底部かも知れない。

須恵器皿（145）　平らな底部から口縁が開く皿で，復原口径17.6cm，器高2.2cmの大きさ。石英粒などを胎土に含み，あまい焼成で淡灰色を呈する。

土師器杯（146～149）　146は底部から屈曲して立ち上がった口縁部が外反する杯。復原口径14.2cmの大きさで，淡褐色に焼成されている。147～149は口縁部が内彎あるいは内彎気味に立ち上がる杯で，147は復原口径15.2cmの大きさ。148・149は外底部にヘラ削り痕がみられる。いずれも胎土に雲母・赤褐色粒などを含み，淡橙色に焼成されている。

土師器甕（150～156）　150・151は口縁部が如意状に外反し，頸部から胴部へ膨らまない小型の甕。口縁部の器壁は肥厚するが，胴部外面はハケ目，内面はヘラ削りされて胴部の器壁は薄い。復原口径では150が17.6cm，151が15.4cmの大きさで，胎土に雲母・角閃石・赤褐色粒を含み，淡褐色ないし茶褐色に焼成されている。152・153は150・151の甕と同様の器形で型の大きな例である。復原口径では152が23.2cm，153が23.6cmを測るが，胎土に雲母・角閃石・赤褐色粒などを含み，淡褐色に焼成されている。150～153はいずれも外面に煤が付着している。154・155は口縁部が如意状に外反し，頸部から胴部に膨らみがみられる大型の甕で，口縁部の器壁はさほど肥厚しない。154の復原口径は28.3cmで，胎土に雲母・赤褐色粒などを含み，淡褐色ないし淡黄褐色に焼成されている。156は如意状に外反する口縁部破片で，器壁が薄い。



第42図　16号住居跡出土土器実測図（1/3）

土師器鍋（157・158） 破片資料で口径も復原できないので152・153と明確な区別をし難いが，胴部が下側にすぼまることから鍋の破片とした。口縁部の特徴はほぼ同様で，157の外面には煤が付着している。

土師器鉢（159） 扁球形の胴部から口縁部が外反する浅めの鉢であり，胴下半部の外面にはヘラ削り痕がみられる。胎土に雲母・赤褐色粒を含み，淡褐色に焼成されている。

土師器高杯（160） 杯部・裾部をともに欠くが，裾に向かって開く中空の柱状部破片で，外面に縦方向，内面に横方向のヘラ削り痕がみられる。

須恵器杯蓋の特徴からは7世紀後半と8世紀半前半に考えられるが，杯身や皿にも両者の時期幅がみられる。（小池）

17号住居跡（第35図，旧9K住）

西壁一辺と東北隅が12号住居跡の床面より僅かに深かったことから一辺4m弱の正方形の平面プランをもつ住居であることがわかった。柱穴は直径20cm前後，深さ50～60cm前後のもの4本を検出した。4本柱によって形づくられる平面が歪みの大きな方形である点やや気になる。カマドは13号住居跡のカマドに隣接する位置に焼土があり，北壁に築かれたものと判明している。（栗原）

カマド（図版8－1，第36図）

住居跡が12号住居跡に切られるため北壁際に30cm×32cm程の焼土面を留めるのみで，壁体・袖部は全く遺存しておらず，詳細は不明。また焼土面を切るピットは12号住居跡の柱穴で，カマドとは無関係。（小田）

出土遺物（第43図）

土　器（第43図）

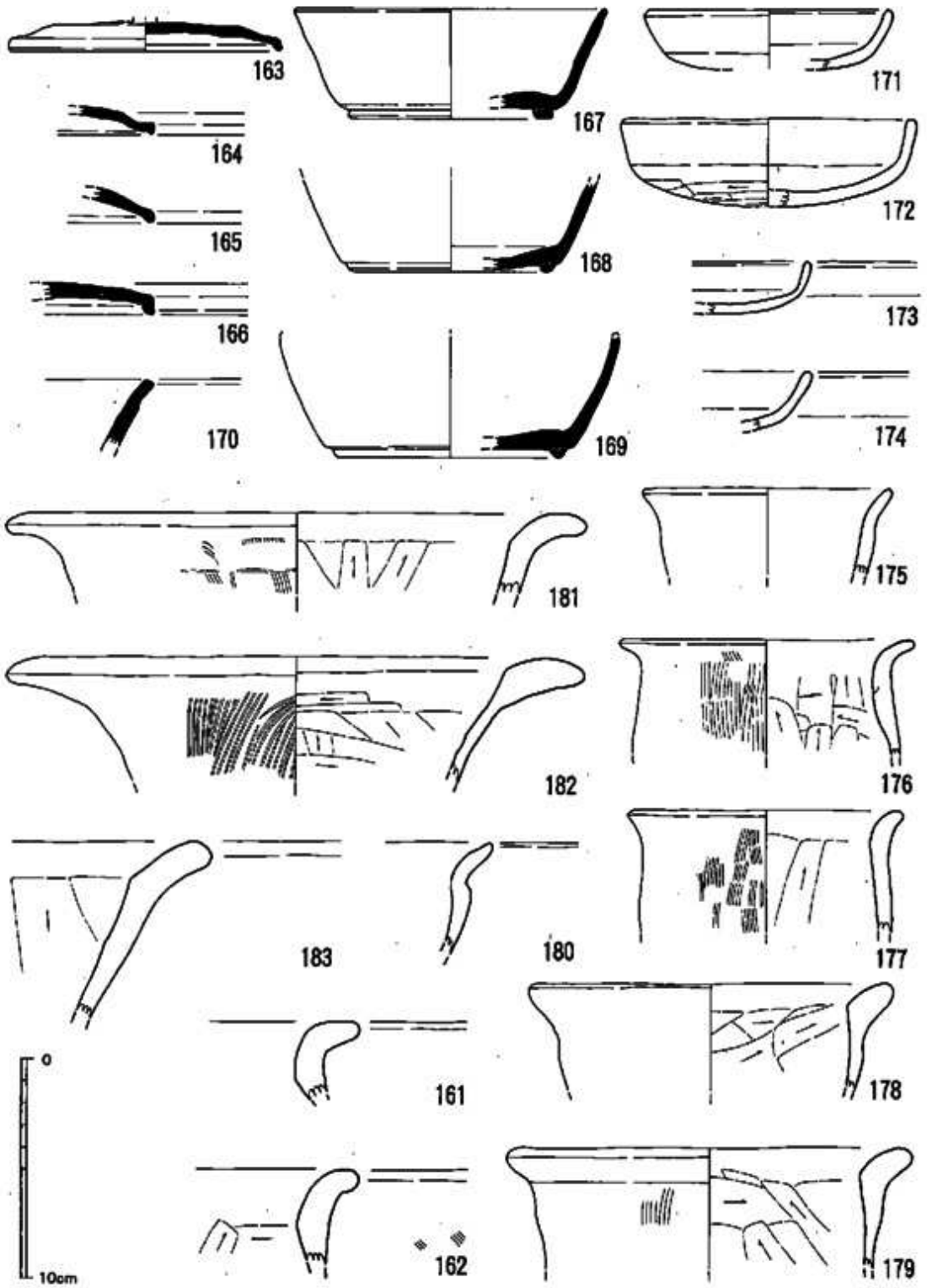
土師器甕（161・162） ともに口縁部が如意状に外反する破片だが，反り具合は161が強く，胴部への膨らみがみられる。一方の162は頸部から胴部へ膨らまない甕であろう。

土師器甕の口縁部小破片のみでは細かな時期を判定し難い。また17号住居跡からは掌に入るほどの焼成された粘土塊が1点出土している。

なお，9号から17号住居跡の重複した部分から出土した帰属不明の土器について以下に紹介する。

9～15号住居跡付近出土土器（図版37，第43図）

須恵器杯蓋（163～166） いずれも身受けのかえりが口縁端部で鈍い鳥嘴状をなす杯蓋で，163では外天井につまみが付いていて剥落した痕跡がみられる。復原口径12.6cmの大きさで，外天井は回転ヘラ削りのあとにナデが加わっている。163・164は堅く焼成されるが，165・166



第43図　9～15号住居跡付近出土土器実測図（1/3）

の焼成はあまい。

須恵器杯身（167～169） いずれも高台を有する底部から直線的に口縁部が開く杯身である。167は復原口径14.3cm，器高5.0cmの大きさで，高台は低くやや外に開き，口縁端部はやや外反する。168・169は断面蒲鉾形の低い高台が底部端に付き，口縁端部を欠くが内彎気味である。いずれも焼成があまく，淡茶灰色ないし淡緑灰色を呈している。

須恵器口縁片（170） 直線的に開く破片で，外面の口唇部下が凹線状に浅く凹む。

土師器杯（171～174） いずれも底部から屈曲して口縁部が立ち上がる杯で，内彎気味である。172・173の外底部はヘラ削りされている。復原口径は171が11.4cm，172は13.5cmで，172の器高は4.0cm。胎土に雲母・赤褐色粒を含み，淡褐色ないし暗橙色に焼成されている。

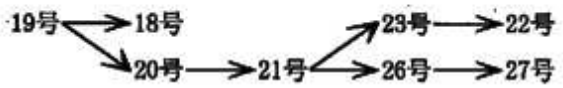
土師器甕（176～179） 小型の甕で如意状に口縁部が外反するが胴部への膨らみは小さい。176の口縁端部の器壁が薄いのに比して179は肥厚する。176は復原口径13.4cmで淡茶褐色に，177は復原口径12.6cmで暗褐色に焼成され，177の外面には煤が付着している。179は復原口径18.4cmの大きさである。178は復原口径16.7cmの大きさで，179との大きな差異がみられない。

土師器鉢（175・180） 175は復原口径8.6cm，180は小破片であるが，開いた胴部からさらに口縁部が薄く外反する。

土師器鍋（181～183） 開いた胴部から口縁部が肥厚して外反する器形で，181の口縁端部の肥厚は少ない。胴部外面は縦方向ハケ目，内面は縦方向のあと横方向にヘラ削りされている。181・182の復原口径はいずれも26.5cmを測る。（小池）

18号住居跡（第44図，旧11A住）

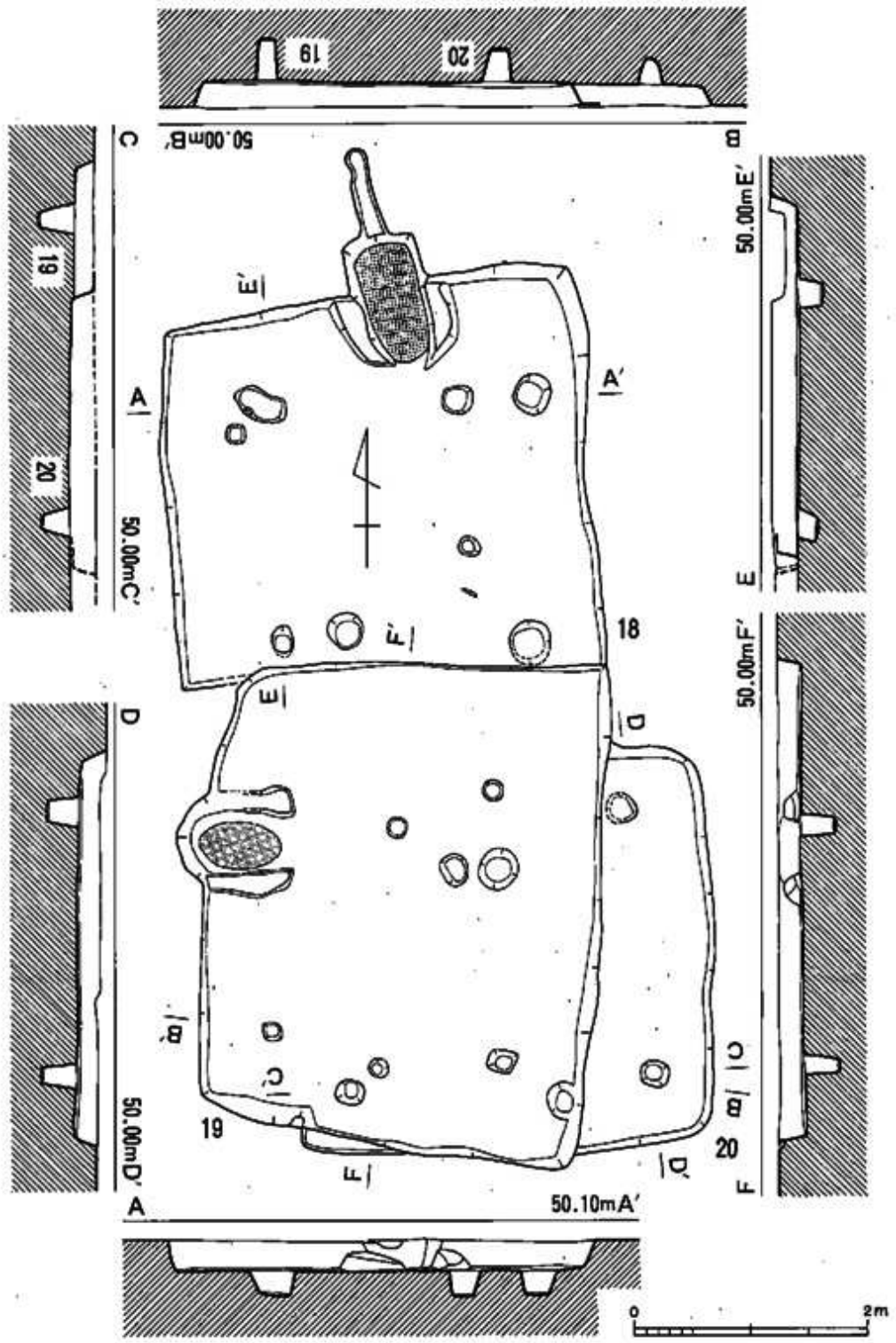
18号住居跡から23号・26号・27号住居跡まで8つの住居跡が重複して調査された。ここでの重複関係は，以下のとおりである。



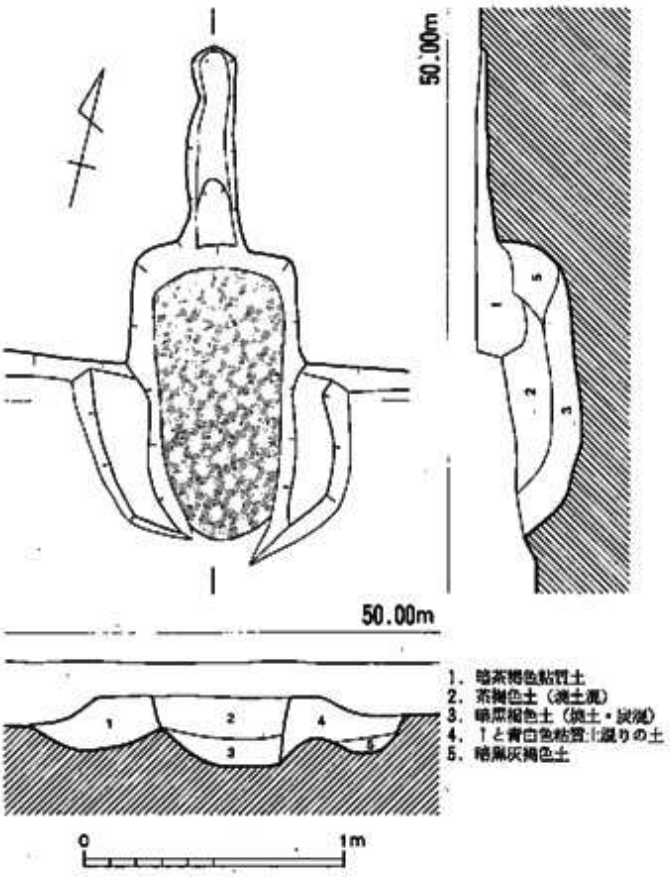
（新→古）

ここでの立て替えの関係は，東南から北西にかけて27号，26号，21号，20号，19号の順に移動しながら新しい竪穴住居が建て替えられていった状況が認められる。それぞれの住居跡の出土遺物から判断される年代幅はそう広くないようであるから，この場所にこだわって住居跡の建て替えが行われていたと考えている。

18号住居跡は，19号住居跡に南壁を切られている。一辺が3.1～3.7mの平面が不整方形の住居跡である。床面までの深さは15～20cm前後である。柱穴の掘り方は直径20～40cm，深さ20cm前後のもの4本である。柱穴の配置状況から，やや住居跡の東壁・南壁側が狭く，北壁側・西



第44図　18～20号住居跡実測図（1／60）



第45図　18号住居跡カマド実測図（1/30）

壁側が広い。カマドは北壁中央に築かれていた。（栗原）

カマド（図版8－3，第45図）

袖部の遺存状態は良くないが，全体的な形状は留めている。火床面が床面より一段下がるⅢa類で，北壁中央に付設する。壁体は幅65cm，奥行き45cmの方形を呈する。右袖は長さ75cm，基底部幅27cm，残高6cmで，左袖は長さ68cm，基底部幅33cm，残高11cmを測り，茶褐色粘質土を盛っていた。火床はさほど焼けておらず，支脚については不明。煙道は先端ピットを有しないもので，長さ76cm，幅18cm，深さ5cmを測る。（小田）

出土遺物（図版36，第46図）

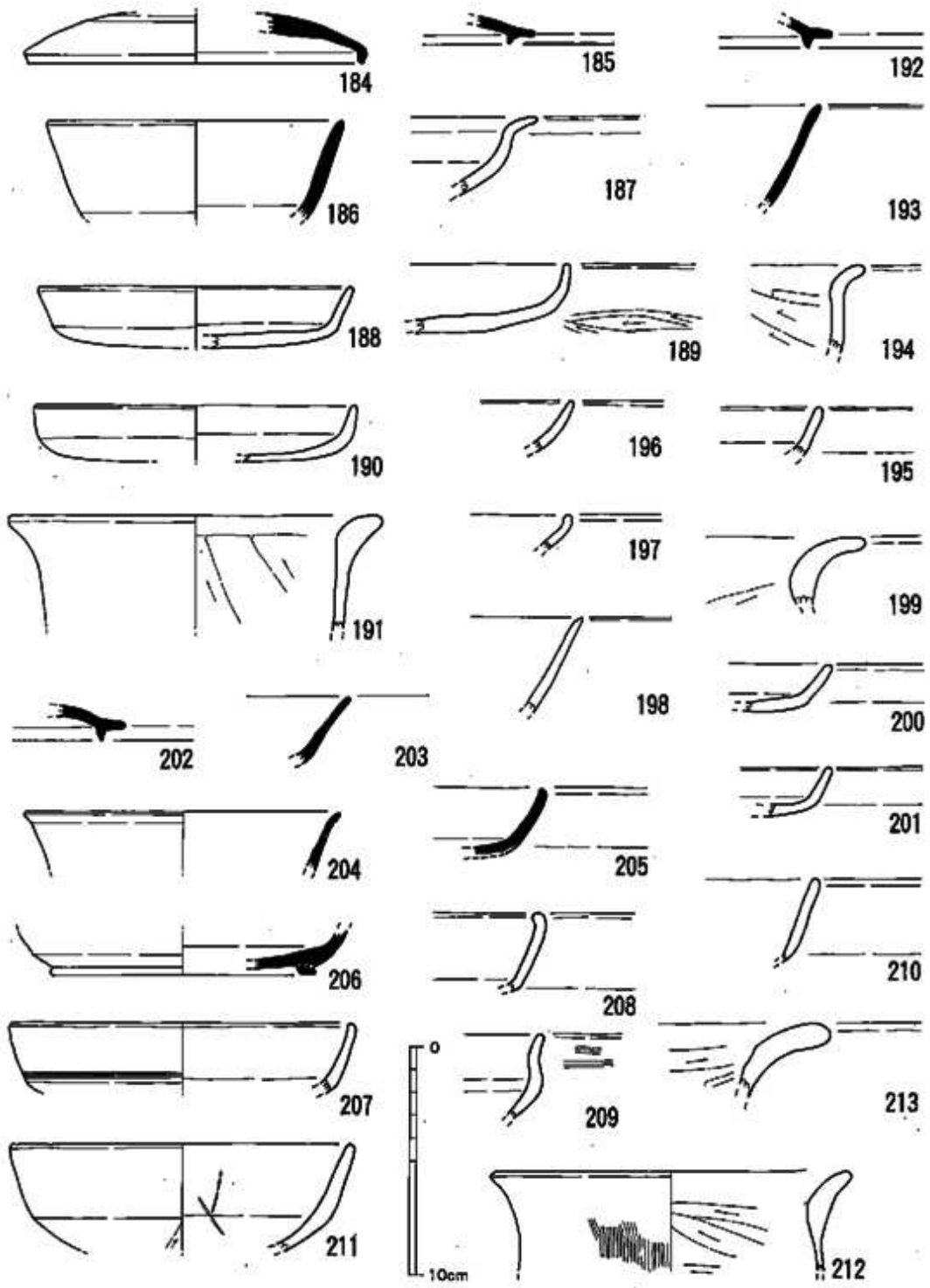
土　器（第46図）

須恵器杯蓋（184・185）　184は身受けのかえりが口縁端部で鳥嘴状をなす杯蓋で，復原口径15.0cmの大きさ。外天井は回転ヘラ削りされている。185は身受けのかえりがｙ字状をなす杯蓋で，小破片のために径は復原できない。焼成では184は堅いが185はあまい。いずれもカマド内から出土した。

須恵器杯身（186）　高台を有する杯身と思われるが，底部を欠く。口縁部は直線的に開くが器壁はやや厚めである。復原口径13.1cmの大きさで，焼成があまく淡灰色ないし白灰色を呈している。

土師器皿（187）　口縁部が如意状に外反する皿で，小破片のため径は復原できない。器面は磨滅するが外面にヘラ削りないし板ナデ痕と一部ヘラ磨きの痕跡がみられる。胎土に雲母・赤褐色粒を含み，淡橙色に焼成されている。

土師器杯（188～190）　いずれも底部から屈曲して口縁部が立ち上がる杯で，188の口縁部は直線的ながら外反気味だが，189・190は内彎気味である。なお189の外底部はヘラ削りされている。188は復原口径14.0cm，器高2.7cm。190は復原口径14.4cmで，器高2.5cm。188は胎土に



第46図　18～21号住居跡出土土器実測図（1/3）

雲母を含み淡褐色に焼成されている。カマド内出土。189・190は胎土に雲母・赤褐色粒を含み，淡褐色ないし淡橙色に焼成されている。

土師器甕（191） 小型の甕で如意状に口縁部が外反するが，口縁部は肥厚し，胴部へは膨らまない。復原口径16.6cmの大きさで，胴部内面はヘラ削りされる。胎土に雲母・赤褐色粒を含み，淡茶褐色に焼成されている。

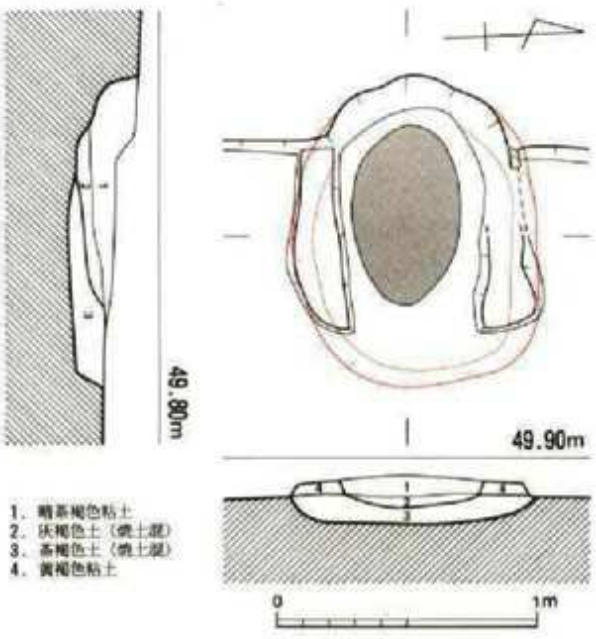
出土土器では，カマド内出土の須恵器杯蓋・土師器杯の特徴からみて，8世紀初頭から前半にかけての時期を考えたい。（小池）

19号住居跡（第44図，旧11B住）

北壁部分で18号住居跡を切り，東壁から南壁部分が20号住居跡を切る。一辺3.4～4.2m程の平面不整方形の住居跡である。床までの深さは20cm程。柱穴掘り方は直径15～20cm，深さ30cmの小さなもの3本がみつかっている。西壁に築かれたカマド近くに西北隅の柱穴を推定できるが，検出していない。カマドは西壁中央やや北よりに築かれていた。（栗原）

カマド（図版9－1，第47図）

下部掘り込みを有するⅡb類で，西壁中央に付設する。カマドの構築方法は住居壁際を122cm×95cmの楕円形に掘り込み茶褐色土で一旦埋めた後，黄褐色粘土で袖部を構築する。右袖は残存長66cm，基底部幅26cm，残高5cmで，左袖は残存長72cm，基底部幅22cm，残高5cmを測る。煙道は削平されたものか，遺存していない。支脚についても不明。（小田）



第47図 19号住居跡カマド実測図（1/30）

出土遺物（第46図）

土　器（第46図）

須恵器杯蓋（192） 身受けのかえりがy字状をなす杯蓋で，小破片のために径は復原できない。ややあまい焼成で，淡緑灰色に焼成されている。

須恵器杯身（193） 高台を有する杯身と思われるが，底部を欠く。口縁部は直線的に開くが器壁は薄めで，端部で外反する。あまい焼成で，暗灰色を呈している。

土師器甕（194） 小型の甕で如意状に口縁部が外反するが，口縁部は肥厚せず，胴部へも膨らまない。小破片だ

が胴部内面はヘラ削りされる。胎土に雲母・赤褐色粒を含み，淡茶褐色に焼成されている。

土師器杯（195～197） いずれも口縁部小破片である。195・196の口縁部は直線的に立ち上がるが，197は内彎する。胎土に雲母・赤褐色粒などを含み淡褐色ないし暗橙色に焼成されている。

出土土器では，カマド内出土の須恵器杯蓋・土師器杯の特徴からみて，7世紀末から8世紀初頭頃に考えておきたい。（小池）

20号住居跡（第44図，旧11C住）

19号住居跡に西側3分の2近くを切られている。住居跡の南西隅の一部が19号住居跡の南壁と重なって残っていた。東壁・南壁部分では21号・22号住居跡を切って造られている。東西3.2m前後，南北が3.7～4.4mとやや南北が長い平面形の住居跡である。床面は19号住居跡よりやや浅い。床までの深さ15cm程が部分的に残る。柱穴は東壁近くの2つに，南西隅の柱穴が柱穴に対応すると思われるが，西北隅の柱穴は検出していない。カマドは西・北壁のいずれかであったろう。（栗原）

出土遺物（第46図）

土　器（第46図）

須恵器杯身（198） 高台を有する杯身と思われるが，底部を欠く。口縁部は直線的に開くが器壁は薄めで，端部で外反する。堅い焼成で，淡緑灰色を呈している。

土師器甕（199） 口縁部が肥厚せずに強く外反する甕小破片で，全体の形は分からないが，胴部内面はヘラ削りされる。胎土に雲母を含み，淡褐色に焼成されている。

土師器杯（200～201） いずれも口縁部小破片である。底部から口縁部には稜をもって屈曲し，内彎気味ながら直線的に立ち上がる。胎土に雲母・赤褐色粒などを含み淡褐色ないし淡茶褐色に焼成されている。

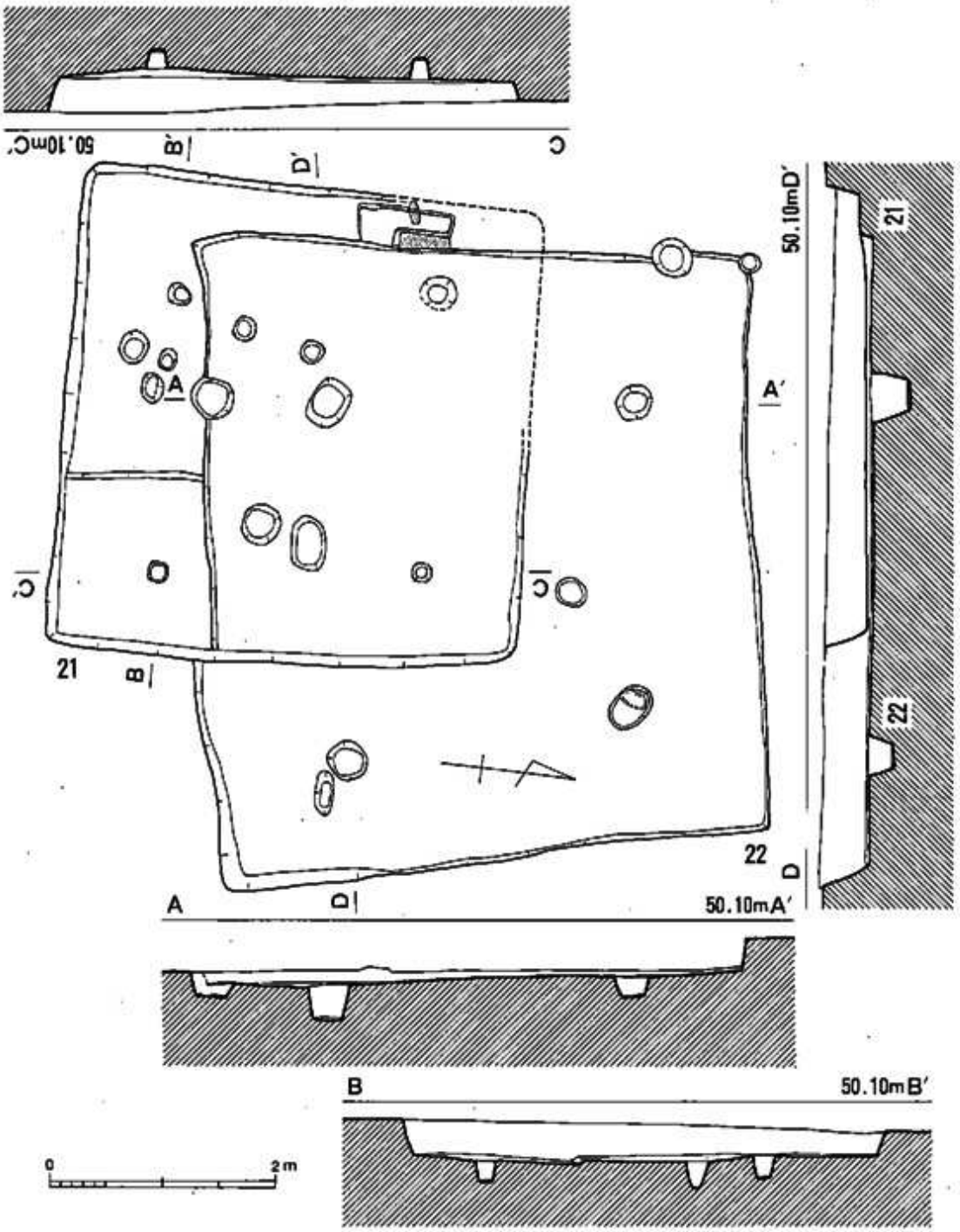
20号住居跡では掌大の粘土塊も1点出土した。なお出土土器では，須恵器杯身や土師器杯の特徴からみて，8世紀初頭頃に考えておきたい。（小池）

21号住居跡（第48図，旧11D・G住）

西北部分を19号・20号住居跡に切られ，北壁から東壁部分で22号・23号・26号住居跡を切って造られている。東壁・南壁の状況から一辺4.2m程の平面方形の住居跡である。床面までの深さは35cm程あり，22号住居跡より5cm程高い。柱穴は直径20cm，深さ15～20cm程と小さなもので，4つ検出されている。カマドは北あるいは西壁に築かれたものだろう。（栗原）

出土遺物（図版47，第46・62図）

土　器（第46図）



第48図　21・22号住居跡実測図（1/60）

須恵器杯蓋（202） 身受けのかえりがｙ字状をなす杯蓋で，小破片のために径は復原できない。堅い焼成で，淡緑灰色に焼成されている。

須恵器杯身（203～206） 高台を有する杯身と思われるが，203～205は底部を欠き，206は外方に踏ん張るような高台が付く。いずれも堅く焼成され，灰色・暗灰色に焼成されている。

土師器杯（207～211） いずれも口縁部小破片である。207・208の口縁部は内彎気味に立ち上がるが，209は外反し，210・211は直線的に立ち上がる。なお211は復原口径15.2cm，残存器高4.7cmで，椀のように深めで，口縁部の器壁が厚い。いずれも胎土に雲母・赤褐色粒などを含み淡褐色・褐色ないし淡橙色に焼成されている。

土師器甕（212） 小型の甕で，肥厚した口縁部は如意状に外反するが，胴部はさほども膨らまない。胴部外面はハケ目調整，内面はヘラ削りされる。胎土に雲母・赤褐色粒を含み，淡褐色に焼成されている。

土師器鍋（213） 口縁部小破片だが，やや肥厚気味で大きく外反する。胴部内面はヘラ削りされる。胎土に細砂粒・雲母を含み暗褐色に焼成されるが，外面には煤が付着している。

鉄製品（第62図）

鉄　鏃（7） 基部と被篦部の一部で，先端・基部端を欠く。現存長4.3cm，厚さ0.3cm前後，関部幅0.8cm，被篦部幅0.5cmを測る。

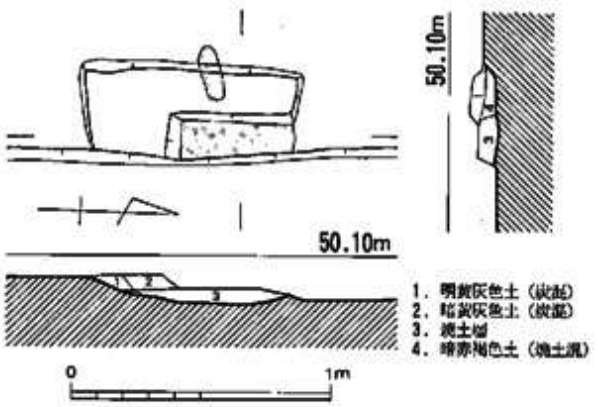
なお，21号住居跡からは粘土塊も１点出土した。出土土器では，須恵器杯蓋・杯身や土師器杯などの特徴からみて，７世紀末頃に考えておきたい。（小池）

22号住居跡（第48図，旧11Ｅ住）

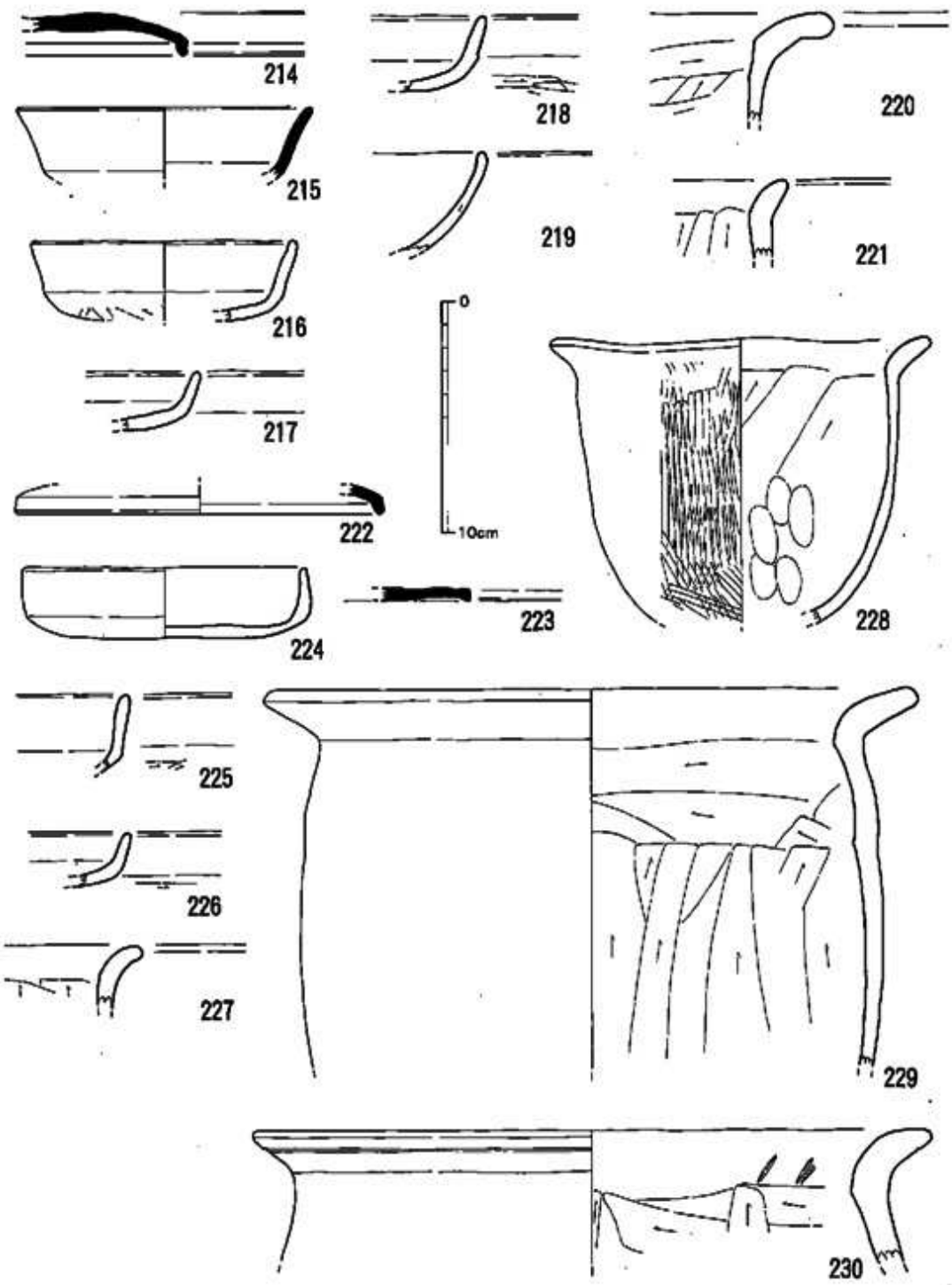
東北部分を23号住居跡に，南西部分を21号住居跡に，北西部分を20号住居跡に切りとられ，東南隅および北壁の一部が残るだけである。ただ21号・23号住居跡よりも床面が低く辛うじて平面形を知ることが出来た。南北4.8m，東西5.8mと平面長方形の住居跡である。柱穴の直径は30cmを越えるが，深さは20～30cm前後のものが四隅に配置されている。カマドの位置は，はっきりとしないが西壁を考えたい。（栗原）

カマド（図版７－２，第49図）

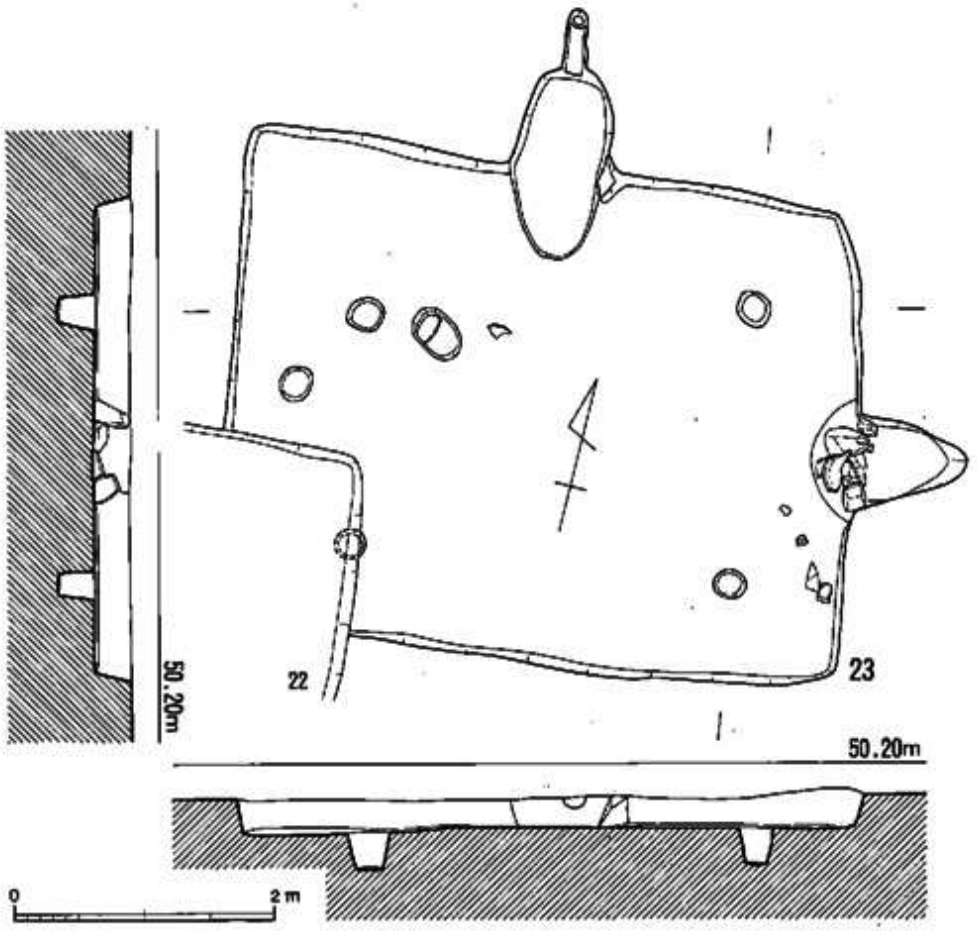
平面図には図示されていないが，下部掘り込みを有するⅡＡ類で西壁に付設する。遺存状態は悪く，奥壁及び左袖付近を留めるにすぎない。壁体は明黄灰色土・暗黄灰色土で構



第49図　22号住居跡カマド実測図（１/30）



第50図　22・23号住居跡出土土器実測図（1/3）



第51図　23号住居跡実測図（1／60）

築されている。火床は良く焼けていたが，支脚は不明。煙道も遺存しない。（小田）

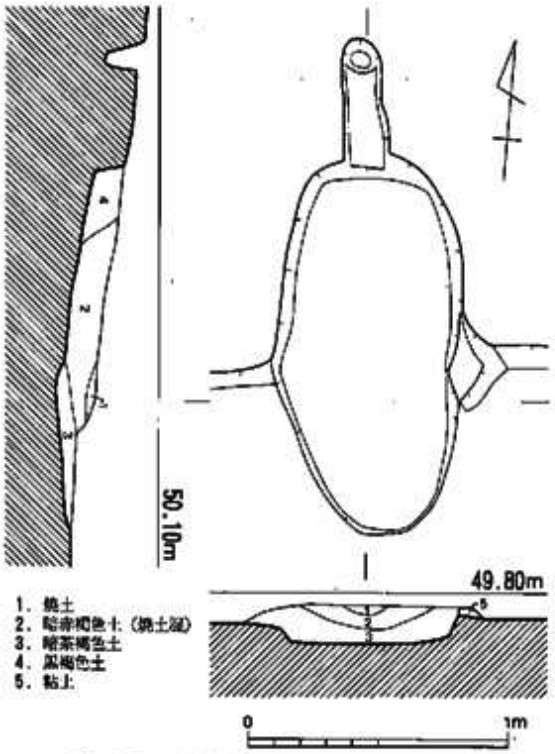
出土遺物（第50図）

土　器（第50図）

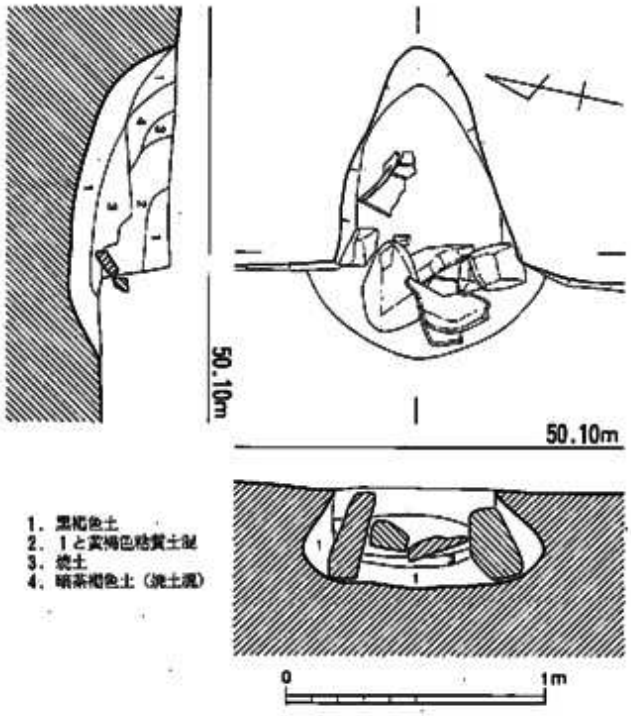
須恵器杯蓋（214）　身受けのかえりが鳥嘴状をなす杯蓋で，小破片のために径は復原できない。外天井は回転ヘラ削りされる。堅い焼成で，淡緑灰色に焼成されている。

須恵器杯身（215）　高台を有する杯身と思われるが，底部を欠く。口縁部は外反し，回転ナデ調整される。堅く焼成され，淡灰色に焼成されている。

土師器杯（216～218）　いずれも口縁部小破片である。216・218の口縁部は底部と口縁部の境に僅かな段を生じるが，217はやや稜をもつ程度である。216では復原口径11.6cm，器高3.5cmの大きさで，口縁端部は内彎気味にまとまる。いずれも胎土に雲母・赤褐色粒などを含み淡橙色ないし淡黄橙色に焼成されている。



第52図　23号住居跡北カマド実測図（1/30）



第53図　23号住居跡東カマド実測図（1/30）

土師器椀（219）　小破片で口径は復原できない。内彎して口縁部が立ち上がり，ヨコナデないしナデ調整される。胎土に雲母・赤褐色粒を含み淡褐色に焼成されている。

土師器甕（220・221）　口縁部がやや肥厚するが，220は強く外反し，胴部内面をヘラ削りされ，外面はヨコナデ調整される。外面に煤が付着し，鍋の可能性もあろう。221は小型の甕であろうか。外反は緩く，胴部へは膨らまない。胴部内面はヘラ削りされる。いずれも胎土に雲母を含み，淡橙色ないし褐色に焼成されている。

出土土器では，須恵器杯蓋・杯身や土師器杯などの特徴からみて，8世紀前半に考えておきたい。（小池）

23号住居跡（第51図，旧23住）

住居跡の西半部は22号住居跡を埋めて掘られているが，西南隅では21号住居跡に切られている。南北が3.6～3.8m，東西が4.7m程と平面長方形の住居跡である。床までの深さは22cm前後。直径25cm程の柱穴が四隅に配置される。南北の柱穴の間隔が1.8m，東西の柱穴間隔が3.0m程であるから，東西棟の建物と判断される。カマドは，北壁中央と東壁中央の2ヶ所にあるが，東壁のカマドの前面が閉塞されていることから，北壁のものが東壁のものより新しいと

考えられよう。(栗原)

北カマド(第52図)

火床面が床面より一段下がるⅢb類で，北壁中央に付設する。壁体は方形を呈し，幅70cm，高さ14cmを測るが，奥行きは75cmと長く煙道部とはアンバランスである。これは，カマド壁体と7号建物跡掘方とが重複しているためで，焼土を含まない黒褐色土の④層が右下がりであることから本来の奥行きは55cm程であろう。袖部の遺存状態は悪く，右袖のみ長さ17cmを留めるにすぎない。火床はさほど焼けておらず，支脚については不明。煙道は現状での長さ48cm，幅17cmであるが，壁体が20cm短くなることから70cm程の長さになろう。また，先端には径13cm，深さ15cmのピットを有する。

東カマド(図版9－2，第53図)

平面図には図示されていないが，下部掘り込みを有するⅢb類のカマドで，東壁中央に付設する。壁体は三角形を呈し，幅70cm，奥行き83cm，高さ24cmを測る。袖部の粘土はみられないが，壁体のコーナー部左右には長さ30～35cmの袖石を立てており，焚口幅は40cmになる。また，焚口部の前面にはカマドの使用を否定するかのように石が5個置いてあり，意識的に詰めたものと考えられる。火床は良く焼けていたが，支脚は不明。煙道は削平されたものか遺存しない。(小田)

出土遺物(図版36，第50図)

土　器(第50図)

須恵器杯蓋(222・223)　身受けのかえりが鳥嘴状をなす杯蓋の小破片である。223では外天井は回転ヘラ削りされる。堅い焼成で，淡灰色ないし白灰色に焼成されている。

土師器杯(224～226)　224は口径12.4cm，器高3.1cmの大きさの杯で，平坦な底部から丸みをもって屈曲して口縁部は直に立ち上がる。外底面は磨滅するが，全体にナデないしヨコナデ調整される。胎土に砂粒・雲母を含み，褐色に焼成されている。225・226は口縁部小破片で，225は屈曲した部分に僅かな凹みを生じている。口縁部の器壁はやや厚めである。胎土に雲母を含み淡黄橙色ないし淡褐色に焼成されている。

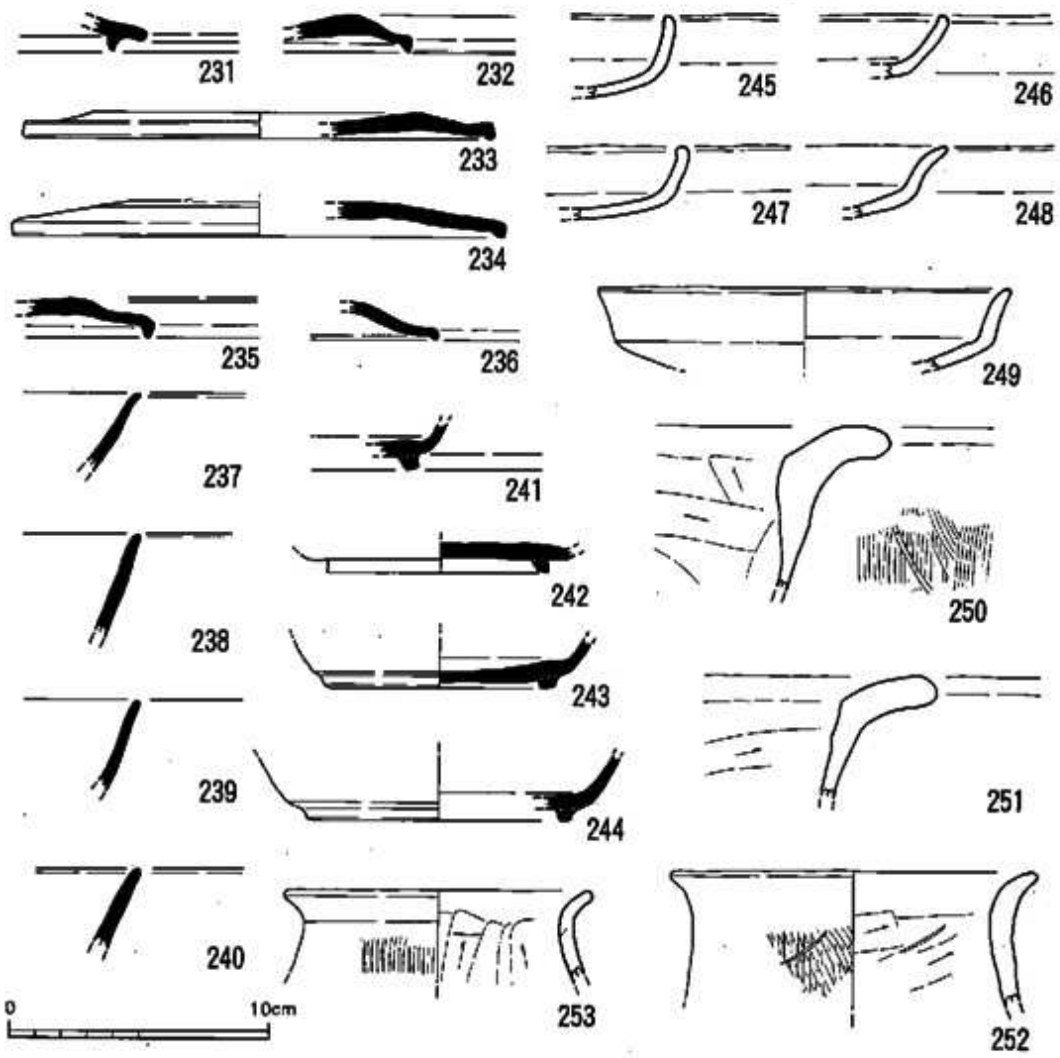
土師器甕(227～230)　227は口縁部が肥厚しないで緩やかに外反する。228は肥厚した口縁部が外反し，胴部が膨らまない小型甕である。胴部外面はハケ目，内面はヘラ削りと指押さえ痕がみられる。復原口径は16.6cm，残存器高12.5cmの大きさ。胎土に砂粒・雲母を含み，茶褐色ないし暗茶褐色に焼成されているが，外面には煤が付着する。229は，カマド内出土の，肥厚した口縁部が強く外反する甕で，胴部の膨らみは少ない。復原口径28.6cm，残存器高16.6cmの大きさ。胴部外面には板ナデ状の痕跡がみられ，内面は縦方向と，上位の横方向ヘラ削り痕がみられる。胎土に砂粒・雲母を含み，淡茶褐色ないし暗茶褐色に焼成されているが，胴部外面には煤が付着する。230は肥厚した口縁部が強く外反する甕で，復原口径29.6cmの大きさ。

胴部へやや膨れるが，肩部内面は横方向にヘラ削りされている。胎土に砂粒・雲母・赤褐色粒を含み，淡褐色に焼成されている。

出土土器では，須恵器杯蓋・杯身や土師器杯などの特徴からみて，7世紀前半頃に考えておきたい。

18～23号住居跡付近出土土器（第54図）

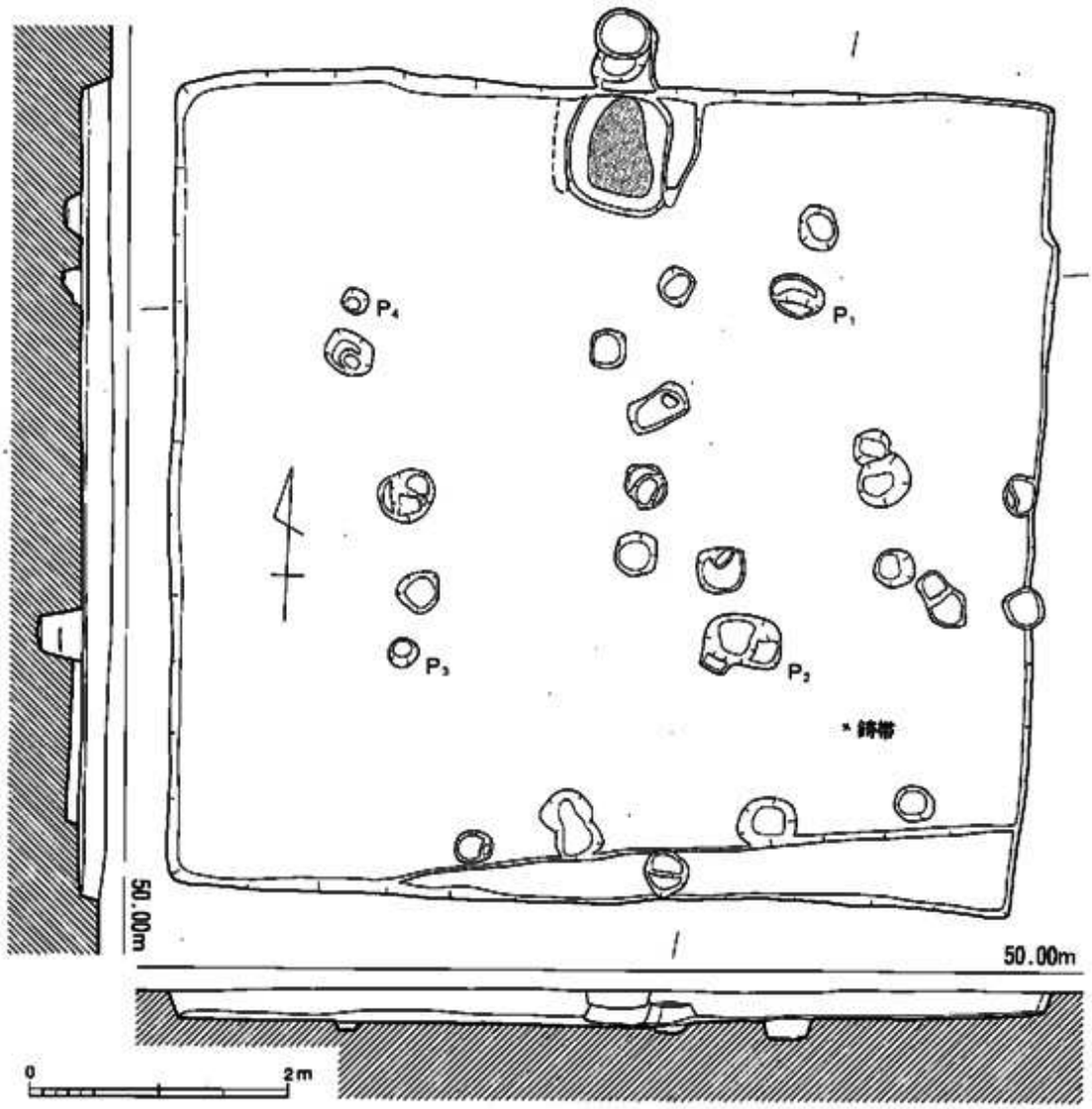
ここでは，重複の著しい部分で，帰属する住居跡を判断しえなかった土器を，一括して紹介することにしたい。



第54図　18～23号住居跡付近出土土器実測図（1/3）

須恵器杯蓋（231～236） 231は身受けのかえりがｙ字形をなす杯蓋の口縁部小破片である。焼成不良で赤茶色の色調を呈する。232～236は身受けのかえりが鳥嘴状をなす杯蓋の口縁部破片である。口縁部のかえりが尖り気味な232・235と，鈍い233・234のような例がある。234・235では外天井は回転ヘラ削りされ，内天井は多方向にナデられる。いずれも堅い焼成で，淡灰色ないし青灰色に焼成されている。

須恵器杯身（237～244） 口縁部は緩やかに外反するものや直線的に伸びる例などがある。



第55図 24号住居跡実測図（1／60）

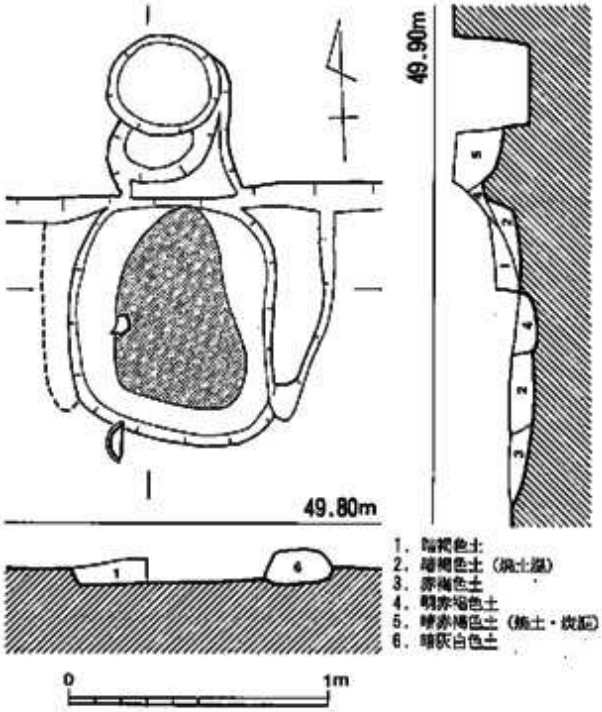
底部では高台が外下側に張るものや断面が四角の例などがある。238・243の焼成はあまいが，他はいずれも堅い焼成で灰色や緑灰色などの色調を呈している。

土師器杯（245～249） 底部から稜をなして屈曲する口縁部が端部で内彎する245～247のような例と，口縁部が外反する248・249のような例があり，249は口縁部の器壁が厚めで，復原口径16.0cmの大きさ。いずれも胎土に赤褐色粒・雲母を含み，淡褐色などの色調に焼成されている。

土師器鍋（250・251） 肥厚した口縁部が強く外反し，胴部へ窄まる器形であろう。胴部内面は横方向のヘラ削り痕がみられる，250の外面にはハケ目が，251の外面にはナデ痕と煤の付着がみられる。いずれも胎土に砂粒・雲母を含み，茶褐色に焼成されている。

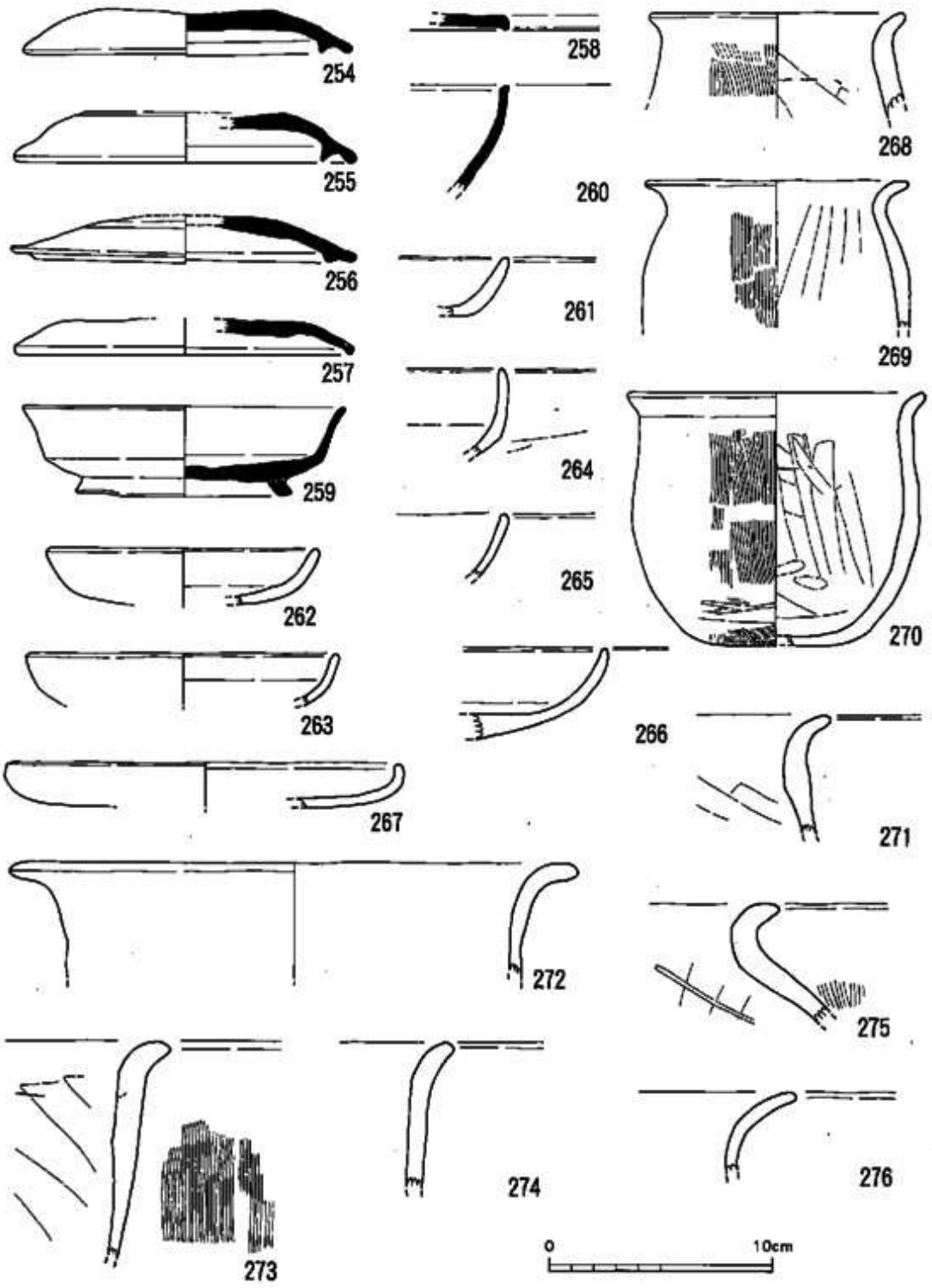
土師器甕（252・253） 口縁部が如意状に外反する小型甕で，胴部はさほど膨れない。252は復原口径14.2cmの大きさ。口縁部がやや肥厚し，胴部内面は横方向にヘラ削りされ，外面に煤が付着している。253は復原口径11.8cmの大きさ。口縁部が肥厚せず，胴部内面は縦方向にヘラ削りされ，お焦げが付着する。いずれも胎土に砂粒・雲母・赤褐色粒を含み，茶褐色ないし暗茶褐色に焼成されている。（小池）

24号住居跡（図版10－1，第55図，旧49住）



第56図 24号住居跡カマド実測図（1/30）

調査区西端部で発見された竪穴住居跡で，18号・19号住居跡の南西側にあって19号住居跡に一部切られる。また南側では25号住居跡と重複して，25号を切っている。主軸方向をN2°Wに向ける不整方形プランの住居跡で，南北方向6.2～6.3m，東西方向6.7～6.8m，深さ0.2m前後の規模に残る。カマドは北側壁の中央に設けられ，煙道部分が外に出る。床面は標高49.6m前後で，中央部は堅緻だが，周囲はやや柔らかい。床面を掘り込むピットのうちp1～4が主柱穴と推定されるが，これ以外にも中軸線よりやや振れるものの，左右対称的な配置のピットが柱穴を構成するのかも知れない。これらの柱穴・柱穴状ピットは，直径15～25



第57図　24号住居跡出土土器実測図（1/3）

cm，深さ10～20cm程の規模で，p1～4の柱間距離は1.4～1.6mと1.9mを測る。（小池）

カマド（図版10－2，第56図）

Ⅰb類のカマドで，北壁中央に付設する。左袖は遺存しないが，右袖は長さ82cm，基底部幅26cm，残高7cmを測り，締まりのある暗灰白色土を盛っていた。火床は良く焼けていたが，支脚は不明。煙道はピットに切られるものの60cm程の長さを有する。（小田）

出土遺物（図版36・47，第12・57図）

土　器（第57図）

須恵器杯蓋（254～258）　254・255は身受けのかえりがy字状をなす杯蓋である。254では復原口径14.8cm，器高2.1cmの大きさ。外天井はナデ調整され，つまみは付かない。暗紫灰色に堅く焼成されている。255は復原口径15.5cm，器高2.3cmの大きさ。外天井は回転ヘラ削りされるが，つまみの有無は不明。堅い焼成で茶灰色を呈する。256～258は身受けのかえりが鳥嘴状をなす杯蓋である。端部のかえりは鈍く，256・257の外天井は回転ヘラ削りされるがつまみの有無は不明。257・258の復原口径は15.2cmと16.1cmである。257は青灰色に堅く焼成されているが，他の2点はあまい焼成で白灰色を呈する。

須恵器杯身（259）踏ん張るような高台をもつ底部破片で内底面は多方向にナデられる。ややあまい焼成で淡茶灰色を呈する。

須恵器鉢（260）　内彎気味に立ち上がる口縁部破片で端部はやや摘み上げたような形をとる。黒灰色に堅く焼成されている。

土師器杯（261～265）　261～263は内彎気味に口縁部が立ち上がる杯で，262は復原口径13.3cm，器高2.5cm，263は復原口径14.0cmの大きさ。264・265は深めの杯で，やはり内彎気味に立ち上がる。ヨコナデないしナデ調整され，264の外底部はヘラ削りされる。いずれも胎土に砂粒・雲母・赤褐色粒を含み，淡褐色ないし淡橙色に焼成されている。

土師器高杯？（266）　内彎する口縁をもち，底部の器壁が厚めになる破片で，器面は磨滅するが叩き目のような痕跡が下端にある。口径も復原しえないが，高杯杯部の可能性が高い。砂粒・赤褐色粒を胎土に含み，淡橙色に焼成されている。

土師器皿（267）　復原口径17.8cm，器高2.0cmの大きさで，内彎する口縁部と平坦な底部をもつ。ヨコナデないしナデ調整されるが，外底面はヘラ削りらしい痕跡がみられる。胎土に砂粒・雲母・赤褐色粒を含み，淡橙色に焼成されている。

土師器甕（268～276）　268～270は口縁部が肥厚せず如意状に外反する小型甕である。胴部は膨らむものの顕著ではない。270では頸部と胴部径に大差がなく口径を上回らないで，復原口径13.2cm，器高11.4cm，胴最大径12.8cmの大きさ。いずれも胴部外面にハケ目，内面にヘラ削り痕がみられ，胎土には砂粒・雲母・赤褐色粒を含み淡橙色ないし淡褐色に焼成されているが，外面の一部に煤が付着する。

271～274は口縁部が緩やかに外反する。273では口縁部が肥厚するが他は顕著でない。272・274は器面が磨滅して調整不明だが，273では胴部外面にハケ目，内面にヘラ削り痕がみられる。なお，273・274の特徴は甕の口縁部にもみられるので，その可能性も含んでおきたい。いずれも胎土に砂粒・赤褐色粒などを含み，淡茶褐色ないし淡橙色に焼成されている。

275はやや肥厚した口縁部が短く強めに外反するが，胴部の膨らみの大きな甕であろう。胴部外面にハケ目，内面に斜方向のヘラ削り痕がみられる。胎土に砂粒・赤褐色粒を含み，黄茶色に焼成されている。また276は肥厚しない口縁部が外反する破片である。胎土に雲母・赤褐色粒を含み，淡褐色に焼成されている。

土製品（第12図）

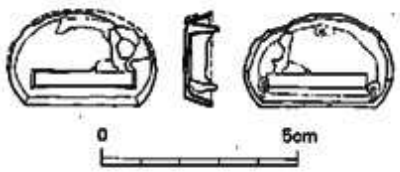
管状土錘（15） 一方の端を欠損するが，現存値で長さ4.0cm，外径1.1cm，孔径0.3cm，重量4.4gを測る。赤褐色粒・雲母を含むが精良な胎土で，淡灰橙色に焼成されている。

鉄製品（第62図）

不明鉄製品（30）太さ0.7～1.2cmの抹角丸棒状の鉄製品で，現存長10.2cmを残す。

銅製品（第58図）

丸　鞆　一部を欠損するが，幅3.9cm，高さ2.4cm，厚み0.7cmの大きさで，下端は直線をなし，側面から上部は丸く膨らむ形をなす。下端に沿って長方形の透かしが開けられる。断面形は台形に近く，裏面は中空になっているが，3カ所に足が付けられる。足は0.8cm程の長さで，直径0.2cmの丸棒状で先に尖る。皮革質などの付着物は検出されない。

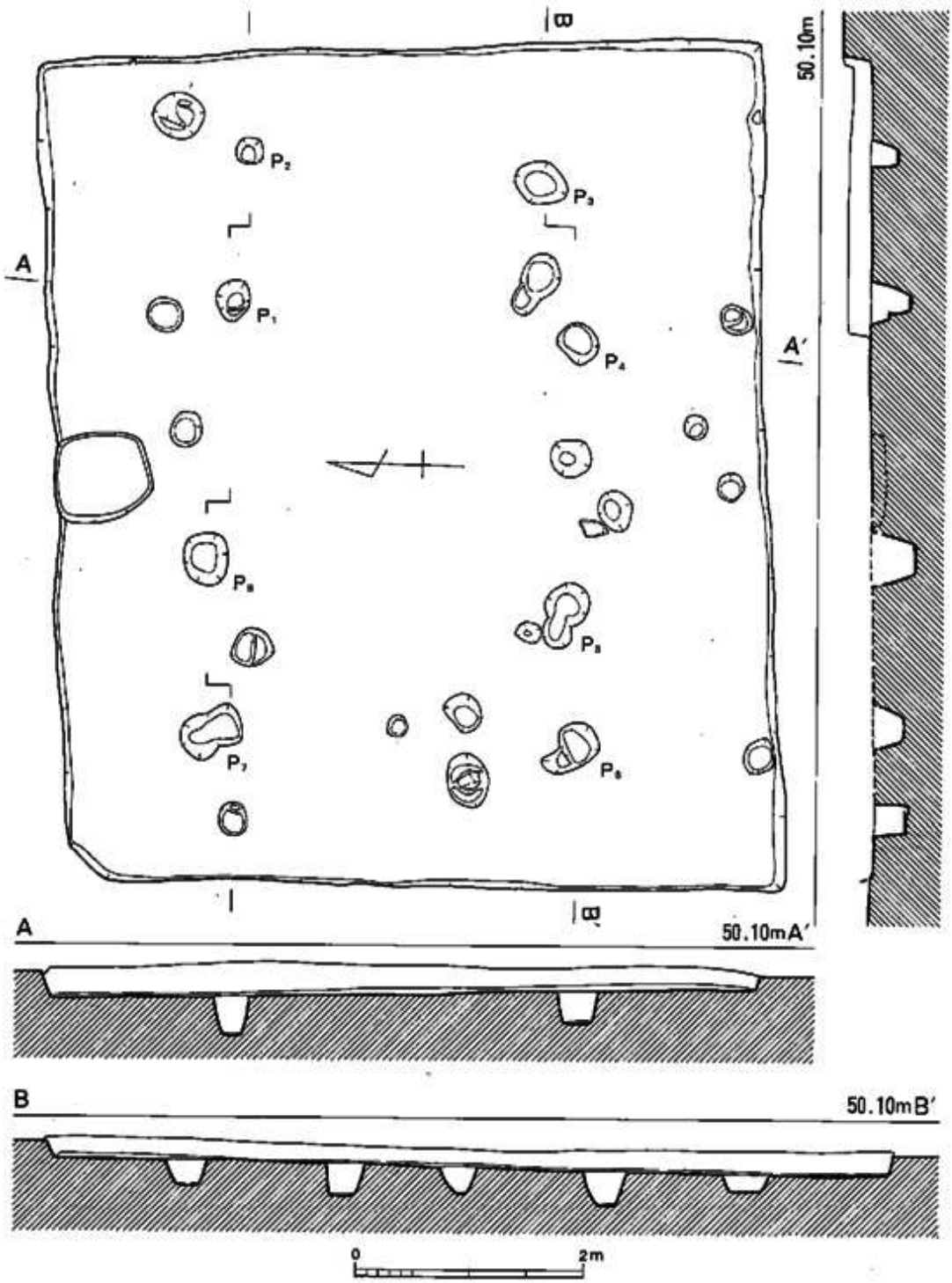


第58図　出土銅製品実測図1（1/2）

出土土器では，須恵器杯蓋・杯身や土師器杯などの特徴からみて，7世紀後半から8世紀前半の時期幅を考えられるが，7世紀後半の要素が強いとみておきたい。

25号住居跡（図版11－1，第59図，旧50住）

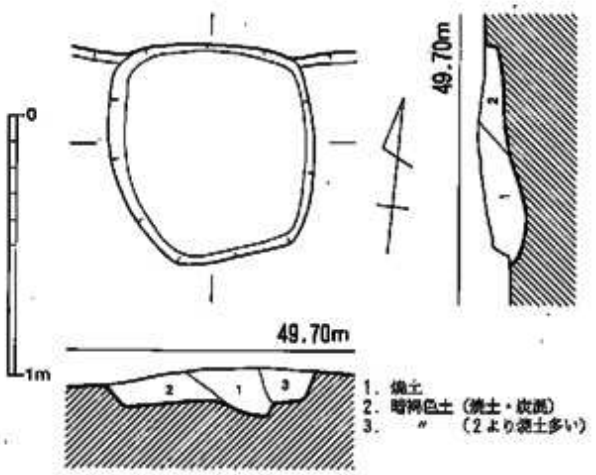
調査区西端部で発見された竪穴住居跡で，24号住居跡の南東側に位置して重複するが，カマド部分が削られているので，25号が先行する住居である。主軸方向をN2°Wに向ける不整方形プランの住居跡で，南北方向6.2m前後，東西方向7.1～7.4m，深さ0.2m前後の規模に残る。カマドは北側壁の中央に設けられるが床面下の掘り込みだけが残る。床面は標高49.6mないし49.7mで，中央部は堅緻だが，周囲はやや柔らかい。床面を掘り込むピットのうちp1～8が主柱穴と推定されるが，左右対称的に配置されている。これらの柱穴は，直径20～40cm，深さ15～35cm程の規模で，柱間距離は長軸方向では1.2～1.4mと2.2mで，主軸方向2.6～3.0mを測る。（小池）



第59図　25号住居跡実測図（1／60）

カマド（図版11－2，第60図）

北壁中央に付設しているが，24号住居跡に切られるため80cm×95cmの方形掘り込みを残すのみで，壁体・煙道は遺存しない。Ⅰb類のカマドと考えられるが，詳細は不明。埋土中から土師器の小型甕小片が出土している。（小田）



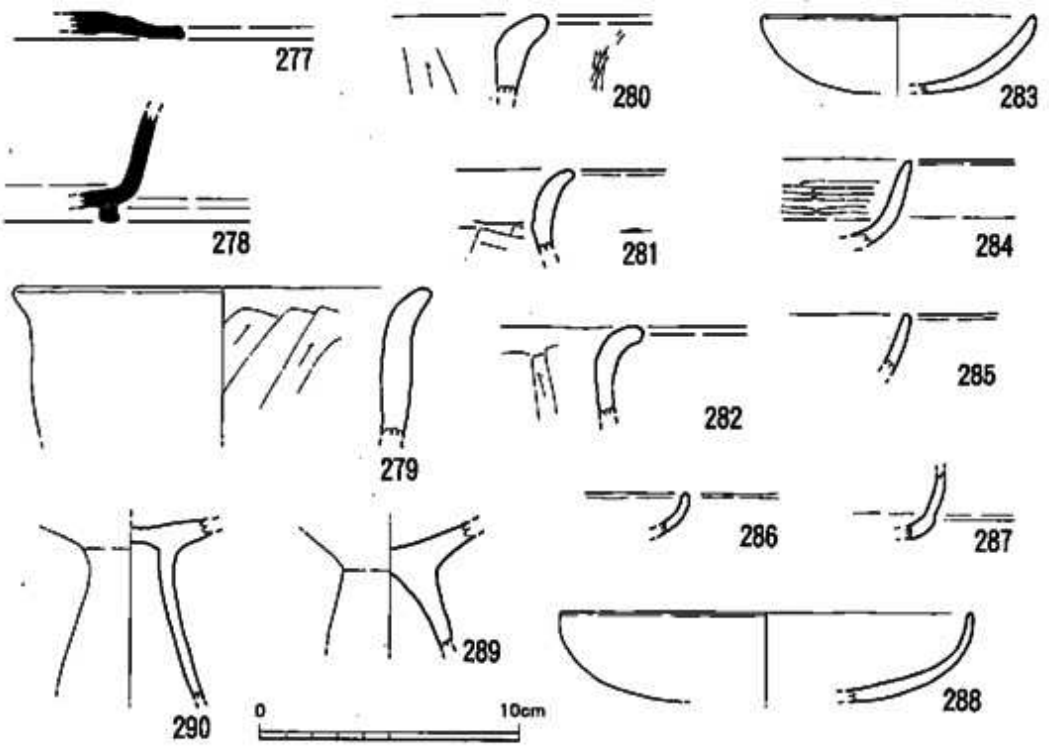
第60図　25号住居跡カマド実測図（1／30）

出土遺物

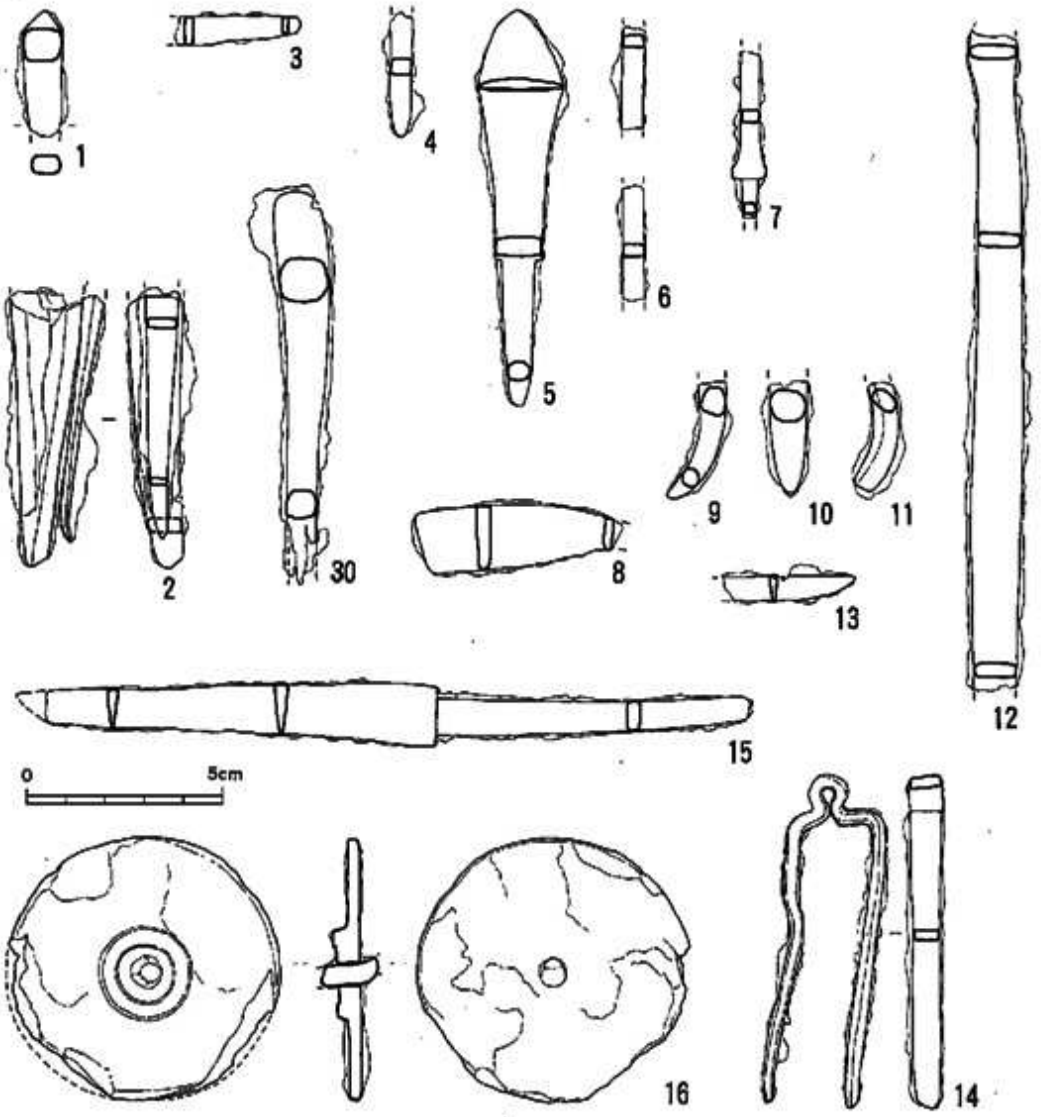
（図版37・47，第61・62図）

土　器（第61図）

須恵器杯蓋（277）　身受けのかえりが鳥嘴状をなす杯蓋である。端部のかえりは低く，外天井にはナデ調整がみられる。淡灰色に堅く焼成されている。



第61図　25号住居跡出土土器実測図（1／3）



第62図　出土鉄製品実測図1（1/2）

須恵器杯身（278）　底部端に断面四角の高台をもつ破片で，暗灰色に堅く焼成されている。

土師器甕（279～282）　279は復原口径16.2cmの大きさの小型甕で，如意状に外反する口縁部は肥厚しない。胴部外面はナデ，内面はヘラ削りされる。

280は肥厚し，281・282は肥厚せずに外反する口縁部破片で，胴部内面はヘラ削りされる。いずれも胎土に細砂粒・雲母を含み，茶褐色ないし茶橙色に焼成されている。

土師器杯（283～288）　283は内彎気味に口縁部が開く杯で，復原口径10.3cm，器高3.0cmの

大きさ。器面が磨滅して調整手法は不明。284は口縁部が内彎気味に立ち上がり端部で僅かに外反する。外面はナデ，内面はヘラ磨きで調整される。285・286は端部が内彎気味あるいは内彎する口縁部破片，287は底部と口縁部の境に段を有する破片である。いずれも内外面ともヨコナデ調整される。288は復原口径16.0cm，器高2.5cmの大きさで，口縁部が内彎気味に立ち上がるが，外底部はヘラ削りで調整される。土師器杯はいずれも細砂粒・雲母・石英などを微量胎土に含み，淡褐色ないし褐色に焼成されている。

土師器高杯（289・290） 2点とも，杯部と柱状部の境の部分破片で，杯と裾部の形状などは分からず，器面も磨滅していて，調整手法も分からない。柱状部は中空で，290はやや長めになるようである。胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒などを含み，淡褐色に焼成されている。

鉄製品（第62図）

用途不明鉄製品（8～12） 8は一方の端を欠くが現存長5.3cm，幅0.8～1.6cm，厚さ0.2～0.4cmの大きさで，扁平な板状をなし，刀子のような形を呈するが，刃が付かない。9～11は端部破片で，9・10は端が尖るが，9・11は曲がっている。12は扁平な棒状で，両端を欠き全体の形は分からないが，一方の端付近に側縁のくびれがみられる。現存長16.9cm，幅1.1～1.3cm，厚さ0.4cm弱である。

出土土器では，須恵器杯蓋・杯身や土師器杯などの特徴からみて，8世紀初頭前後の時期を考えておきたい。

26号住居跡（図版12－1・2，第63図，旧51住）

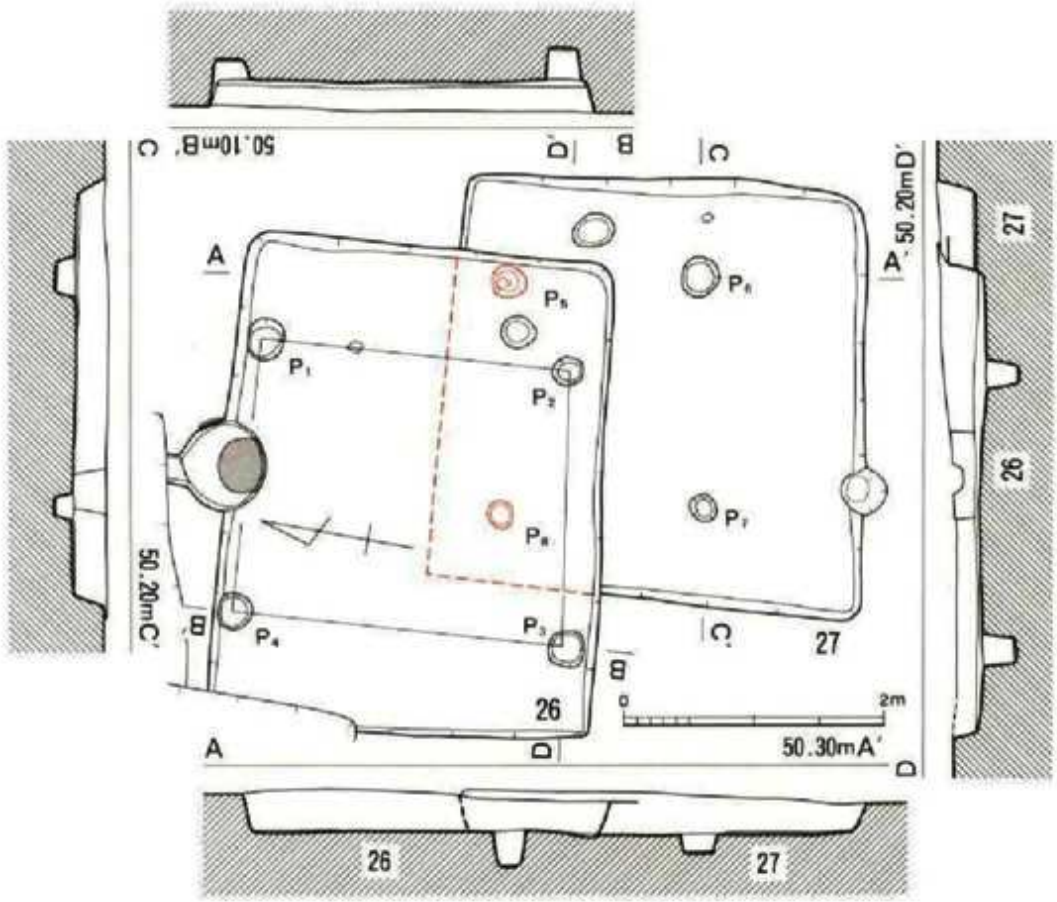
調査区西部で発見された竪穴住居跡で，25号住居跡の東側に位置するが，21号・22号住居跡に北西隅の一部やカマドの煙道部分を削られている。また南東側で重複する27号住居跡を切っている。主軸方向をN5°Wに向ける不整方形プランの住居跡で，南北方向2.9m前後，東西方向3.6～3.8m，深さ0.2m前後の規模に残る。カマドは北側壁の中央に設けられ，袖部分は不明瞭であったが，燃焼室の奥側と煙道が竪穴プランより飛び出している。床面は標高49.8m弱で，中央部は堅緻だが，周囲はやや柔らかい。床面を掘り込むピットのうちp1～4が主柱穴と推定されるが，左右対称的に配置されている。これらの柱穴は，直径20～30cm，深さ15～25cm程の規模で，柱間距離は長軸方向では2.1m前後で，主軸方向2.3～2.5mを測る。

カマド（図版12－2，第64図）

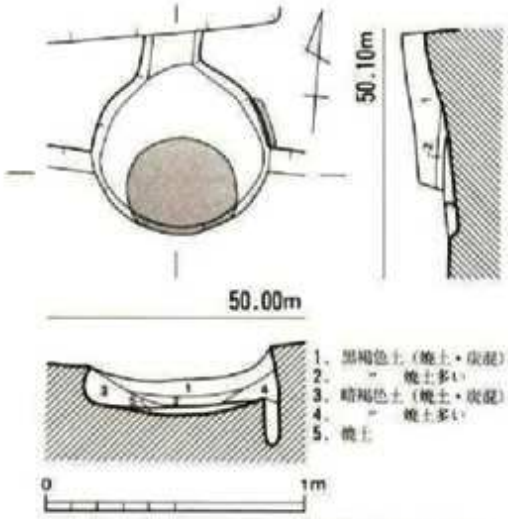
火床面が床面より一段下がるⅢb類で，北壁中央に付設する。遺存状態は悪く，円形（径約70cm）の壁体を留めるのみで，両袖とも残っていなかった。火床は床面より15cm下がっており，良く焼けていた。煙道は21号住居跡に切られるため長さ10cm遺存する程度。（小田）

出土遺物（図版37・48，第65・66図）

土　器（第65図）



第63図　28・27号住居跡実測図（1／60）



第64図　26号住居跡カマド実測図（1／30）

須恵器杯蓋（291）　身受けのかえりがy字状をなす杯蓋である。端部のかえりは小さめである。暗青灰色に堅く焼成されている。

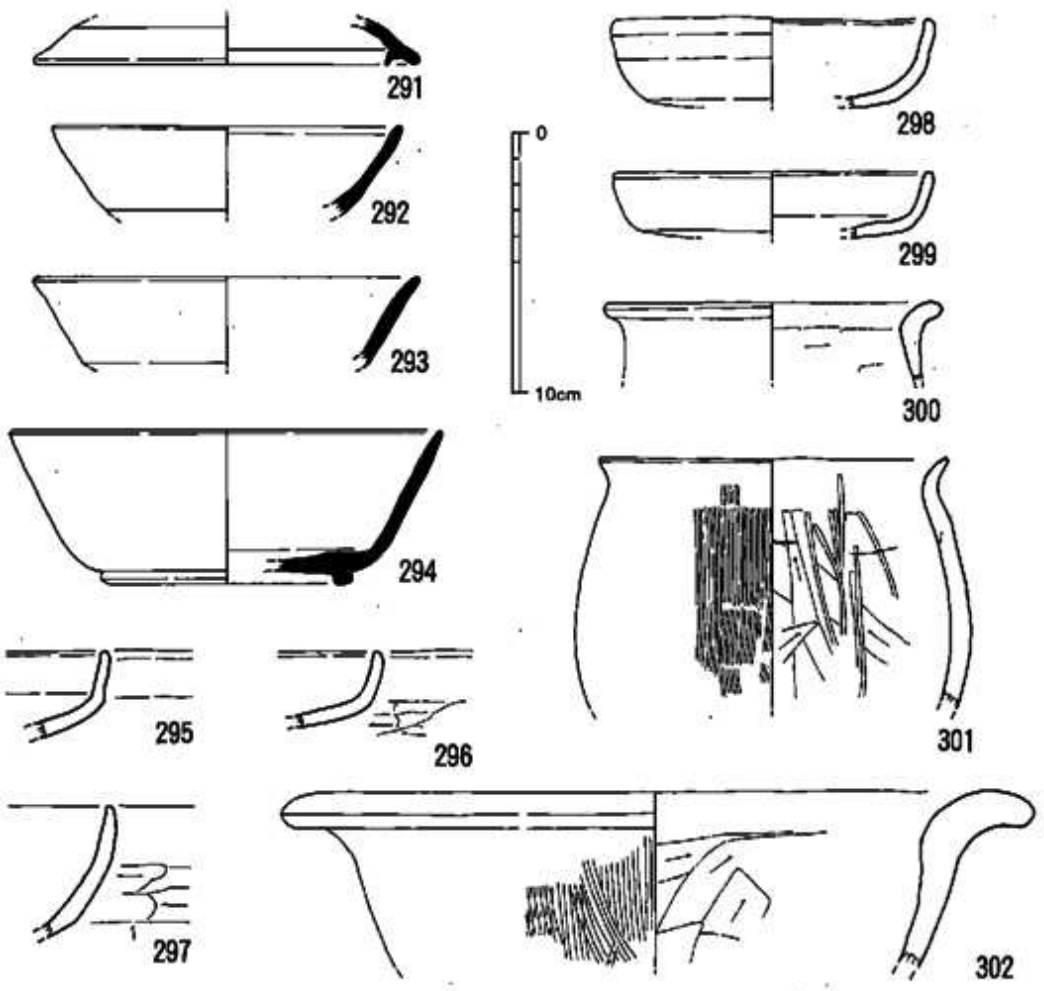
須恵器杯身（292・293）　底部を欠き，高台の有無は分からない。口縁部が内彎気味に開く292の例と，外反する293の例がある。復原口径13.6cm・15.0cmの大きさで，底部との境には稜を生じる。暗灰色ないし灰色に堅く焼成されている。

似非須恵器（294）　復原口径16.7cm，器高5.9cmの大きさで，紐状の高台が付く。口縁部は直線的に開き，回転ナデ調整される。ま

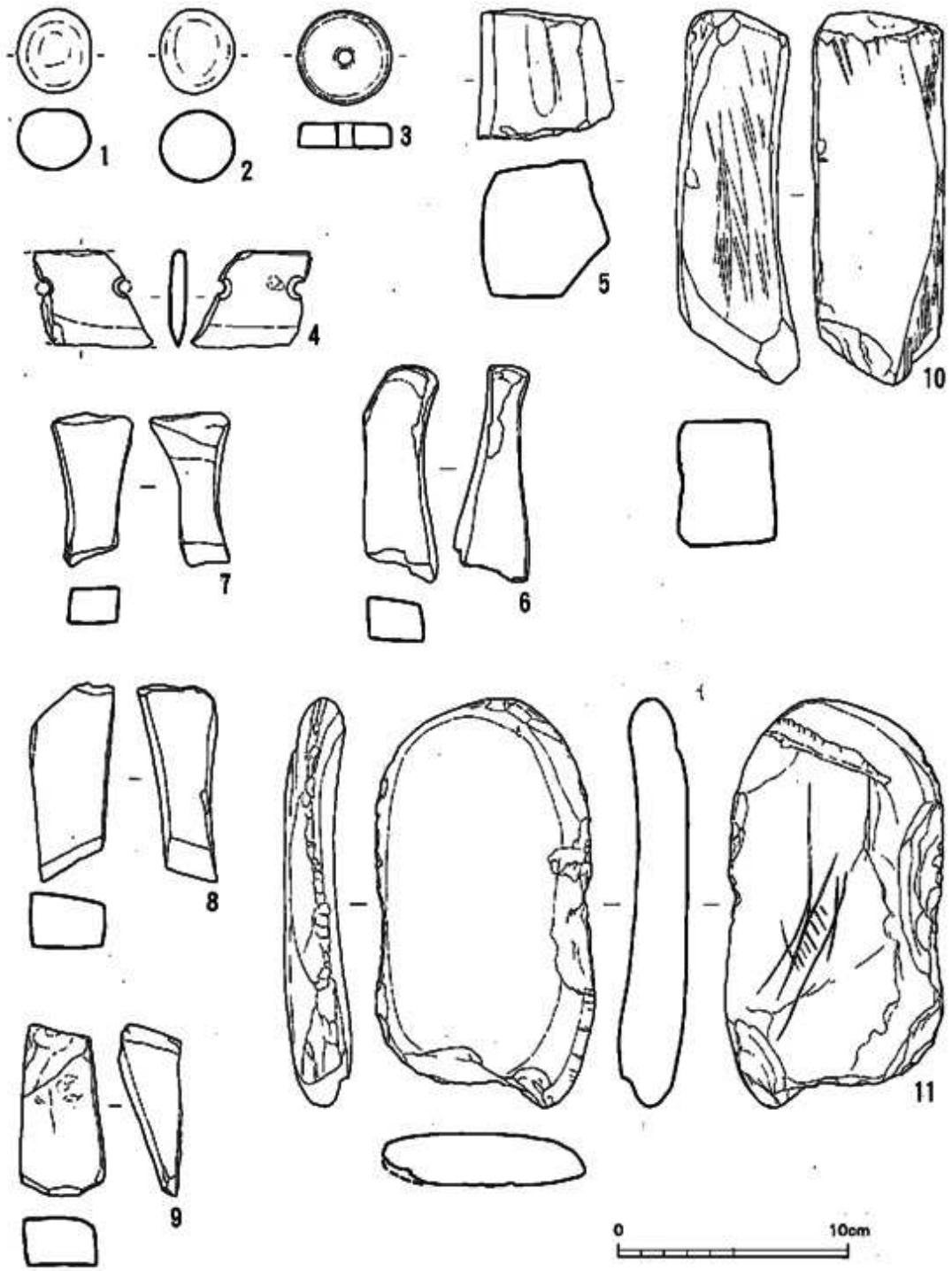
た底部は内外ともナデ調整される。堅めの焼成だが赤褐色を呈している。

土師器杯（295～299） 295は底部と口縁部の境に段をもち，端部は内彎気味に立ち上がる。296・298もほぼ同様の特徴をもつが，外底部はヘラ削りされる。298は復原口径12.4cm，器高3.5cmの大きさ。297・299も外底部がヘラ削りされるが，深い体部の297は口縁部下位に板ナデの痕跡がみられる。299は復原口径12.2cm，器高2.5cmの大きさ。いずれも胎土に細砂粒を含み，298・299は赤褐色粒も含むが，淡明褐色・褐色などの色調に焼成されている。

土師器甕（300・301） 300は復原口径13.0cmの大きさの小型甕で，肥厚した口縁部が如意状に外反し，胴部は膨らまない。胴部外面はナデ，内面はヘラ削りされる。301は肥厚しない口縁部が短く外反するが，胴部は復原口径13.4cmを上回る15.2cmの最大径に膨らむ。胴部外面は



第65図　26号住居跡出土土器実測図（1/3）



第66図　出土石器実測図（1/3）

ハケ目，内面はヘラ削りされる。いずれも胎土に砂粒を含み，赤褐色・淡橙色に焼成されている。

土師器鍋（302） 復原口径29.0cmの大きさで，肥厚した口縁部は強く外反する。胴部は内に窄まり，外面をハケ目，内面をヘラ削りされる。胎土に砂粒を含み，淡褐色に焼成されているが，外面に煤が付着する。

石　器（第66図）

投弾？（1） 長さ3.6cm，幅3.1cm，厚さ2.6cmの大きさの，一部凹みがあるものの，扁球形の丸玉で，表面は平滑。安山岩質の円礫を素材にしている。

26号住居跡からは以上の他に，焼成された粘土塊5点，黒曜石製削器1点（第138図7），カマド部分から鉄滓1点・黒曜石製剥片1点などが出土した。

出土土器では，須恵器杯蓋にやや古い要素がみられるが，杯身や土師器杯・鍋などの特徴からみて，8世紀前半頃の時期を考えておきたい。

27号住居跡（図版12－1，第63図，旧52住）

調査区西部で発見された竪穴住居跡で，26号住居跡の南東側に重複して削られる住居跡である。主軸方向をN5°Wに向ける不整方形プランの住居跡で，南北方向3.1m前後，東西方向3.1～3.3m，深さ0.2～0.3mの規模に残る。カマドは確認されず，26号住居で削平された部分にあった可能性も否定しえない。床面は標高49.8m前後で，中央部は堅緻だが，周囲はやや柔らかい。床面を掘り込むピットのうちp5～8が主柱穴と推定されるが，左右対称的に配置されているものの北側に偏る。これらの柱穴は，直径20～40cm，深さ15～20cm程の規模で，柱間距離は長軸方向では1.5m前後で，主軸方向は1.8m前後を測る。

出土遺物（第67図）

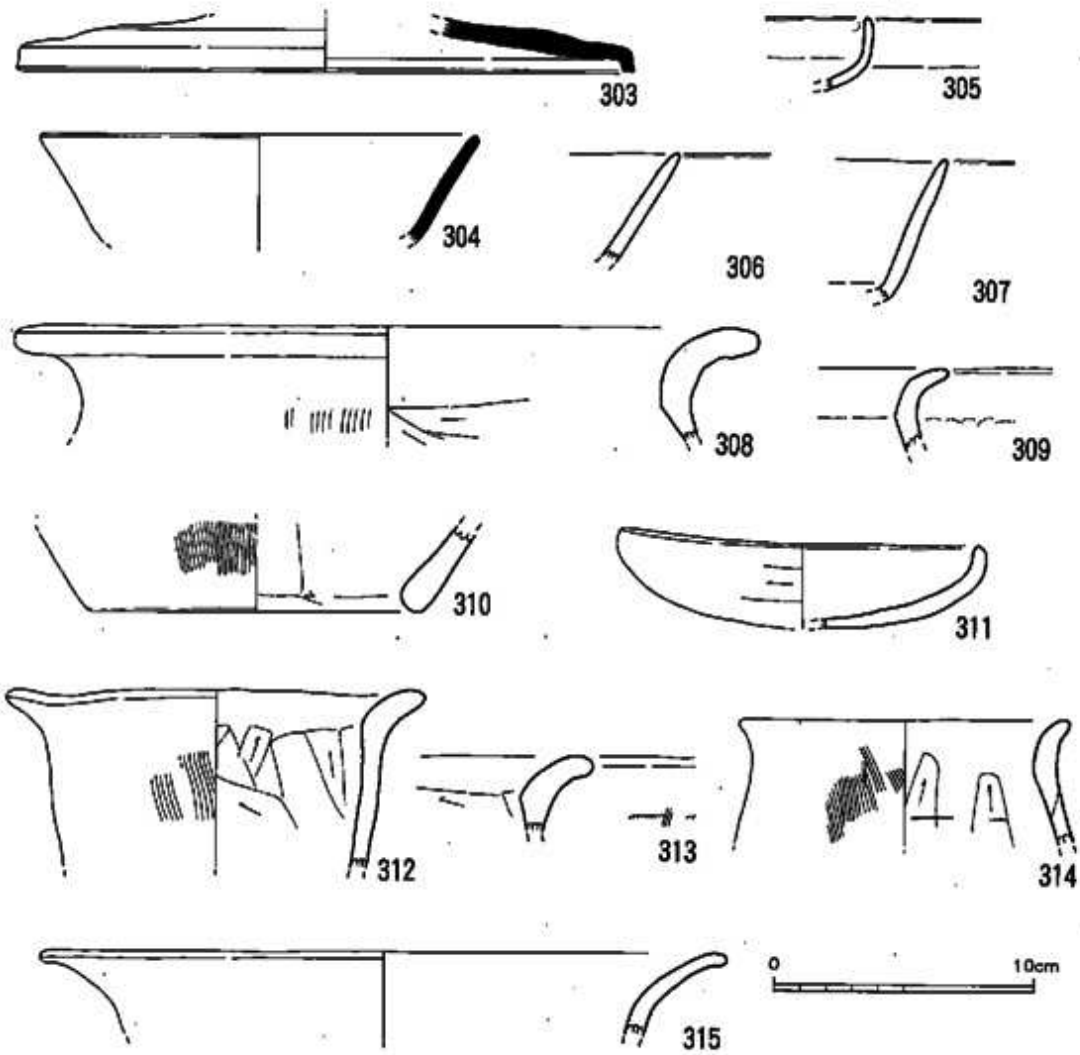
土　器（第67図）

須恵器杯蓋（303） かえりが鳥嘴状をなす杯蓋だが，高杯杯部の可能性もある。復原口径23.8cm，残存器高2.1cm。外天井部は回転ヘラ削りされ，淡青灰色に堅く焼成されている。

須恵器杯身（304） 底部を欠き，高台の有無は分からない。復原口径17.0cmの口縁部は外反気味に開く。淡青灰色に焼成されている。

土師器杯（305～307） 305は底部と口縁部の境に稜をもち，端部は内彎気味に立ち上がる。外底面はナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石・石英を含み明褐色に焼成されている。306・307は口縁部が直線的に開く杯で体部が深い。胎土に細砂粒・雲母を含み，明褐色に焼成されている。

土師器甕（308・309） 308は復原口径28.7cmの大きさの甕で，やや肥厚した口縁部が強く外反し，胴部へは膨らむようである。胴部外面はハケ目調整，内面はヘラ削りされる。胎土に砂

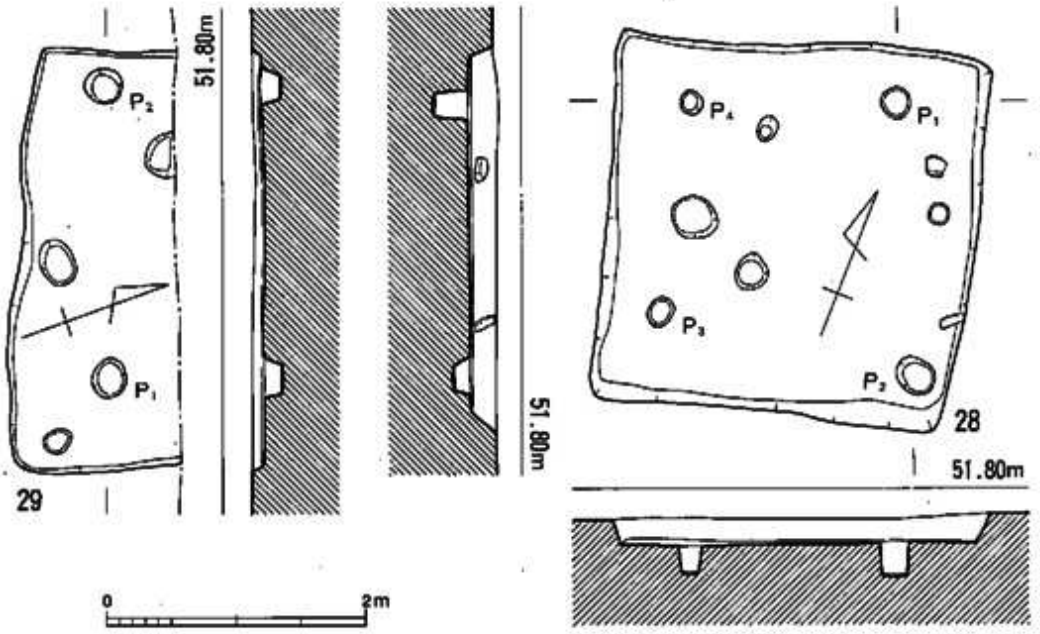


第67図　27～29・31号住居跡出土土器実測図（1/3）

粒・雲母・角閃石を含み淡茶褐色に焼成されている。309は肥厚しない口縁部が外反し，胴部はやや膨らむようである。胴部外面は器面が剥落して不明だが，内面はヘラ削りされる。胎土に砂粒を含み，淡赤褐色に焼成されている。

土師器甕（310）　復原底径12.8cmの大きさで，胴部に向かって膨らむが，端部は丸みをもってやや肥厚する。外面はハケ目，内面はヘラ削りされる。胎土に細砂粒・赤褐色粒を含み，淡茶褐色に焼成されている。

出土土器では，須恵器杯蓋・杯身などの特徴からみて，8世紀前半頃の時期を考えておきたい。

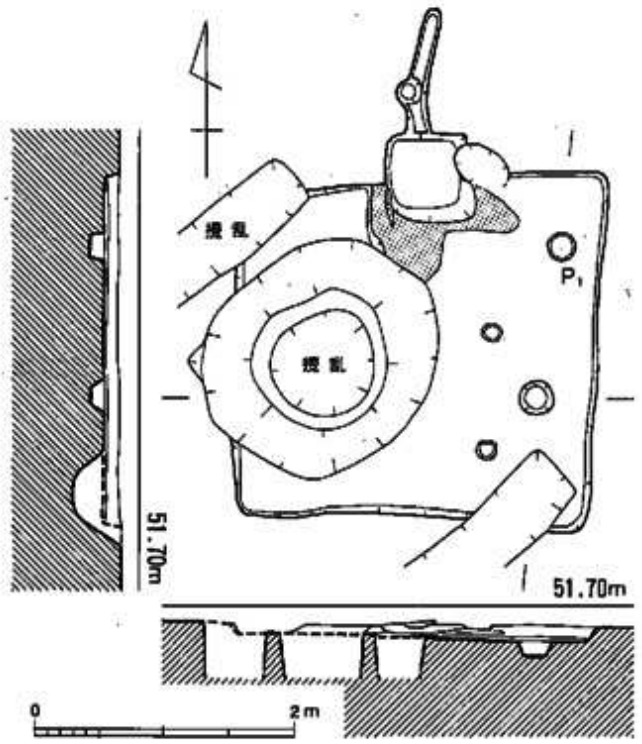


第68図　28・29号住居跡実測図(1/60)

28号住居跡

(図版13－1，第68図)

調査区北東部で発見された竪穴住居跡で，10号掘立柱建物跡と重複するが先後関係は分からない。主軸方向をN15°WないしN20°W方向にとる平行四辺形状の不整方形プランを呈する住居跡である。南北2.8m前後，東西2.8～2.9m，深さ0.2m程の規模に残る。カマドや炉穴はみられない。標高51.4m前後でやや堅緻な床面を掘り込むピットのうち隅に近いp1～4が主柱穴と推定される。柱穴は直径15～25cm，深さ15～25cm程の規模であり，柱間は約1.6～2.1mを測る。



第69図　30号住居跡実測図(1/60)

出土遺物（第67図）

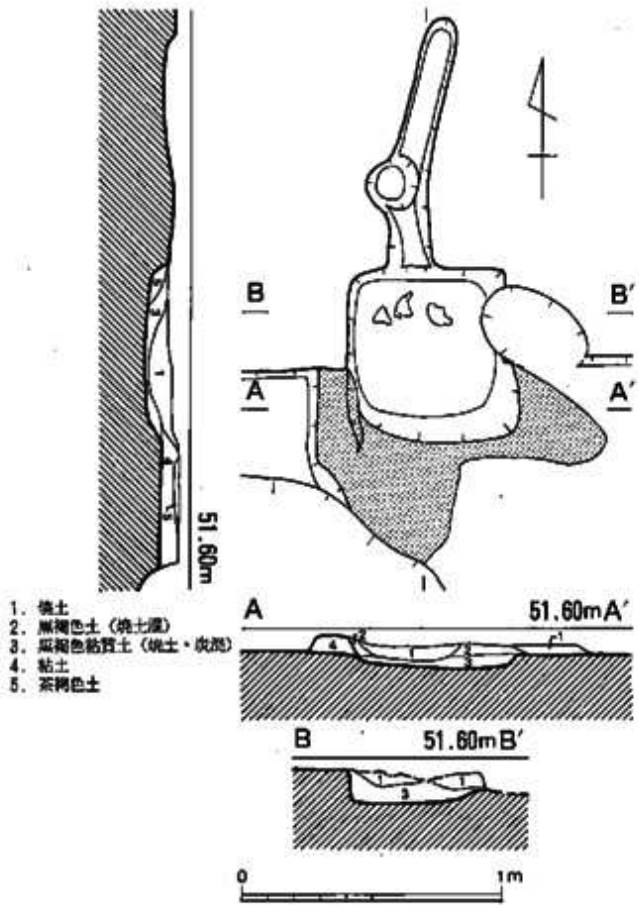
土　器（第67図）

土師器杯（311）　復原口径14.1cm，器高3.3cmの大きさの杯。端部は内彎気味に立ち上がる。外底面はヘラ削りされる。胎土に細砂粒・雲母を含み淡茶褐色に焼成されている。

この土器の特徴だけで時期を決め難いが，8世紀前半頃の時期を考えておきたい。

29号住居跡（図版13－2，第68図）

調査区北東西部で発見された竪穴住居跡で，28号住居跡の北東側に位置し，北側は調査区域外に続く。主軸方向をN70°W前後ないしこれに直交する方向にとる不整方形プランの住居跡である。南北1.3m以上，東西3.2m前後，深さ0.1m程の規模に残る。カマドの位置や有無は分からない。標高51.5m前後でやや堅緻な床面を掘り込むピットのうち隅に近いp1・2が主柱穴と推定される。柱穴は直径25cm，深さ15cm程の規模であり，柱間は約2.2mを測る。



第70図　30号住居跡カマド実測図（1/30）

出土遺物（図版37，第67図）

土　器（第67図）

土師器甕（312・313）　312は復原口径16.2cmの大きさの小型甕で，やや肥厚した口縁部が外反し，胴部は膨らまない。胴部外面はハケ目調整，内面はヘラ削りされる。胎土に砂粒・雲母・石英・赤褐色粒を含み，茶褐色に焼成されている。313もやや肥厚した口縁部が外反し，胴部へはさほど膨らまないようである。胴部外面はハケ目調整，内面はヘラ削りされる。胎土に砂粒・雲母を含み，淡茶黄色に焼成されている。

これら2点の土器だけでは時期を決め難いが，8世紀前半頃の時期を考えておきたい。

30号住居跡（図版13－3，第69図）

調査区北東部で発見された竪穴住居跡で，28号住居跡の東側，29号住居跡の南側に位置する。植木穴の撹乱坑によって

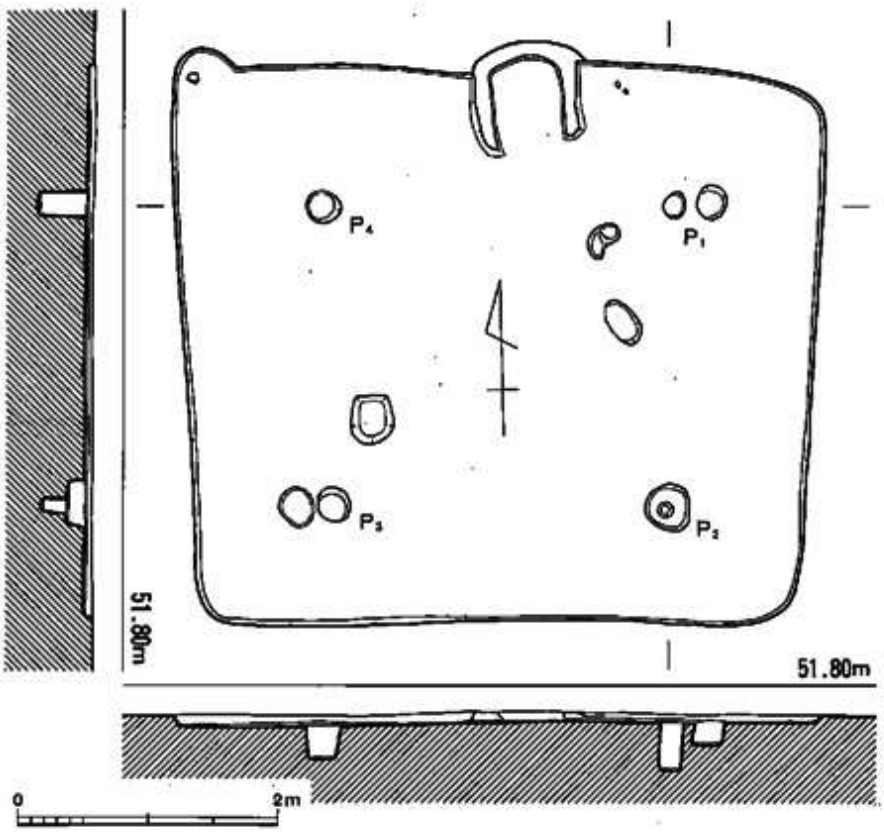
大きく失うが，辛うじて規模などは分かる。主軸方向をほぼ南北方向にとる不整方形プランを呈する住居跡である。南北2.5～2.8m，東西2.7～2.8m，深さ0.1m強の規模に残る。カマドは北側壁の中央に設けられて，燃焼室と煙道が外側に出る。標高51.4m強でやや堅緻な床面を掘り込むピットのうち東側に残るp1が主柱穴と推定される。柱穴は直径20cm，深さ15cm程の規模である。出土遺物では土師器小破片のみ数点出土したが，図示しえない。(小池)

カマド（第70図）

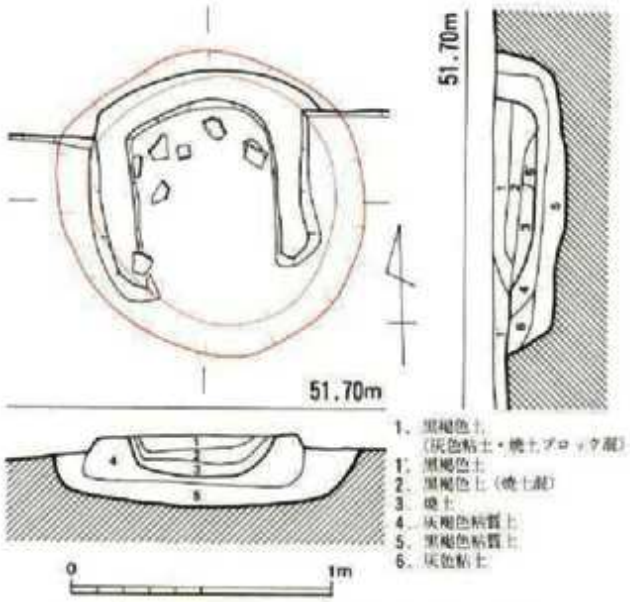
火床面が床面より一段下がるⅢb類で，北壁中央に付設する。壁体は方形を呈し，幅60cm，奥行き40cmを測る。袖部の遺存状態は悪く，左袖のみ長さ33cmを留めるにすぎない。カマド前面に焼土・粘土が広がっていることから，袖部は破壊されたものと考えられる。壁体は強い削平を受けるが，煙道は辛うじて遺存する。右側にやや屈曲しているが，長さ95cm，幅16cm，深さ4cmを測る。先端部ピットは有していない。(小田)

31号住居跡（図版14－1，第71図）

調査区北東部で発見された竪穴住居跡で，29号・30号住居跡の南側に位置する。主軸方向を



第71図　31号住居跡実測図



第72図　31号住居跡カマド実測図（1/30）

N2°Wにとる不整方形プランを呈する住居跡である。南北4.2～4.3m，東西4.6～5.0m，深さ0.1m弱の規模に残る。カマドは北側壁の中央に設けられている。標高51.5m前後でやや堅緻な床面を掘り込むピットのうちp1～4が主柱穴と推定される。柱穴は直径20～35cm，深さ25～35cm程の規模で，柱間は2.3～2.7mを測る。（小池）

カマド（図版14－2，第72図）

下部掘り込みを有するⅢa類で，北壁中央に付設する。カマドの構築方法は住居壁際を大きく円形（径120cm）に掘り込み，黒褐色粘質土で一旦埋めた後，灰褐色粘質土を馬蹄形に貼付し壁体・袖部を築く。右袖は残存長60cm，基底部幅14cm，残高5cmで，左袖は残存長64cm，基底部幅20cm，残高6cmを測る。煙道は削平されたものか，遺存していない。支脚についても不明。（小田）

出土遺物（第67図）

土　器（第67図）

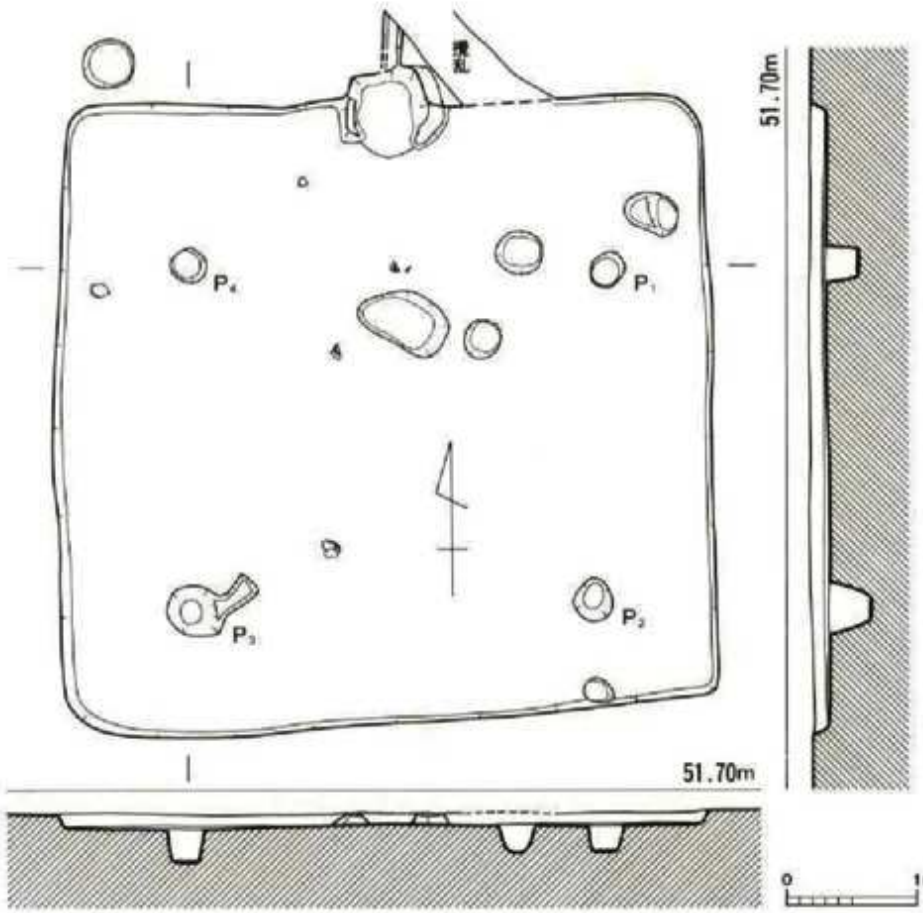
土師器甕（314）　カマド内から出土したが，復原口径12.8cmの大きさの小型甕で，やや肥厚した口縁部が外反し，胴部はやや膨らむ。胴部外面はハケ目調整，内面はヘラ削りされる。胎土に砂粒・赤褐色粒を含み淡褐色に焼成されている。

土師器口縁部（315）　復原口径26.5cmの大きさで肥厚しない口縁部が外反して開く。内外面ともにヨコナデ調整されるが，胴部の形状は不明。胎土に砂粒・雲母を含み，淡黄橙色に焼成されている。Ⅲあるいは鍋の口縁部であろうか。

これら2点の土器だけでは時期を決め難いが，8世紀代であろうか。

32号住居跡（図版15－1，第73図）

調査区北東部で発見された竪穴住居跡で，31号住居跡の西側に位置する。主軸方向をN1°Wにとる不整方形プランを呈する住居跡である。南北4.6～4.9m，東西4.9～5.1m，深さ0.1m前後の規模に残る。カマドは北側壁の中央に設けられている。標高51.4m前後でやや堅緻な床面を掘り込むピットのうちp1～4が主柱穴と推定される。柱穴は直径25～40cm，深さ20～30

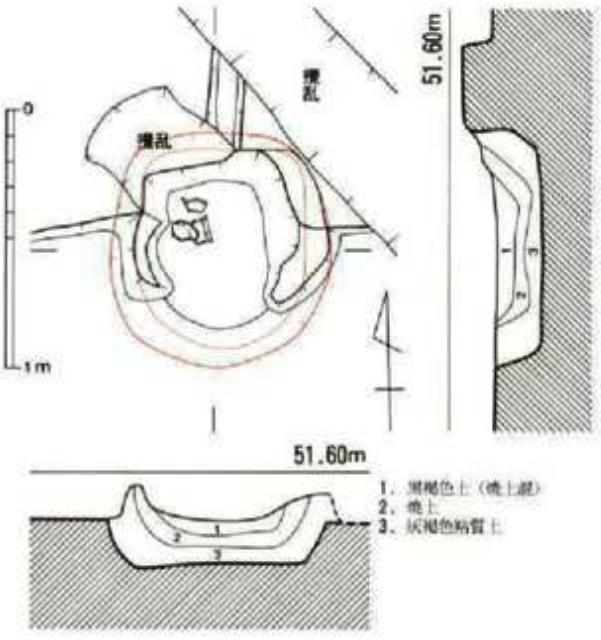


第73図　32号住居跡実測図（1／60）

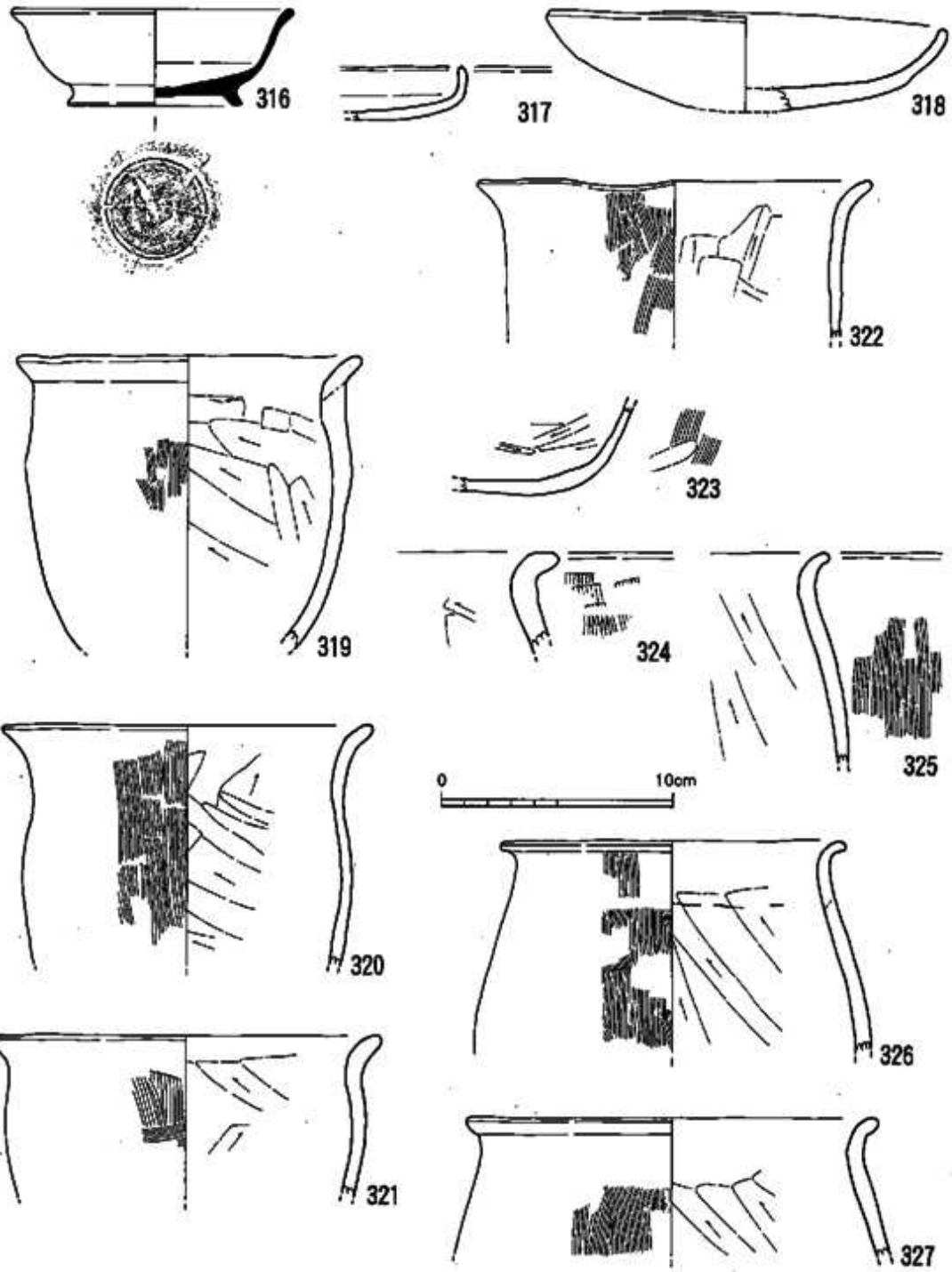
cm程の規模で，柱間は2.5～3.2mを測る。(小池)

カマド(図版15－2，第74図)

下部掘り込みを有するⅢa類で，北壁中央に付設する。カマドの構築方法は住居壁を90cm×85cmの隅丸方形に掘り込み，灰褐色粘質土で一旦埋めた後，壁体・袖部を築く。右袖は残存長30cm，基底部幅28cm，残高10cmで，左袖は残存長28cm，基底部幅17cm，残高10cmを測る。火床は良く焼



第74図　32号住居跡カマド実測図（1／30）



第75図　32号住居跡出土土器実測図（1/3）

けていたが，支脚は不明。また，煙道は新期の溝に切られて判然としない。（小田）

出土遺物（図版37，第75図）

土　器（第75図）

須恵器杯（316）　高台をもつ杯で，口縁部は如意状に外反する。高台は外方に踏んばるような形状である。復原口径12.3cm，器高4.2cm，高台径7.6cmの大きさ。堅い焼成で，淡青灰色に焼成されている。なお，高台内側の底面に単直線のヘラ記号が付されている。

土師器杯（317・318）　317は内彎する口縁部破片で，外底面はヘラ削りされる。胎土に角閃石・赤褐色粒を含み，淡茶褐色に焼成されている。318は復原口径17.2cm，器高4.4cmの大きさの杯で，底面は内外ともに磨滅・風化して調整手法は不明。口縁部は僅かに段をもって内彎気味に立ち上がる。胎土に赤褐色粒を含み，淡黄褐色に焼成されている。

土師器甕（319～327）　319・321～323・325～327はカマド部分から出土した破片である。319～322は如意状に外反する口縁部をもつが，胴部が口縁部よりも膨れない甕。319は口縁部が肥厚するが，端部は薄めになり，復原口径15.0cmの大きさ。320・321は復原口径が16.0cmと17.0cmの大きさである。また322は口縁部が波打つものの同様な器形であろう。復原口径17.2cmの大きさ。323は底部破片だが径は復原できない。いずれも胴部から底部の外面をハケ目，内面をヘラ削りで調整される。胎土に細砂粒・石英・雲母を含み，淡黄褐色ないし淡茶褐色に焼成されている。

324～327は短く且つ強めに外反する口縁部をもち，胴部が膨らむ器形で，324・325は口縁部がやや肥厚する。326・327は復原口径15.0cm・17.8cmの大きさ。これらはいずれも胴部外面をハケ目，内面をヘラ削り調整しているが，胎土に細砂粒・石英・雲母・赤褐色粒を含み，淡黄褐色ないし淡茶褐色に焼成されている。

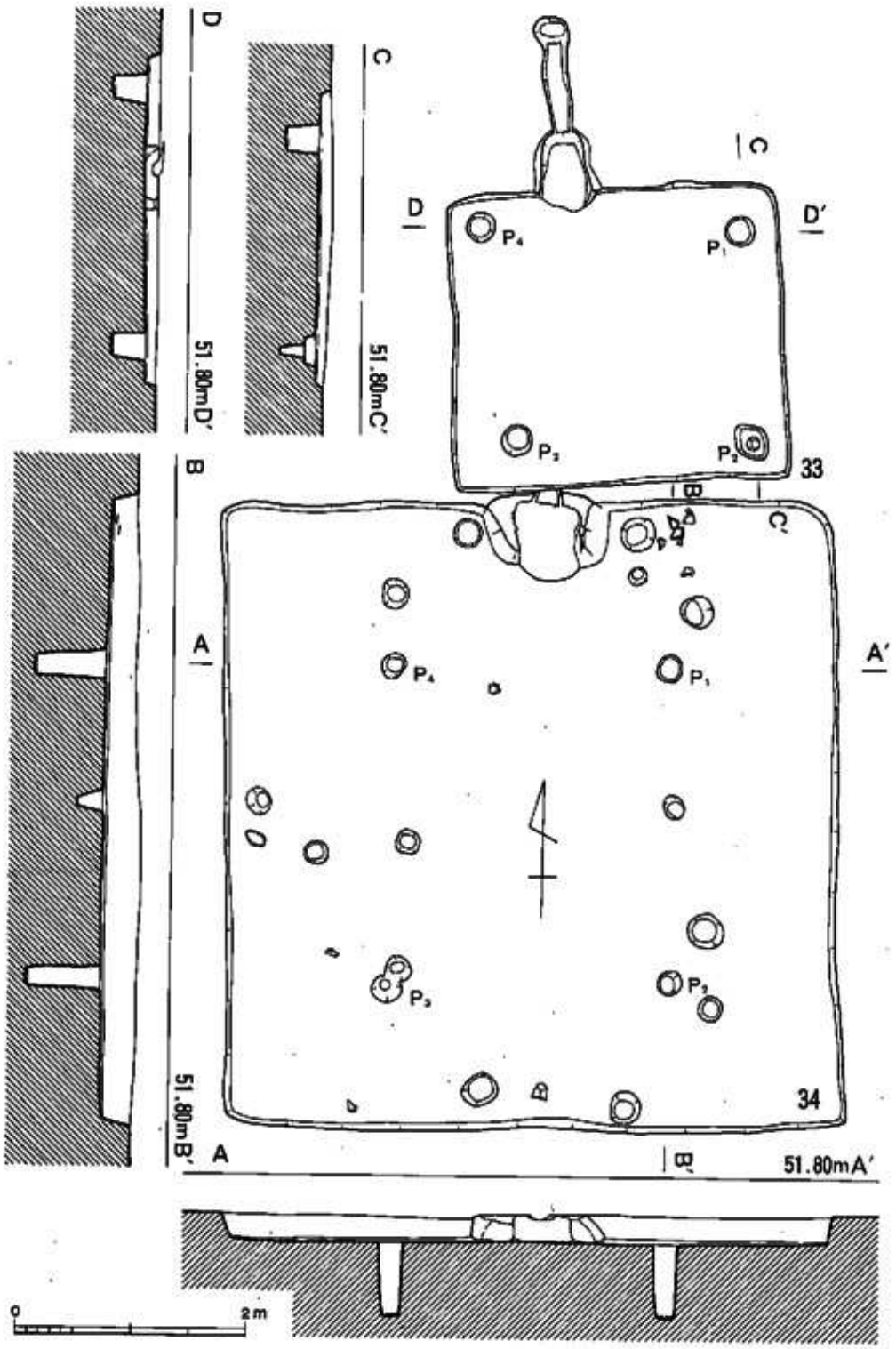
出土土器では，須恵器杯や土師器杯などの特徴からして７世紀後半から末の間に考えておきたい。

33号住居跡（図版16－１，第76図）

調査区北東部で発見された竪穴住居跡で，28号住居跡の南側，32号住居跡の西側に位置する。主軸方向をN3°Wにとる不整方形プランを呈する住居跡である。南北2.5m，東西2.8～2.9m，深さ0.1m前後の規模に残る。カマドは北側壁の中央より西側に設けられているが，燃焼室と煙道で約1.5m外に続く。床面は標高51.4m前後で，中央部は堅緻だが，周囲はやや柔らかめである。四隅の床面を掘り込むピットｐ１～４が主柱穴と推定されるが，柱穴は直径25cm，深さ30cm程の規模で，柱間は1.9～2.3mを測る。（小池）

カマド（図版16－２，第77図）

火床面が床面より一段下がるⅢｂ類で，北壁のやや西寄りに付設する。壁体は長方形を呈し，



第76図　33・34号住居跡実測図(1/60)

幅45cm，奥行き65cmを測る。袖部の遺存状態は悪く，右袖を僅かに留める。火床は良く焼けていたが，支脚は不明。煙道は長さ95cm，幅22cm，深さ7cmで，先端に径22cm，深さ13cmのピットを有する。（小田）

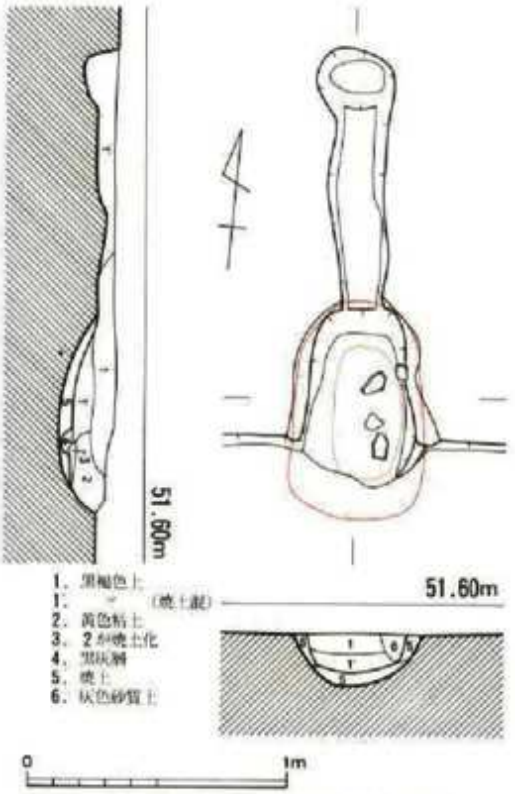
出土遺物（第79図）

土　器（第79図）

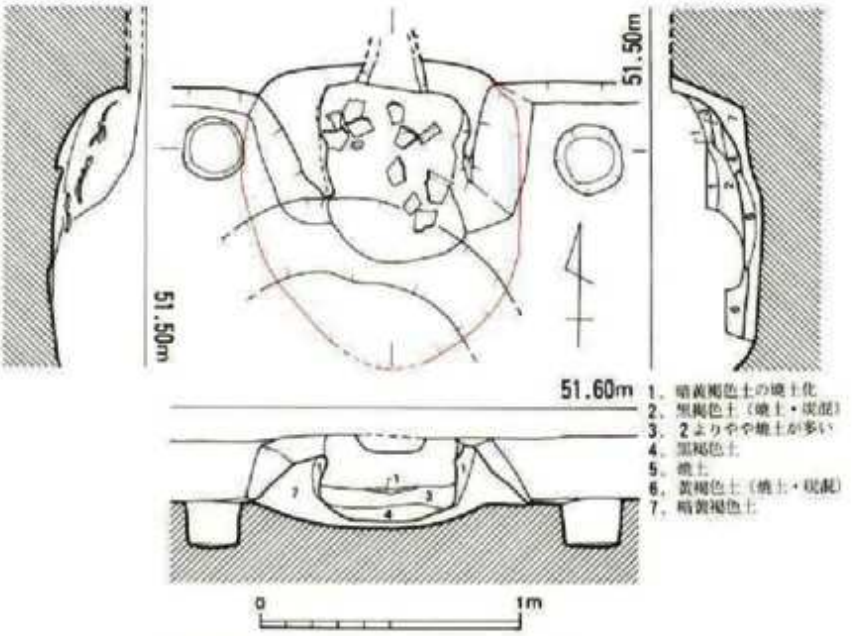
土師器甕（328）　やや肥厚気味の外反する口頸部破片で，胴部へは膨れる。外面にはハケ目がみられ，内面にヘラ削りらしい痕跡がある。胎土に砂粒・赤褐色粒・雲母を含み，淡褐色に焼成されている。

この土器片のみでは時期を特定し難いが，後述する34号住居跡よりも後出する時期であり，8世紀代に考えておきたい。

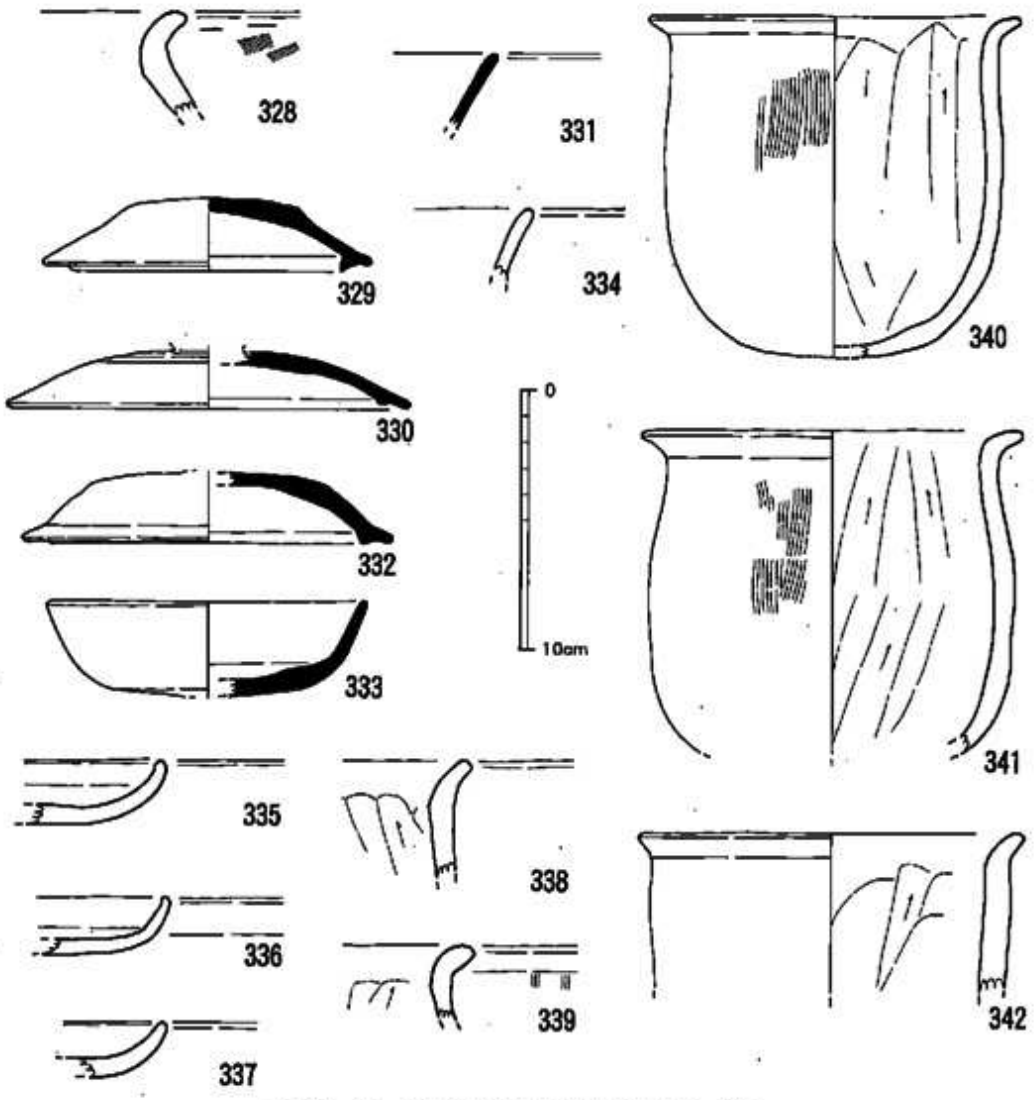
34号住居跡（図版17－1，第76図）



第77図　33号住居跡カマド実測図（1／30）



第78図　34号住居跡カマド実測図（1／30）



第79図　33・34号住居跡出土土器実測図（1/3）

調査区北東部で発見された竪穴住居跡で，33号住居跡の南側，32号住居跡の南西側に位置する。竪穴部分では重複しないがカマドの煙道が33号住居跡の竪穴部分に切られているので33号住居跡より先行する。主軸方向をN1°Wにとる不整方形プランを呈する住居跡である。南北5.4～5.5m，東西5.3～5.4m，深さ0.2～0.3mの規模に残る。カマドは北側壁の中央に設けられているが，煙道部分は外に続く。床面は標高51.2m前後で，中央部は堅緻だが，周囲はやや柔らかめである。床面を掘り込むピットのうちp1～4が主柱穴と推定されるが，柱穴は直径20cm，深さ60cm程の規模で，柱間は2.3～2.7mを測る。またp5・7・9・11がp6・8・10・12と中軸線で左右対称の位置に配置されているが，直径20～30cm，深さ20cm前後の柱穴である。

カマド右側のｐ5・7付近の床面から若干浮いた位置で土器・鉄製品が出土した。（小池）

カマド（図版17－2，第78図）

下部掘り込みを有するⅡａ類で，北壁中央に付設する。下部掘り込みは120cm×105cmの隅円形を呈し，暗黄褐色土で壁体を構築する。カマドの先端部分は葡萄の肥料穴によって壊されているが，右袖は残存長56cm，基底部幅28cm，残高25cmで，左袖は残存長42cm，基底部幅25cm，残高22cmを測る。火床は良く焼けていたが，支脚は不明。煙道は33号住居跡に切られるため，長さ12cm遺存するのみ。カマド内より土師器甕が浮いた状態で出土した。（小田）

出土遺物（図版37・47，第62・79・80図）

土　器（第79図）

須恵器杯蓋（329・330）　身受けのかえりを有する杯蓋で，329は口径12.8cm，器高2.9cmの大きさ。外天井につまみは付かない。器面は風化・磨滅して調整手法は不明。良好な胎土だが，焼成不良で淡緑灰色を呈する。330は復原口径15.7cmで，外天井に宝珠形のつまみが付くものと思われるが，器高はやや低く，かえりも鈍い。焼成はややあまく紫茶灰色を呈している。

須恵器杯身（331・332）　331は直に立ち上がる口縁部破片で，内外面ともに磨滅するがヨコナデ調整であろう。やや焼成があまく茶褐色を呈している。332は外反する口縁部破片で，内外面ともにヨコナデ調整される。良好な焼成で緑灰色を呈している。

似非須恵器杯蓋（333）　身受けのかえりを有する杯蓋で，かえりは鈍い。外天井部はヘラ切り離しの後ナデられ，内天井は不定方向にナデられる。胎土に砂粒・赤褐色粒を含み，淡褐色に焼成される。

土師器杯（334～337）　334は外反する口縁部破片で，他３点は口縁部が内彎し外底部はヘラ削りされる。胎土に雲母・赤褐色粒を含み，淡橙色・淡褐色に焼成されている。

土師器甕（338～342）　340・341はカマド部分から出土した。338は如意状に僅かに外反する口縁部破片で，外面は磨滅するが，内面はヘラ削りされる。胎土に石英・雲母を含み，茶褐色に焼成されている。甑の可能性もあろう。

339～342は口縁部が如意状に短く外反し，胴部が口縁部よりも膨れない甕。340・341は口縁部が肥厚しないが，復原口径14.4cm・14.6cmの大きさ。胴部外面にハケ目，内面にヘラ削り痕がみられる。胎土に雲母・石英を含むが，340は赤褐色粒も含み，褐色・暗褐色の色調を呈し，340の外面に煤が付着している。342は如意状に口縁が短く外反する。胴部外面は磨滅して調整手法不明。内面はヘラ削りされる。胎土に細砂粒・石英・雲母を含み，茶褐色に焼成されている。

鉄製品（第62図）

刀　子（13）　現存長3.4cm，幅0.6cm，厚さ0.2cmの先端部破片で，基部端を欠く。

玉　類（第80図）

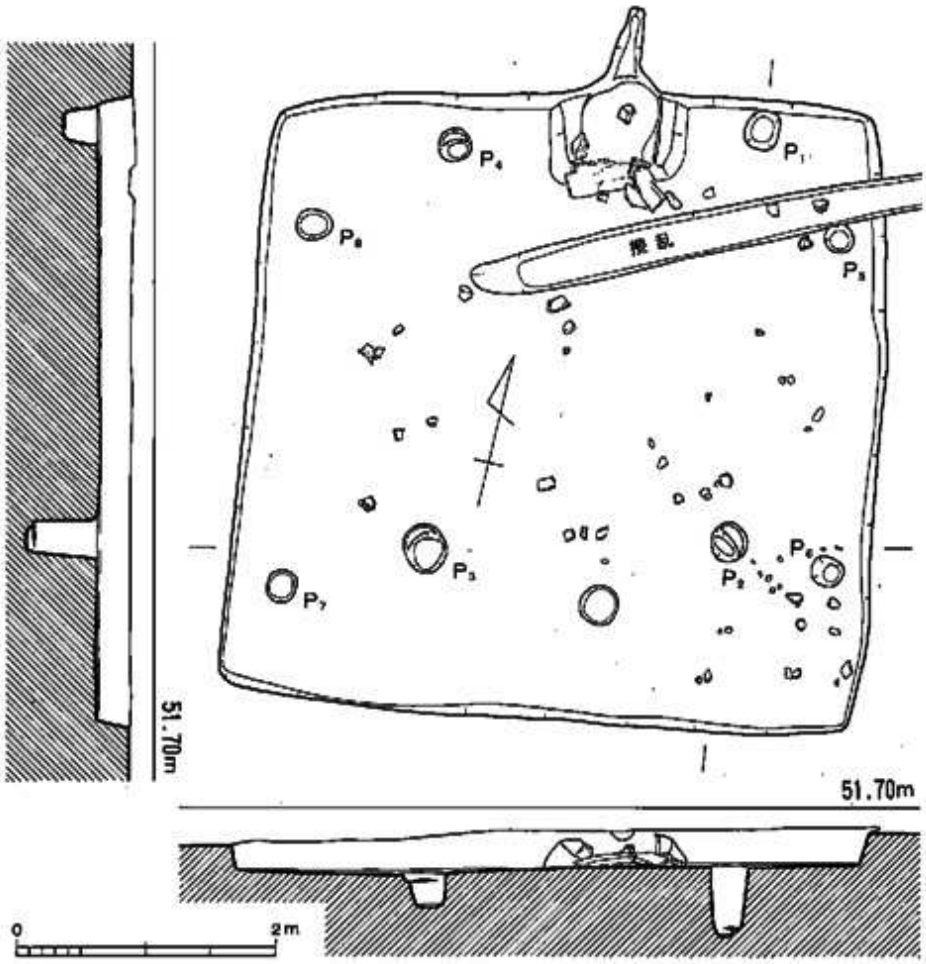
第80図
出土玉類実測図（1/1）

ガラス小玉（1） 濃いめのスカイブルーの色調を呈する小玉で，外径4.1～4.5mm，厚さ3.7mm，孔径1.6mmの大きさ。

出土土器では，須恵器杯蓋や土師器杯などの特徴からして7世紀後半から末の間に考えておきたい。

35号住居跡（図版18－1，第81図）

調査区北部で発見された竪穴住居跡で，28号住居跡の南西側に位置する。主軸方向をN 9°30′Wにとる不整方形プランの住居跡である。南北4.5～4.9m，東西4.7～4.9m，深さ0.2～0.3mの規模に残る。カマドは北側壁の中央より僅かに右側に設けられているが，煙道部分は外に続く。床面は標高51.3m前後で，中央部は堅緻だが，周囲はやや柔らかめである。床面を

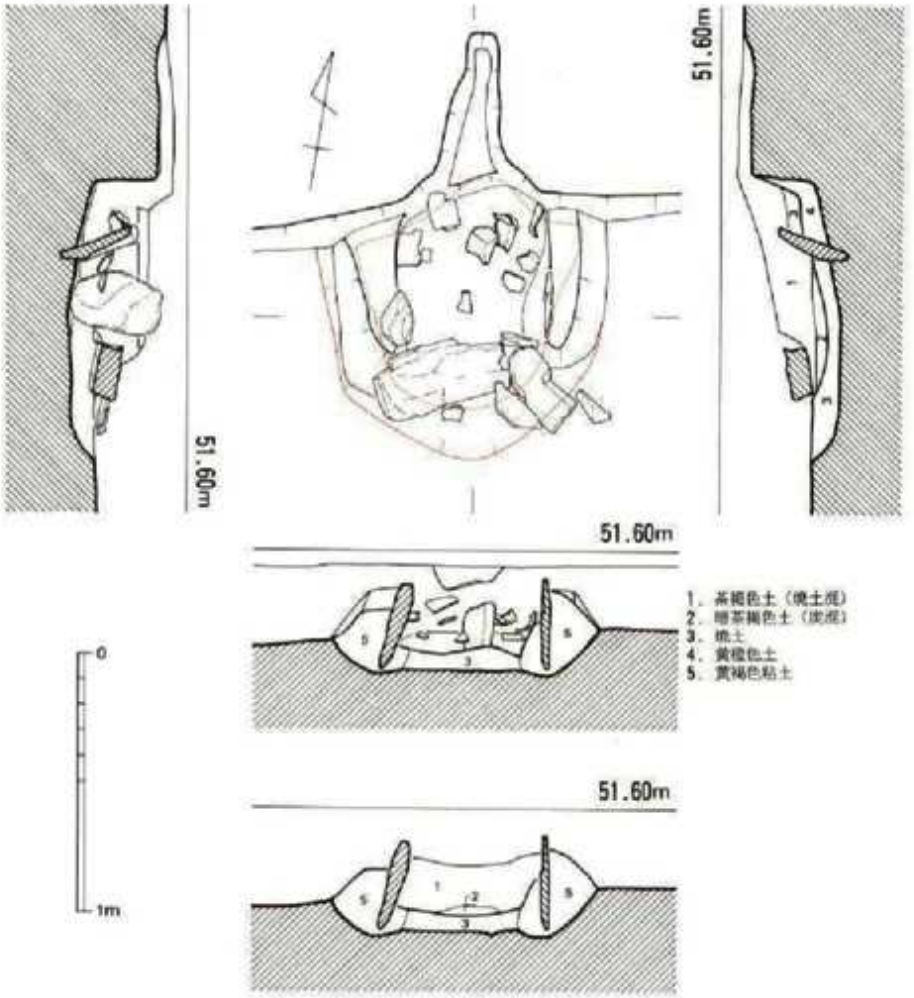


第81図　35号住居跡実測図（1/60）

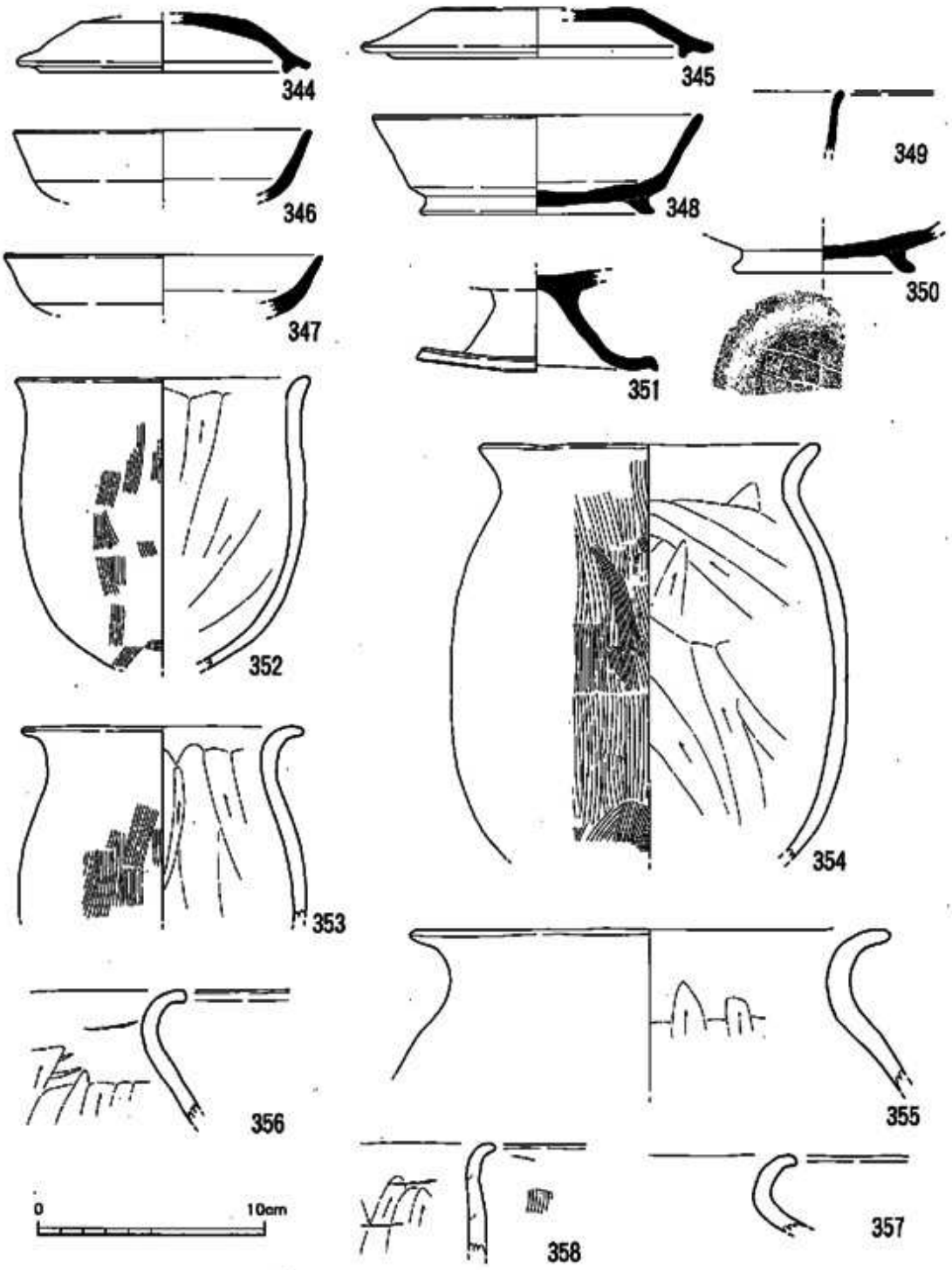
掘り込むピットのうちｐ1～4が主柱穴と推定されるが，柱穴は直径25～30cm，深さ25～50cm程の規模で，柱間は2.3・3.2mを測る。またｐ5～8も中軸線で左右対称の位置に配置されているが，直径20～30cm，深さ20～30cm前後の柱穴である。（小池）

カマド（図版18－2・3，第82図）

火床面が床面より一段下がるⅠｂ類で，北壁のやや東よりに付設する。比較的遺存状態の良好なカマドである。袖部は明褐色粘土を25cm程盛り，先端には長さ35cmの袖石を立てている。また，焚口部からは掛口部に使用した石がずり落ちた状態で出土した。右袖は長さ61cm，基底部幅29cm，残高14cmで，左袖は長さ60cm，基底部幅36cm，残高15cmを測る。支脚は奥壁から22cmの所にあり，太めの石を立てていた。煙道は長さ55cm，幅24cm，深さ6cmで，先端にピット



第82図　35号住居跡カマド実測図（1／30）



第83図　35号住居跡出土土器実測図1（1/3）

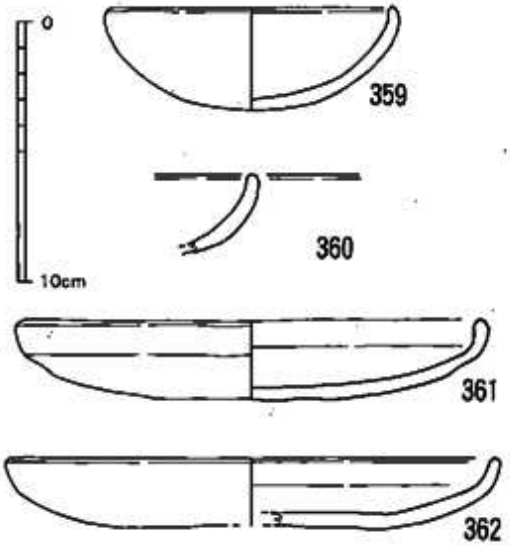
を有しないタイプのものである。(小田)

出土遺物

(図版37・38・47，第12・83・84図)

土　器（第83・84図）

須恵器杯蓋（344・345） 344は身受けのかえりを有する杯蓋で，外天井はヘラ切り離しの後ナデ，内天井は不定方向にナデられる。復原口径13.0cm，器高2.6cmの大きさで，焼成はあまく淡灰色を呈している。345も身受けのかえりを有する杯蓋だが，天井部中央を失いつまみの有無は確認できない。天井部の外面は回転ヘラ削り，内面は不定方向にナデられる。復原口径15.6cm，器高2.2cmの大きさで，淡黒灰色に堅く焼成されている。



第84図　35号住居跡出土土器実測図２（１/３）

須恵器杯身（346～350） 346・347は口縁部が内彎気味ながらも直線的に開く杯身で，底部を失う。復原口径13.1cm・14.0cmの大きさで灰色ないし暗灰色に堅く焼成されている。348・349は口縁部が直線的に開くものの端部で外反する。348の底部には外方に反る高台が付き，復原口径14.5cm，器高4.4cmの大きさ。やや堅い焼成で暗緑灰色を呈する。350も外方に開く高台を有するが，口縁部を失う。高台内側の外底面には双直線のヘラ記号が描かれている。堅い焼成で暗灰色を呈している。

須恵器高杯（351） 杯部を失うが，杯身のような口縁部が付くのであろう。脚裾部は回転ナデ調整で裾方向に開いて外反するが，端部は下方に折れ曲がる。復原裾径10.6cmの大きさで，黒灰色に堅く焼成されている。

土師器甕（352～358） 352は復原口径13.0cm，残存器高12.9cmの大きさの小型甕で，口縁部は肥厚気味だが短く如意状に外反して，胴部はほとんど膨らまない。胴部外面はハケ目，内面はヘラ削りされる。胎土に細砂粒・雲母を含み，茶色に焼成されている。353は復原口径12.4cm，胴最大径12.6cmの大きさの小型甕で，口縁部は肥厚気味だが強めに外反して，胴部は膨らむ。胴部外面はハケ目，内面はヘラ削りされる。胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒を含み，淡橙色に焼成されている。354はカマド内から出土した。復原口径15.1cm，残存器高18.5cm，胴最大径17.5cmの大きさ。口縁部は強めに外反し，胴部は膨らむ。胴部外面はハケ目，内面はヘラ削りされる。胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒を含み，淡褐色に焼成されているが，外面には煤が付着する。355～357は口縁部がやや強めに外反する破片で，胴部は膨らみ，内面はヘラ削り

される。355では復原口径21.2cmの大きさで，口縁部は僅かに肥厚する。胎土に細砂粒・石英・雲母・赤褐色粒を含み，淡褐色に焼成されている。356・357は胎土に細砂粒・石英・雲母を含み，淡橙色に焼成されている。また358は口縁部が薄めに短く外反する甕で，粘土帯接合の痕がヘラ削り調整される内面に残る。

土師器椀（359・360） 口縁部が内彎する椀で，器面はナデ調整される。359は口唇部も内彎し，復原口径11.3cm，器高3.9cmの大きさ。胎土に細砂粒・石英・雲母を含み，淡茶橙色に焼成されている。360は胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒を含み，淡褐色に焼成されている。

土師器皿（361・362） やや平らな底部から口縁部が内彎気味に立ち上がる器形で，外底部はヘラ削りされる。胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒などを含み，淡褐色に焼成されている。

土製品（第12図）

紡錘車（16） 半欠資料である。雲母を含むが精良な胎土で，円盤形に成形されてナデ調整される。復原外径5.2cm，厚さ1.3cm，孔径0.6cmの大きさで，重量の現存値は20.4gを測る。

住居跡内からは，敲石・鉄滓が各1点，粘土塊が13点，木炭片なども出土した。敲石は縄文時代に属するものであり，後述する。出土土器は，須恵器杯蓋・杯身・高杯などの特徴からみて，7世紀後半頃に含まれるであろう。

36号住居跡（図版19－1，第85図）

調査区北東部で発見された竪穴住居跡で，35号住居跡の西側に位置し，37号住居跡に一部重複して切られる。主軸方向をN7°Wにとる不整方形プランの住居跡である。37号住居跡によって南西部を，近世溝によって北西部を失うが，南北3.7～4.0m，東西3.7m前後，深さ0.2m強の規模に残る。カマドは北側壁の中央より僅かに右側に設けられているが，燃焼室部分は外に出る。床面は標高51.0m強で，中央部は堅緻だが，周囲はやや柔らかめである。床面を掘り込むピットのうちp1～4が主柱穴と推定されるが，柱穴は直径20～25cm，深さ20cm程の規模で，柱間は1.3～1.9mを測る。

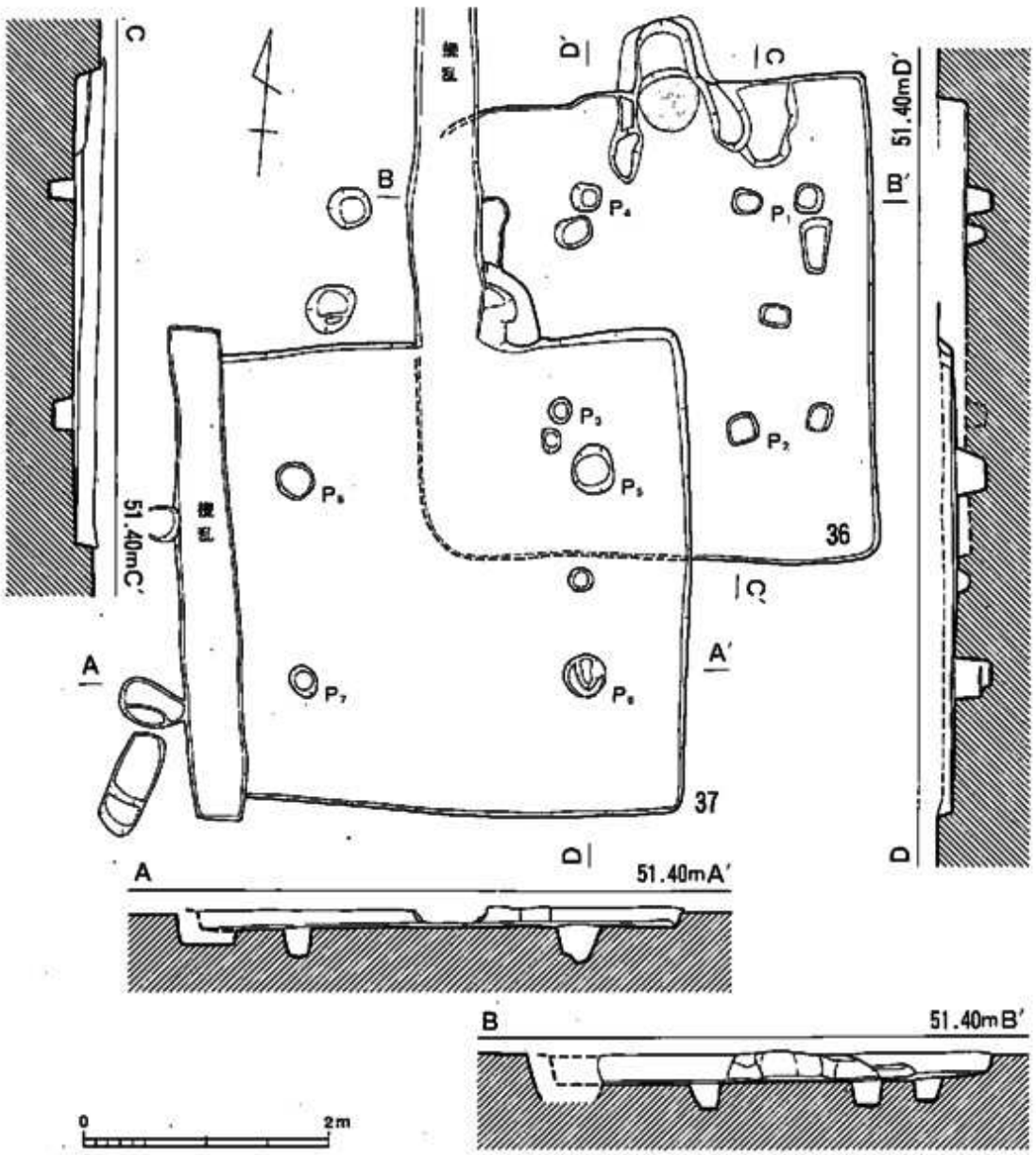
p4脇の床面直上で土製紡錘車が出土した。（小池）

カマド（図版19－2，第86図）

下部掘り込みを有するⅢa類で，北壁中央に付設する。下部掘り込みは径110cmの円形を呈し，焚口部から火床面にかけて掘り込んでいる。袖部はハ字形を呈し，右袖は残存長56cm，基底部幅33cm，残高7cmで，左袖は残存長71cm，基底部幅26cm，残高11cmを測り，赤褐色粘土を盛っていた。壁体は方形で，幅80cm，奥行き50cmを測る。火床は径50cmの範囲で焼けていたが，支脚は不明。煙道は削平されたものか，遺存していない。（小田）

出土遺物（図版47・48，第12・66・88図）

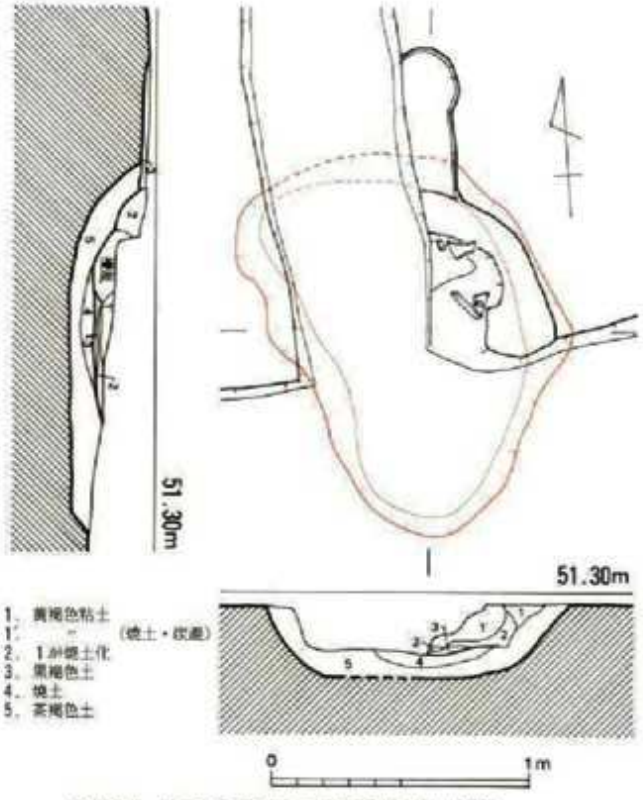
土　器（第88図）



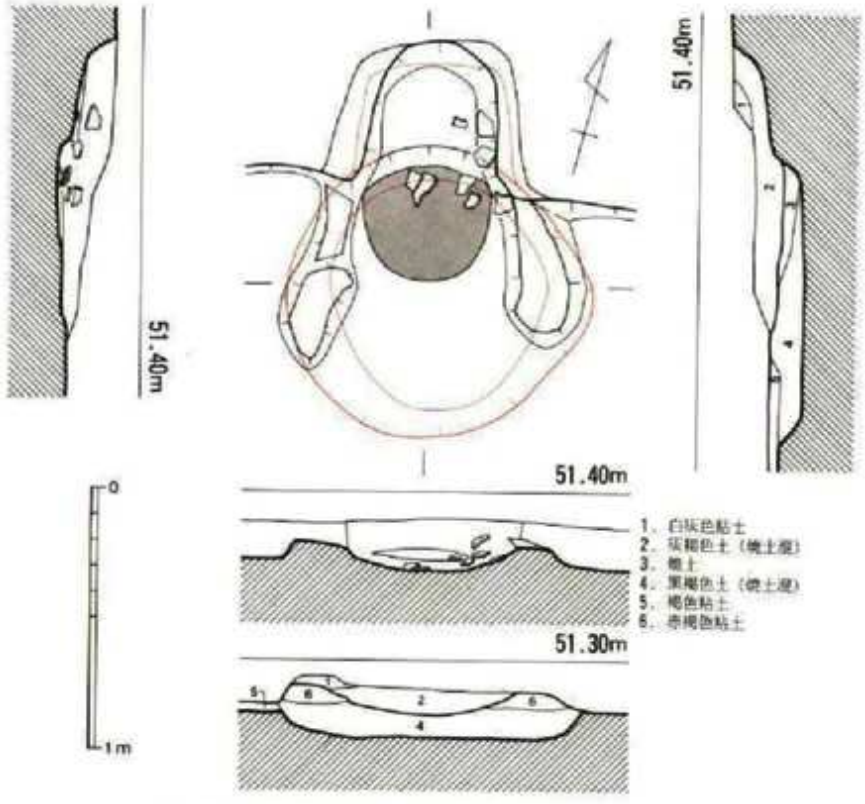
第85図　36・37号住居跡実測図（1/60）

須恵器杯蓋（363）　鈍く折れる鳥嘴状のかえりを有する杯蓋で，淡灰色にあまく焼成されている。

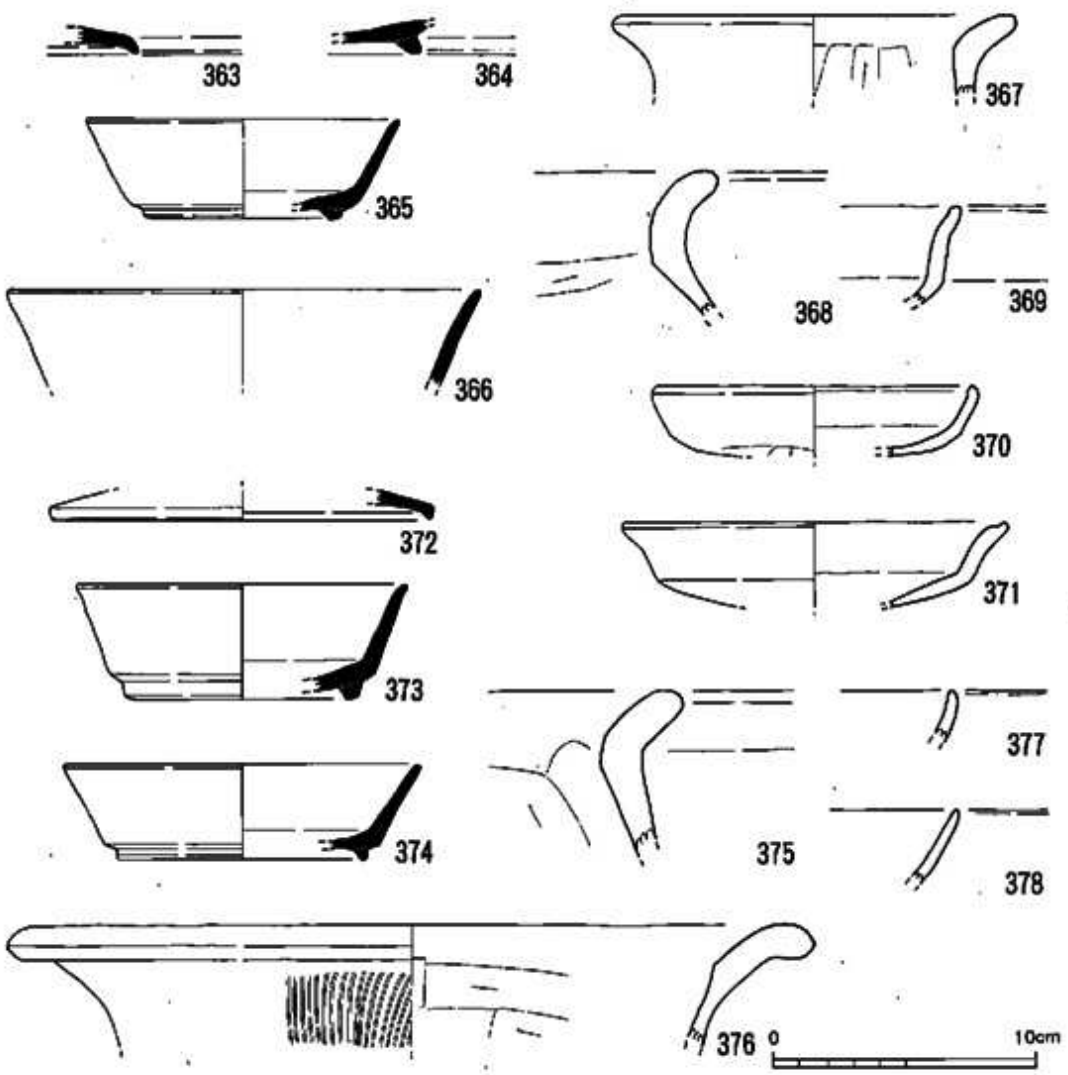
須恵器杯身（364～366）　364は底部端に開き気味な高台が付く杯身で，口縁部を失う。あまい焼成で灰色を呈している。365は底部から口縁部が直線的に開き，低めの逆台形断面の高台が付く。復原口径は12.2cm，器高3.8cmの大きさ。堅い焼成で，淡青灰色に焼成されている。



第87図　37号住居跡カマド実測図（1/30）



第86図　36号住居跡カマド実測図（1/30）



第88図　36・37号住居跡出土土器実測図（1/3）

366は直線的に開く口縁部破片で，復原口径18.2cmの大きさ。あまい焼成で白緑灰色を呈している。

土師器甕（367・368）　367は復原口径15.6cmの大きさの甕で，カマド内から出土した。口縁部は肥厚して外反するが，胴部は膨らまず，内面はヘラ削りされる。胎土に細砂粒・雲母を含み，茶色に焼成されている。368は肥厚した口縁部がやや強めに外反する破片で，胴部は膨らみ，内面はヘラ削りされる。胎土に細砂粒・石英を含み，淡褐色に焼成されている。

土師器杯（369～371）　底部との境に稜をもつ杯で，371はカマド内から出土した。369は立

ち上がった口縁部が端部で外反する杯の口縁部破片である。胎土に細砂粒・雲母を含み，淡茶橙色に焼成されている。370は復原口径12.6cm，器高2.7cmの大きさで，口縁端部は内傾する。口縁部は内外ともヨコナデ調整され，外底部はヘラ削りされる。371は復原口径14.8cm，残存器高3.2cmの大きさで，口縁部は外反する。胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒を含み，淡橙色に焼成されている。

石　器（第66図）

砥　石（6）　凝灰質砂岩の石材を用いた肌理の細かな砥石で，方柱状をなすが，4面ともによく使用されて凹む。長さ9.4cm，幅3.2cm，厚さ1.0cm～3.2cmの大きさである。

土製品（第12図）

紡錘車（17）　砂粒・雲母を含む胎土で円盤形に成形され，円孔を穿っているが，ナデ調整され，灰黄褐色に焼成される。一部欠損するが，外径4.8cm，厚さ1.3cm，孔径0.6cmの大きさで，重量の現存値は35.6gを測る。

出土土器は，須恵器杯蓋・杯身，土師器杯などの特徴からみて，8世紀前半頃に含まれるであろう。

37号住居跡（図版19－3，第85図）

調査区北東部で発見された竪穴住居跡で，35号住居跡の西側に位置し，36号住居跡の南西側に重複している。主軸方向をN7°Wにとる不整方形プランの住居跡である。近世の耕作溝によって西端部を失うが，南北3.6～3.9m，東西4.0m前後，深さ0.1m強の規模に残る。カマドは北側壁の中央より僅かに右側に設けられているが，燃焼室部分は外に出る。床面は標高51.1m強で，中央部は堅緻だが，周囲はやや柔らかめである。床面を掘り込むピットのうちp5～8が主柱穴と推定されるが，柱穴は直径25～40cm，深さ25～30cmの規模で，柱間は1.5・2.3mを測る。（小池）

カマド（図版20－1，第87図）

カマド壁体の大半が新期溝に切られるため遺存状態は悪い。下部掘り込みを有するⅢa類で，北壁中央に付設している。下部掘り込みは長軸146cm×短軸107cmの不整長円形を呈し，茶褐色土で一旦埋めた後，黄褐色粘土を貼付し壁体を築く。袖部は全く遺存しておらず，支脚も不明。煙道は長さ55cmで，先端の煙出しピットを有しないものである。（小田）

出土遺物（図版48，第66・88図）

土　器（第88図）

須恵器杯蓋（372）　鈍く折れる鳥嘴状のかえりを有する杯蓋で，口径14.4cmに復原できる。淡灰色にあまく焼成されている。

須恵器杯身（373・374）　373は底部端に断面逆台形の高台が付く杯身で，口縁部は直線的に

開き端部が外反する。復原口径12.9cm，器高4.5cmの大きさで，淡緑灰色に堅く焼成されている。374は底部に外開きの低い高台が付き，口縁部は直線的に開く。復原口径は13.8cm，器高3.7cmの大きさ。堅い焼成で淡青灰色に焼成されている。

土師器甕（375） 肥厚した口縁部が外反し，胴部は膨らむ。外面は風化・磨滅するが，胴部内面はヘラ削りされる。胎土に細砂粒・赤褐色粒を含み，淡褐色に焼成されている。

土師器鍋（376） 復原口径31.2cmの大きさの鍋で，肥厚した口縁部がやや強めに外反し，胴部は窄まる。胴部外面はハケ目，内面はヘラ削りされる。胎土に細砂粒・石英・雲母・赤褐色粒を含み，暗茶色ないし淡褐色に焼成されている。

土師器杯（377・378） 377はカマド内から出土した。口縁部が端部で内彎する杯の口縁部破片である。胎土に細砂粒・雲母を含み，淡褐色に焼成されている。378は口縁端部が直線的に伸びる。口縁部は内外ともヨコナデ調整される。胎土に細砂粒・雲母を含み，淡茶褐色に焼成されている。

石　器（第66図）

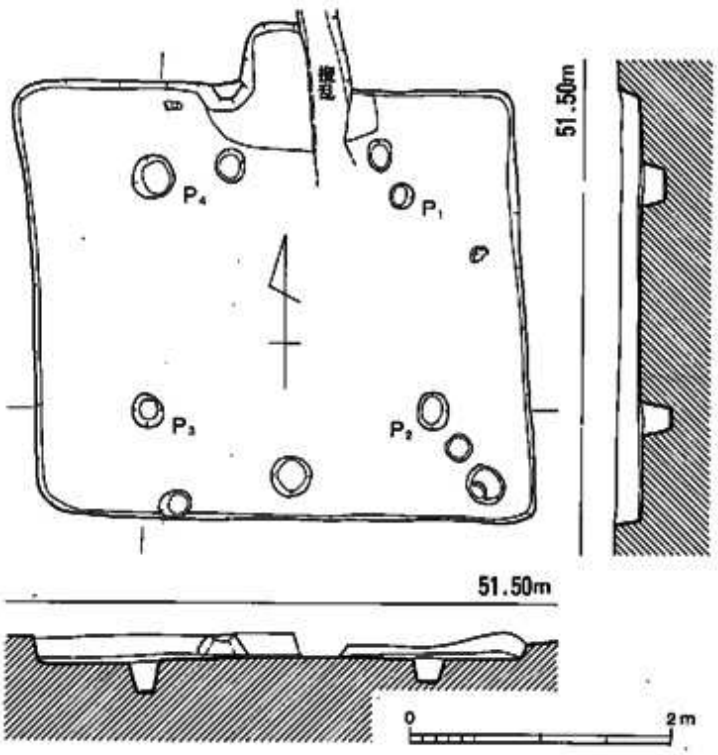
砥　石（7） 凝灰質砂岩の石材を用いた肌理の細かな砥石で，方柱状をなすが，4面ともによく使用されて凹む。長さ6.7cm，幅2.2cm～3.0cm，厚さ1.5cm～3.3cmの大きさである。

37号住居跡からはこれらの他に，カマド内から鳥嘴状のかえりをもつ須恵器杯蓋細片と粘土塊が3点出土した。住居跡出土土器は，須恵器杯蓋・杯身，土師器杯などの特徴からみて，8世紀前半頃に含まれるであろう。

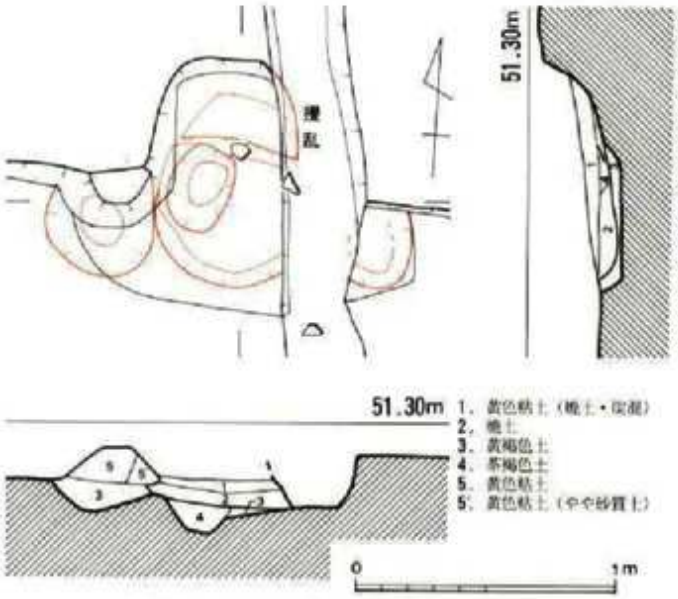
38号住居跡

（図版20－2，第89図）

調査区北東部で発見された竪穴住居跡で，35号住居跡の南西側，36号・37号住居跡の南東側に位置している。主軸方向をほぼ南北にとる不整方形プランの住居



第89図　38号住居跡実測図（1/60）



第90図　38号住居跡カマド実測図（1/30）

跡である。近世の溝によって東側の上部を失うが，南北3.3～3.4m，東西約3.8m，深さ0.2m前後の規模に残る。カマドは北側壁の中央に設けられているが，燃焼室部分は外に出る。床面は標高51.1m弱で，中央部は堅緻だが，周囲はやや柔らかめである。床面を掘り込むピットのうちp1～4が主柱穴と推定されるが，柱穴は直径20～30cm，深さ15～25cmの規模で，柱間は1.7～2.2mを測る。（小池）

カマド（図版20－3，第90図）　火床面が床面より一段下がるⅢb類で，北壁中央に付設する。壁体は方形を呈し，奥行きは42cmを測るが，幅は新期溝に切られるため70cm程であろうか。左袖は残存長22cm，基底部幅43cm，残高12cmを測り，左右両袖の下部には円形（径約40cm）のピットが存することから或いは袖石を抜き去った可能性がある。煙道は削平されたのであろう。支脚も遺存していない。（小田）

出土遺物（図版38，第91図）

土　器（第91図）

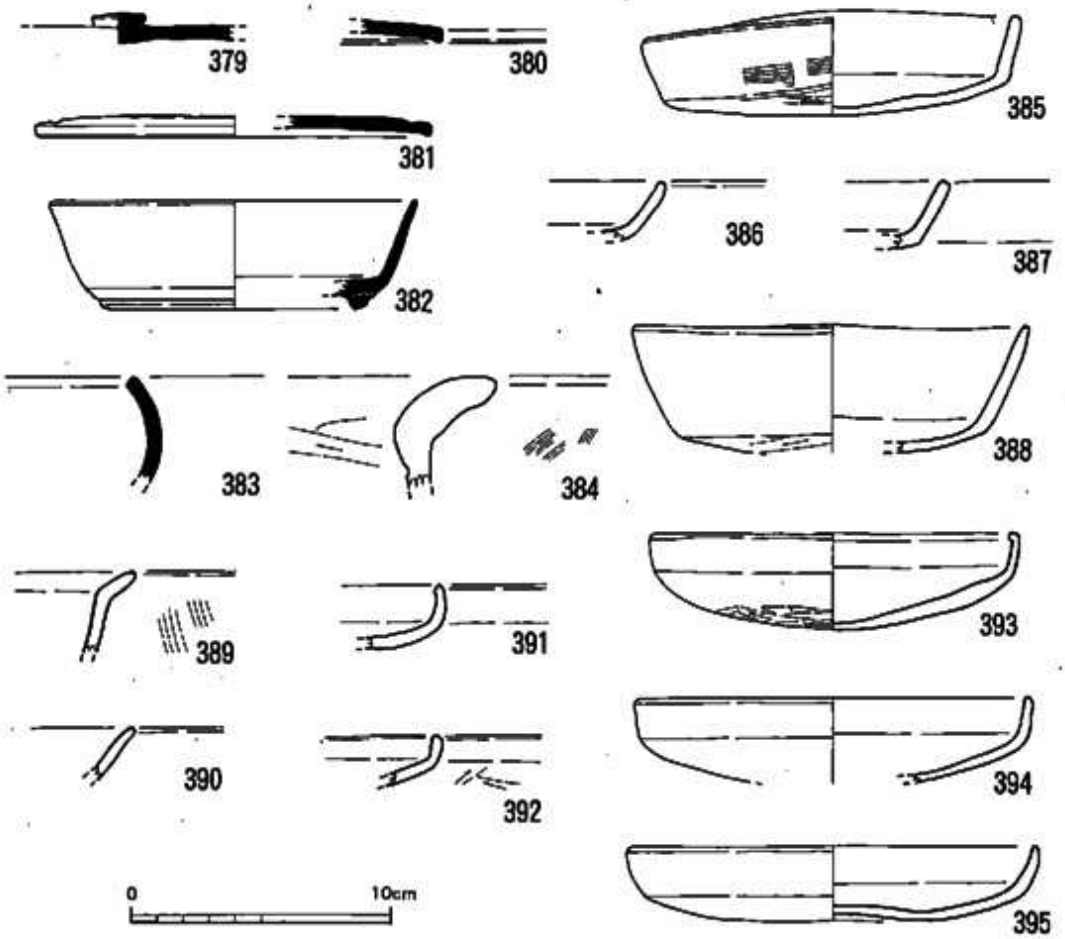
須恵器杯蓋（379～381）　鳥嘴状のかえりを有する杯蓋で，379は扁平な宝珠形つまみの付く天井部破片。380・381は口縁部破片である。端部のかえりは鈍く，381は口径15.2cmの大きさ。外天井は回転ヘラ削りされる。淡灰色ないし青灰色に堅く焼成されている。

須恵器杯身（382）　口縁部が直に立ち上がり，端部が僅かに外反する杯身で，低めの四角い高台が付く。復原口径14.2cm，器高4.1cmの大きさで，淡灰色に焼成されている。

須恵器鉢（383）　カマド部分から出土した。内彎する口縁部破片で，端部は肥厚せず，特に面ももたない。淡緑灰色に焼成されている。

土師器甕（384）　肥厚する口縁部破片で，如意状に外反するが，胴部はあまり膨れないだろう。胴部外面にハケ目，内面にヘラ削り痕がみられる。胎土に雲母・石英を含み，淡黄橙色に焼成されている。

土師器杯（385～388）　底部と口縁部との境に明瞭な稜をもつ杯で，口縁端部はやや丸みをもち，外底部はヘラ削りされる。385は復原口径14.5cm，器高4.5cmの大きさ。いずれも胎土に



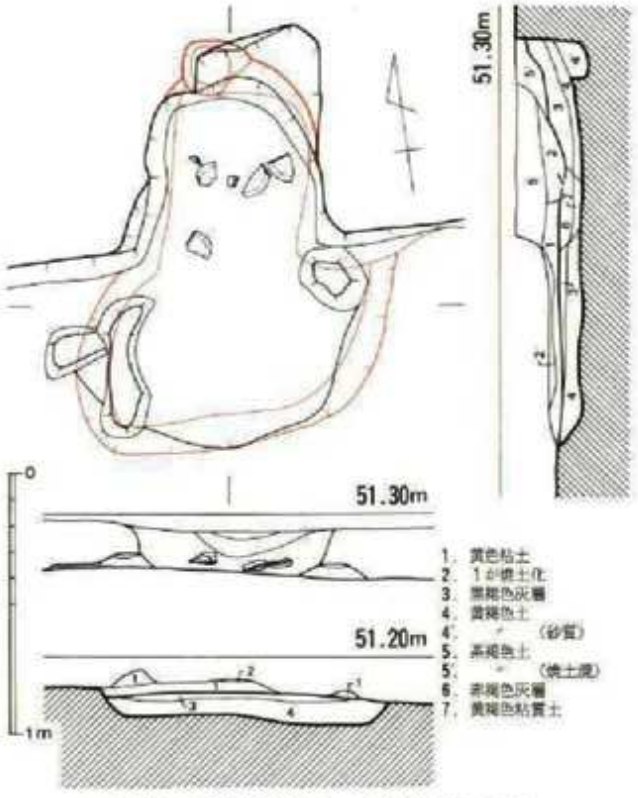
第91図　38・39号住居跡出土土器実測図（1/3）

雲母・赤褐色粒を含み，淡橙色・淡褐色に焼成されている。

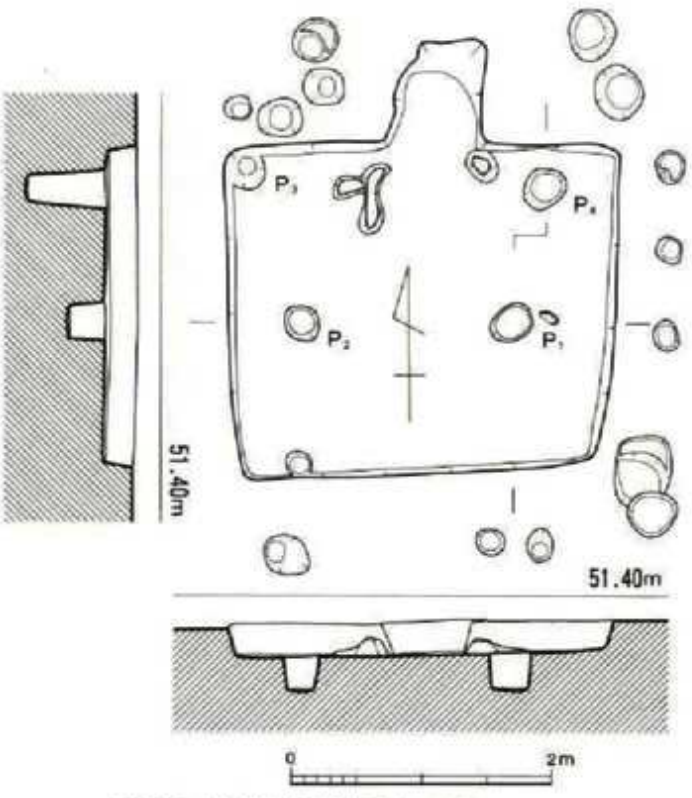
出土土器では，須恵器杯蓋・杯身や土師器杯などの特徴からして8世紀前半頃に考えておきたい。

39号住居跡（図版20－1，第92図）

調査区東寄りで発見された竪穴住居跡で，36号・37号住居跡の南西側，38号住居跡の西側に位置している。主軸方向をほぼ南北にとる不整方形プランの住居跡である。南北2.4～2.6m，東西2.7～3.0m，深さ0.2m前後の規模に残る。カマドは北側壁の中央に設けられているが，燃焼室部分は外に出る。床面は標高51.0m前後で，中央部はやや堅緻である。床面を掘り込むピットのうちp1・2が主柱穴と推定されるが，柱穴は直径20～30cm，深さ25～30cmの規模で，柱間は1.6mを測る。また北側の隅部にあるp3・4も左右対称的な位置にあるが，p4は深さ



第93図　39号住居跡カマド実測図（1/30）



第92図　39号住居跡実測図（1/60）

60cmを越している。(小池)

カマド（図版21－2，第93図）

下部掘り込みを有するⅢａ類で，北壁中央に付設する。下部掘り込みは壁体から焚口部にかけて掘っており，長軸158cm，短軸74～116cmを測る。他のカマド同様，黒褐色土・黄褐色土で埋めている。袖部は遺存状態が悪く，カマドの前面に黄色粘土が部分的に残存するのみである。支脚は遺存しないが，南北土層断面中央の落ち込み（⑥・⑦層）が抜き跡になるか。煙道は削平されたものか，遺存していない。(小田)

出土遺物（図版38，第91図）

土　器（第91図）

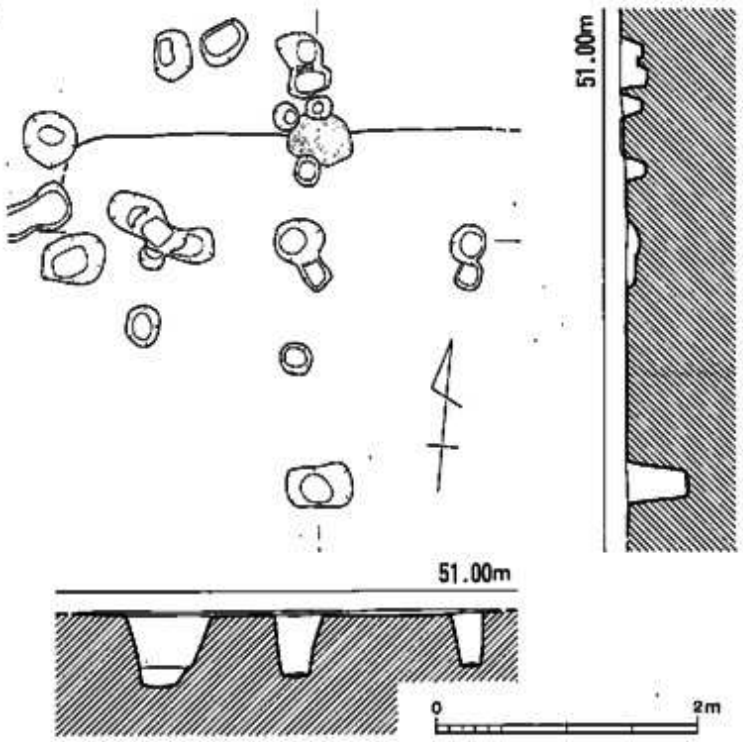
土師器鉢（389）　如意状に外反する口縁部破片で，器壁は肥厚しない。胴部外面にハケ目がみられる。胎土に雲母・石英を含み，淡黄橙色に焼成されている。

土師器杯（390～395）　390は外開きで，僅かに端部が外反する口縁部破片。391～395は内彎気味ながら口縁部が直に立ち上がる杯である。外底部は磨滅している例もあるが，ヘラ削りされて，口縁部と底部の境に稜をもつ。390・392・393・395はカマド部分から出土した。このうち393は口径14.3cm～14.9cm，器高3.7cmの大きさで，口縁端部は内に曲がる。雲母を含むが精良な胎土で，淡橙色に焼成されている。394は復原口径17.4cm。395は復原口径15.8cm，器高2.9cmの大きさである。共に胎土には雲母・赤褐色粒を含み，淡褐色に焼成されている。

これらの土器では，土師器杯の特徴からして８世紀前半頃に考えておきたい。

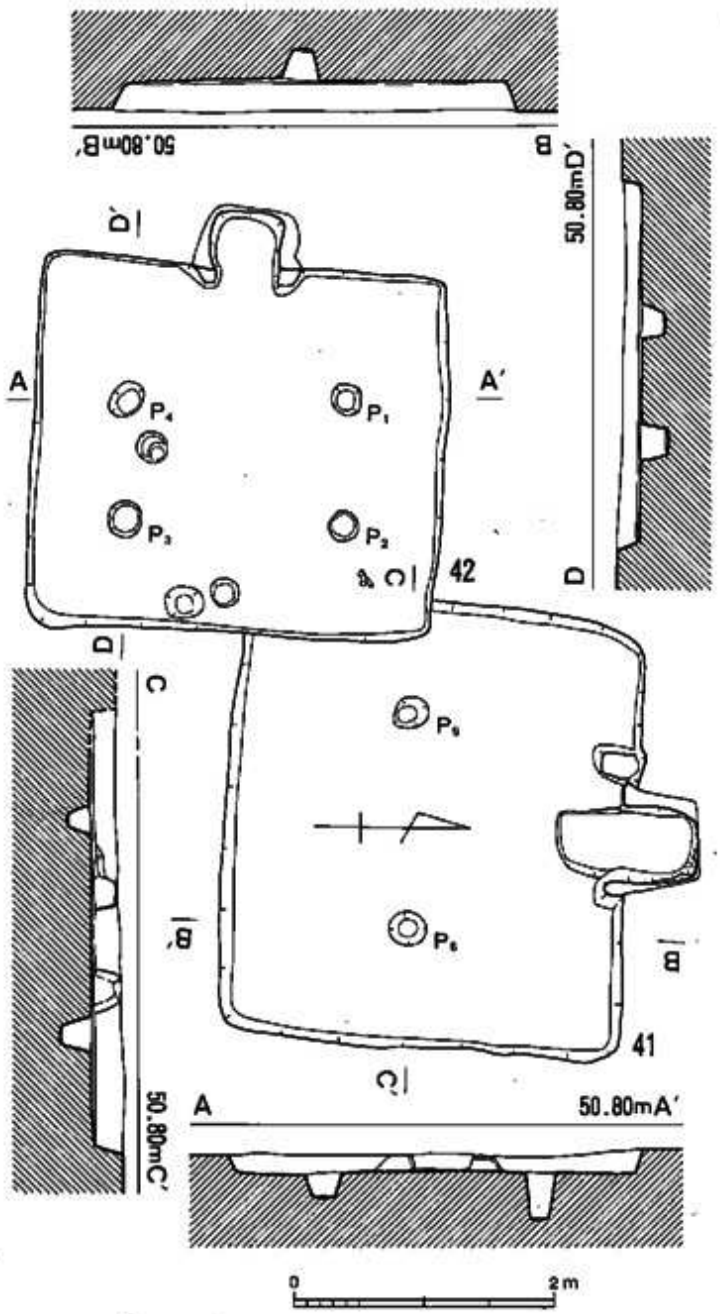
40号住居跡（第94図）

調査区中央部で，39号住居跡の約10m西側に発見された，焼土と東西方向に伸びる堆積土の境で，住居跡の北側端とみたが，南側は既に削られて床面も不明瞭



第94図　40号住居跡実測図（1／60）

である。ラインはN83°Eの方向で3.2mの距離を確認し，カマドと目される焼土は30cm×30cmの範囲にみられたが，カマド袖や壁体，住居跡周壁などは全く分からない。また，柱穴状ピットは多数みられるが，主柱穴を特定し難く，遺物の出土もみとめられなかった。



第95図　41・42号住居跡実測図（1/60）

41号住居跡

（図版22－1，第95図）

調査区中央部で発見された竪穴住居跡で，5号住居跡の南側に位置しているが，南西隅部を42号住居跡によって一部切られる。主軸方向をN5°Eにとる方形プランの住居跡である。南北方向3.1m，東西方向3.4m，深さ0.1～0.2mの規模に残る。カマドは北側壁の中央に設けられているが燃焼室部分は外側に出る。床面は標高50.4m強で，カマド前にあたる中央部は堅緻な床がみられる。床面を掘り込むp5・6のピットが主柱穴と推定されるが，柱穴は直径25cm前後，深さ15～25cmの規模で，柱間は1.6mを測る。（小池）

カマド

（図版22－2，第96図）

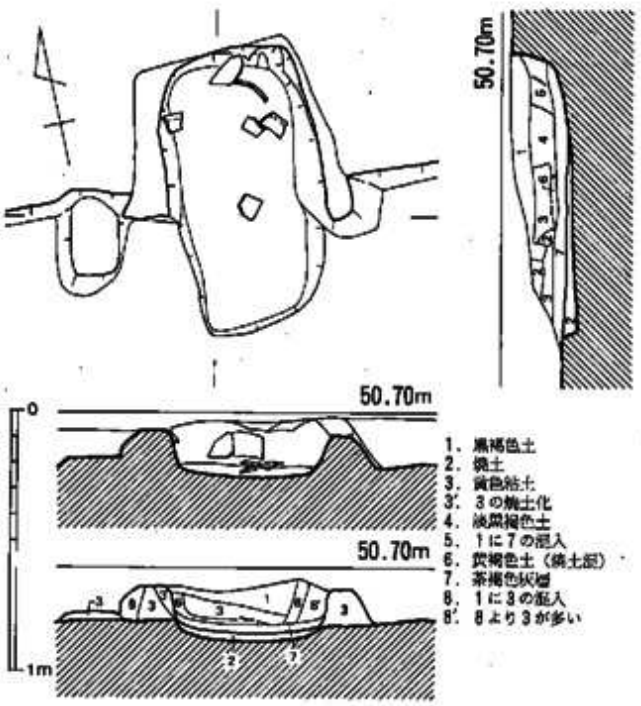
火床面が床面より一段下がるⅢb類で，北壁中央に付設する。壁体は方形を呈

し，幅82cm，奥行き66cmを測る。右袖は残存長23cm，基底部幅28cm，残高14cmを測る。左袖は残存長37cm，基底部幅28cm，残高4cmを測るが，壁体際から20cmも離れていることから袖として原形を留めているとは考え難い。煙道は遺存しておらず，支脚も不明。埋土中から土器が出土している。(小田)

出土遺物（第97図）

土　器（第97図）

須恵器杯蓋（396）　身受けのかえりを有する杯蓋で，復原外径14.0cmの大きさ。外天井は回転ヘラ削りされる。堅緻な焼成で黒灰色を呈している。



第96図　41号住居跡カマド実測図（1／30）

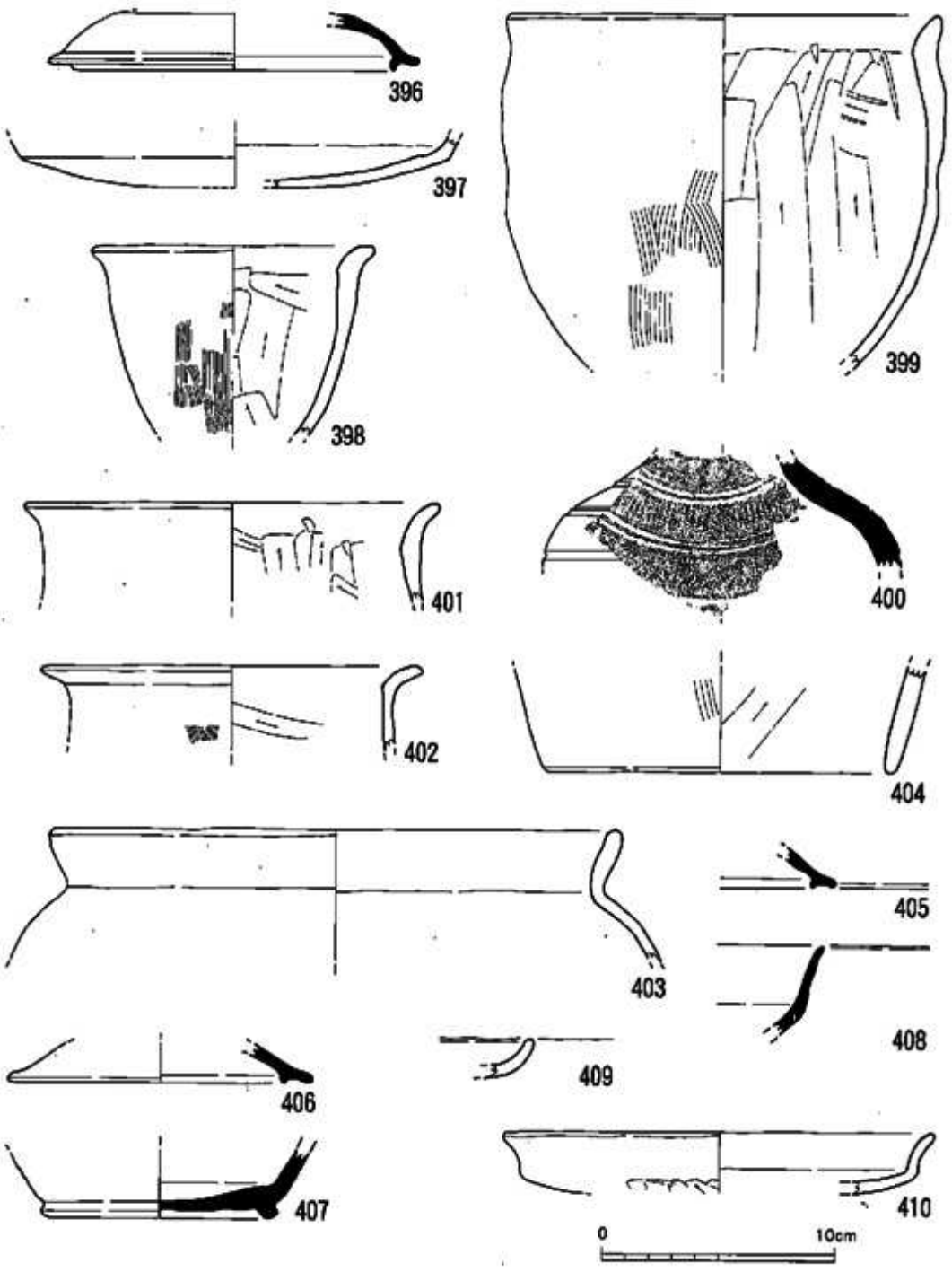
土師器皿（397）　口縁端部を失うが，外底面がヘラ削りされて，口縁部との境に稜をもつ皿で，復原底径18.3cmの大きさ。胎土に雲母・石英・赤褐色粒を含み，淡褐色に焼成されている。

土師器甕（398・399）　398は口縁部が如意状に外反し，胴部がほとんど膨らまない小型の甕で，復原口径12.1cmの大きさ。口縁部は短く，肥厚する。胴部外面にハケ目，内面にヘラ削り痕がみられる。胎土に石英など砂粒を含み，淡茶橙色に焼成されているが，外面には煤が付着している。399は復原口径18.8cmの大きさの甕で，短く外反する口縁部はやや肥厚する。胴部はあまり膨らまず，外面にハケ目，内面にヘラ削り痕がみられる。胎土に雲母・石英・赤褐色粒を含み，淡褐色に焼成されている。

出土土器では，須恵器杯蓋などの特徴からして7世紀前半頃に考えておきたい。

42号住居跡（図版23－1，第95図）

調査区中央部で発見された竪穴住居跡で，5号住居跡の南西側に位置しているが，北東隅部で41号住居跡と一部重複する。長軸方向をN3°Eに向ける不整方形プランの住居跡であるが，カマドは西側壁の中央に設けられていて，主軸方向は直交する。南北方向3.1～3.2m，東西方向2.8m前後，深さ0.1～0.2mの規模に残る。カマドの燃焼室部分は外側に出るが，カマド前から竪穴中央部の床面は堅緻で，周辺部はやや柔らかく，標高は50.40m強を測る。床面を掘

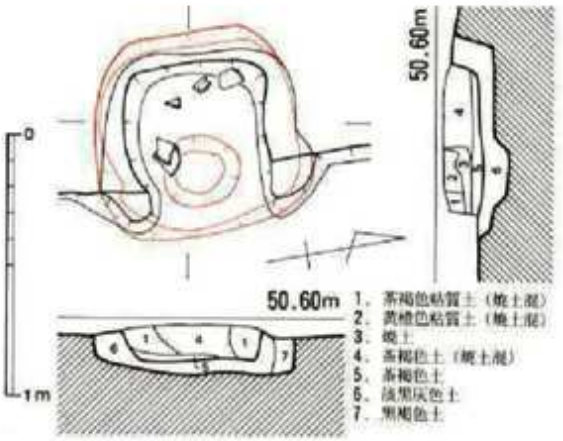


第97図　41～43号住居跡出土土器実測図（1/3）

り込むピットのうちp1～4が主柱穴と推定されるが，柱穴は直径20～25cm，深さ20cm前後の規模で，柱間は0.9・1.6mを測る。（小池）

カマド（図版24－1，第98図）

下部掘り込みを有するⅢa類で，西壁中央に付設する。カマドの構築方法は住居壁を80cm×76cmの隅丸方形に掘り込み，淡黒灰色土で一旦埋めた後，壁体・袖部を築く。右袖は残存長22cm，基底部幅26cm，残高10cmで，左袖は残存長15cm，基底部幅31cm，残高9cmを測る。また，床面中央下層には径28cmのピットがあり，支脚を抜いた痕跡であろうか。煙道は削平により，遺存していない。（小田）



第98図　42号住居跡カマド実測図（1／30）

出土遺物（第97図）

土　器（第97図）

須恵器壺（400）　口縁部と胴下半を欠くが，胴最大径15.5cm程の大きさの壺。肩部に2条単位の沈線が巡り，沈線間に櫛歯状の刺突文様が連続施文される。堅い焼成で淡緑灰色を呈する。

土師器甕（401・402）　僅かに肥厚する口縁部破片で，如意状に外反するが，胴部はあまり膨れないだろう。外反は401が緩やかなのに比して，402は強く反る。いずれも胴部内面はヘラ削りされるが，402の外面にハケ目がみられる。胎土に雲母・石英を含み，淡茶褐色に焼成されている。402はカマド内から出土した。

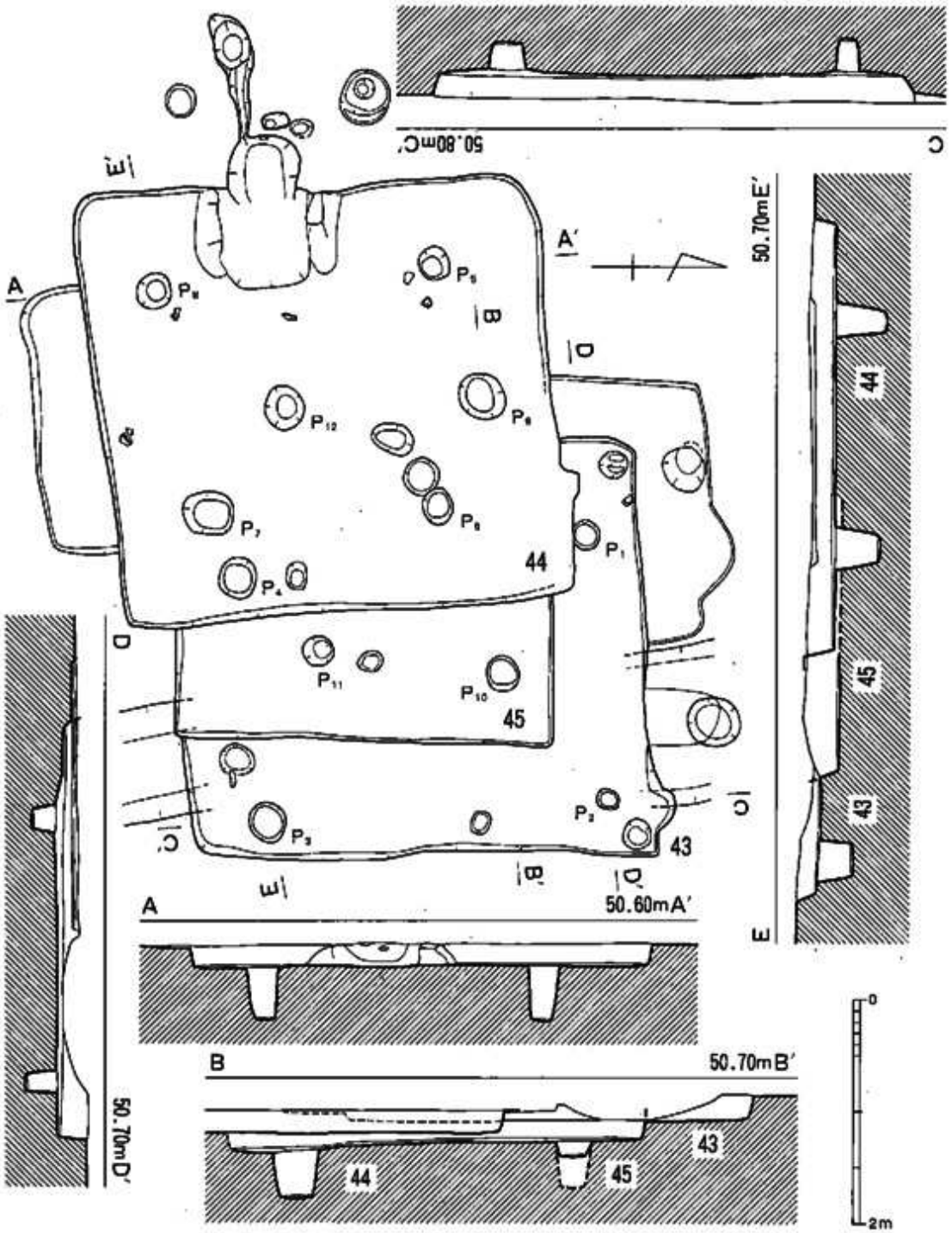
土師器鉢（403）　口縁部は肥厚して内彎気味に立ち上がり，胴部は膨らむ。復原口径24.7cmの大きさで，胴部内外面は磨滅する。胎土に雲母を含み，淡黄橙色に焼成されている。

土師器甑（404）　底部破片で，下端部の復原径は15.2cm。外面にハケ目，内面にヘラ削り痕がみられる。胎土に雲母・石英を含み，淡黄橙褐色に焼成されている。

出土土器では，破片資料ばかりで不明確だが，7世紀代に考えておきたい。

43号住居跡（図版22－1，第99図）

調査区中央部で発見された竪穴住居跡で，42号住居跡の南西側に隣接し，42号住居跡のカマドが43号住居跡の竪穴埋土を切り込むことから，42号住居跡より先行する。また西側では44号・45号住居跡にも切られ，上部には近世溝が南北に縦断する。長軸方向をN3°Wに向ける不整方形プランの住居跡であるが，南北方向4.2m前後，東西方向3.8m前後，深さ0.1～0.2mの



第99図　43～45号住居跡実測図（1／60）

規模に残る。カマドはみられないが，西側に付設されていたかも知れない。床面はやや堅緻で，標高は50.3m強を測る。床面を掘り込むピットのうちp1～4が主柱穴と推定されるが，柱穴は直径20～30cm，深さ20～30cm前後の規模で，柱間は2.2～2.3mと3.0～3.1mを測る。なお，北側壁にみられる飛び出しは，近世溝による攪乱ないし色調の染み込みによるものであろう。

出土遺物（第97図）

土　器（第97図）

須恵器杯蓋（405・406）　共に身受けのかえりを有する杯蓋で，堅緻に焼成されて，暗灰色を呈する。406は復原外径13.2cmの大きさである。

須恵器杯身（407・408）　407は口縁部を失うが底部端に高台をもつ杯身である。復原高台径10.2cmで，焼成はあまい。408は外反する口縁部破片で，堅く焼成されて淡緑灰色を呈する。

土師器杯（409・410）　409は内彎する口縁部破片で，410は復原口径18.6cmの大きさで，口縁部は外反し，外底部はヘラ削りされる。いずれも胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒を含み，淡橙色に焼成されている。

出土土器は，須恵器杯蓋・杯身などの特徴からみて，7世紀後半頃に含まれるであろう。

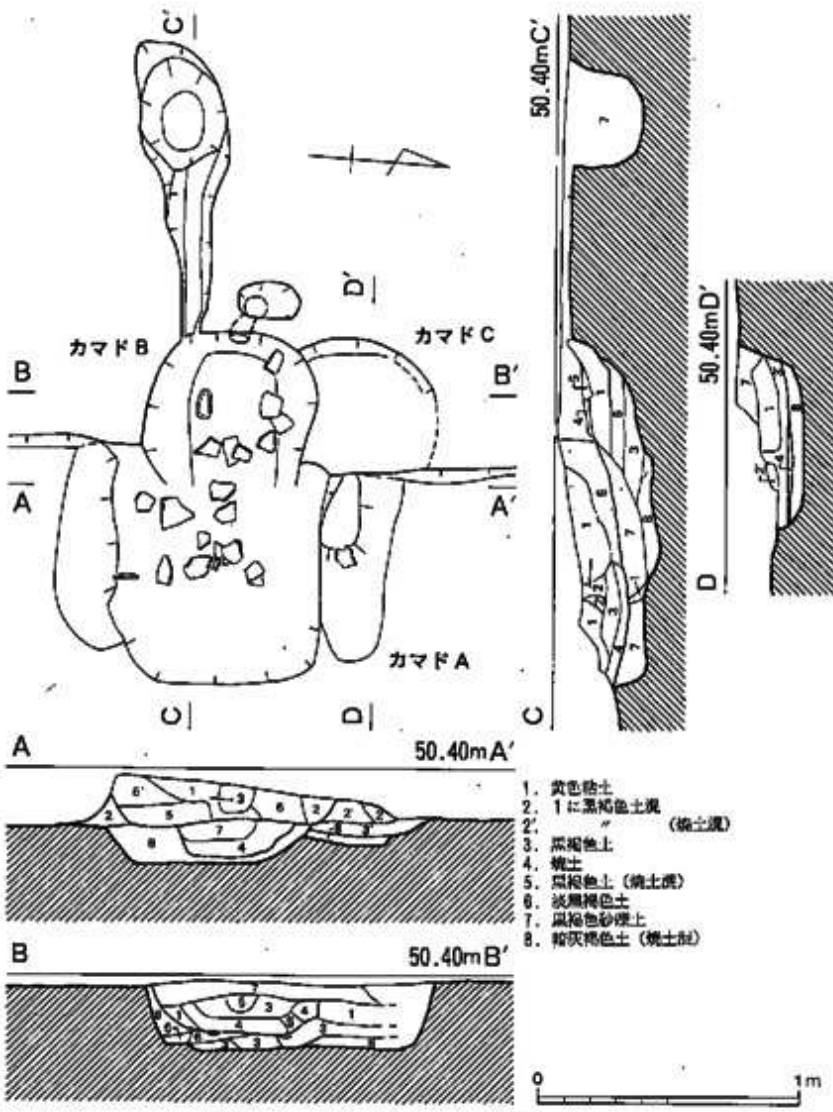
44号住居跡（図版23－2，第99図）

調査区中央部で発見された竪穴住居跡で，43号住居跡の南西側に重複し，43号・45号住居跡より後出する。また北側と南側に小型の竪穴とも重複するが先後関係は調査時に明確に区別しえなかった。また北東隅部はプラン検出時に傾斜した堆積土を見誤って少し内側に判断していたが実際には少し外側であったようである。長軸方向をN4°Wに向ける不整方形プランの住居跡であるが，西側壁にカマドが付設されており，主軸はこれにほぼ直交する。南北方向4.0～4.2m，東西方向3.8～3.9m，深さ0.2mの規模に残る。カマドは西側壁の中央より僅か左側に付設されているが，燃焼室の奥部と煙道で約1.5m西側に飛び出る。床面はカマド前の中央部が堅緻で，周辺はやや柔らかく，標高は50.2m前後である。床面を掘り込むピットのうちp5～8が主柱穴と推定されるが，柱穴は直径25～40cm，深さ40～45cm程の規模で，柱間は2.0～2.4mを測る。（小池）

カマド（図版24－2・3，第100図）

西壁の中央に付設している。3基のカマド（A・B・C）が重複しており，新しい方から説明を加える。最も新しいAカマドは下部掘り込みを有するⅠa類で，長い煙道を有する。袖部の遺存状態は悪いが，右袖側で長さ72cm，基底部幅30cm，残高9cmを測る。下部掘り込みは平面図には図示していないが，80～90cmの方形を呈しよう。煙道は長さ148cm，幅17cm，深さ4cmで，先端には48cm×32cmの長円形のピットを有する。支脚については不明。

Bカマドも下部掘り込みを有するが，形態的には突出型のⅢa類で，短い煙道を付設する。



第100図　44号住居跡カマド実測図（1／30）

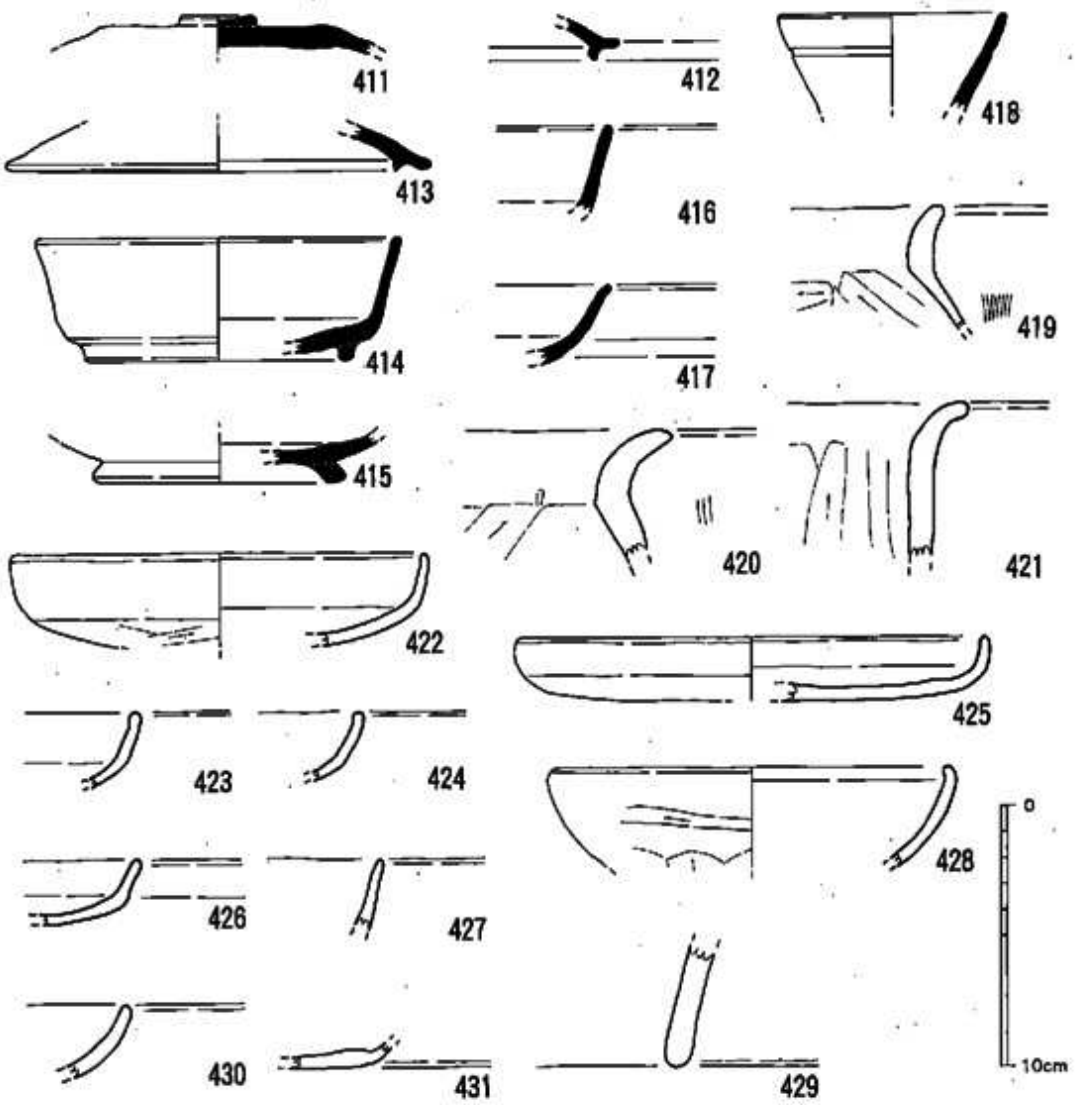
壁体は幅65cmを測るが，奥行き及び袖に関してはAカマドに切られるため不詳。奥壁の10cm先にはトンネル式の煙道を穿っている。

最も古いCカマドはA・Bの両カマドに切られるため奥壁を残す程度であり，詳細は不明。東西土層断面により火床面が床面から一段下がるⅢb類と考えられる。（小田）

出土遺物（図版38，第101図）

土　器（第101図）

須恵器杯蓋（411～413）　411は外天井に扁平なつまみを有する杯蓋で，口縁部を欠く。



第101図　44～47号住居跡出土土器実測図（1/3）

412・413は身受けのかえりを有する杯蓋で，413は復原外径16.4cmの大きさ。いずれも堅く焼成されて淡灰色ないし暗灰色を呈する。

須恵器杯身（414～417）　414・415は高台を有する杯身で，415は口縁部を欠くが，外方に開く高台をもつ。414は口縁部が外反気味ながらも直線的に開く杯身で，四角い高台が付く。復原口径14.2cm，器高4.8cmの大きさである。また416は外反気味の口縁部破片，417は内彎しながら開き端部で外反する。いずれも堅く焼成されて，淡緑灰色ないし緑灰色を呈している。

須恵器平瓶？（418）　外開きの口縁部破片で，復原口径8.8cmの大きさ。口縁下に1条の沈

線が巡る。平瓶ないしは提瓶の口縁部であろう。暗緑灰色に堅く焼成されている。

土師器甕（419～421） 419・420はやや肥厚した口縁部が外反して，胴部へは膨らむ。胴部外面はハケ目，内面はヘラ削りされる。421は口縁部が如意状に外反し，胴部は膨らまない。いずれも胎土に細砂粒・石英・赤褐色粒を含み，淡茶橙色に焼成されている。421はカマド内から出土した。

土師器杯（422～424） 422は口縁部が内彎気味に立ち上がる杯で，外底面はヘラ削りされ，口縁部との境にやや稜をもつ。復原口径16.2cm，残存器高3.6cmの大きさ。胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒を含み，淡橙色に焼成されている。423・424は口縁端部が僅かに内彎し，いずれも胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒を含み，淡褐色・淡橙色に焼成されている。424はカマド内から出土した。

土師器皿（425） 復原口径18.2cm，器高2.5cmの大きさで，口縁部は内彎して立ち上がり，やや平らな外底面はヘラ削りされる。胎土に細砂粒・雲母を含み，淡褐色に焼成されている。

出土土器は，須恵器杯蓋・杯身などの特徴からみて，7世紀後半頃に含まれるであろう。

45号住居跡（図版22－1，第99図）

調査区中央部で発見された竪穴住居跡で，43号住居跡と44号住居跡の間に重複していて，43号住居跡を切るが，45号住居跡によって切られる。また北側に小型の竪穴とも重複するが先後関係は調査時に明確に区別しえなかった。長軸方向をほぼ南北に向ける不整方形プランの住居跡であるが，西側壁と南側壁の大半は44号住居跡によって失う。南北方向3.4m，東西方向3.7m，深さ0.1～0.3mの規模に残る。カマドの有無は分からず，床面はさほど堅緻でなく，むしろ床面下の掘り込みであろうか。標高50.2m弱の面を掘り込むピットのうちp9～12が主柱穴と推定されるが，柱穴は直径25～40cm，深さ10～40cm程の規模で，柱間距離は1.6～1.7mと2.2～2.4mを測る。

出土遺物（図版47，第80・101図）

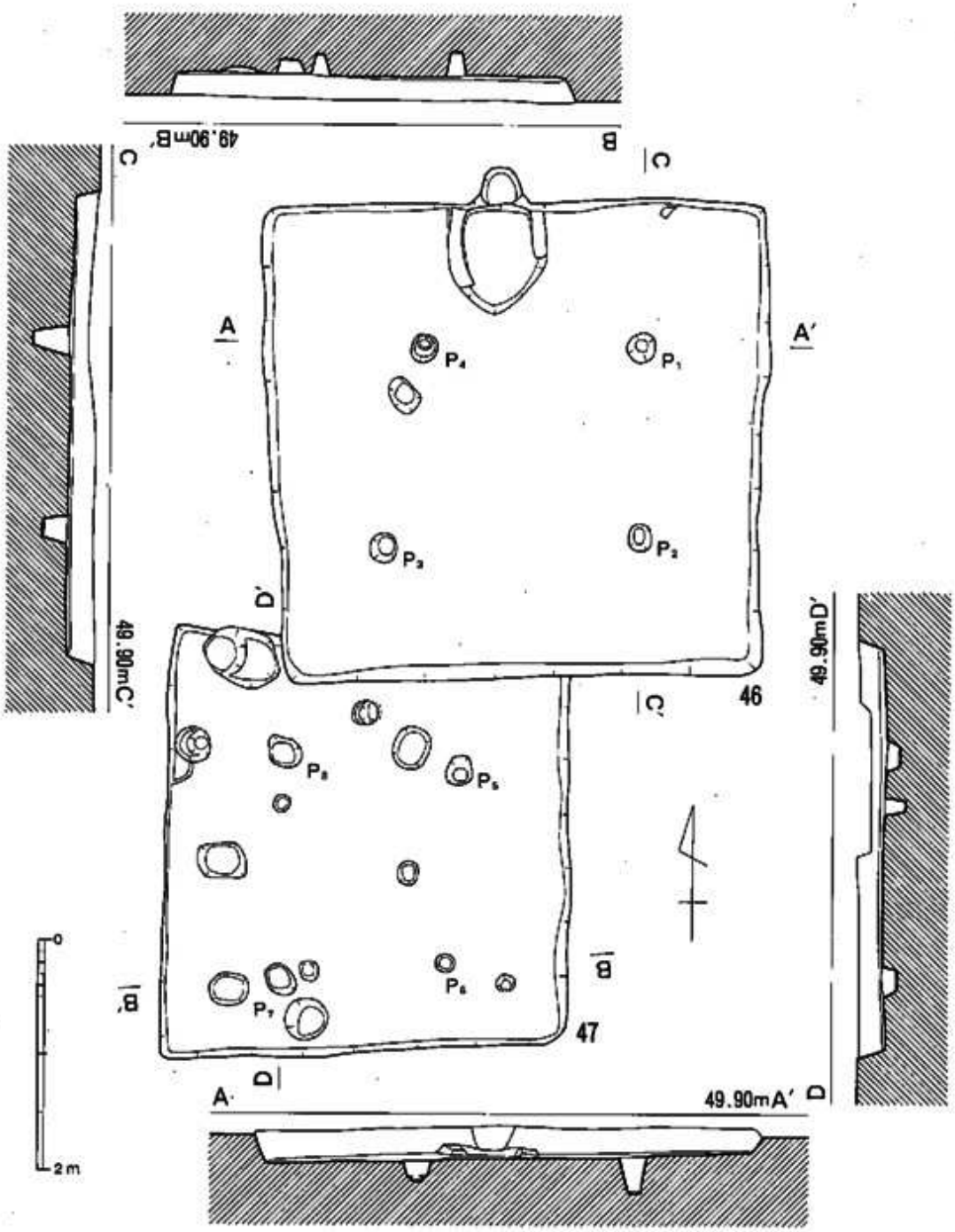
土　器（第101図）

土師器杯（426・427） 426は口縁部が僅かに外反し，底部との境に段をもつが，外底部は板ナデ調整される。427は直線的に立ち上がる口縁部破片である。いずれも胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒を含み，淡橙色・淡茶褐色に焼成されている。

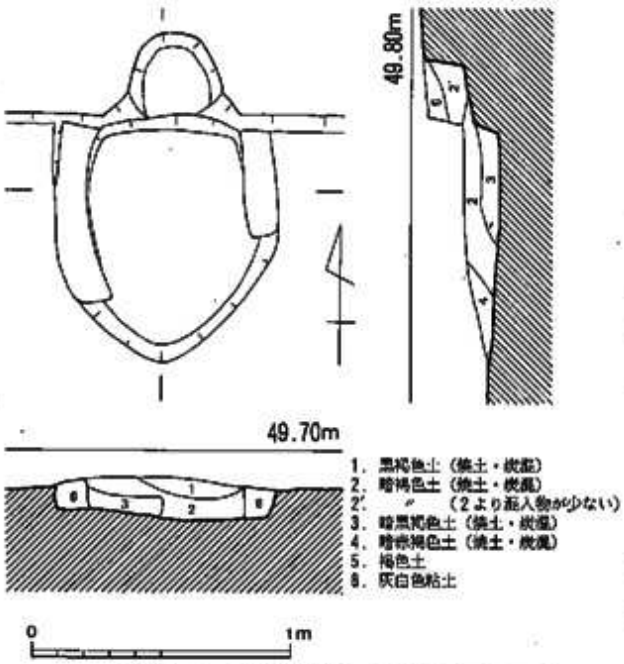
これらの僅かな土器片のみでは時期の特定は難しいが，7世紀後半から8世紀初頭頃であろう。

玉　類（図版47，第80図）

ガラス小玉（2） スカイブルーを呈する小玉で，外径4.8mm，厚さ4.4mm，孔径3.1mmの大きさ。北西隅部から出土した。



第102図　46・47号住居跡実測図（1／60）



第103図　46号住居跡カマド実測図（1/30）

46号住居跡（図版25－1，第102図）

調査区西端部で発見された竪穴住居跡で，47号住居跡と南側で重複し，47号住居跡を切る。主軸方向をほぼ南北に向ける不整方形プランの住居跡で，南北方向4.1m前後，東西方向4.2～4.4m，深さ0.2m前後の規模に残る。カマドは北側壁の中央に付設され，煙道部分が外側に出る。床面は標高49.5m前後で，中央部は堅緻だが，周囲はやや柔らかい。床面を掘り込むピットのうちp1～4が主柱穴と推定されるが，柱穴は直径20～25cm，深さ20～35cm程の規模で，柱間距離は1.7～1.8mと2.2mを測る。（小池）

カマド（図版25－2，第103図）

北壁の中央に付設する。明瞭な火床面は確認していないが，両袖の基底部積み土が床面より一段下がっていることからⅠb類と考えられる。袖部は基底部の灰白色粘土を残すのみで，遺存状態は極めて悪い。奥壁中央にみられる掘り込みが煙道で，径35cm，深さ16cmのピット状を呈する。支脚については不明。（小田）

出土遺物（第101図）

土　器（第101図）

土師器椀（428）　復原口径15.6cm，残存器高3.8cmの大きさで，口縁部は内彎して立ち上がり，外底部はヘラ削りされる。胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒を含み，淡褐色に焼成されている。

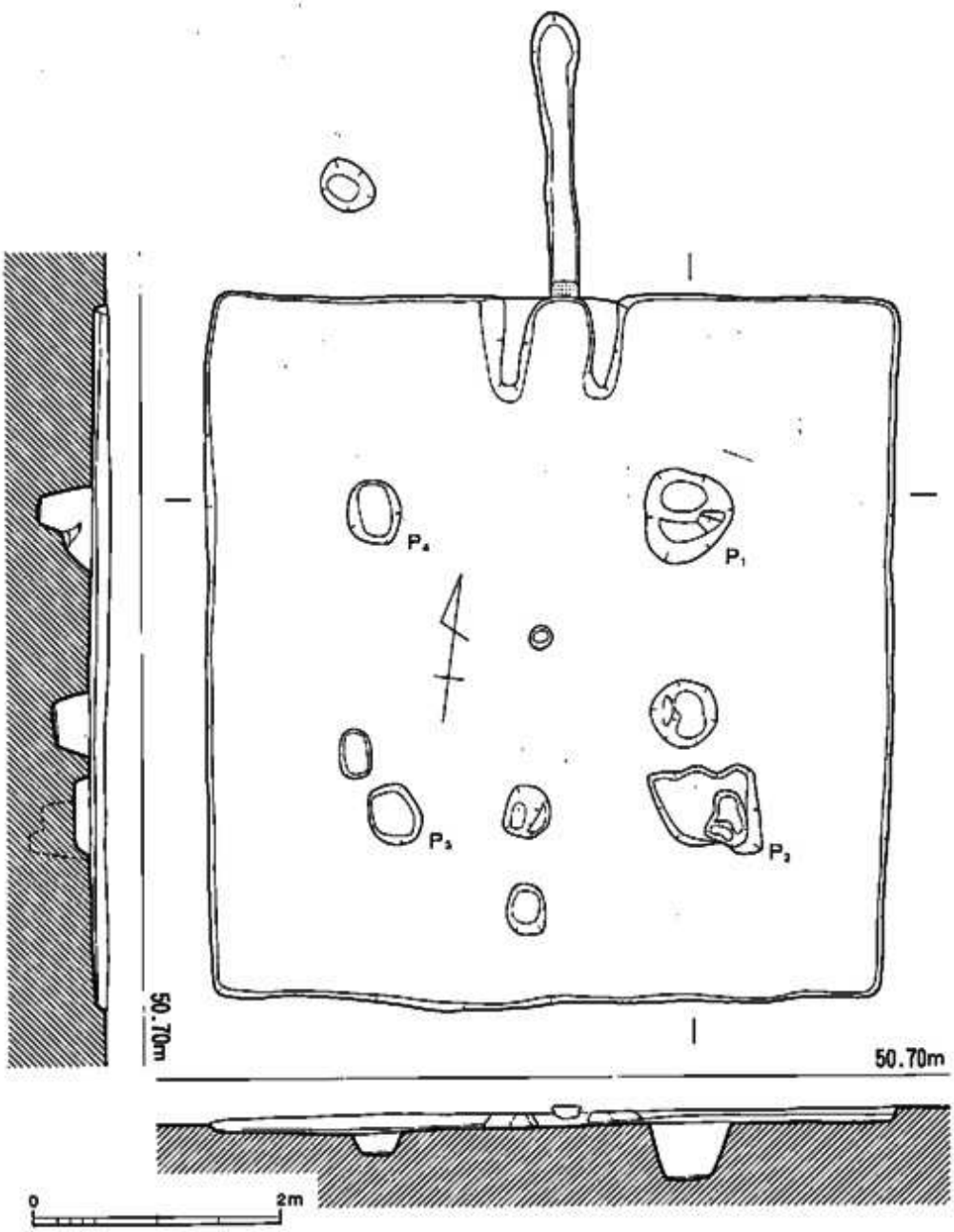
土師器甕（429）　カマド内から出土した据部破片で，全体の形や径は不明。外面はヨコナデ，内面はナデられる。胎土に細砂粒・雲母を含み，淡橙色に焼成されている。

これらの土器片のみでは時期を特定し難いが，8世紀代であろうか。

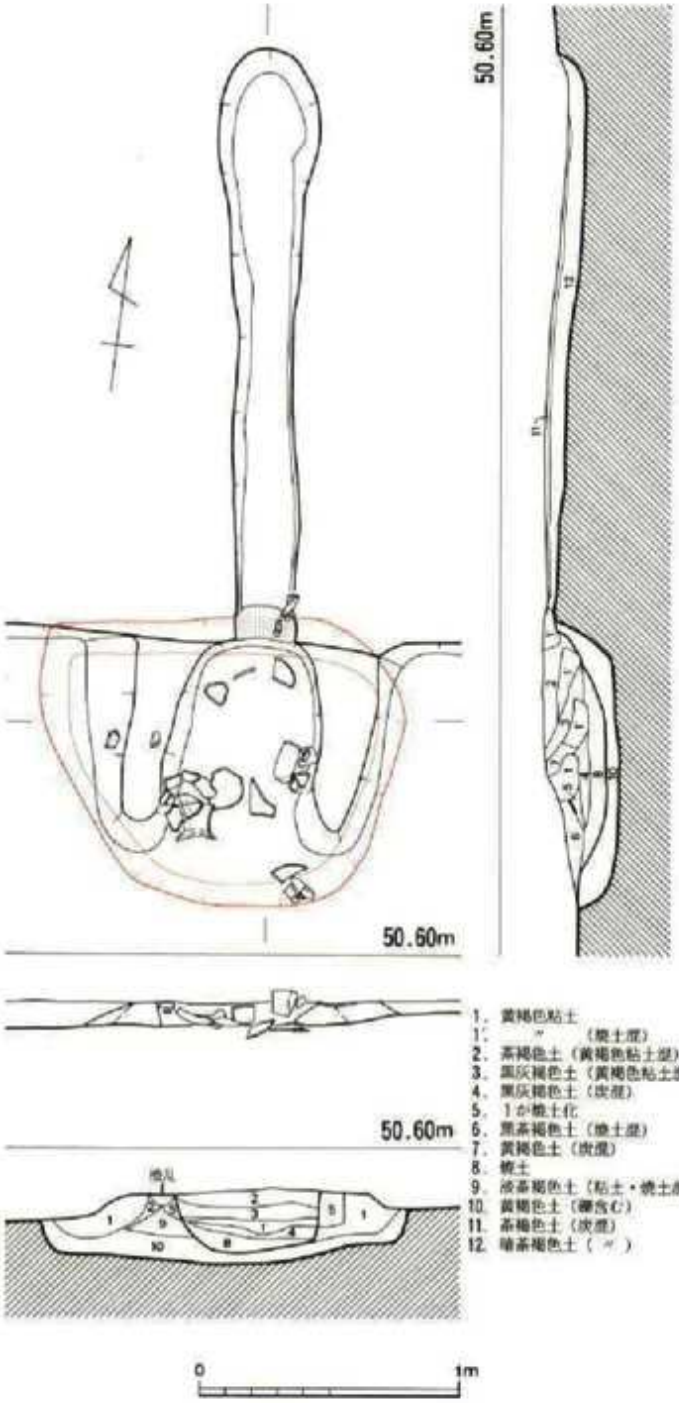
47号住居跡（図版25－3，第102図）

調査区西端部で発見された竪穴住居跡で，46号住居跡の南側で重複し，46号住居跡に北東部を切られる。主軸方向をほぼ南北に向ける不整方形プランの住居跡で，南北方向3.8m前後，東西方向3.5～3.6m，深さ0.2m前後の規模に残る。カマドはみられないが，あったとすれば

失われた北側壁の中央部であったかもしれない。床面は標高49.5m前後で，中央部は堅緻だが，周囲はやや柔らかい。床面を掘り込むピットのうちp5～8が主柱穴と推定されるが，柱穴は直径15～25cm，深さ10～20cm程の規模で，柱間距離は1.4～1.6mと1.9mを測る。



第104図　48号住居跡実測図（1／60）



第105図　48号住居跡カマド実測図（1/30）

出土遺物（第101図）

土　器（第101図）

土師器杯（430・431）　430は径を復原できないので，椀の可能性もある。口縁部が内彎して立ち上がり，底部側はヘラ削りされる。431は口縁部を失い器形がはっきりしないが，平らな底をもつ。いずれも胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒を含み，淡橙色・淡茶褐色に焼成されている。

これらの小破片のみでは時期を特定し難いが，8世紀前後であろうか。

48号住居跡

（図版26－1，第104図，旧7住）

調査区中央部で発見された竪穴住居跡で，北側に44号住居跡，西側に26・27号住居跡が位置する。主軸方向をN7°30′Wの方向にとり，北側壁中央にカマドが設置される不整方形プランの住居跡である。南北5.6～5.8m，東西5.4～5.6m，深さ0.1m強の規模で，カマドは2.0m余りの煙道を伴う。中央部の床面は堅緻で，周辺部はそれほど堅緻ではない。標高50.4m前後の床面を掘り込むピットのうちp1～4が主柱穴と推定される。柱穴は直径40～70cm，深さ15～45cmの規模であり，柱間は2.5～2.7mを測る。（小池）

カマド（図版26－2，第105図）

下部掘り込みを有するⅠａ類で，北壁中央に付設する。下部掘り込みは長さ140cm×幅110cmの長方形で，住居壁に沿って掘り込んでいた。右袖は長さ81cm，基底部幅30cm，残高6cmで，左袖は長さ83cm，基底部幅40cm，残高8cmを測る。焚口幅は52cmで，壁体内には土師器甕片と石がみられたが，支脚については不明。煙道は削平されているものの220cmと非常に長いものである。煙出しのピットは掘り込まれていないが，煙道の先端部に向かって傾斜しており，雨水の流入を考慮した作りとなっている。（小田）

出土遺物（図版38・39，第106図）

土　器（第106図）

須恵器甕（432）　復原口径21.5cmの大きさで，外反する口縁部は端部下に小さな台形状の凸帯を巡らす。頸部下の内面には同心円当て具痕が付く。堅緻な焼成で紫灰色を呈している。

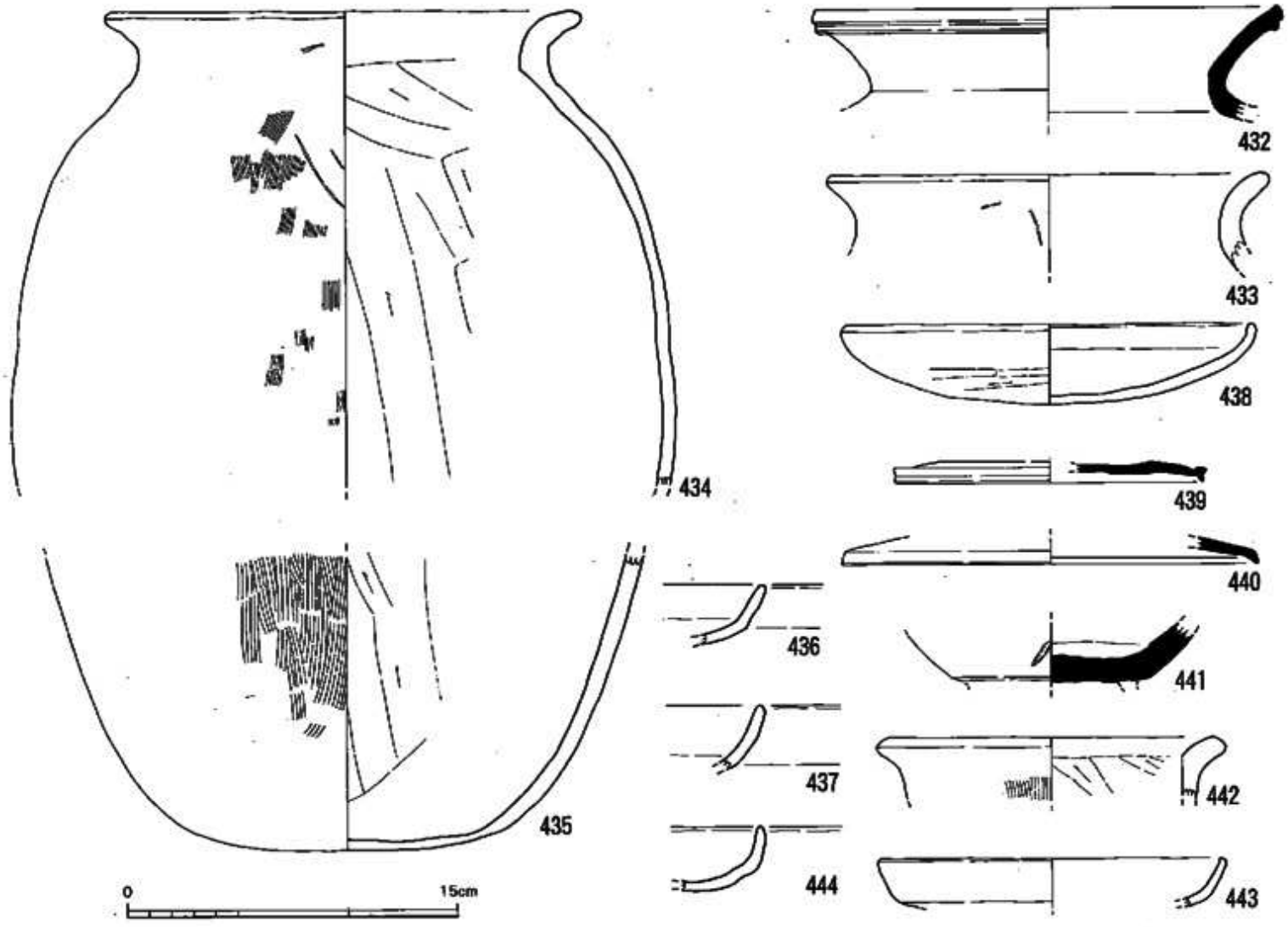
土師器甕（433～435）　433はあまり肥厚しないで外反する口縁部破片で，頸部外面に板状工具の小口圧痕が残る。胎土に砂粒・雲母を含み褐色に焼成されている。434は復原口径21.8cm，胴最大径30.3cm，残存器高21.5cmの大きさで，口縁部は肥厚して強めに外反し，胴部は膨らむ。胴部外面はハケ目，内面はヘラ削り調整される。胎土に砂粒・雲母・赤褐色粒などを含み，淡茶褐色ないし淡褐色に焼成されている。435はやや平らな丸底の底部破片で，底部は内外とも磨滅するが，外面はハケ目，内面はヘラ削り調整される。胎土に砂粒・雲母・石英を含み，淡茶褐色に焼成されている。

土師器杯（436～438）　436・437は口縁部破片で，外面の底部と口縁部の境に稜をもつが，436は段状をなし，底部側はヘラ削りされる。438は復原口径19.0cm，器高3.6cmの大きさで，内彎する口縁部とやや平らに彎曲する底部をもつ。ヨコナデないしナデ調整されるが，外底面はヘラ削りされる。いずれも胎土に砂粒・雲母・赤褐色粒を含み，淡褐色・橙色に焼成されている。

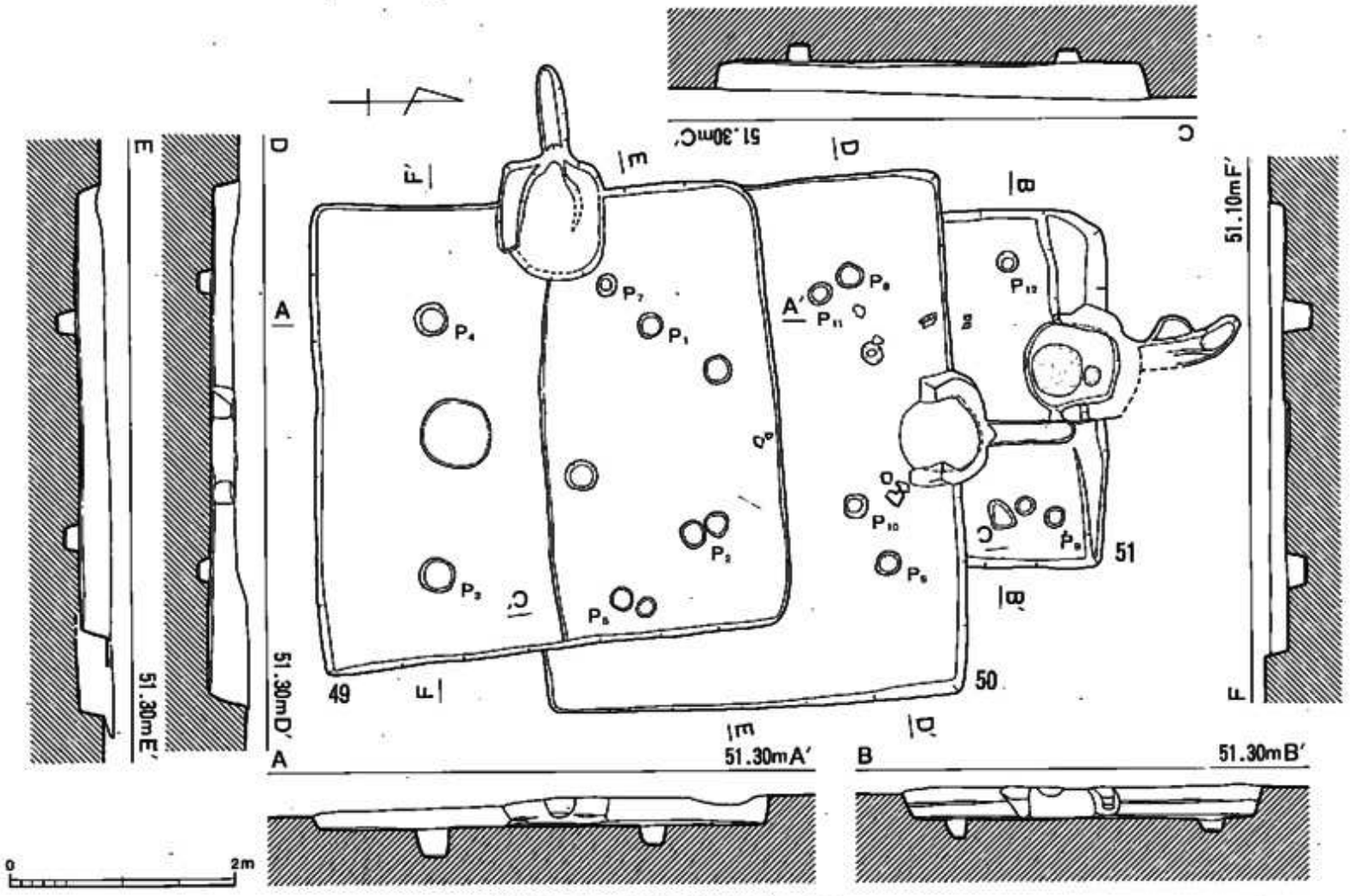
出土土器では，須恵器甕や土師器甕・杯などの特徴からみて，7世紀後半から8世紀初頭前後であろうか。

49号住居跡（図版27－2，第107図，旧53住）

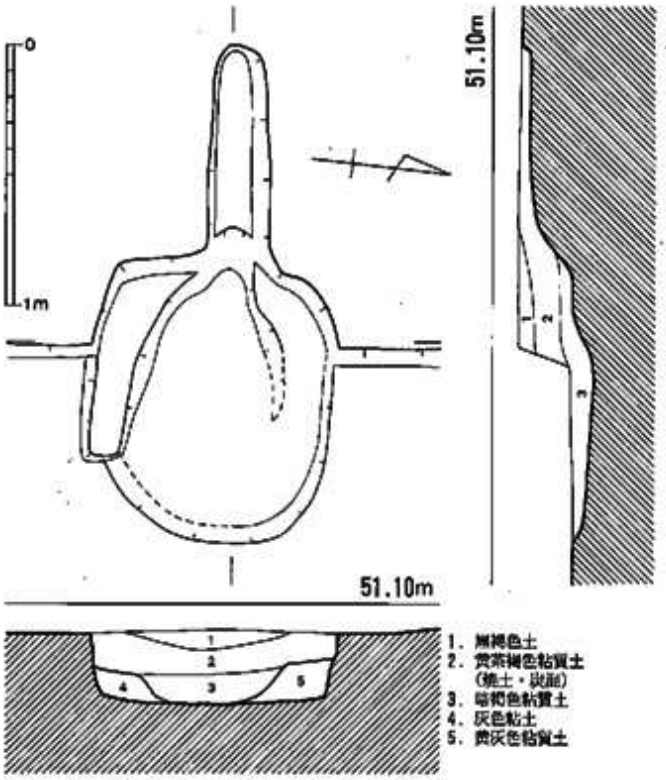
調査区東南部に発見された竪穴住居跡で，50号住居跡の南側に重複して50号住居跡を切る。主軸方向をN87°Eに向けるほぼ方形プランの住居跡で，東西方向・南北方向とも4.0～4.2m，深さ0.2m前後の規模に残る。カマドは西側壁のほぼ中央に施設されている。床面は標高50.8m前後で，中央部は堅緻だが，周囲はやや柔らかい。床面を掘り込むピットのうちp1～4が主柱穴と推定されるが，北東側の柱穴がやや外側に位置する。これらの柱穴は，直径20～35cm，深さ15～25cm程の規模で，柱間距離は1.9～2.2mを測る。（小池）



第106図　48・49号住居跡出土土器実測図（1/3）



第107図　49～51号住居跡実測図(1 / 60)



第108図　49号住居跡カマド実測図（1/30）

カマド

（図版27－3，第108図）

火床面が床面より一段下がるⅡb類で，西壁中央に付設する。掘り方は長方形を呈し，幅95cm，奥行き35cmを測る。左袖は残存長72cm，基底部幅25cm，残高5cmを測る。右袖は検出ミスのため遺存しない。煙道は先端ピットを有しないもので，長さ80cm，幅25cm，深さ5cmを測る。底面は奥壁側に若干傾斜している。支脚については不明。（小田）

出土遺物

（図版47，第62・106図）

土　器（第106図）

須恵器杯蓋（439・440）　身受けのかえりが鳥嘴状をなす杯蓋である。439は復原口径14.2cmの大きさで，端部のかえりは鋭いが低く，外天井につまみの付いていた痕跡がある。青灰色に堅く焼成されている。440は復原口径が18.9cmになる口縁部破片で，端部は緩やかにかえる。焼成はあまく，灰白色を呈している。

須恵器台付壷？（441）　脚台部の剥落した底部破片で内外面は回転ナデとナデで調整される。器壁の厚みからして壷などの底部であろう。堅めの焼成で青灰色を呈する。

土師器壷（442）　復原口径16.0cmの大きさの小型甕で，如意状に外反する口縁部は肥厚しない。胴部は膨らまず，外面をハケ目，内面をヘラ削りで調整される。胎土に細砂粒・雲母を含み，茶褐色に焼成されている。

土師器杯（443・444）　443は内彎気味に口縁部が開く杯で，復原口径15.9cm，残存器高2.2cmの大きさ。器面が磨滅して調整手法は不明。444は口縁部が内彎気味に立ち上がり，口縁部と底部の境に僅かな稜がある。ヨコナデないしナデ調整されるが，外底部は磨滅して分からない。いずれも細砂粒・赤褐色粒などを胎土に含み，淡赤褐色ないし明褐色に焼成されている。

鉄製品（第62図）

用途不明鉄製品（14）　幅0.6～0.8cm，厚さ0.3cmの板をコ字形に曲げて，曲がった側の中央

部に丸く輪を設けている。コ字形の長さは7.7cm，幅2.5cmで，輪の外径は1.0cm，孔径は0.3cmを測る。先端がやや尖り，ピンセットのような形状を呈するが，用途は不明。木質などの付着はみられない。

出土土器では，須恵器杯蓋や土師器甕・杯などの特徴からみて，8世紀前半以降の時期を考えておきたい。

50号住居跡（図版28－1，第107図，旧54住）

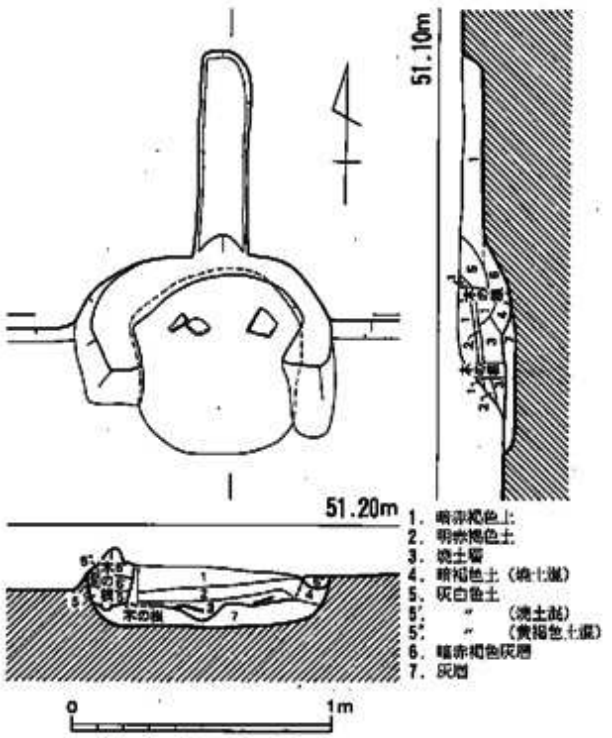
調査区東南部に発見された竪穴住居跡。49号住居跡の北側に重複して49号住居跡に切られるが，一方では北側に重複する51号住居跡を削っている。主軸方向をN87°Eに向け，東西方向に長い長方形プランの住居跡で，東西方向4.7m，南北方向3.8m，深さ0.2～0.3mの規模に残る。煙道をもったカマドは北側壁のほぼ中央に施設されている。床面は標高50.8m前後で，中央部は堅緻だが，周囲はやや柔らかい。床面を掘り込むピットのうちp5～8が主柱穴と推定されるが，南側の柱穴がやや外側に開いて位置する。これらの柱穴は，直径約20cm，深さ10～15cm程の規模で，柱間距離は2.2～2.8mを測る。（小池）

カマド（図版28－2，第109図）

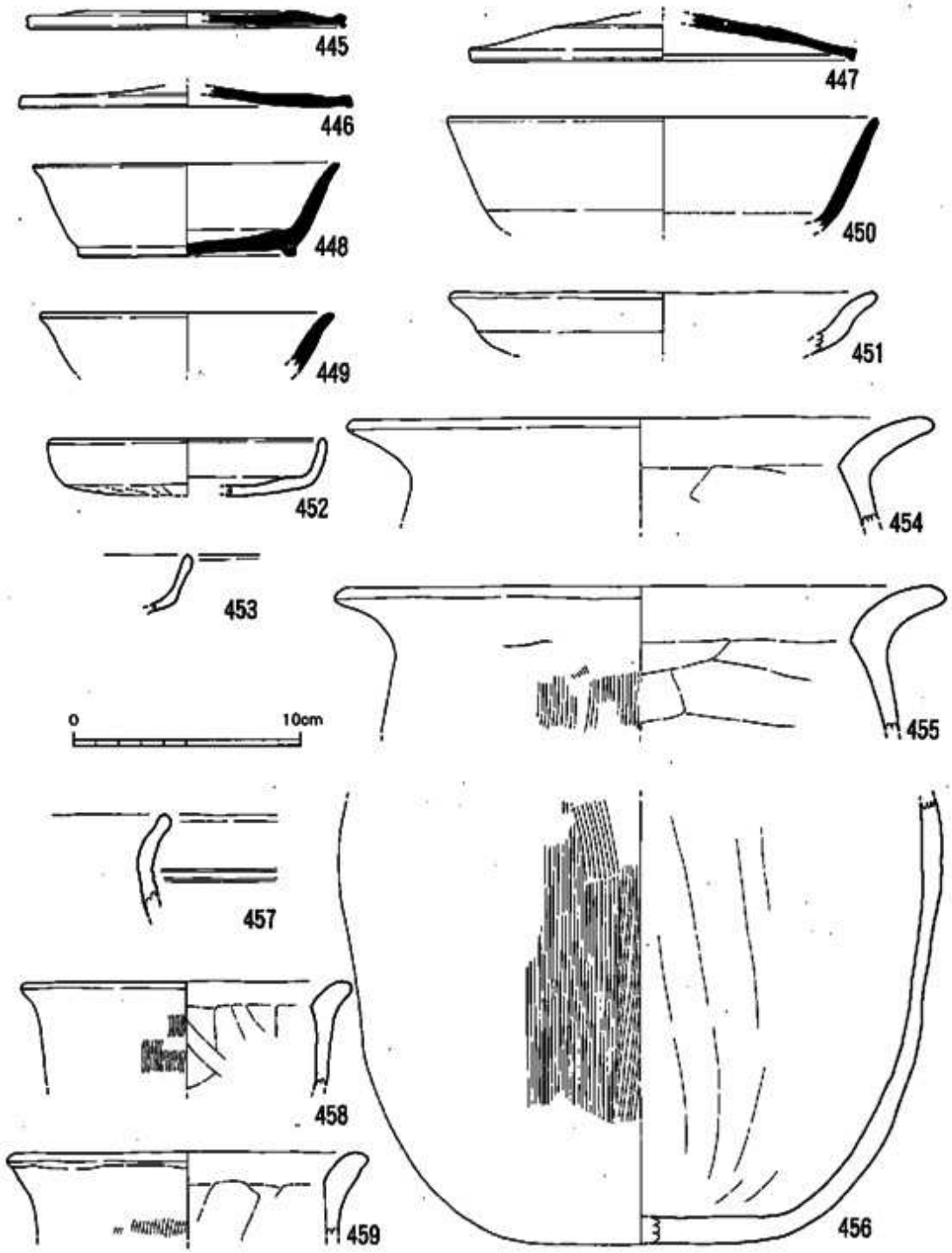
下部掘り込みを有するⅡa類で，北壁中央に付設する。下部掘り込みは平面図には図示されていないが，90cm×80cm程度の円形を呈するか。他のカマド同様，掘り込みを一旦埋めた後，灰色粘土を壁面全体に貼付し，壁体・袖部を築いている。右袖は残存長45cm，基底部幅14cm，残高15cmで，左袖は残存長32cm，基底部幅21cm，残高17cmを測る。煙道は先端ピットを有しないもので，長さ78cm，幅19cm，深さ8cmを測り，底面は奥壁側に若干傾斜している。支脚については不明。（小田）

出土遺物（図版39・47，第61・110・111図）

土　器（第110・111図）

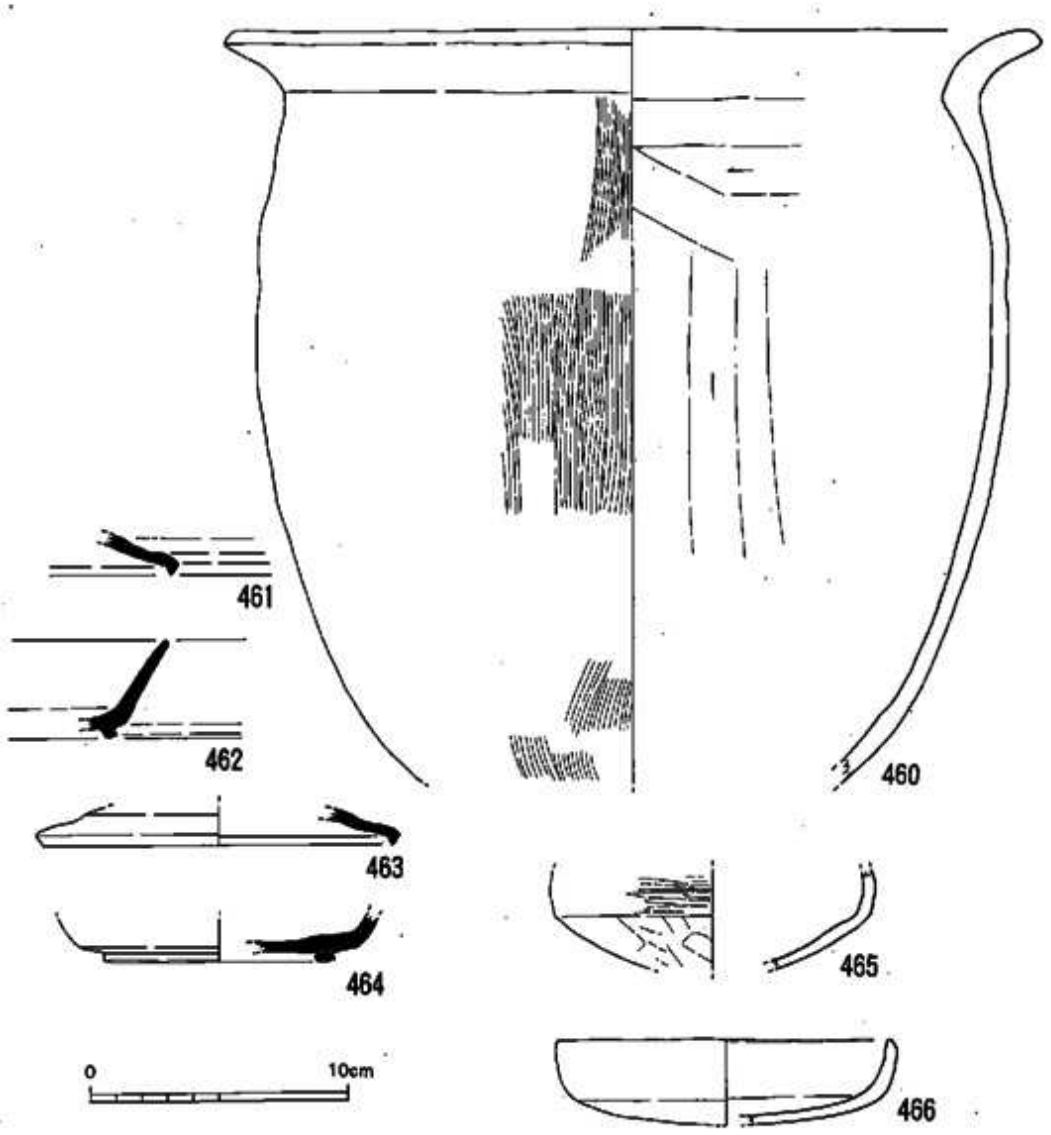


第109図　50号住居跡カマド実測図（1／30）



第110図　50号住居跡出土土器実測図1（1/3）

須恵器杯蓋（445～447） 身受けのかえりが鳥嘴状をなす杯蓋である。445は復原口径14.0cmの大きさで，端部のかえりは鋭いが低く，外天井につまみの付いていた可能性が高い。青灰色に堅く焼成されている。446は復原口径が14.7cmになる口縁部破片で，端部のかえりは鈍い。447は復原口径が17.1cmになる口縁部破片で，端部のかえりはやや鋭いが低い。外天井は回転ヘラ削りされ，つまみがついていたものとおもわれる。446・447ともに，堅く焼成されて，淡灰色を呈している。



第111図 50・51号住居跡出土土器実測図（1／3）

須恵器杯身（448～450） 448は口径13.6cm，器高4.1cmの大きさで，底部端に高台が付く。口縁部は緩やかに外反する。449も口縁部は緩やかに外反するが，器壁は448に比して厚い。両者とも堅く焼成されて，淡青灰色を呈する。450は復原口径19.0cm，残存器高5.0cmの大きさで，口縁部は緩やかに外反する。堅めに焼成され，灰色を呈している。

土師器杯（451～453） 451は底部と口縁部の境に稜をもつが，口縁部が反りながら開いて，高杯の杯部のような形状で，復原口径は18.0cm。器壁はやや厚い。452は復原口径12.4cm，器高2.5cmの大きさで，外面をヘラ削りされる底部は平坦。口縁部は内彎気味に立ち上がる。453は口縁部と底部の境が段状になる杯で，外底部はナデられる。いずれも細砂粒・雲母を胎土に含み，橙褐色ないし明褐色に焼成されている。

土師器甕（454～460） 454・455・460はやや肥厚した口縁部が強めに外反する甕で，460の例などからみて，胴部は少し膨らむが口径を上回らない。胴部外面はハケ目調整，内面は頸部までヘラ削りされる。復原口径は25.8cm・27.0cm・31.4cmで，460の胴最大径は29.0cmである。いずれも胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒を含み，橙色ないし淡茶褐色に焼成されている。また，456はカマド内から出土した甕の底部破片で，平らな丸底を呈する。底部は風化して分からないが，胴部外面はハケ目，内面はヘラ削りされる。胴最大径26.6cmの大きさで，胎土に砂礫・雲母を含み，暗黄褐色に焼成されている。

458・459は復原口径14.6cm・16.0cmの大きさの小型甕で，口縁部は肥厚して，如意状に短く外反する。胴部は膨らまず，外面をハケ目，内面をヘラ削りで調整される。胎土に細砂粒・雲母を含み，茶褐色に焼成されている。また，457の口縁部は肥厚せずに緩く外反して，肩部に浅い沈線が付く。

鉄製品（第62図）

刀　子（15） 先端部を失うが，残存長18.1cm，関部幅1.5cm，厚さ0.3cm，茎部は長さ8.0cm，幅0.6～0.9cm，厚さ0.3cmの大きさ。刃部はやや内に反る。

出土土器では，須恵器杯蓋・杯身や土師器甕・杯などの特徴からみて，8世紀前半頃の時期を考えておきたい。

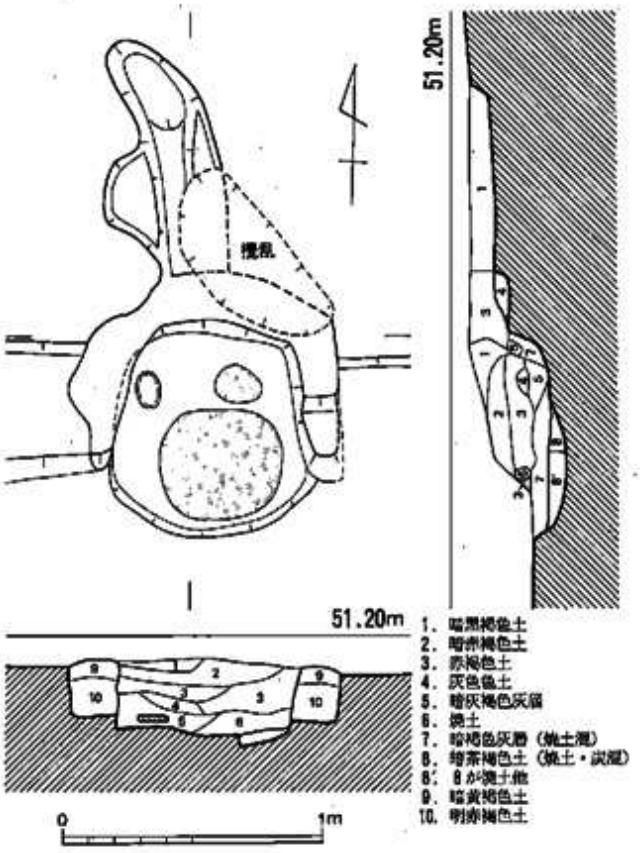
51号住居跡（図版28－1，第107図，旧55住）

調査区東南部に発見された竪穴住居跡で，50号住居跡の北側に重複して50号住居跡に切られる。主軸方向をほぼ東西に向ける方形ないし長方形プランの住居跡で，東西方向3.2m，深さ0.25m前後の規模に残る。煙道を伴うカマドは北側壁のほぼ中央に施設されている。床面は標高50.9m前後で，床面はやや柔らかくて不明瞭である。床面を掘り込むピットのうちp9～12が主柱穴と推定されるが，軸線が約8°北西側に振れた配置に位置する。これらの柱穴は，直径約20cm，深さ10～20cm程の規模で，柱間距離は1.7～2.2mを測る。（小池）

カマド

（図版28－3，第112図）

火床面が床面より一段下がるⅢb類で，北壁中央に付設する。壁体は隅丸方形を呈し，幅63cm，奥行き52cmを測る。壁体は掘り方底面から赤褐色土・黄褐色土を盛っていた。火床面は二ヶ所にみられ，大きい方は47cm×42cmの円形に良く焼けていた。煙道は長さ117cm，幅27cm，深さ9cmを測る。先端が左側に曲がっており，先端部底面はやや窪んでいる。（小田）



第112図　51号住居跡カマド実測図（1／30）

出土遺物（第111図）

土　器（第111図）

須恵器杯蓋（461・463）　身受けのかえりが鳥嘴状をなす杯蓋で，端部のかえりは鋭い。463は復原口径14.0cmの大きさである。両者とも淡灰色に堅く焼成されている。

須恵器杯身（462・464）　462は高台が外に開いて付き，口縁部は直線的に開く。堅い焼成で暗灰色を呈している。464は逆台形の高台が付き，復原高台径9.0cmの大きさ。焼成があまく色調は淡灰色。

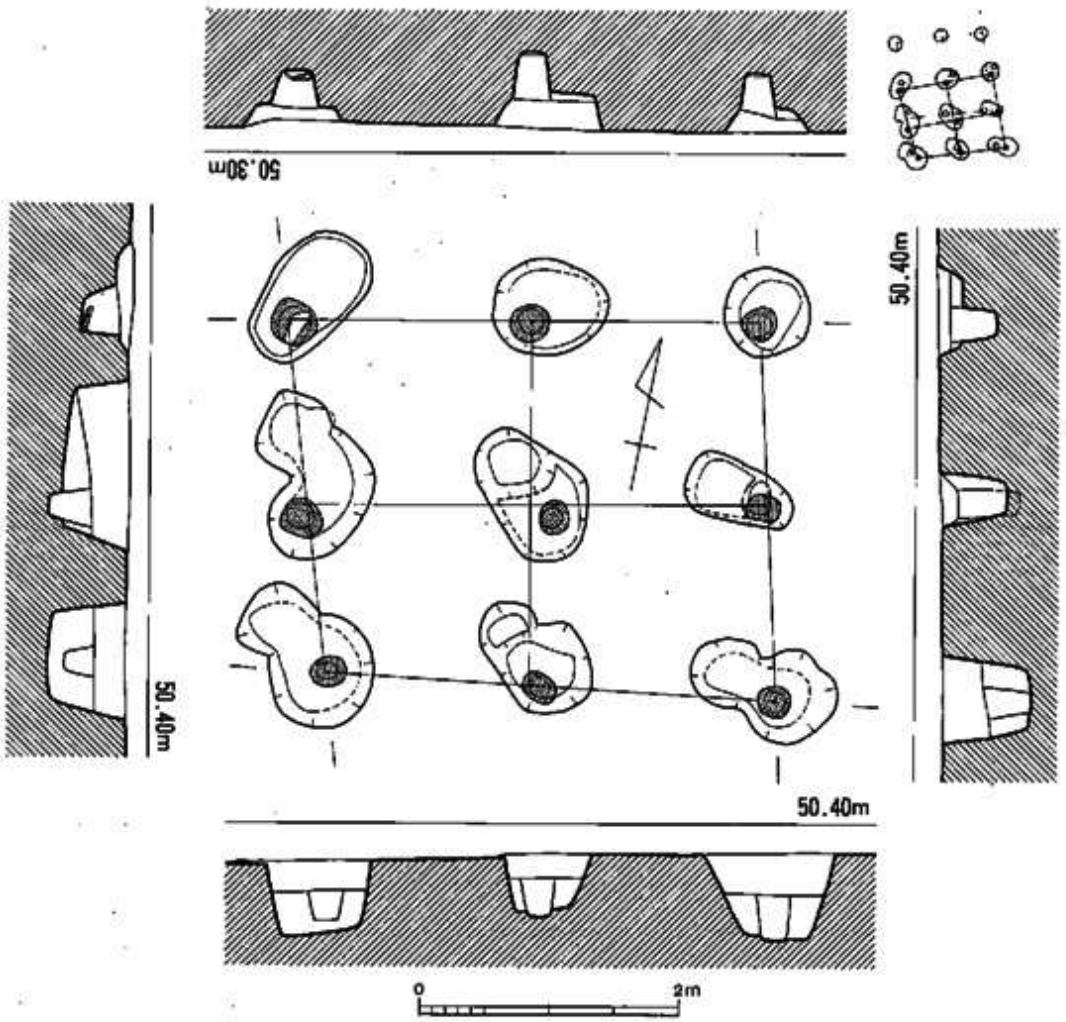
土師器杯（465・466）　ともに底部と口縁部の境に稜をもつが，465の底部が深いのに比して，466は浅く，復原口径13.2cm，器高3.3cmの大きさで，外底面は風化している。465は口縁部を欠くが復原外径12.6cmで，外底部はヘラ削りされるが，口縁部側はヘラ磨きされる。いずれも細砂粒・雲母を胎土に含み，淡茶褐色ないし明褐色に焼成されている。

出土土器では，須恵器杯蓋・杯身や土師器杯などの特徴からみて，7世紀後半頃の時期を考えておきたい。

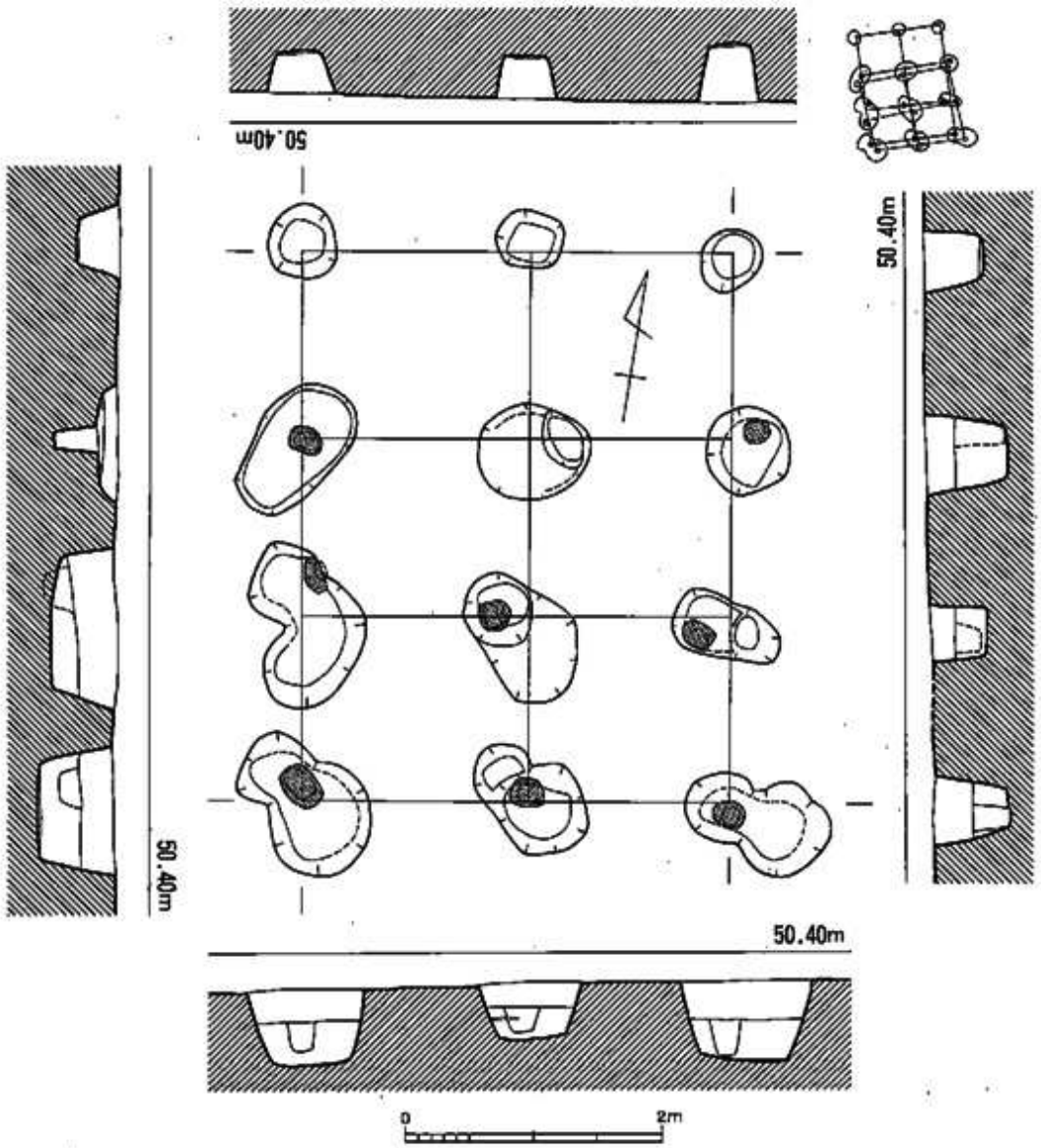
2．掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（図版29－1，第113図）

C地区調査区の北西部で，1号住居跡の西側に位置する建物跡。2号建物跡と重複して，共有する柱穴がみられるが，2号より先行する。主軸方向N79°E前後の東西棟で，桁行3.60m，柱間2.86mの規模の2×2間建物である。柱穴は直径40cm～90cm，深さ40cm～70cmの規模で，方形プランの例はない。柱穴内に暗茶褐色土が埋められるが，黒っぽい色調の柱痕が確認できた。柱痕はいずれも直径20cm程の大きさである。北西隅の柱穴には扁平石が敷かれている。



第113図　1号建物跡実測図（1/60）



第114図　2号建物跡実測図（1/60）

2号掘立柱建物跡（図版29－1，第114図）

1号建物跡と重複して後出するが，主軸方向N9°W程の南北棟で，桁行4.33m，柱間3.36mの規模の2×3間建物である。柱穴は直径40cm～90cm，深さ40cm～70cmの規模だが，直径40～50cm規模の例が多く，全て円形ないしは不整円形プランである。柱穴内に暗茶褐色土が埋めら

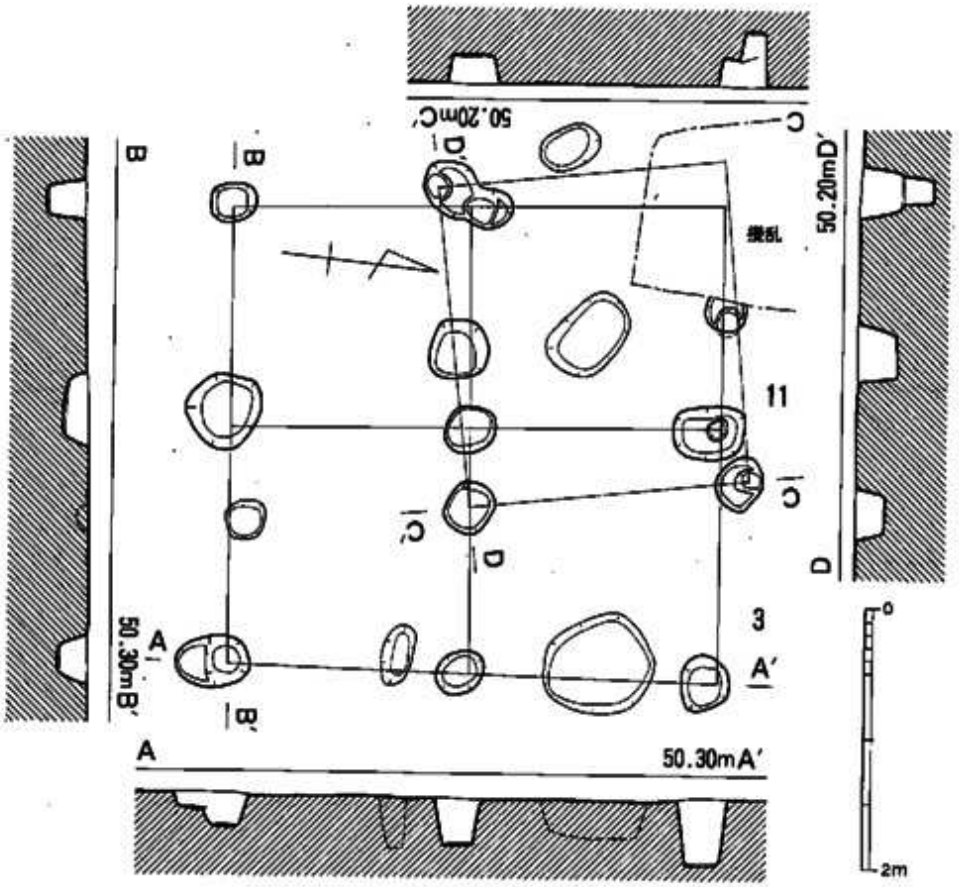
れ，黒っぽい色調の柱痕がいくつか確認できたが，柱痕は直径20cm弱と1号建物の柱痕より細めである。

出土遺物（第194図）

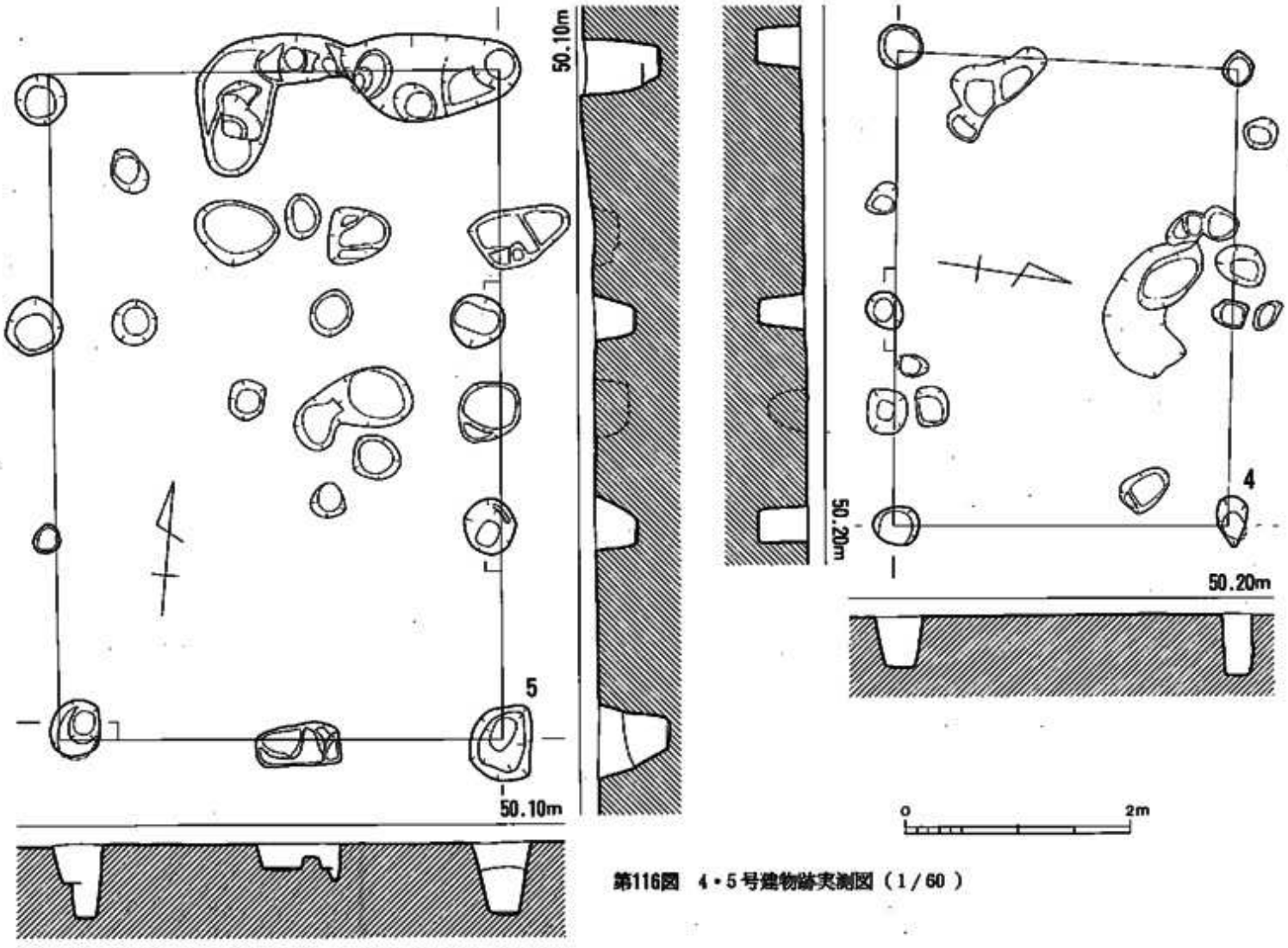
須恵器短頸壺（53） 口縁部が直に立ち上がり，胴は丸く膨らむ。内外面ともに回転ナデ調整され，砂粒を若干含む胎土で暗灰色に堅く焼成されている。1号・2号の区別をしえないが，柱穴掘り方から出土した。

3号掘立柱建物跡（第115図）

1号・2号建物跡の南西側に位置していて，11号建物跡と一部重複するが，11号建物より後出する。北西隅の柱穴を失うが，主軸方向N5°W前後の南北棟で，桁行3.76m，柱間3.60mの規模の2×2間建物である。柱穴は直径30cm～50cm，深さ20cm～50cmの規模だが，直径40cm以下が多く，全て円形ないしは不整円形プランである。柱穴内に暗茶褐色土が埋められるもの



第115図 3・11号建物跡実測図（1/60）



第116図　4・5号建物跡実測図（1/60）

の，柱痕は確認できず，遺物の出土もみられなかった。

4号掘立柱建物跡（第116図）

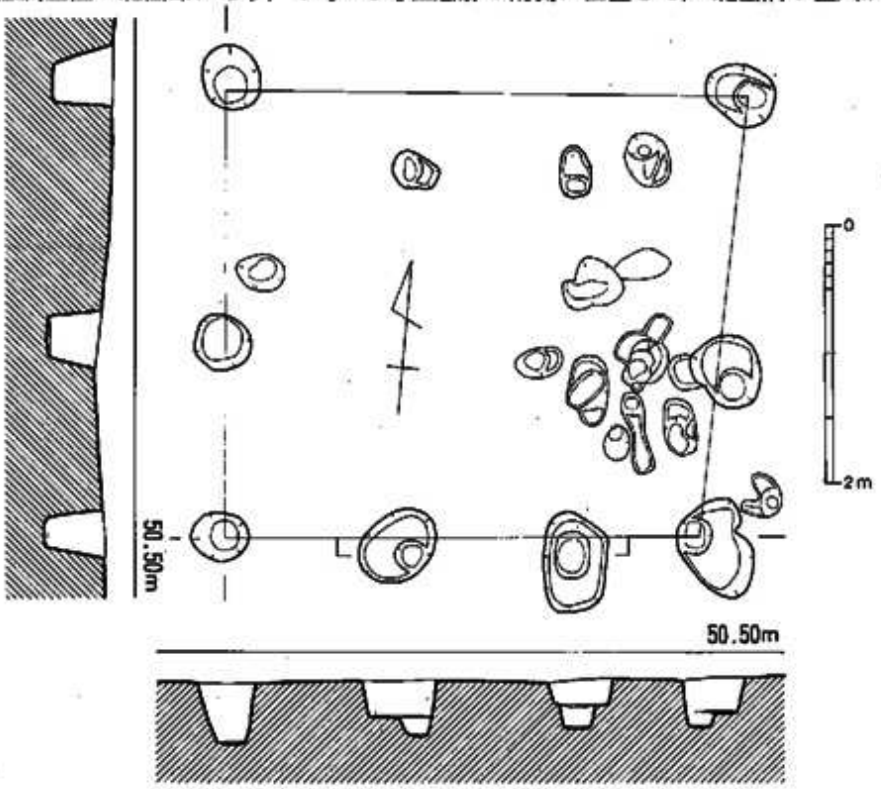
C地区調査区の西部にあり，3号建物跡の南側に位置する。主軸方向N82°E前後の東西棟で，桁行4.30m前後，柱間3.00m前後の規模の1×2間建物である。柱穴は直径20cm～40cm，深さ40cm～55cmの規模で，全て不整円形プランだが，暗茶褐色土が堆積するだけで柱痕は確認できない。また遺物の出土もみられなかった。

5号掘立柱建物跡（第116図）

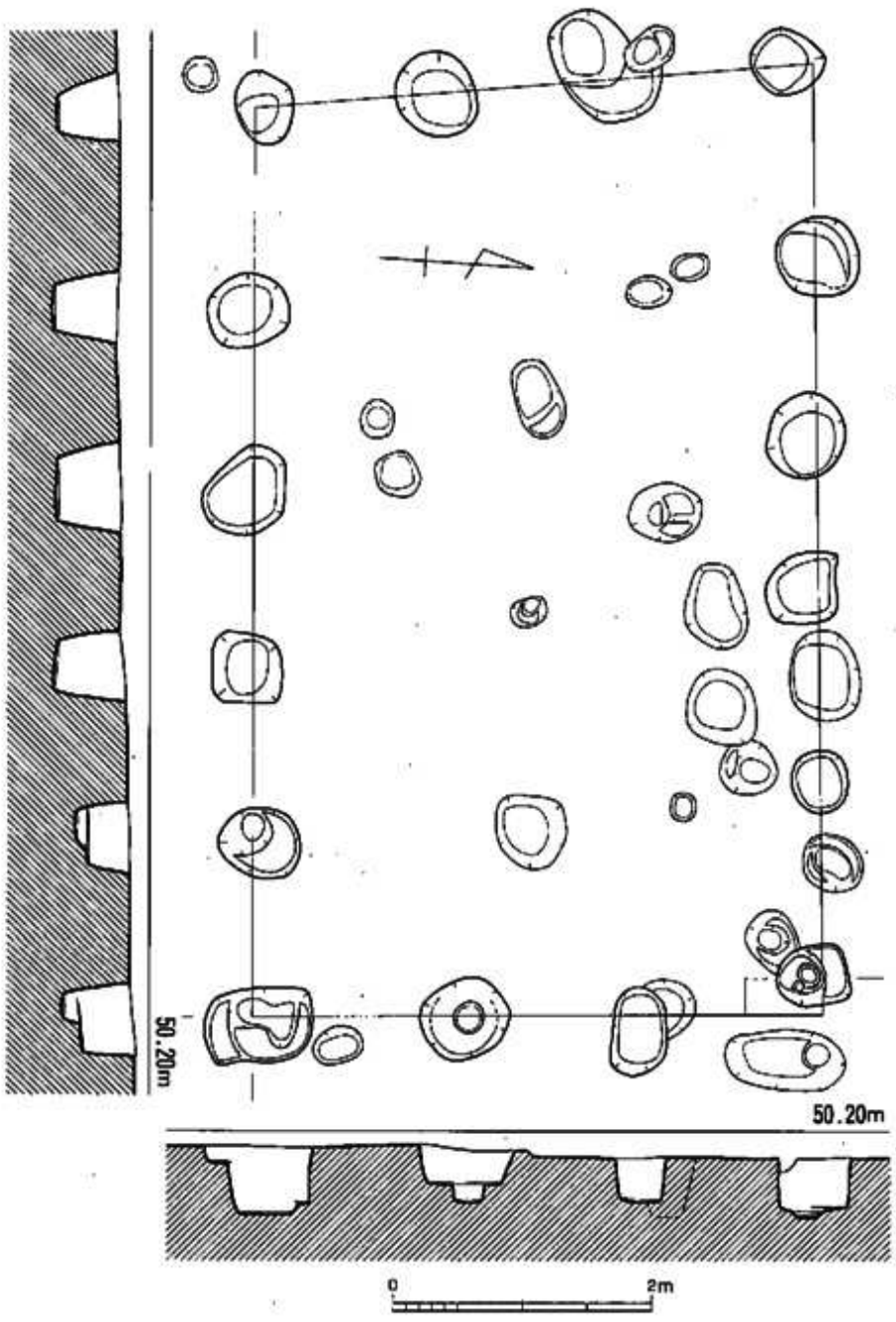
C地区調査区の西部にあり，4号建物跡の南側に位置する。主軸方向N5°W前後の南北棟で，桁行6.00m前後，柱間4.00m前後の規模の2×3間建物である。柱穴は直径20cm～60cm，深さ20cm～70cmの規模で，全て不整円形プランだが，暗茶褐色土が堆積するだけで柱痕は確認できない。土師器片などの遺物が若干出土したが図示しうる例はない。

6号掘立柱建物跡（第117図）

C地区調査区の北西部にあり，3号・4号住居跡の南側に位置して，北西隅の柱穴が3号住



第117図　6号建物跡実測図（1/60）



第118号　7号建物跡実測図（1／60）

居跡南壁と重複し，住居跡より後出するが，西側の重複部分で柱穴は検出されない。主軸方向N85°E前後の東西棟で，桁行4.00m前後，柱間3.50m前後の規模の2×3間建物である。北側の柱列は一直線に並ばず中の2ヶ所は内側に並ぶ。柱穴は直径30cm～50cm，深さ35cm～45cmの規模で，全て不整円形プラン。暗茶褐色土が堆積するものの，柱痕はうまく確認できず，遺物は出土していない。東側に木根状にピットが集中していて，焼土もみられるが，カマドを構成するような状態ではない。

出土遺物（第149図）

土師器甕（54） あまり肥厚せずに外反する口縁部で，胴部はほとんど膨らまない。胴部外面はハケ目，内面はヘラ削りされる。胎土に砂粒・赤褐色粒を含み，淡褐色に焼成されている。

7号掘立柱建物跡（図版29－2，第118図）

C地区調査区の西部にあり，9～17号住居跡の南側，18～23号住居跡の北東側に位置し，16号・23号住居跡よりも後出する。主軸方向N85°E程の東西棟で，桁行7.10m前後，柱間4.30m前後の規模の3×5間建物である。北東隅の柱穴は東辺に一直線に並ばずに内側に入る。柱穴は直径40cm～70cm，深さ30cm～55cmの規模で，全て不整円形プラン。暗茶褐色土が堆積するものの，柱痕はうまく確認できない。

8号掘立柱建物跡（第119図）

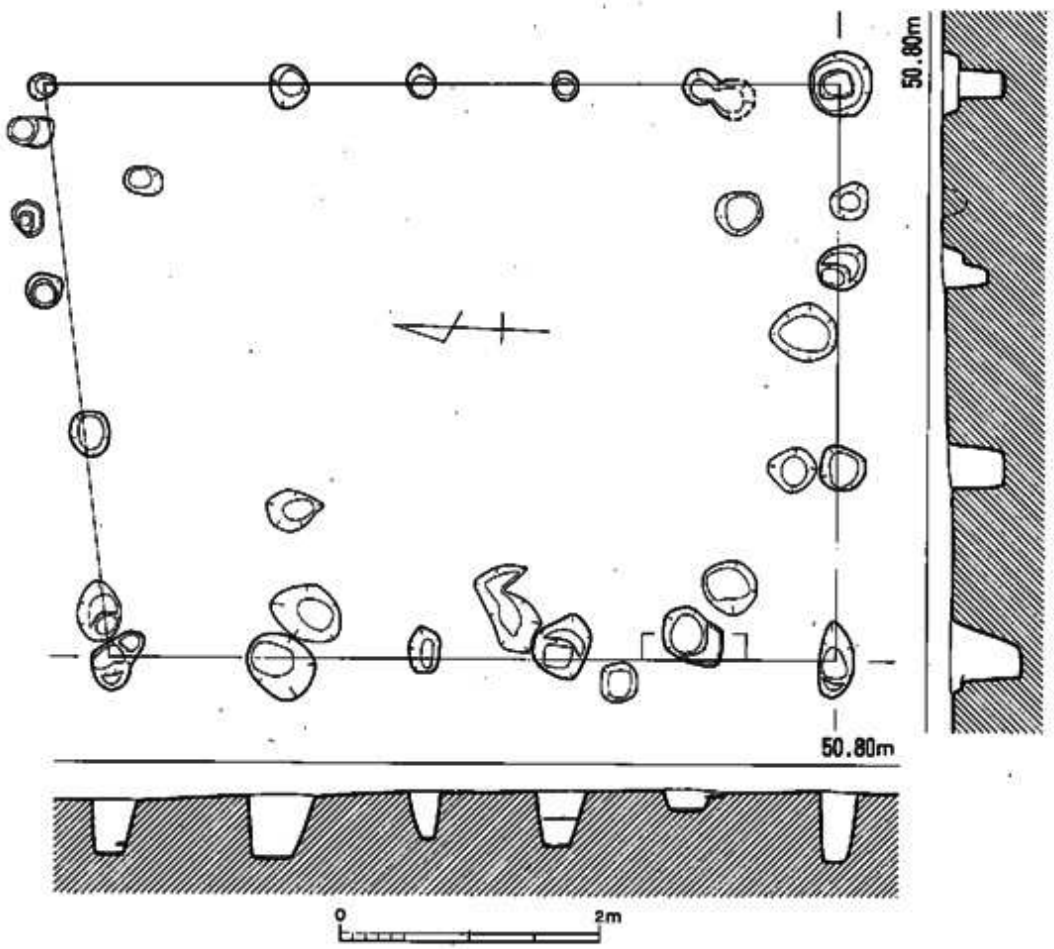
C地区調査区の北部にあり，6号住居跡と東側で，北西部で4号土壙墓と一部重複し，調査時には住居跡内堆積土や土壙内埋土と柱穴の区別ができず，住居跡・土壙の床面で柱穴を検出したので，住居跡・土壙よりも先行するとみている。主軸方向N 3°W前後の南北棟で，桁行5.60m～6.10m，柱間4.40m前後の規模の3×5間建物である。北辺が東で開く配置に並ぶ。柱穴は直径20cm～50cm，深さ20cm～55cmの規模で，全て不整円形プラン。暗茶褐色土が堆積し，柱痕はうまく確認できない。

出土遺物（第149図）

須恵器甕（55） 復原口径23.8cmの大きさの口縁部破片で，直線的に開いて端部は低い三角凸帯様に肥厚するが，内面側は僅かに凹む。細砂粒を含む胎土で，暗青灰色に焼成されている。

9号掘立柱建物跡（図版30－1・2，第120図）

C地区調査区の西部にあり，16号住居跡の東側，6号建物跡の南側に位置する。主軸方向N89°W前後の東西棟で，桁行7.00m前後，柱間4.10m前後の規模の3×4間建物である。西側から2番目の柱穴は北辺・南辺ともに，先行する柱穴が対峙する位置にあって建て替えの可能性もある。また，東辺の内側にほぼ並行する柱穴状ピットがみられ，間仕切の可能性が高い。

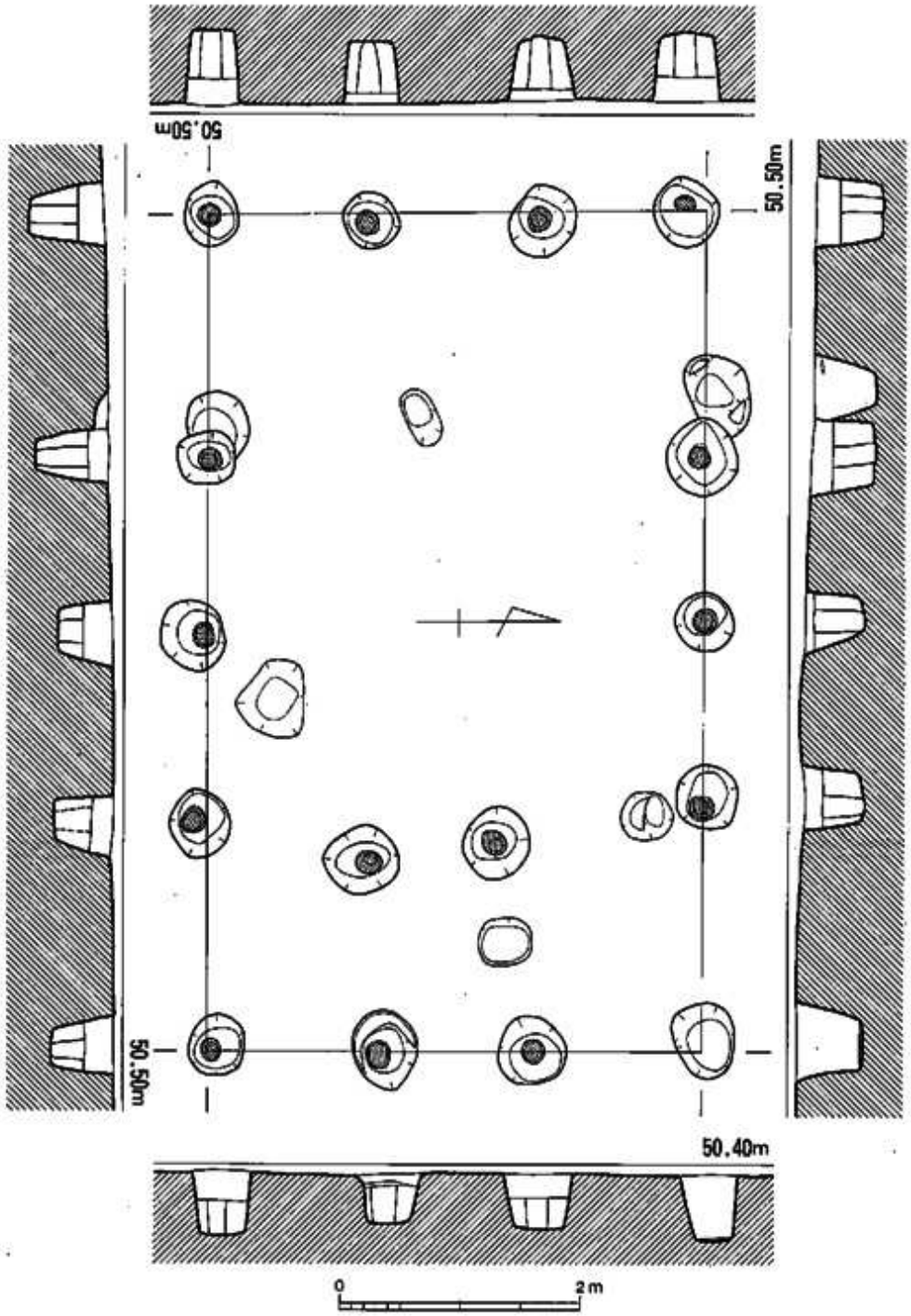


第119図　8号建物跡実測図（1/60）

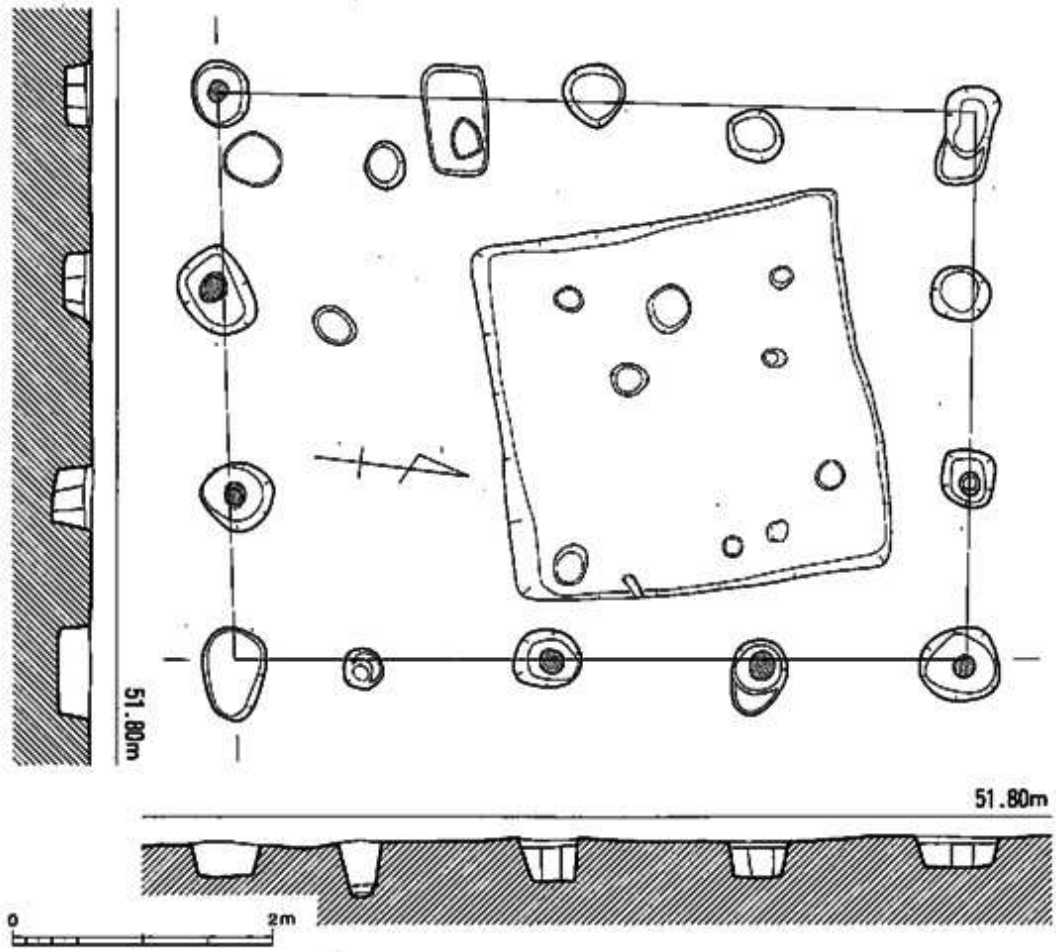
柱穴は直径45cm～60cm，深さ40cm～60cmの規模で，全て不整円形プラン。暗茶褐色土が堆積し，やや黒っぽい色調の柱痕が検出された。柱痕の直径は20cm前後である。

10号掘立柱建物跡（図版30－3，第121図）

C地区調査区の北部にあり，28号住居跡と重複する位置にある。主軸方向N7°E前後の南北棟で，桁行5.70m 前後，柱間4.40m 前後の規模の3×4間建物である。西側の辺は柱穴が一直線に並ばず，端から2番目の柱穴は内側に入る。柱穴は直径30cm～60cm，深さ20cm～40cmの規模で，全て不整円形プラン。暗茶褐色土が堆積し，やや黒っぽい色調の柱痕も検出された。柱痕の直径は20cm前後である。



第120図　9号建物跡実測図（1/60）

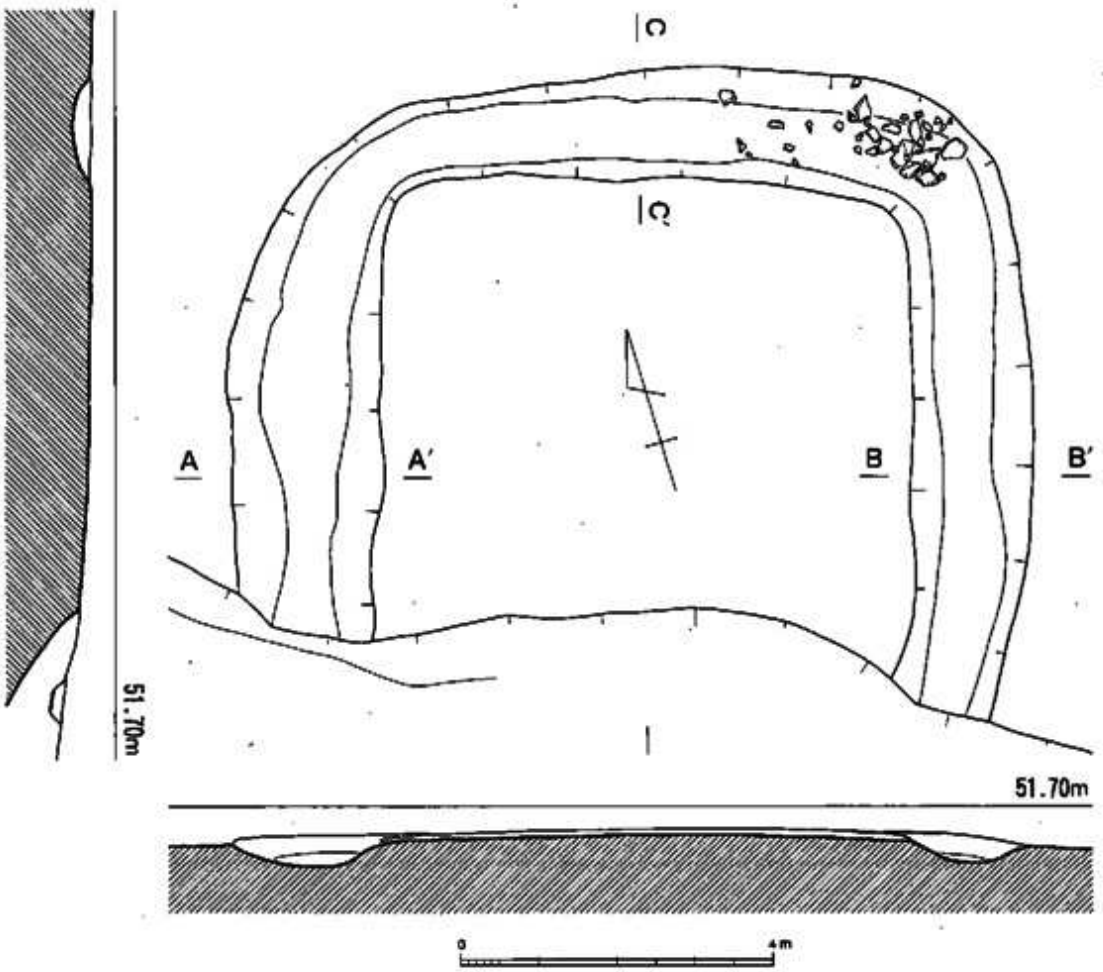


第121図　10号建物跡実測図（1／60）

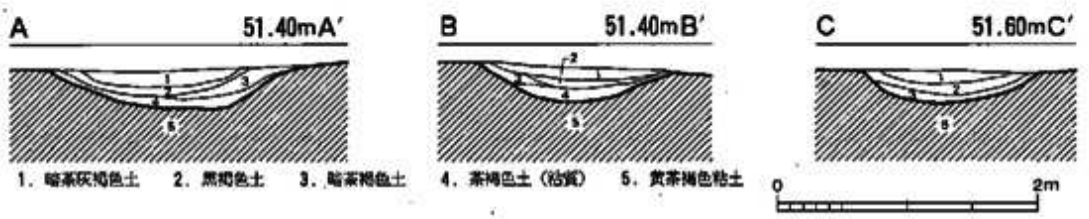
11号掘立柱建物跡（第115図）

1号・2号建物跡の南西側に位置していて，3号建物跡と一部重複するが，3号建物より先行する。北西隅の柱穴を失うが，主軸方向N78°E前後の東西棟で，桁行2.50m，柱間2.16mの規模の1×2間建物である。柱穴は直径30cm～45cm，深さ20cm～55cmの規模だが，全て円形ないしは不整円形プランである。柱穴内に暗茶褐色土が埋められるが，柱痕は確認できず，遺物の出土もみられなかった。

3. 古 墳



第122図　1号墳墳丘・周溝実測図（1／100）



第123図　1号墳周溝断面実測図（1／60）

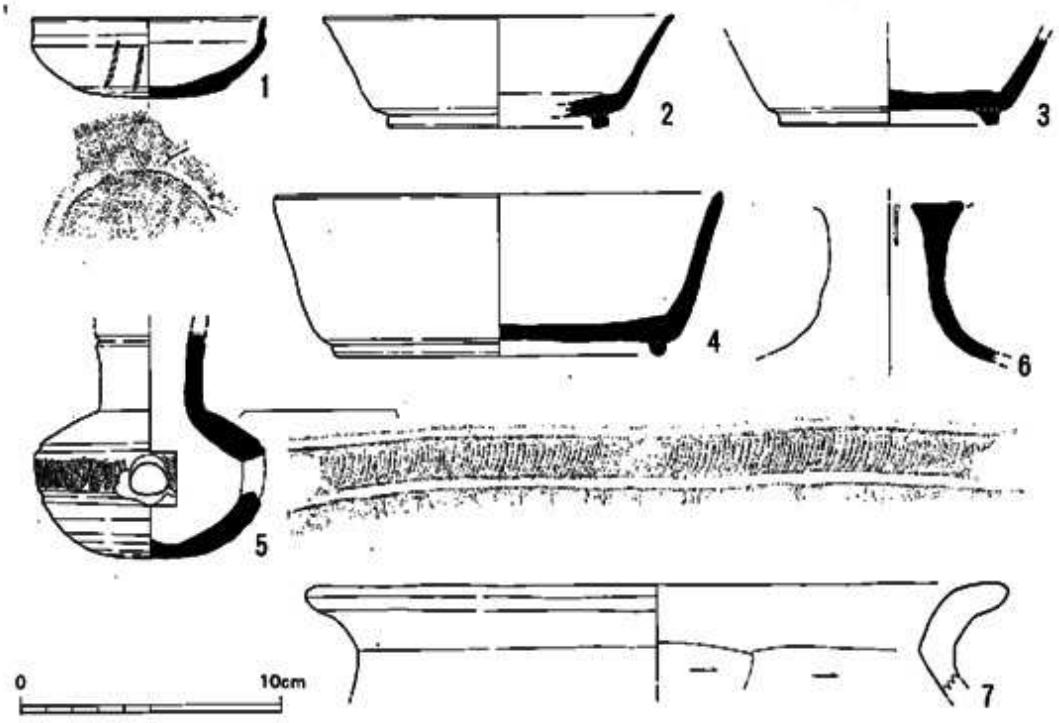
墳丘などを有する古墳は，1号墳の1基のみであった。

1号墳（図版31，第122・123図）

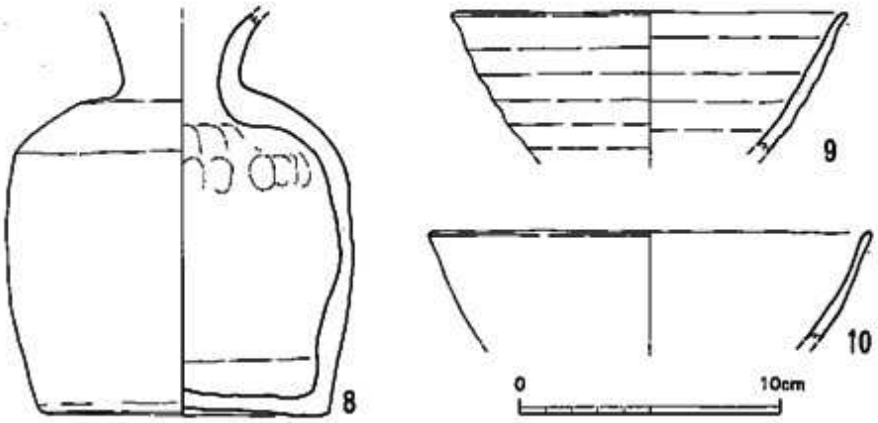
調査区の南東部にあり，南側は段落ちの崖で削られて残らない。上部も削平を受けて，隅丸方形に巡る周溝が残るものの，周溝に囲まれた部分に主体部は残らない。周溝の方向からみれば主軸方向はN16°Eかこれに直交する方向である。溝は上縁で1.0～2.0m幅，深さ0.2～0.3mで緩やかなU字形断面をなすが，周溝で区画される部分は外側で10.3m，内側で7.0mの規模である。溝内の堆積土は黒褐色土と暗茶褐色土で，堆積状況は墳丘側から流出した土が主に茶褐色っぽい色調であることを物語っている。また北東部には緑泥片岩角礫などがややまとまって堆積していた。遺物は周溝部分と南側の斜面下から出土した。

周溝出土土器（図版39，第124図）

須恵器杯（1） 復原口径9.1cm，器高3.0cmの大きさの杯で，口縁部は外側に僅かな段を介して外反する。外底部はヘラ切り離しの後にナデ，内底部は不定方向にナデられる。外底面から口縁部下の段にかけて2条の単沈線のヘラ記号が付されている。砂粒を若干胎土に含むが，淡灰色に堅く焼成されている。



第124図 1号墳出土土器実測図（1/3）



第125図　1号墳南方斜面出土土器実測図（1/3）

須恵器杯身（2～4）　いずれも高台を有する杯身で口縁部は僅かに外反する。2・3は外に踏ん張り気味の断面が角張った高台が付き器壁が薄めだが，4は丸みをもった高台が付き器壁は厚めで口縁部への立ち上がりにもやや丸みがある。2は底部，3は口縁部を失い，2は復原口径13.6cm，器高4.3cm，高台径8.6cmの大きさで，高台径8.4cmの3より僅かに大きい。胎土に若干の砂粒を含むが，灰色ないし黒灰色に堅く焼成されている。4は復原口径17.2cm，器高6.3cm，高台径11.9cmの大きさで，砂粒を胎土に若干含み，あまい焼成で，灰白色を呈している。

須恵器甕（5）　口縁部を失うが，残存器高8.9cmの内体部高が5.7cmを占め，最大径8.9cmの大きさ。体部はなで肩の扁球形で，頸部は細く成形されて，外底部は回転ヘラ削りされるが，胴部中位に円孔が外方から穿孔される。頸部と胴部に各2条の沈線が巡り，胴部沈線間に板小口の連続刺突文が施される。胎土に砂粒を若干含み，暗灰色に堅く焼成されている。

須恵器高杯（6）　中空の柱状部をもつ脚部破片で，杯部は剥がれて失い，外反りに開く脚裾部端も欠損する。胎土に砂粒を若干含み，淡緑灰色に堅く焼成されている。

土師器甕（7）　復原口径27.0cmの大きさの，口縁部が外反する甕で，胴部へは膨らむようである。胎土に砂粒・雲母を含み，堅めに焼成され，褐色を呈している。

南方斜面出土土器（図版39，第125図）

須恵質壷（8）　口縁部を欠くが，残存器高15.5cm，胴最大径13.3cm，底径11.2cmの大きさの壷で，細めの頸部から口縁部は外反する。肩は膨らみ，胴部下半は底部よりあまり膨らまない。器面はやや風化・磨滅するが，指圧痕の凹凸の残るナデで調整される。胎土に砂粒を含み，暗黄灰色に焼成されている。

土師器椀（9）　底部を欠くが，復原口径15.2cmの大きさの椀で，直線的に口縁部が開き外面には指先の凹みの残るヨコナデで調整される。胎土に細砂粒・赤褐色粒を含み，淡橙色に焼成されている。

内黒土器椀（10） 復原口径17.2cmの大きさの，口縁部が内彎気味に開く椀で，器面がやや風化する。胎土に細砂粒・赤褐色粒を含み，外面は淡橙色，内面は黒色を呈している。

鉄製品（図版47，第148図）

鉄　鏃（19） 篦被部の破片で，先端側の形状は細根鏃であろうと思われる他は不明である。幅0.6cm，厚さ0.4cmの大きさ，基部側は径0.4cmの太さで木質が残る。西側周溝から出土した。

出土土器では，須恵器甕などに6世紀後半ないし7世紀前半頃の様相をみれるが，須恵器杯身の高台からは7世紀後半と8世紀代にみることができる。主体部がなく，周溝内からの出土土器であり，周溝の埋没の最終段階を8世紀以降におくことはできよう。また，南側斜面では10世紀代の遺物も含まれる。

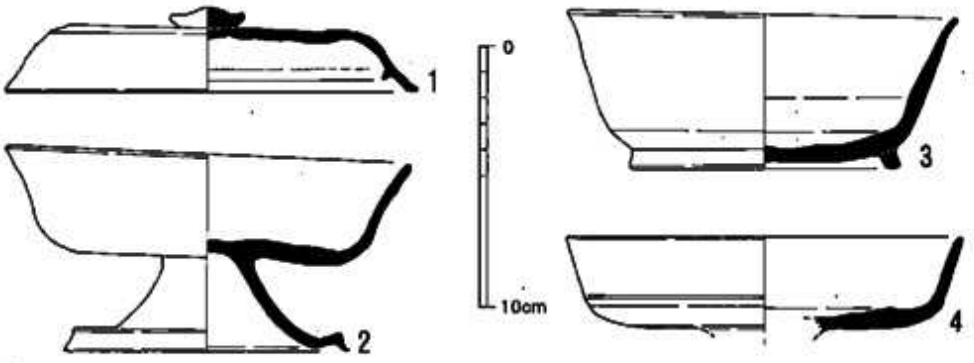
4．土壙墓

1号土壙墓（第127図）

C地区の北西部で，2号・3号・7号住居跡に囲まれた位置にある。主軸方向をN56°Eにとり，南西側を頭位にする土壙墓である。長方形に近いプランだが，南西側がやや広い。検出面での長さ168cm，幅46～59cm，深さ23～59cm，床面での長さ159cm，幅35～45cmを測る。南西側の床が僅かに高めで，隅に須恵器高杯1点が倒れて，杯蓋が裏返しに被った状態に出土し，他には特に遺物の出土はみられなかった。

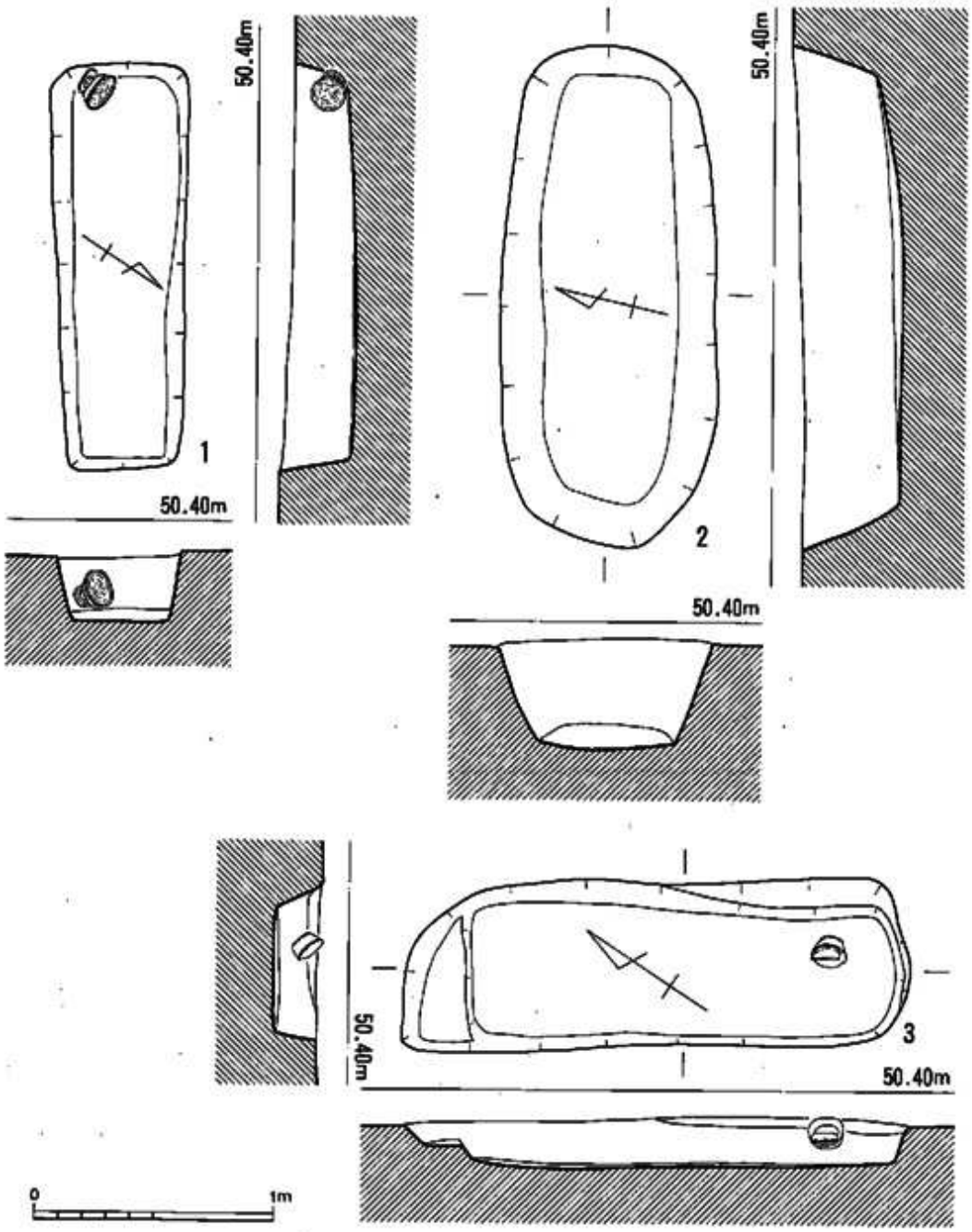
出土遺物（図版39，第126図）

須恵器杯蓋（1） 口縁部に身受けのｙ字形のかえり，外天井に偏平な宝珠形つまみが付く杯蓋で，口径16.0cm，器高3.3cmの大きさ。回転ヘラ削りされる外天井は平坦で，口縁部は緩やかに外反して，短いかえりの突出は内に隠れる。胎土に砂粒を含み，青灰色に堅く焼成されている。



第126図　1・3号土壙墓出土土器実測図（1/3）

須恵器高杯（2）　口径15.7cm，器高7.6cm，裾径11.0cmの大きさの高杯で，杯部高は4.0cmを占める。回転ヘラ削り痕を残す杯底部は平坦で，丸みをもって立ち上がった口縁部は緩やかに



第127図　1～3号土壙墓実測図（1/30）

外反する。柱状部は中空で，裾に向かって外反しながら開き，端部は鳥嘴状に折り返る。砂粒を胎土に含み，淡青灰色ないし暗青灰色の色調に堅く焼成されている。

出土土器はセットであり，7世紀後半頃の特徴をとどめているので，この頃の墓であろう。

2号土壙墓（第127図）

1号土壙墓から12m程南東側に位置して，9号建物跡と重複する。主軸方向をN77°Eにとる土壙墓である。長楕円形プランだが，西側がやや広い。検出面での長さ208cm，幅75～95cm，深さ35～43cm，床面での長さ177cm，幅45～55cmを測る。東側の床が僅かに高めである。須恵器小破片以外の遺物の出土はみられなかった。

3号土壙墓（図版32－1，第127図）

C地区の南西部で，27号住居跡の約10m南東，2号土壙墓から22m程南側に位置する。主軸方向をN33°Wにとる土壙墓である。長方形に近いプランだが，北西側がやや広く，壁にテラス状の段がある。検出面での長さ210cm，幅70cm，深さ15～20cm，床面での長さ176cm，幅49～55cmを測る。南東側の床が僅かに高めで，やや浮いた位置に須恵器杯身と高杯片各1点が傾いて出土したが，土器以外の遺物は出土しなかった。

出土遺物（図版39，第126図）

須恵器杯身（3） 口縁部が深めに立ち上がり端部で僅かに外反し，底部端に外開き気味の高台が付く杯身で，口径15.0cm，器高4.9cmの大きさ。砂粒を胎土に含み，暗灰青色に堅く焼成されている。

須恵器高杯（4） 脚部を失う杯部のみの破片で，回転ヘラ削りされて平坦な杯底部から口縁部が立ち上がり端部で僅かに外反する。口縁部下に段状の沈線が1条巡る。胎土に砂粒を若干含み，青灰色に堅く焼成されている。

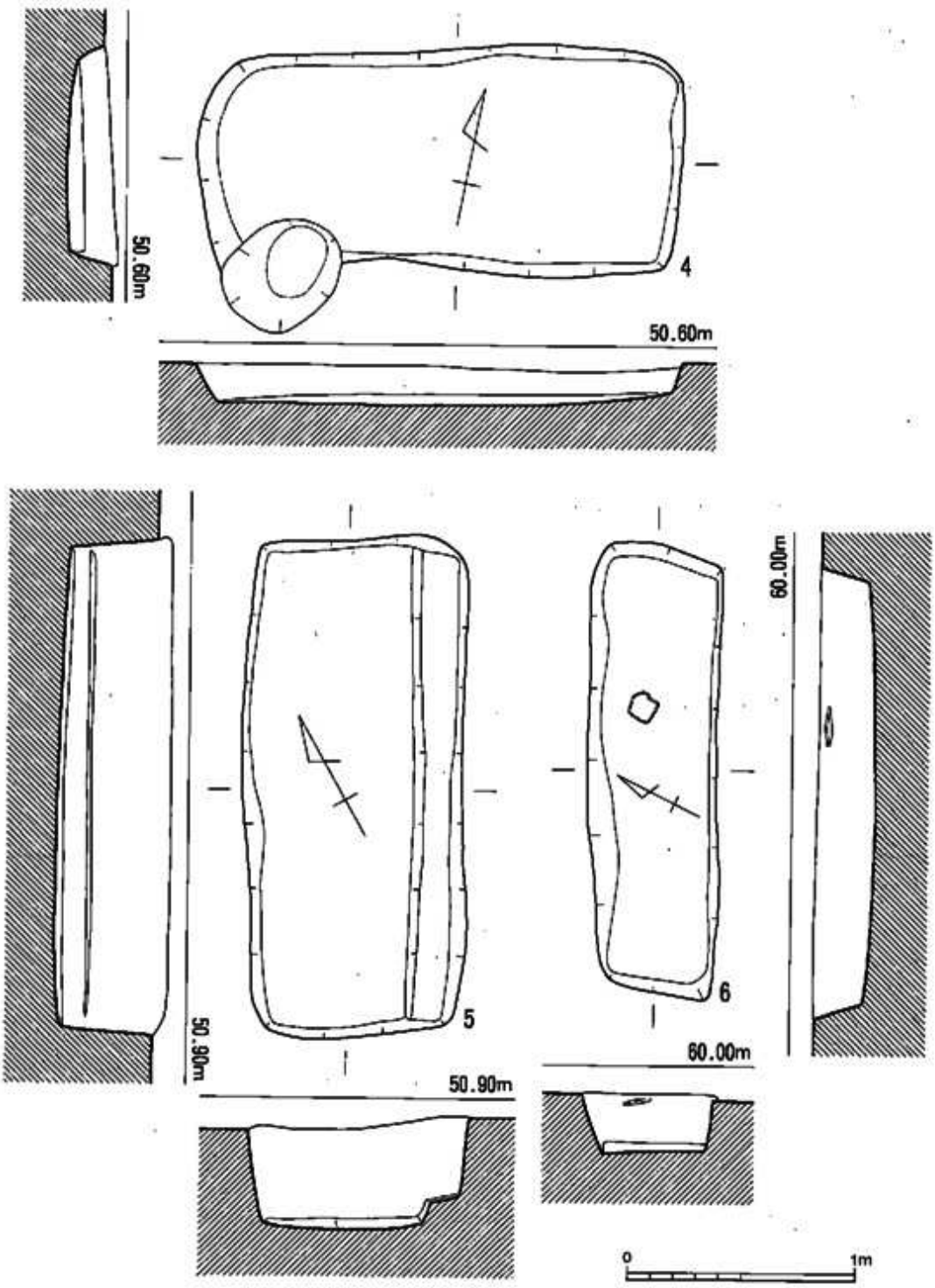
出土土器では，高台の特徴から8世紀中頃に近い時期を考えたい。

4号土壙墓（第128図）

C地区の北部で，6号住居跡の西側に位置し，8号建物跡と一部重複するが，建物跡より先行する可能性が高い。主軸方向をN79°Eにとる土壙墓で，長方形に近いプランだが，東側がやや広い。検出面での長さ214cm，幅90～100cm，深さ10～16cm，床面での長さ200cm，幅80～90cmを測る。東側の床が僅かに高い。土師器小破片以外の遺物は出土しなかった。

5号土壙墓（第128図）

C地区の北部で，6号住居跡の北東側に位置する。主軸方向をN30°Eにとる土壙墓で，長



第128図　4～6号土壙墓実測図（1/30）

方形プランをとり，床面より少し上の東南側にテラス状の段がある。検出面での長さ220cm，幅95cm，深さ45～50cm，床面での長さ210cm，幅60～70cmを測る。北東側の床が僅かに高い。土師器小破片以外の遺物は出土しなかった。

6号土壙墓（第128図）

C地区の北部で，6号住居跡の東側，5号土壙墓の約5m南東側に位置する。主軸方向をN64°Eにとる土壙墓で，長方形プラン。検出面での長さ199cm，幅50～55cm，深さ20～26cm，床面での長さ185cm，幅40～50cmを測る。北東側の床が僅かに高い。埋土上部で土師器片が出土した。

7号土壙墓（第129図）

C地区の北部で，6号土壙墓の約6m南東側に位置する。主軸方向をN59°Eにとる土壙墓で，長方形に近いプラン。検出面での長さ167cm，幅55～60cm，深さ15～20cm，床面での長さ160cm，幅46～53cmを測る。床は平坦だが，北東側が僅かに広く，南西側でピットと重複する。遺物は全く出土しなかった。

8号土壙墓（第129図）

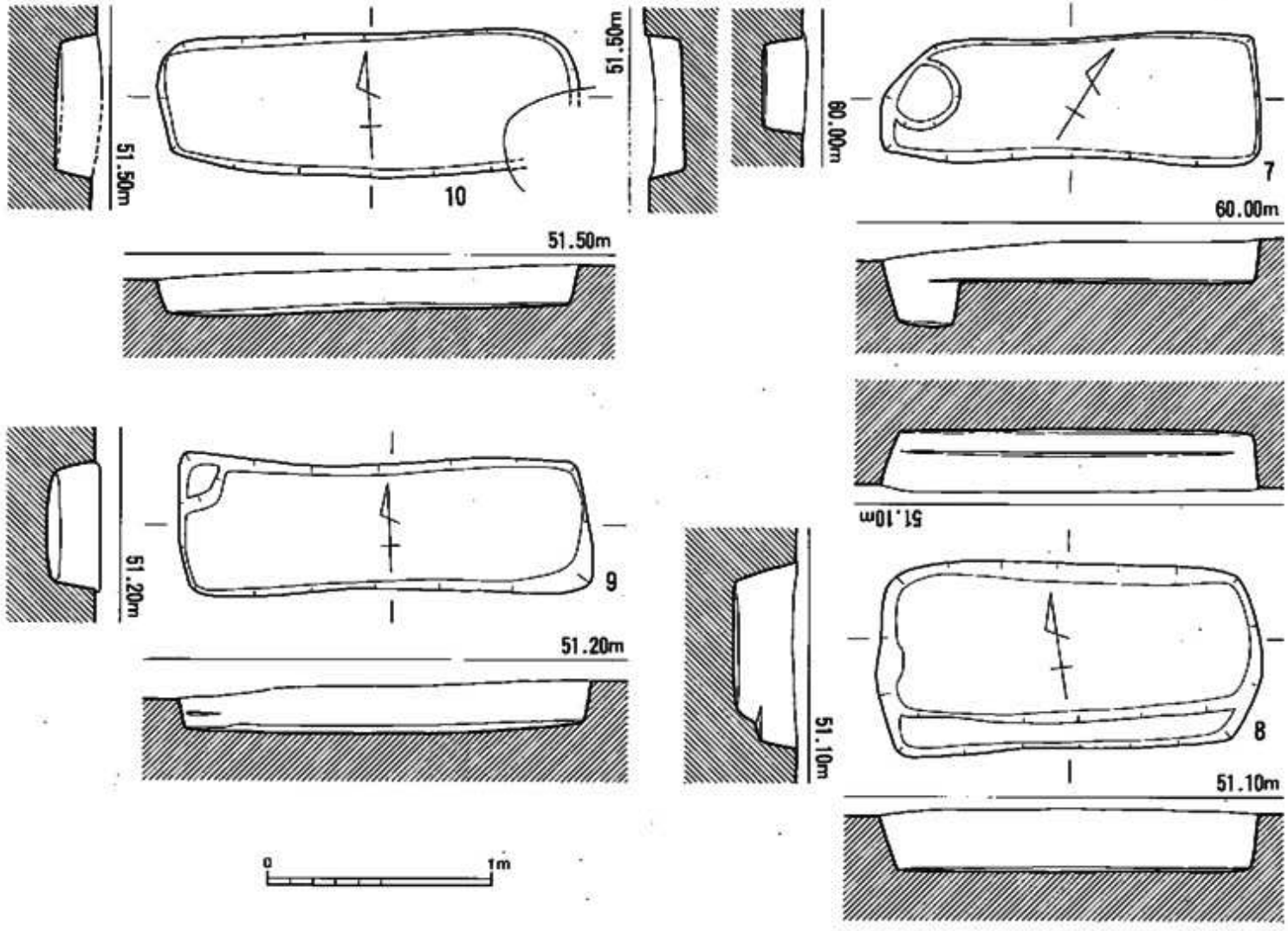
C地区の北部で，7号土壙墓の約3m南東側に位置する。主軸方向をN81°Wにとる土壙墓で，長方形に近いプランだが，床面より少し上の南側壁にテラス状の段がある。検出面での長さ170cm，幅75～85cm，深さ25～27cm，床面での長さ157cm，幅50～61cmを測る。床は平坦だが，西側が僅かに広い。遺物は土師器小破片が出土したものの，図示しうる資料はない。

9号土壙墓（第129図）

C地区の北部で，7号土壙墓の約3m東側に位置する。主軸方向をN88°Wにとる土壙墓で，長方形に近いプラン。床面より少し上の北西隅にテラス状の段がある。検出面での長さ183cm，幅55～60cm，深さ15～20cm，床面での長さ176cm，幅47～52cmを測る。床は浅い舟底状だが，西側が僅かに広い。遺物は全く出土しなかった。

10号土壙墓（図版32－3，第129図）

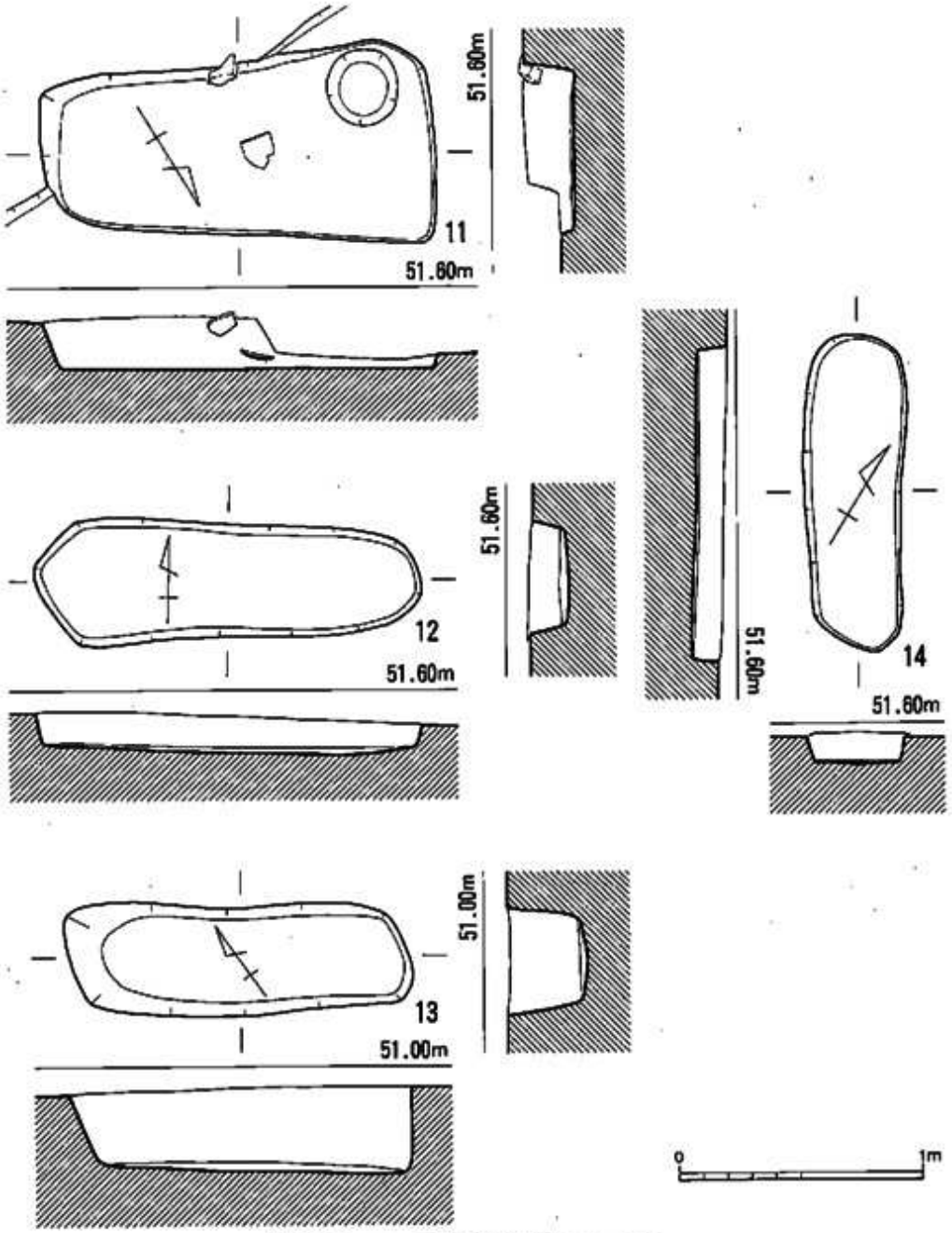
C地区の北部で，35号住居跡の約3m北側に位置する。主軸方向をN87°Wにとる土壙墓で，長方形に近いプランだが，東側を攪乱坑で失う。検出面での長さ188cm，幅55～64cm，深さ15～17cm，床面での長さ180cm，幅45～57cmを測る。床は平坦だが，東側が僅かに広い。遺物は全く出土しなかった。



第129図　7～10号土壙墓実測図（1/30）

11号土壙墓（第130図）

C地区の東部で，34号住居跡の南側に位置して，34号住居跡に北側の大半を削られる。主軸



第130図　11～14号土壙墓実測図（1／30）

方向をN58°Wにとる土壙墓で，撥形に近いプラン。検出面での長さ163cm，幅50～80cm，深さ20cm，床面での長さ153cm，幅45～73cmを測る。床は平坦だが，西側に柱穴状ピットの攪乱が及ぶ。中央部の床面より僅かに浮いた処から土師器片が出土した。

12号土壙墓（第130図）

C地区の北東部に位置して，主軸方向をN90°Wにとる土壙墓で，長楕円形に近いプランだが西側が広い。検出面での長さ160cm，幅35～53cm，深さ10～15cm，床面での長さ154cm，幅30～45cmを測る。床は平坦だが，西側が僅かに高い。遺物は全く出土しなかった。

13号土壙墓（第130図）

C地区の北部で，6号土壙墓の南側約1mに位置する。主軸方向をN54°Wにとる土壙墓で，長楕円形に近いプラン。検出面で長さ140cm，幅43～46cm，深さ30～35cm，床面で長さ124cm，幅32～35cmを測る。床は平坦だが，北西側が僅かに高い。遺物は全く出土しなかった。

14号土壙墓（第130図）

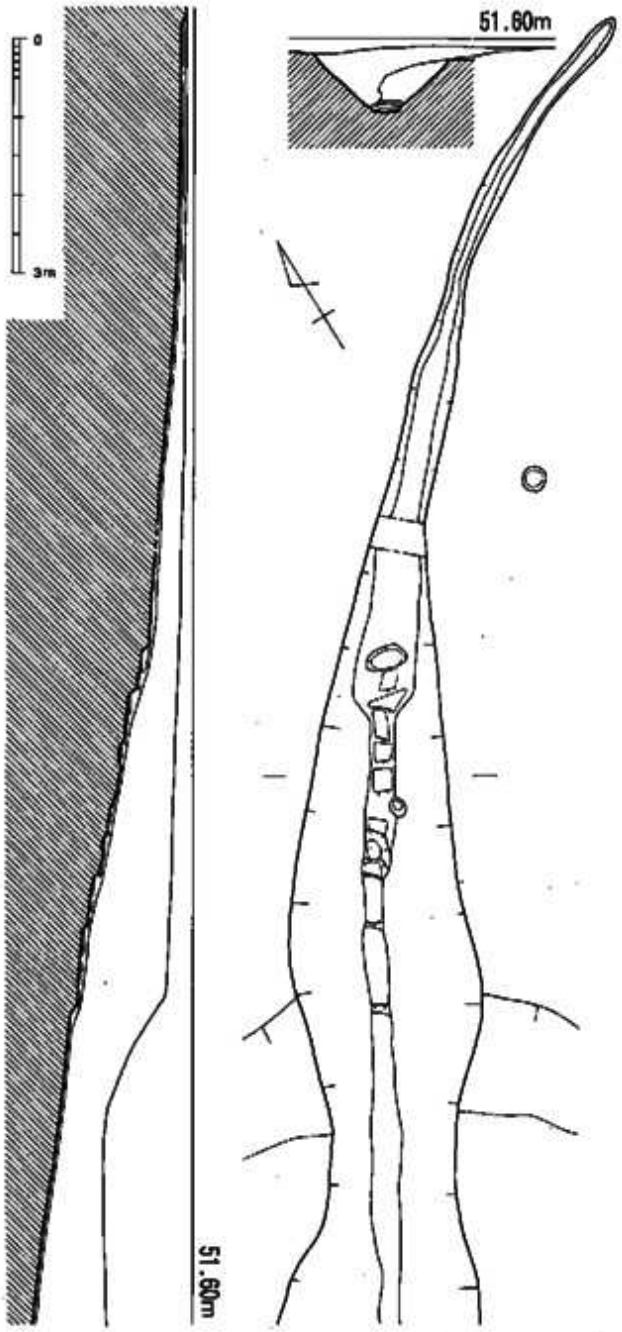
C地区の北東部で，12号土壙墓の約2m南西側に位置する。主軸方向をN32°Wにとる土壙墓で，長楕円形に近いプラン。検出面で長さ129cm，幅38～43cm，深さ12cm，床面で長さ125cm，幅32～36cmを測る。床は平坦だが，北西側が僅かに高い。遺物は全く出土しなかった。

5．通路状遺構（図版33－2，第131図）

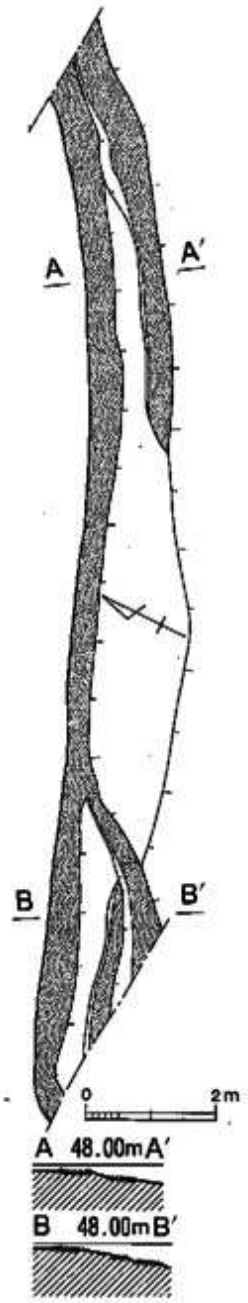
調査区南東部で，1号墳の西側に発見された。南側斜面の上下につながる通路と推定されるが，斜面の崖際ではN30°E前後の方向を向き，上部ではN70°E前後の方向まで緩やかに曲がって，17.5mの長さを確認した。

最も広い部分の幅は2.4mで，上縁の標高51.3m前後だが，削平されていると思われる上部の標高51.5m前後で上縁の幅は0.2m程となっている。V字形ないし逆台形断面に掘り込まれ，斜面の崖際では勾配は約7°で，床面は0.2～0.3m幅で殆ど凹凸がない。これより少し登って少し東側に曲がり始めた部分は勾配が約12°で，1段が0.2×0.2m程の広さをもち，10段余りの階段を設けているが，下位では1段が2段分の距離をもつ緩やかな部分もみられる。更に登った処では勾配約4°で，登り詰めて向きを東に更に曲がる部分では勾配は約2°から平坦に成り，床面は0.1～0.7m幅である。床面は堅く，薄く何枚にも剝がれて検出された。階段部分に中凹みの面をもつ段もあるが，石を敷いた痕跡はみられない。この通路状遺構内の堆積土は，黒っぽい暗茶褐色土で，古墳周溝の堆積土よりも若干茶色味が強い。

通路状遺構からは，まとまった遺物の出土がなく，若干の須恵器・土師器甕片が出土した程度である。いずれも小破片で，器形の分かる例や，時期の特定ができる例はない。



第131図　通路状遺構実測図（1／100）



第132図　道路状遺構実測図（1／120）

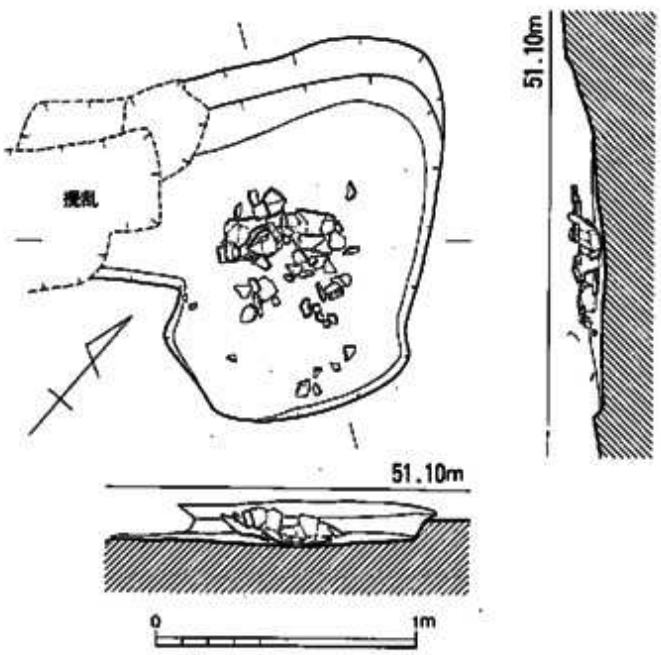
道路状遺構（図版33－1，第132図）

東端調査区の中程で発見された。表土下堆積土を除去したところ，細かな砂利と砂・粘土が混じった部分が相互に層をなしていて，西南西―東北東方向に通るが約16m分に亘る。最大幅2.2mを測るが，南側がやや削平されて，傾斜するためか中途部分は路床面を失う。東北東端部では標高47.9mだが，西南西端部は標高47.6m前後とやや低くなっている。細部では，地山粘土面の凹みに砂が堆積し，細かめの玉砂利が覆う。部分的には更に粘土や砂が覆うように堆積し，細かな玉砂利が覆う状態も確認され，多い処では4枚にも亘っている。玉砂利の間に須恵器細片が若干含まれてはいたが，道路敷部分の施設時期を明らかにする材料に乏しい。

6．その他の遺構と遺物

1）甕棺墓（図版34－3，第133図）

C地区調査区域東南隅部で発見されたが，1号墳周溝の東側に位置する。南側に傾斜して上部を削平され，西側は葡萄畑の肥料穴で撹乱を受けている。長軸方向に約1.7m，短軸方向に約1.3m規模の墓壙があり，墓壙内の中央やや北東寄りに，合わせ甕の甕棺が埋置される。甕棺は主軸方向をN49°Eに向けて，南西側に上甕，北西側に下甕が位置し，15°前後に傾斜していたものと推定される。



第133図　甕棺墓実測図（1/30）

甕の遺存状況は悪く，既に上半分を失っているが，転落して残された部分も葡萄の根が侵入して，かなり乱れた状況であった。

墓壙内からは，甕棺使用土器以外では，撹乱土に含まれていた石鏃が1点出土したのみで，棺内からは何らの出土遺物も検出されなかった。

甕棺使用土器は，調査終了後に接合復原したが，甘木歴史資料館で昭和61年に実施された特別展に展示したことがあったものの，その後に紛失して，行方が分からない。発

見次第紹介することにしたいが，上襄・下襄ともに口縁部下と肩部に刻み目突帯をもつ鉢ないし深鉢であったと記憶している。縄文時代晩期後半の所産であろう。

2）縄文・弥生時代の遺物

縄文土器（図版41・42，第134～137図）

押型文土器（1～4）1～3は，いずれも外面に大粒の楕円押型文が回転押捺される資料で，4は無文部分の破片である。5号建物跡付近の茶褐色土から出土した。4の破片を含めて，ともに細かな砂礫と雲母を含む胎土で，短茶褐色に焼成されていて，器壁が1.1～1.6cmある点で共通していて，同一個体の可能性もある。1は緩やかに外反する口縁部破片で，内面はナデ調整される。2は口縁部側端を欠くが，胴部はさほど膨らまないで，外面全体に楕円押型文がみられるものの風化が進み分かりにくい。3も外面全体に楕円押型文がみられ，内面はナデ調整される。楕円一粒の径は1.0cm前後である。

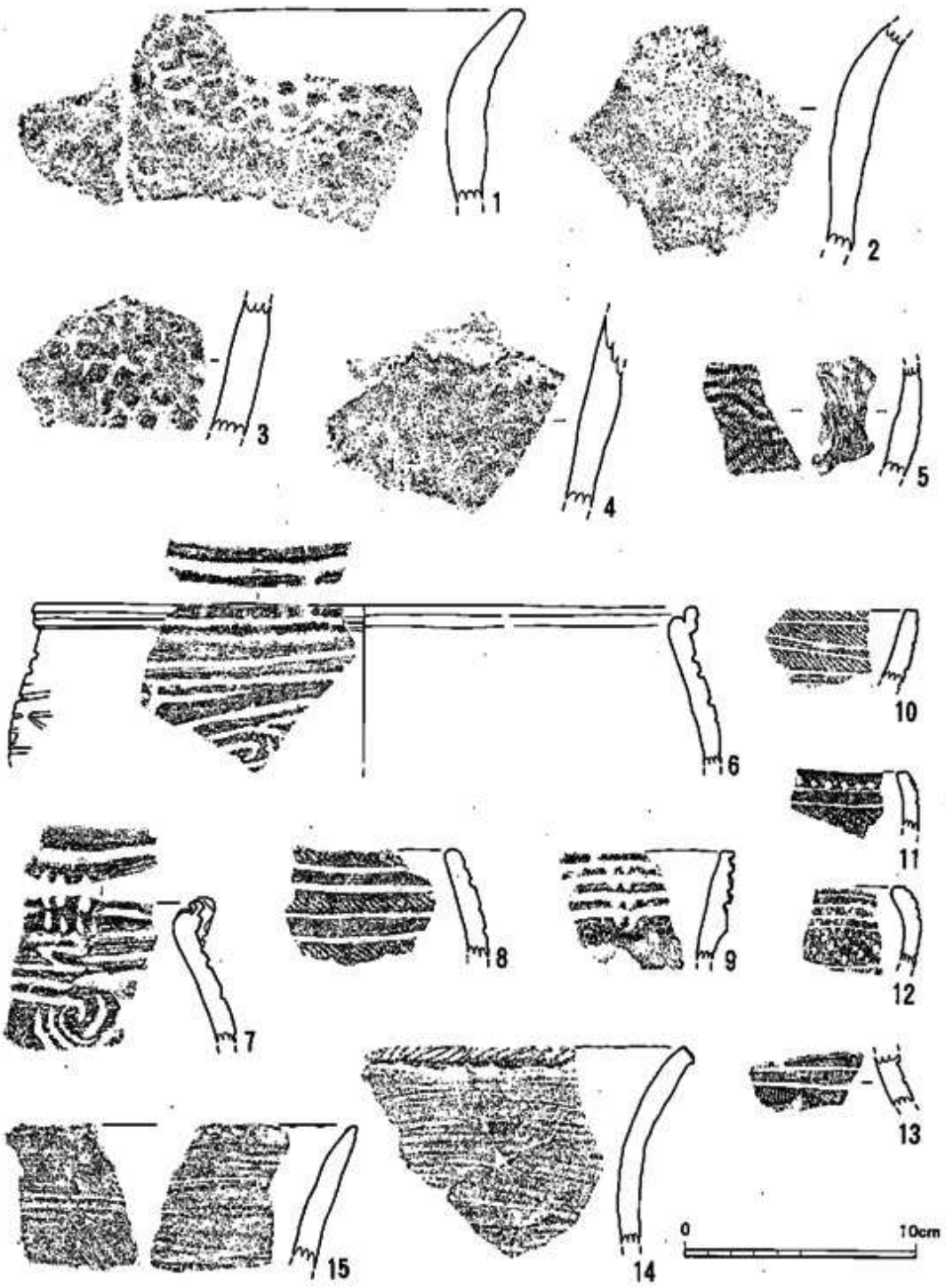
御手洗A式土器（5） 胴下部の破片らしいが，全体の形は不明。凹線状に凹凸をもつ弧線文様があり，凹線状の細部は細かな連続爪形文のようにみえる。胎土には細砂粒を含み，淡明褐色に焼成されている。

鐘崎式土器（6・7） 内傾して立ち上がる口縁部をもち，口縁端部は外側に拡張したような凸帯をもち，外面には沈線が巡るが，内面には段状の沈線が生じている。貝殻条痕を軽くナデ消した下地をもち，外面の肩部には多条の沈線が巡り，蕨状や鉤状の文様と同心円状の文様が描かれる。同心円文様の上の口縁部は低い波頂部のように肥厚して，口縁部には4ヶ所の刻み目が付けられ，同心円との間には逆S字紋文様で繋がれる。胎土に細砂粒・角閃石を含み，灰茶褐色ないし茶褐色に焼成されている。

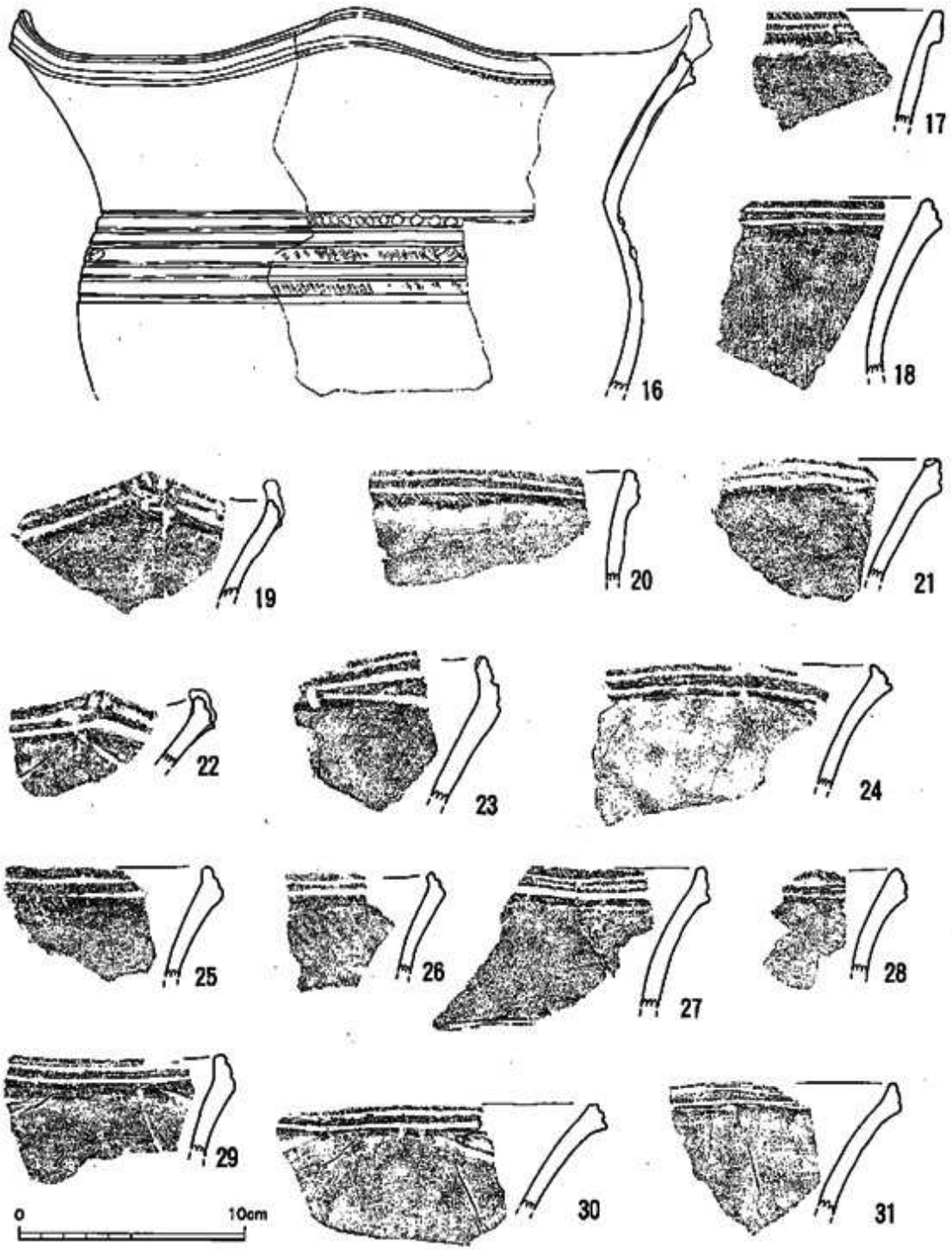
磨消縄文土器（8・10～13） 8は内傾して立ち上がる口縁部破片で，丁寧にナデられた下地で，縄文施文後に平行沈線を巡らせて，沈線間の区画をヘラでナデ消している。胎土に細砂粒・雲母を含み，茶褐色に焼成される。10は内彎気味に開く口縁部破片で，縄文施文後に平行沈線を巡らせるもので，破片のうちでは磨消し部分はみられず，内面は丁寧にナデ調整される。胎土に砂粒を含み，明褐色に焼成されている。11・12は内彎する口縁部破片で，比較的粗い縄文を施文した後に平行沈線を巡らせ，狭い沈線間をナデ消しているが，11では口縁直下の沈線に沿った刺突列点がみられ，内面はヘラ磨きされる。10～12は西部の包含層から出土した。

13はナデ地の胴部破片だが，外面に巡る沈線間にヘナタリ疑似縄文が施文される。胎土に砂粒・雲母を含み，暗黄褐色に焼成されている。

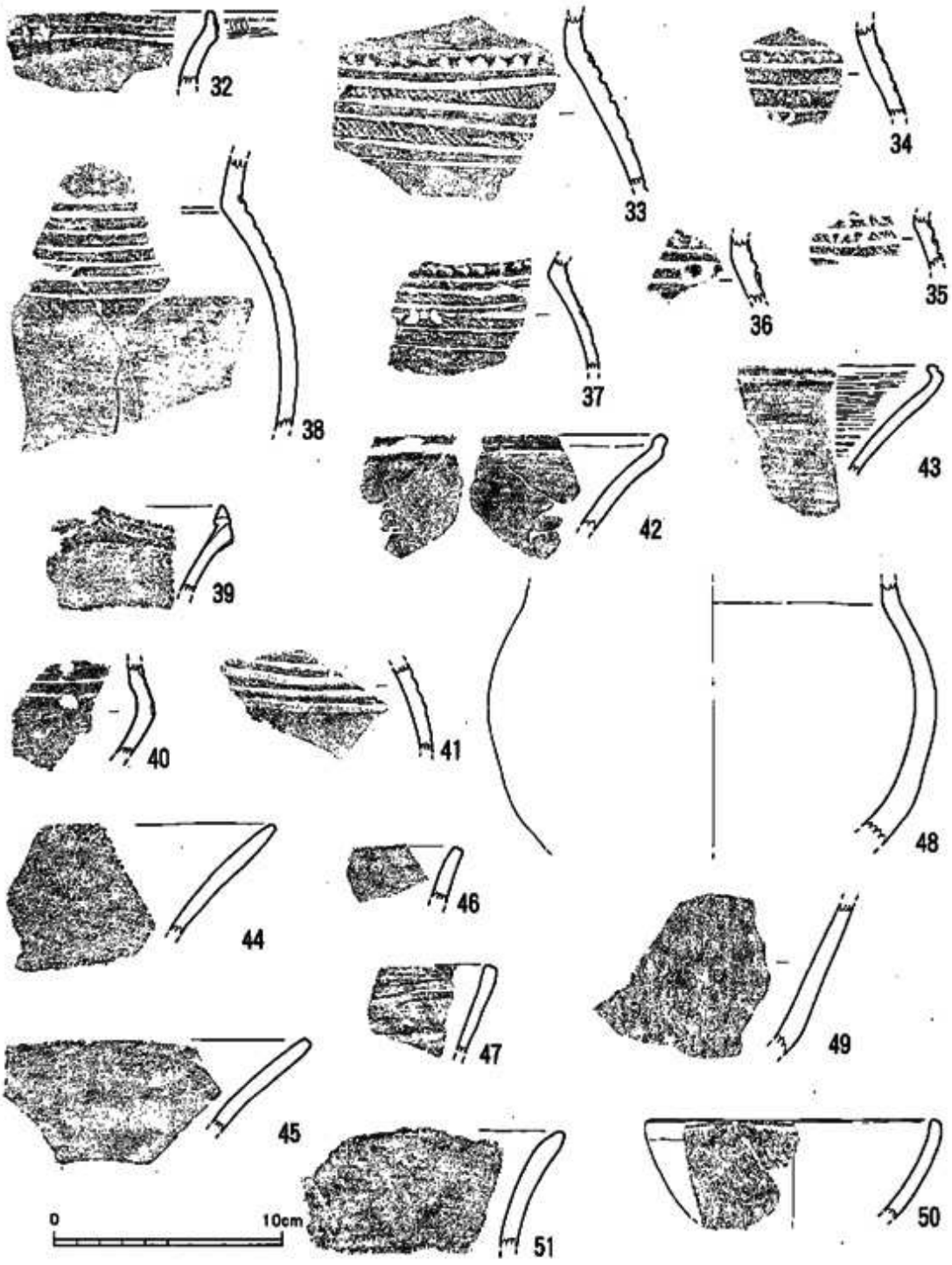
型式不明土器（9） 幅広に肥厚した口縁部の外面に4条の沈線が巡り，沈線に直交する方向に下側から双孔の刺突点が施される。砂粒・角閃石・雲母を胎土に含み，明褐色に焼成されている。沈線などの特徴は西平式系あるいは晩期に含まれる可能性を含んでいる。



第134図　出土縄文土器実測図1（1/3）



第135図　出土縄文土器実測図２（１/３）



第136図　出土縄文土器実測図3（1/3）

条痕土器（14・15・56～62） 14は外面を二枚貝貝殻あるいは板状原体で条痕調整し，平らな口縁部上面に斜方向の刻み目を施した，外反する口縁部破片である。胎土に砂礫・雲母を含み，明褐色に焼成されている。15は内外面を二枚貝貝殻条痕で調整し，口唇部にやや疎らな刻み目を施した口縁部破片で，緩やかに外反する。胎土に砂礫を含み，褐色に焼成されている。

56は内面がナデ調整で，外面に条痕か細く雑な沈線かの区別をし難い破片である。57は直線的に開く深鉢の口縁部破片で，内面はナデられるが，外面は二枚貝貝殻条痕が施される。58・59は内面がナデ調整で，外面を二枚貝条痕で調整する例で，59はやや細かい。

60～62は内外面を二枚貝条痕で調整するもので，62の鉢では胴部の屈曲に稜をもつ。

西平式系土器（16～38） 球形の胴部から，緩やかに外反あるいは，直線的に開いて，口縁端部がく字形に屈折する波状口縁をもつ。磨消縄文手法を辛うじて残す文様は，口縁部と胴上半の肩部に限られる。16では，復原胴最大径が25.0cmの大きさで，口縁端部と肩部に縄文Rを施文後に，沈線を2条と6条巡らせ，沈線区画間をヘラで消しているが，頸部側の沈線間では刺突列点がみられ，胴部沈線間に（）形の刺突点がみられる。胎土に細砂粒・赤褐色粒・雲母・角閃石を含み，茶褐色に焼成されている。17～23の口縁部破片には同様な特徴がみられるが，17は刺突点を介した鉤手状の沈線がみられ，19の波頂部には刻み目とS字文様が，22の波頂部には凹点がみられる。また23は屈曲が緩く，刺突点を介して沈線が増えて三角形の空間をつくると思われるものである。

33～38は，肩部破片で，縄文施文と沈線・磨消し・刺突列点を伴う。胴部の刺突点は（）の例と)(の例や両者の複合したような例がみられる。

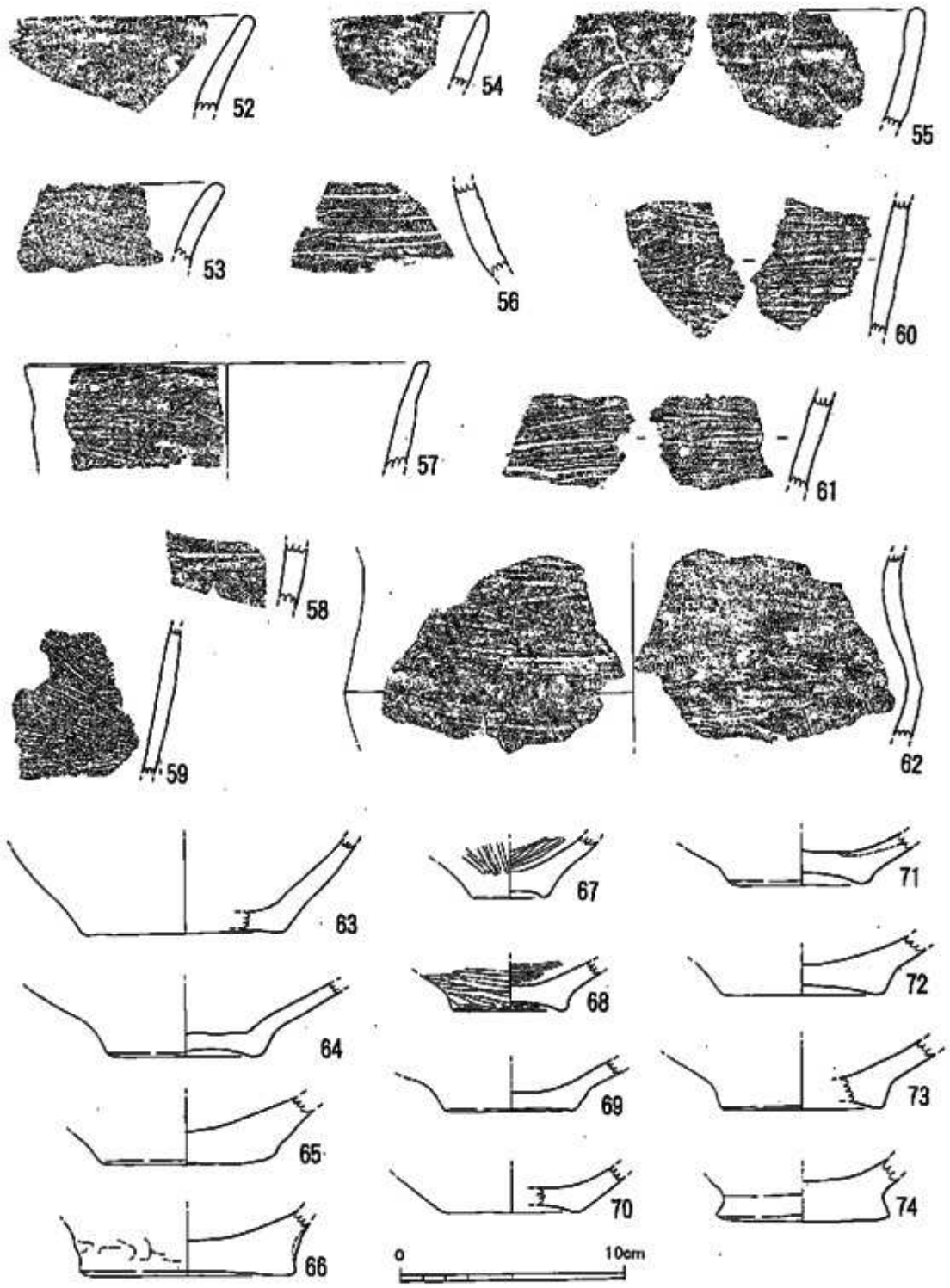
24～32は，く字形に屈折あるいは，断面三角形に肥厚して，口縁部に2条の沈線が巡るものの縄文施文を伴わない口縁部破片である。三万田式土器の範疇にはいるものも含まれ，いずれも器面はヘラ磨きされる。

晩期黒色磨研土器（39～51） 39～45は浅鉢あるいは鉢形の土器である。内外面ともにヘラ磨きで調整され，黒褐色や暗茶褐色の色調を呈する。口縁部の屈折が退化して僅かな段や沈線に変化するものもみられ，肩部文様帯も段状の沈線や細い沈線に変化しているが，41は後期三万田式の範疇であろう。44・45は口縁部に屈折や沈線を伴わない。

46・47の口縁部破片は直に近い立ち上がり具合であるが，内外面ともヘラ磨き調整される。49・50もヘラ磨き調整される壷形あるいは深めの鉢形の土器であろう。48の胴部はやや器壁が厚い。

50は復原口径13.0cmの大きさの椀形土器で，内外面ともにやや丁寧にナデ調整されている。51はヘラ磨きあるいは丁寧にナデ調整され，外反する口縁部破片である。

無文土器（52～55） 内外面がナデで調整されるもので，52・53の口縁部破片は外反して端部は四角に整えられるが，54・55は内彎気味に立ち上がり端部は丸みをもつ。55では口縁部内



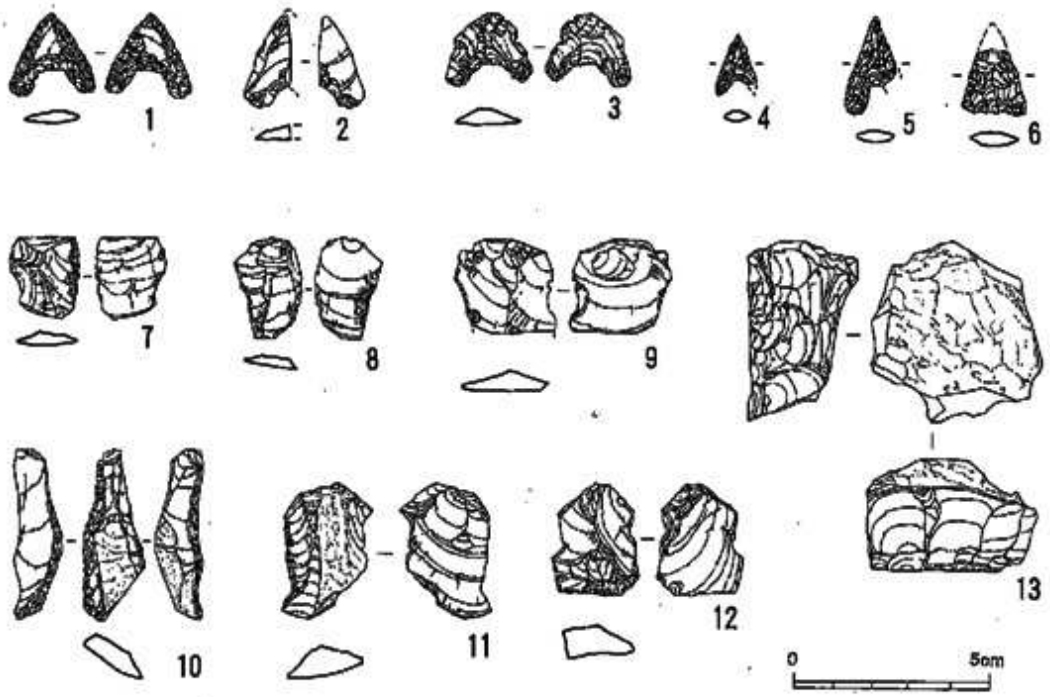
第137図　出土縄文土器実測図4（1/3）

面に指先のナデ痕が凹みになって明瞭に残る。

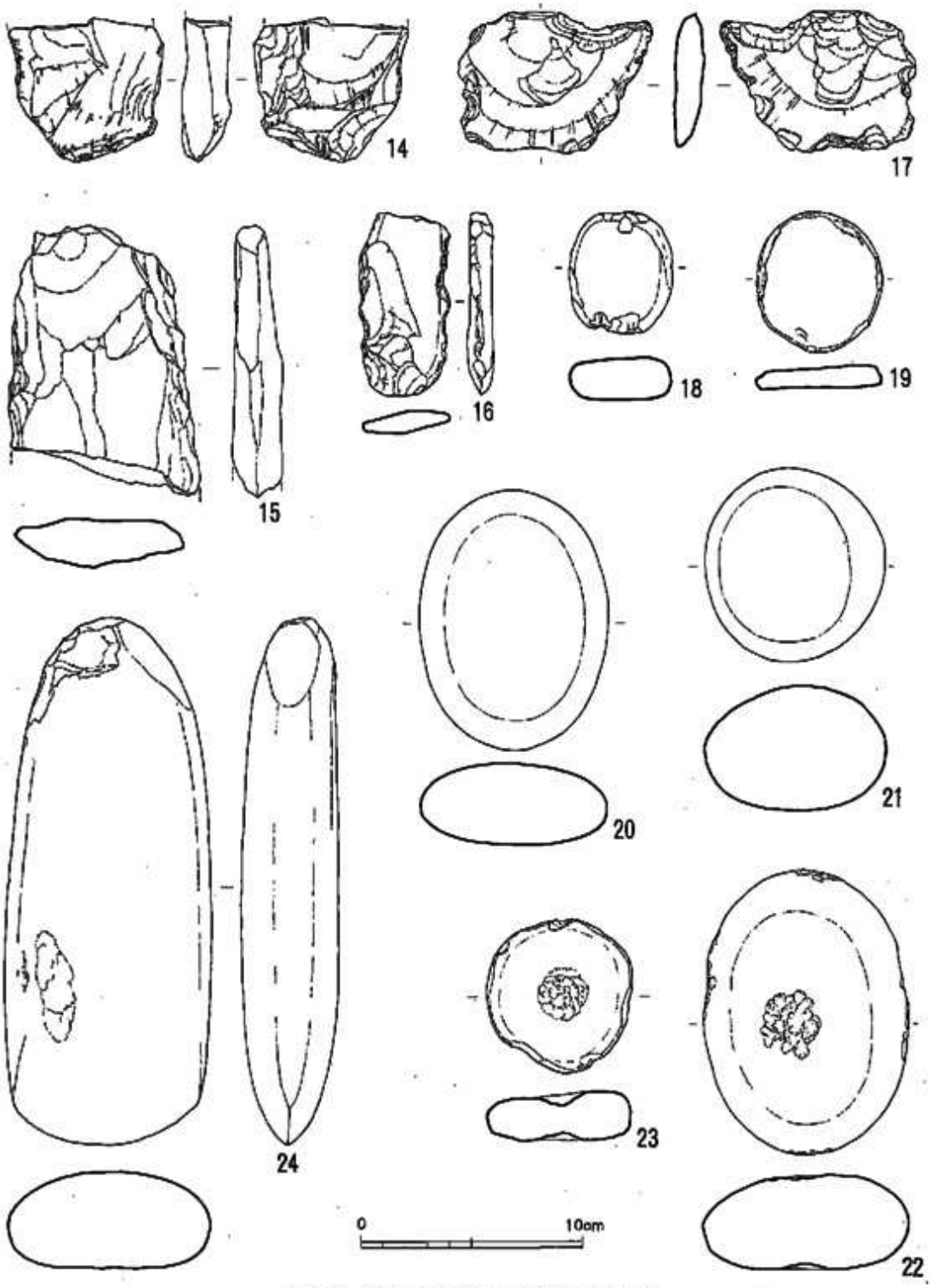
底　部（63～74）　63・64はやや丁寧にナデ調整されている鉢の底部破片で，鐘崎式土器以降の磨消縄文土器の底部。65・66は粗製鉢あるいは深鉢の底部であろう。67～73は外底面が上げ底になり，内外面ともにヘラ磨きあるいは丁寧にナデ調整され，西平式系土器の底部であろう。また74は円盤貼り付け様の底面に拡張する底部で，晩期の粗製深鉢であろう。

石　器（図版42，第138・139図）

石　鏃（1～6）　1～3・5・6は黒色を呈する黒曜石製の剥片を用いた打製石鏃である。1は剥片の基部側を抉りにした凹基鏃で，周縁を両面から調整剥離するが，主要剥離面が残る。長さ2.2cm，幅2.2cm，厚さ0.3cm，重量1.0ｇを測る。2は縦長剥片の基部を石鏃の先端側にして，側縁をそのまま用いる剥片鏃である。主軸付近で半分を失うが，現存値で長さ2.4cm，幅1.2cm，厚さ0.3cm，重量0.8ｇを測る。3は不定形剥片の周縁の一部をそのまま鏃の縁に用いる凹基鏃である。長さ1.8cm，幅2.2cm，厚さ0.4cm，重量1.2ｇを測る。5は片脚を欠損するが，全面に調整剥離の及ぶ，抉りの深い凹基鏃である。長さ2.5cm，幅1.3cm，厚さ0.3cm，重量0.8ｇを測る。6は先端を欠くが，現存長1.6cm，幅1.7cm，厚さ0.4cm，重量1.0ｇを測る。全面に調整剥離の及ぶ平基の鏃である。1・2は24号住居跡内床面から，3は中央部包含層から出土し，5・6は東部で表採した資料である。4は濁暗灰色を呈する流紋岩に似た黒曜石？製の，全面に



第138図　出土縄文時代石器実測図1（1/2）



第139図　出土縄文時代石器実測図２（１／３）

調整剥離の及ぶ凹基鏃で，片脚部を失う。長さ1.6cm，幅1.1cm，厚さ0.3cm，重量0.3ｇを測る。甕棺墓墓壙内から出土した。

削器・使用痕のある剥片（7～12） いずれも黒色を呈する黒曜石製の縦長剥片を用いているが，剥片の側縁を刃部にしている。7は26号住居跡，8・9は44号住居跡，10は39号住居跡，12は48号住居跡の床面などから出土し，11は不整形土坑から出土した。7は剥片の先端・基部両側に折断面をもち，長さ2.1cm，幅1.7cm，厚さ0.3cmの大きさ。8は長さ2.6cm，幅1.7cm，厚さ0.3cmの大きさ。9は先端側を欠損するが，長さ2.4cm，幅2.5cm，厚さ0.5cmの大きさの使用痕をもつ剥片である。

10は長さ4.3cm，幅1.5cm，厚さ0.5cmの大きさの削器で，角度のある刃部をも有していて，基部側には彫器のような機能をも兼ねている。

11は風化原面を残す剥片を用いているが，長さ3.5cm，幅2.3cm，厚さ0.7cmの大きさの削器で，片側縁を刃部にしている。12は長さ2.9cm，幅2.2cm，厚さ0.8cmの大きさで，剥片の先端側と片側縁の2ヶ所を刃部にしている。

石　核（13） 不純物を若干含む，黒色の黒曜石の石核で，風化原面を多く残すが，母岩は広さ約5.0cm角で，厚さ1.5～2.8cmの大きさの角礫であったようである。一部を除いて一方向からの敲打で剥離されているが，剥離の回数は余り多くはない。

打製石斧（14・15） 14は凝灰質安山岩製の打製石斧の刃部破片で，厚みは2.2cmあるが，使用による擦過痕がみられる。15は緑泥片岩製の打製石斧だが，刃部を失う。現存値では長さ12.2cm，幅8.5cm，厚さ2.2cmを測る。14は47号住居跡から，15は中央部の表土除去時に出土した資料である。

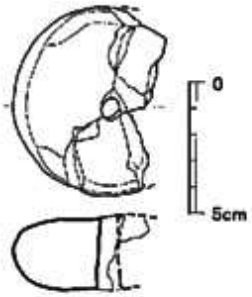
磨製石斧（16・17） 16は緑泥片岩製の局部磨製の石斧で両側縁は敲打調整され，やや広い剥離面もある。長さ8.3cm，幅4.0cm，厚さ1.2cmの大きさで，刃は両刃をなす。17は閃緑岩製の磨製石斧で，長さ24.1cm，幅9.3cm，厚さ4.4cm，重量1760ｇを測る大きさで，やや扁平な楕円形断面をもち，両刃である。

石　錘（18） 凝灰質安山岩の扁平楕円形な円礫を用いて，長軸両端を打ち欠き調整して，紐掛けにする石錘である。長さ5.5cm，幅4.6cm，厚さ1.9cm，重量83.2ｇを測る。

円　板（19） 片岩質の扁平な円礫の周縁を打ち欠き調整し，研磨を加えて整えた円板である。径5.7～6.3cm，厚さ1.0cm，重量55.9ｇを測る。

すり石（20・21） 20は51号住居跡のカマド部分から出土した。花崗岩質の掌に収まり易い大きさの円礫で，長径11.8cm，短径8.5cm，厚さ3.7cmの大きさ。両面ともに磨耗している。21は柱穴状ピットから出土したが，凝灰質安山岩の円礫で，径8.1～8.8cm，厚さ5.6cmの大きさをもち，全体に磨耗している。

敲　石（22・23） 22は35号住居跡から出土した。凝灰質安山岩の円礫で，長径12.9cm，短



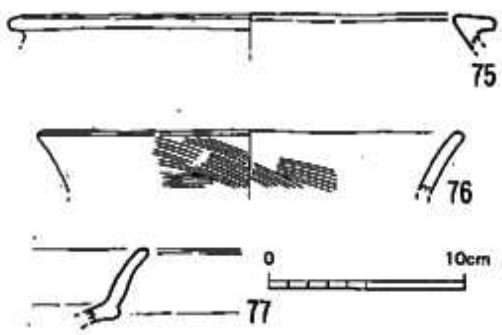
第140図　出土縄文時代土製品実測図（1/3）

径9.2cm，厚さ4.2cmの大きさを有する。両側縁・両端と両面の中央部に敲打痕がみられ，両面は擦れて平滑だが，敲打部分は凹む。23は径6.5～7.0cm，厚さ2.2cmの大きさの花崗岩質石材の円礫を用いているが，側縁と両面の中央部に敲打痕がみられ，両面は擦れて平滑だが敲打部分は凹む。東南部で表採された資料である。

土製品（図版42，第140図）

紡錘車　東部包含層から出土した。2/5程を失うが，外径7.2cm，厚さ2.8cm，孔径0.7～0.9cmの大きさ。胎土に砂粒・雲母・角閃石を含み，やや硬めの焼成で，茶褐色を呈している。

弥生土器（第141図）



第141図　出土弥生土器実測図（1/4）

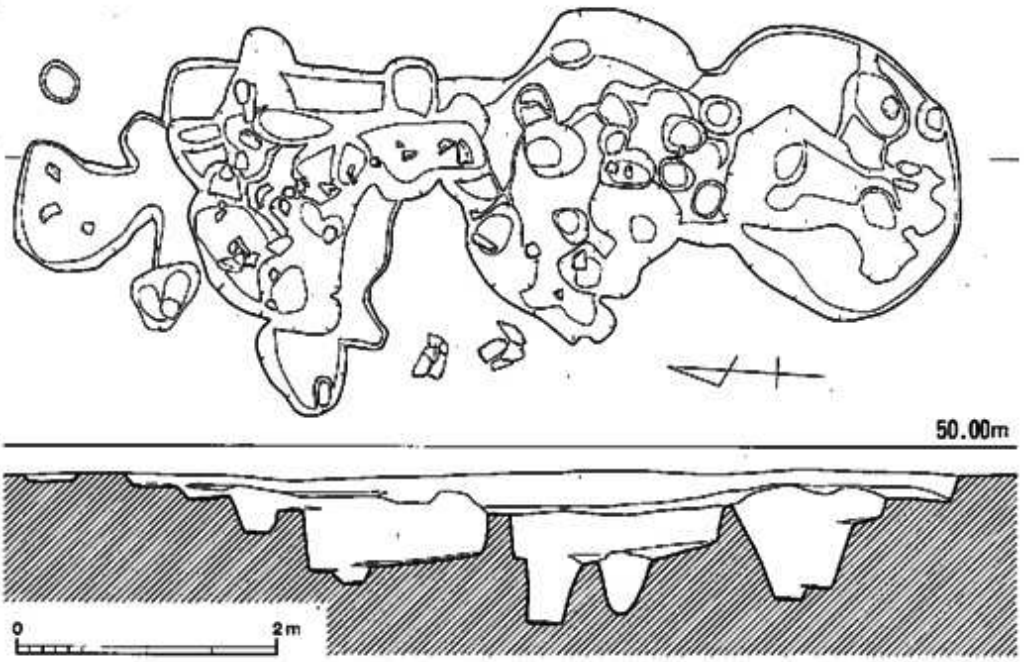
甕（75・76）　75は復原口径25.0cmの大きさのL字口縁甕で，口縁部のみの破片である。胎土に砂粒・角閃石・雲母を含み，淡茶褐色に焼成されている。中期の土器であろう。70は復原口径21.8cmの大きさに外反する口縁部破片で，内外面ともにハケ目調整される。胎土に砂粒・雲母・赤褐色粒・角閃石を含み，橙褐色に焼成されている。後期後半ないし末頃であろう。

複合口縁（77）　外反し凸帯状に飛び出しながら屈曲するが，更に外反して開く口縁部破片である。壷・甕の口縁部であろうが，胎土に砂粒・赤褐色粒・角閃石を含み，橙褐色に焼成されている。後期末ないし古式土師器に含まれるであろう。

3）不整形土坑（第142図）

調査区南西部の24号住居跡と，46号・47号住居跡の間に発見された土坑で，やや大形の柱穴状ピットが集合したような遺構である。堆積土の上部は灰色味のある暗茶褐色土で，住居跡の堆積土に酷似していて，当初は北東隅部のある住居跡を想定して掘り下げた。しかし南西側はすぐに地山が露呈して，上面の輪郭が極限られた部分になったので，不整形土坑と変更した。

南北の長さ7.2m，東西3.0mの範囲だが，2.0～2.5m径の不整円形のピットが連結したような形状であり，細部をみると更に小さなピットに分かれる性格の不分明な遺構である。中央のピットが両側よりやや深く，1.15mの深さを有しているが，全体的にも上部の20～30cmの深さに遺物が集中していた。また，ピット部分より西側に扁平石の集まった部分がみられた。



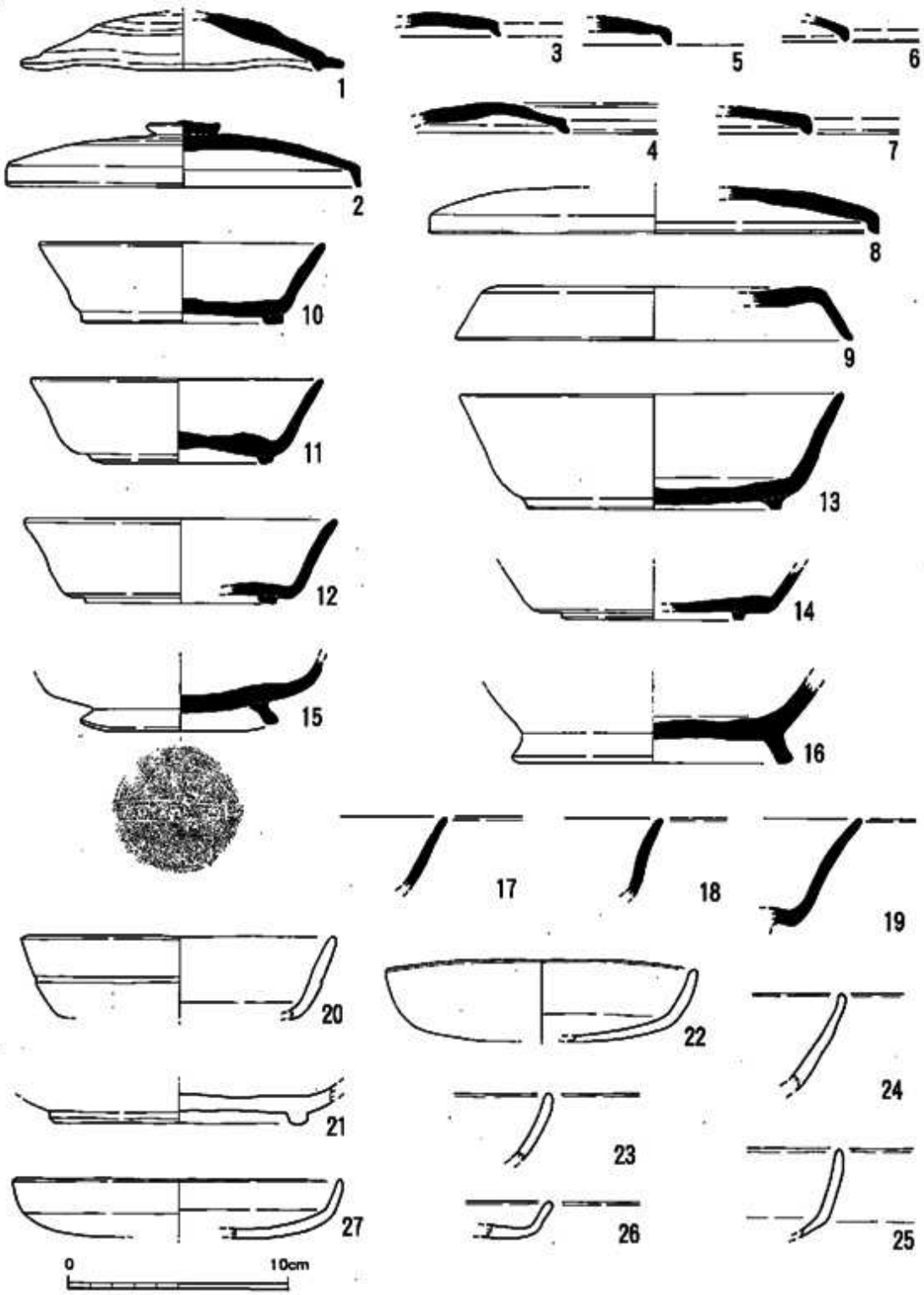
第142図　不整形土坑実測図（1/60）

出土遺物（図版43，第143～145図）

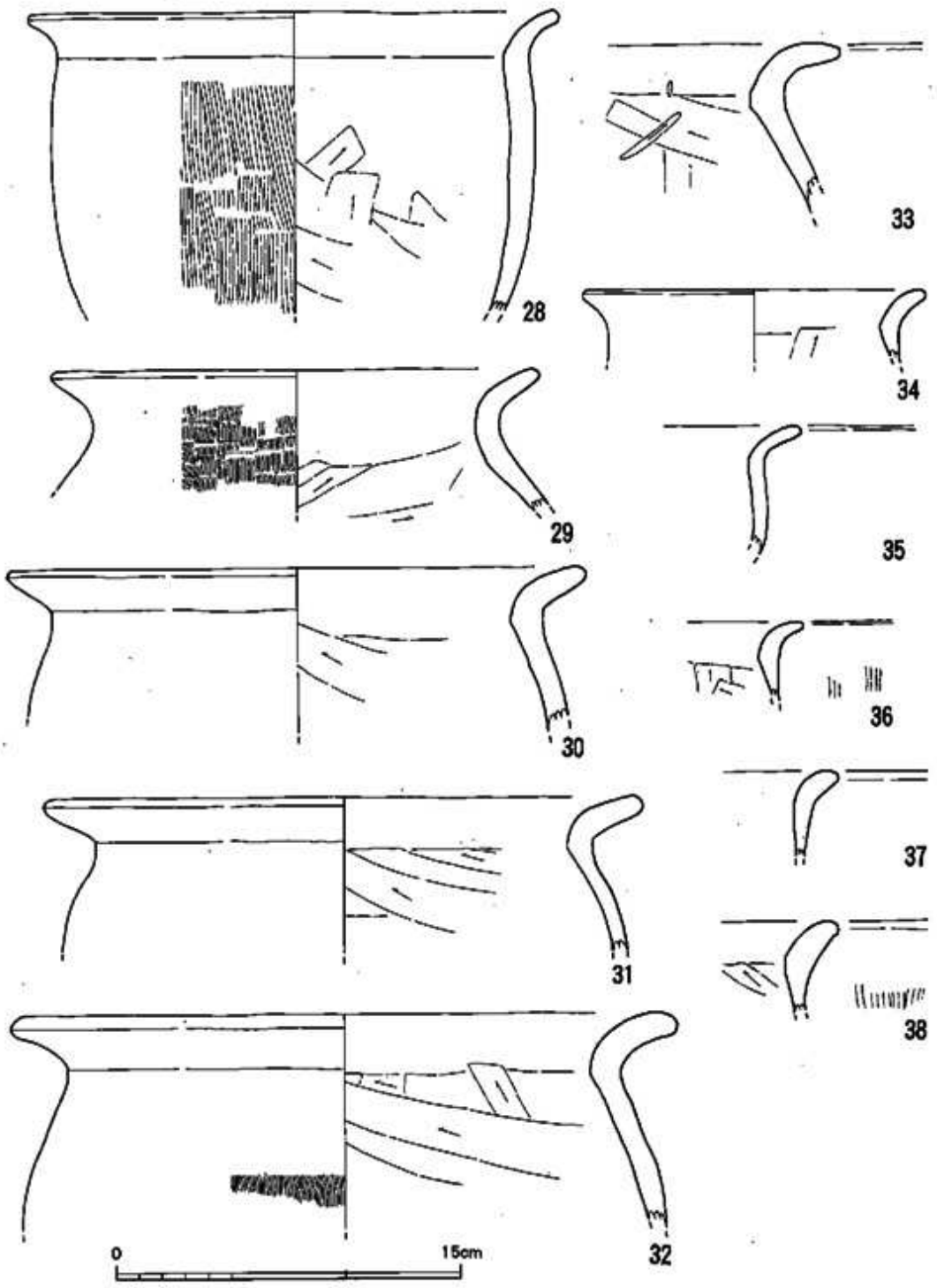
須恵器杯蓋（1～9） いずれも身受けのかえりを有する杯蓋で，口縁端部の断面形がy字形をなすもの（1）と，鳥嘴状をなすもの（2～8），直線的に開いて僅かに外反するもの（9）がある。1はかえりの部分がやや平らで，天井部つまみの有無は分からない。2は復原口径16.4cm，器高3.0cmで，扁平な宝珠形のつまみをもち，かえりはやや長い。3・4の端部はやや鋭いが，5～8の端部はやや鈍く，8は少し外反気味である。9は復原口径18.2cmの大きさで，平らな天井部と2.5cm高の口縁部をもつ。

須恵器杯身（10～19） いずれも高台を有する杯身であろう。高台の断面形が低平で四角いもの（10～14）と，長めに外へ開くもの（15・16）があり，他は高台を失う。口縁部は直線的に開く例が多いものの，器壁が薄いものや，やや外反するものもある。復原口径・器高は，10が13.1cm・3.6cm，11が13.4cm・3.8cm，12が14.2cm・3.8cm，13が17.7cm・5.2cmで，13は大形である。15の高台内には3本線のヘラ記号が付される。

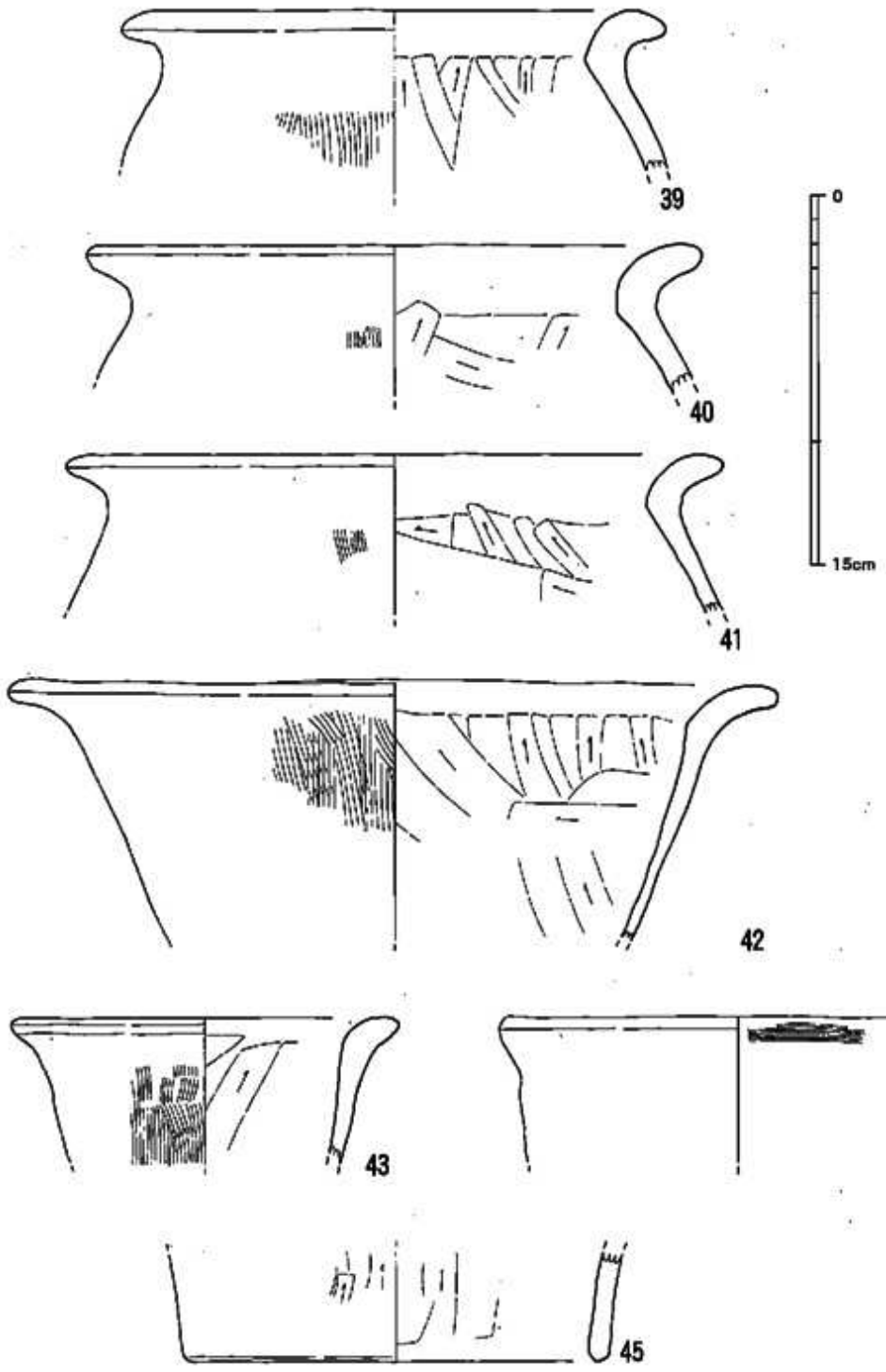
土師器杯（20～27） 20・21は高台を有する似非須恵器の杯であるが，器壁が厚めで，21の高台は丸みをもつ。22はナデ調整されてやや平らな底部から内彎気味に口縁部が立ち上がる杯で，復原口径14.2cm，器高3.7cmの大きさ。24・25の口縁部破片はやや長めに立ち上がり，25では底部と口縁部の境に稜をもつ。26・27も底部と口縁部の境に稜をもつが口縁部が短く皿に



第143図　不整形土坑出土土器実測図1（1/3）



第144図　不整形土坑出土土器実測図2（1/3）



第145図　不整形土坑出土土器実測図３（１／３）

近い器形をなし，27は復原口径15.0cm，器高2.6cmの大きさ。いずれも胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒を含み，淡橙色・暗橙色・淡茶褐色などの色調を呈する。

土師器甕（28～41・43・44） 28は口縁部が肥厚せずに外反し，胴部が殆ど膨らまない器形である。胴部外面はハケ目，内面はヘラ削りされる。復原口径23.3cm，残存器高18.0cmの大きさ。29は口縁部が肥厚せず緩やかに外反し，胴部は膨らむ。胴部から頸部の外面はハケ目，頸部下の内面はヘラ削りされる。復原口径21.4cmの大きさである。30～33は外反する口縁部がやや肥厚して胴部が膨らむ。胴部外面はナデ調整，内面は頸部までヘラ削りされるが，32の外面には一部ハケ目がみられる。32の復原口径は29.2cmある。39～41は肥厚する口縁部の外反が強めで胴部も膨らむ。胴部外面はハケ目，内面は頸部までヘラ削りされる。

35は口縁部が肥厚せずに外反する小形甕で胴部は膨らまない。内外面ともに磨滅して調整手法は不明である。34・36～38・43は口縁部が肥厚して短く外反する小形甕で胴部は膨らまない。36・38・43で胴部外面はハケ目，内面は頸部までヘラ削りされる。43は復原口径15.8cmの大きさである。44は口縁部が肥厚せずに外反するが端部で内彎気味になり，胴部は膨らまない。口縁部内面にハケ目が残るものの全体にナデ調整される。復原口径19.6cmの大きさで，砂粒・雲母を含み，茶褐色に焼成されている。

土師器鍋（42） 復原口径31.6cmの大きさ。端部はやや肥厚して，強く外反する。胴部は内に窄まり，外面をハケ目，内面をヘラ削りされる。胎土に砂粒・石英・雲母を含み，褐色ないし暗褐色に焼成され，外面に煤が付着する。

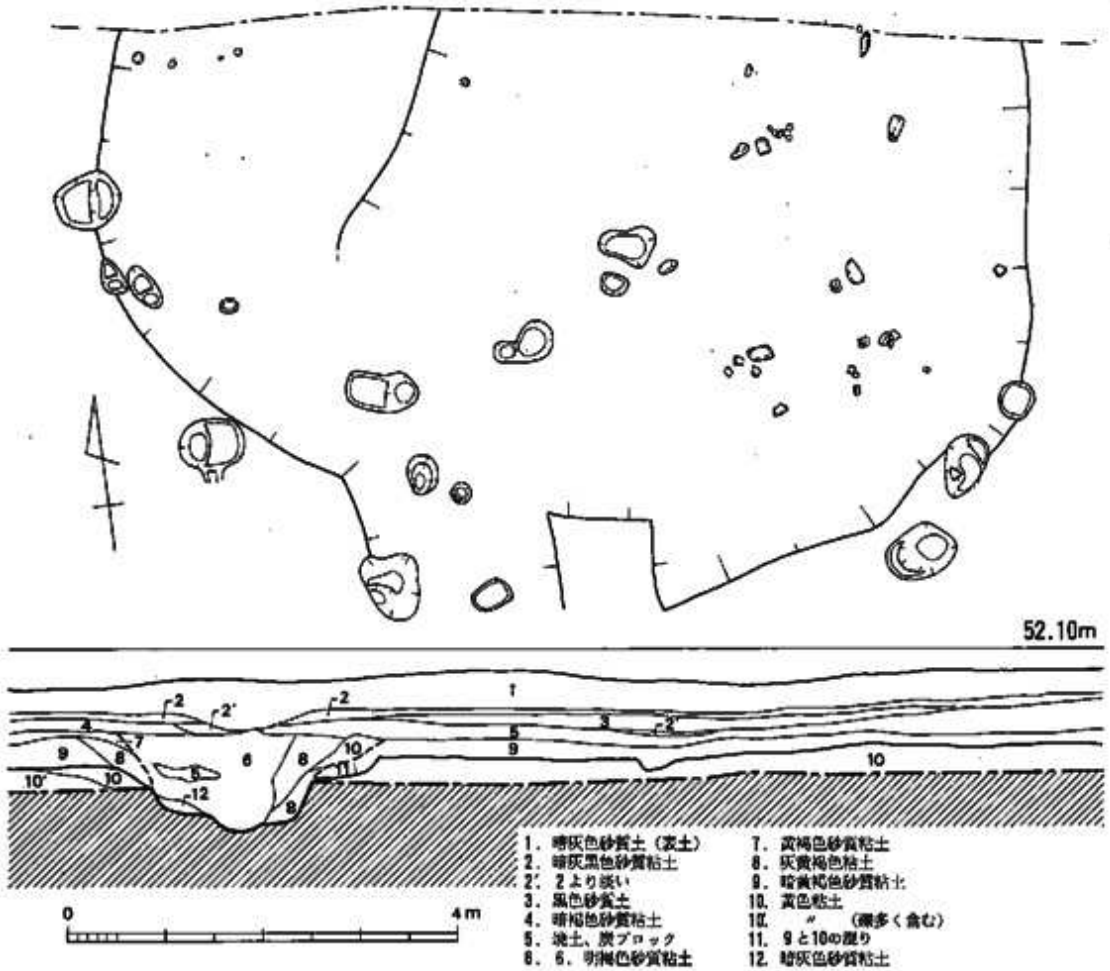
土師器甑（45） 底部破片で，復原径17.5cmの大きさ。端部は丸みをもつが肥厚しない。内外面にヘラ削りの痕跡がみられ，砂粒を含む胎土で淡橙色に焼成されている。

出土土器では，須恵器杯蓋・杯身の特徴から，7世紀後半から8世紀中頃の時期幅におさまる。主には8世紀中頃を考えておきたい。

4）落ち込み遺構（図版34－1・2，第146図）

調査区北部に発見された遺構で，溝状の落ち込みを伴う，浅い凹みである。遺構検出面では暗褐色砂質粘性土と黒色土の堆積した部分で，北側は調査区域外に続くが東西9.5m，南北5.1m以上の広さをもつ。須恵器片を含む遺物包含層ではあるが，溝状の落ち込み部分では焼土・木炭の塊をも含む。溝状の落ち込みは，南側の包含層的な部分では輪郭が不明瞭であるが，約0.8mの深さに下がる床面では，幅0.4m程の浅いU字形断面に掘り込まれ，約N10°Wの向きに4.5mの長さを検出した。包含層部分も，他の部分よりもやや層が厚めではあったが，そのまま周辺に同じ層が続いていて，堆積断面を観察すると溝状部分埋没後に掘削されていたことが分かる。

暗黄褐色土の中途から掘り込まれる柱穴状ピットは西半分に集中していて，直径20cm～50cm，



第146図　落ち込み遺構実測図（1／80）

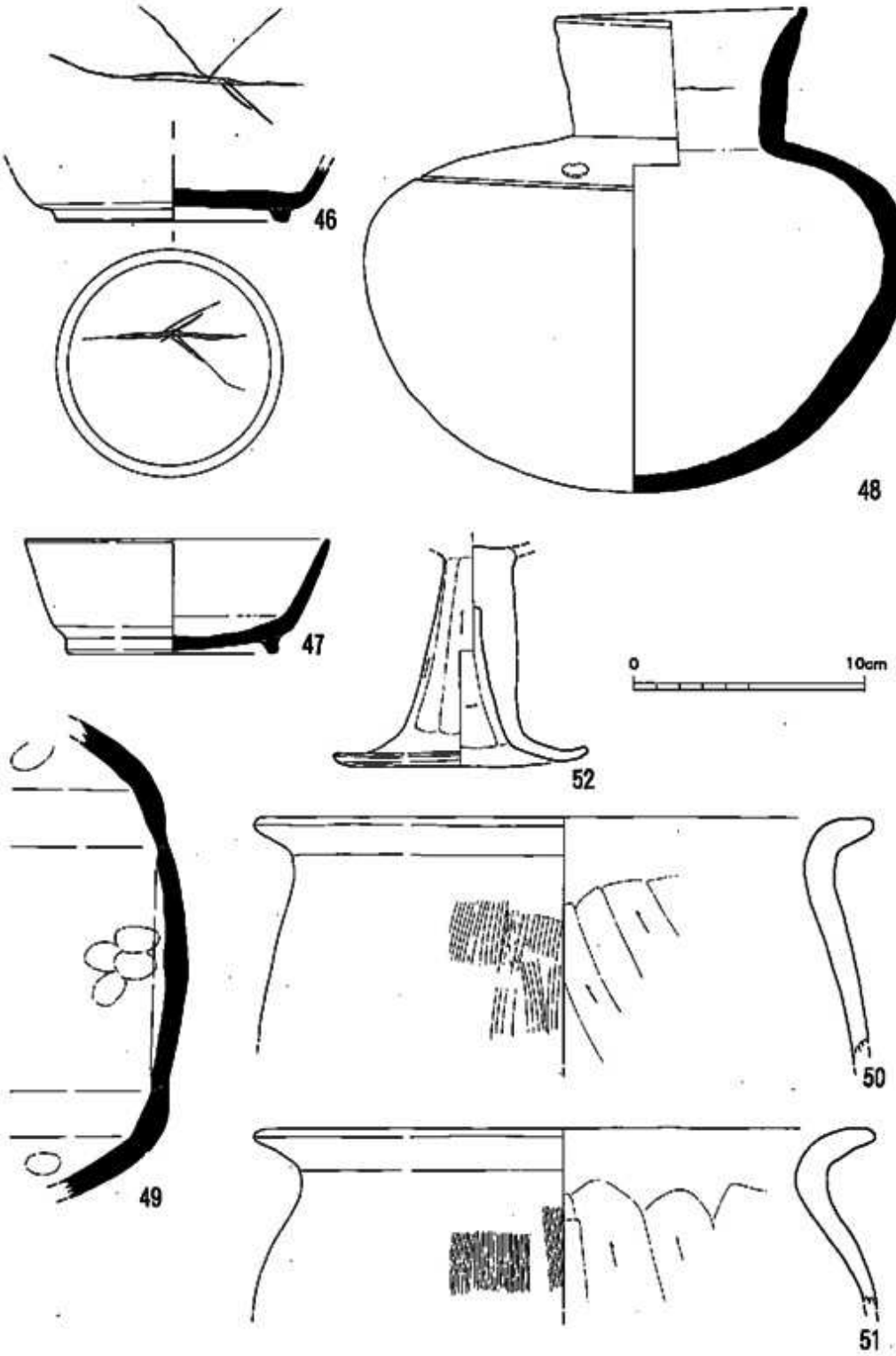
深さ20cm～40cmの大きさである。

出土遺物（図版43，第147図）

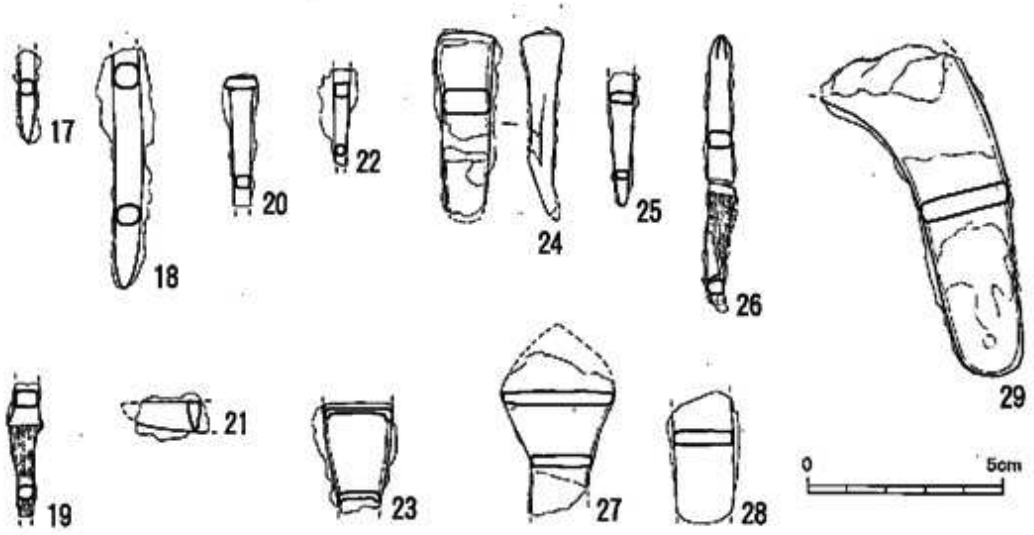
須恵器杯身（46・47）　やや外開きの高台を有する杯身で，46は内外底面に細いヘラで描いた絵がある。絵は鳥が羽ばたく姿を表現現したものにみえるが，ヘラ記号かも知れない。47は復原口径13.2cm，器高4.9cm，高台径9.2cmの大きさの，口縁部が直線的に立ち上がる杯身である。胎土に砂粒を含み，淡緑灰色ないし淡灰色に焼成されている。

須恵器平瓶（48）　底部が丸い扁球形の体部に直口縁のような口縁部が付く平瓶で，復原口径11.0～12.5cm，器高20.7cm，胴最大径23.6cmの大きさ。肩部に沈線が1条巡り，小さなボタン状の突起が付く。口縁部は緩やかに外反して，端部はつまんだように凹む。胴部下半は内外面ともに叩き目の痕跡がみられ，砂粒を含む胎土は淡青灰色に焼成されている。

須恵器提瓶（49）　胴部破片で胴部外径21.0cm以上の大きさであり，胴部中央の成形時蓋は



第147図　落ち込み遺構出土土器実測図（1/3）



第148図　出土鉄製品実測図２（１/２）

直径11.0cm弱の大きさ。外面はカキ目調整，内面は回転ナデ，ナデ調整される。胎土に砂粒を含み，淡緑灰色に焼成されている。

土師器甕（50・51） ともに復原口径27.0cmの大きさで，口縁部はあまり肥厚せずに強く外反する。50は胴部の膨らみが少なく，51は大きく膨らむ。胴部外面はハケ目調整，内面はヘラ削りされる。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石を含み，淡茶橙色・淡褐色に焼成されている。

土師器高杯（52） 杯部を欠くが，細い柱状部を介して，裾部は屈曲して外に反る。上部のみ中実の柱状部は外面を縦方向，内面を横方向にヘラ削り，裾部はヨコナデ調整される。

鉄製品（図版48，第148図）

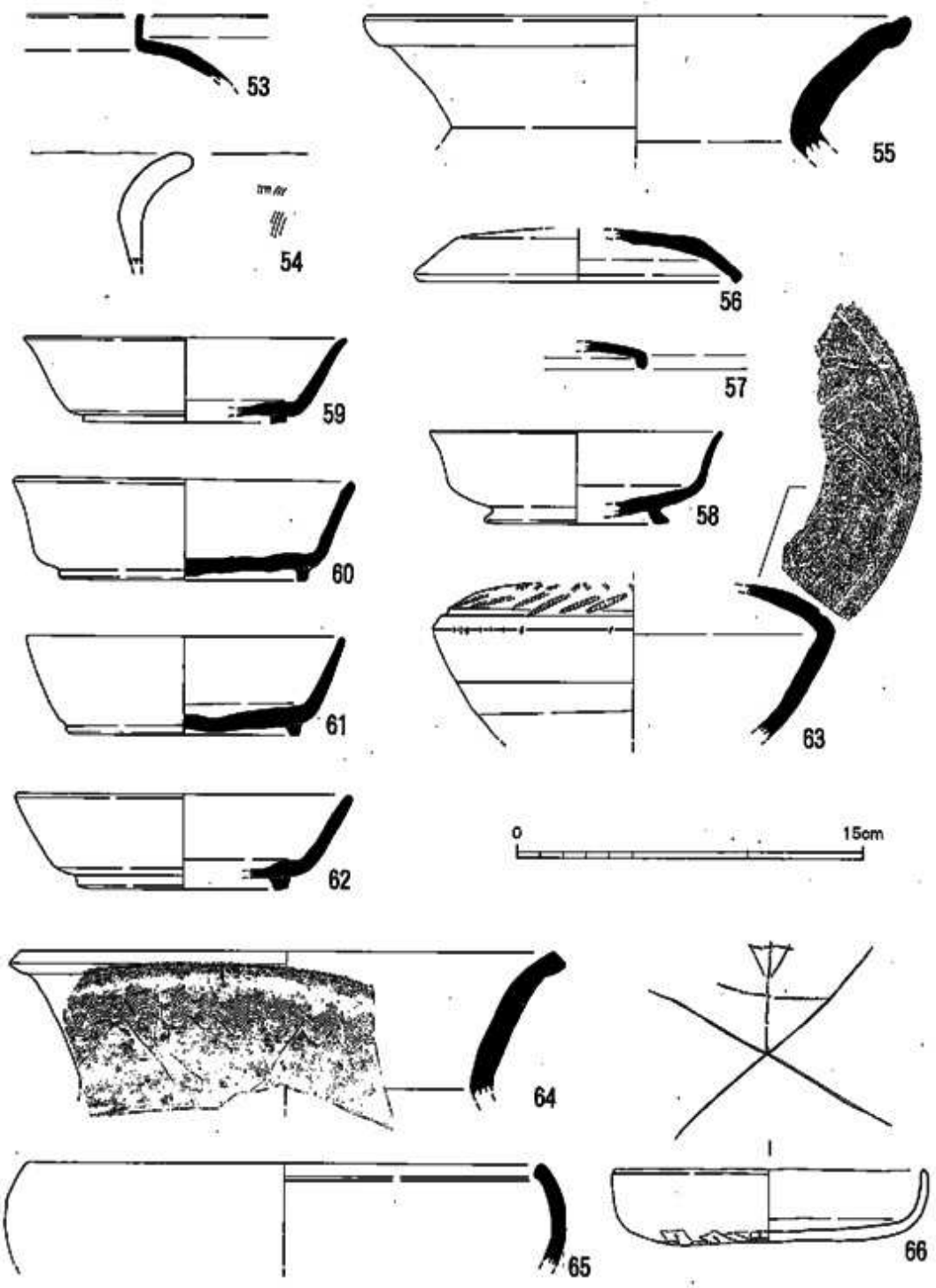
鉄　鏃（27・28） 27は先端を欠くが圭頭広根の鏃で，残存長4.2cm，身部幅2.8cm，厚み0.3cmの大きさ。28は広根の部分であろうか。

不明鉄製品（29） 先端側を欠くが，鏃の柄の部分に似た形である。鏃であれば刃に相当する内彎した縁は刃をなさない。現存長8.5cm，幅1.5～2.9cm，厚さ0.5cmの大きさで，基部端は丸みをもち，目釘穴らしい痕跡がみられる。

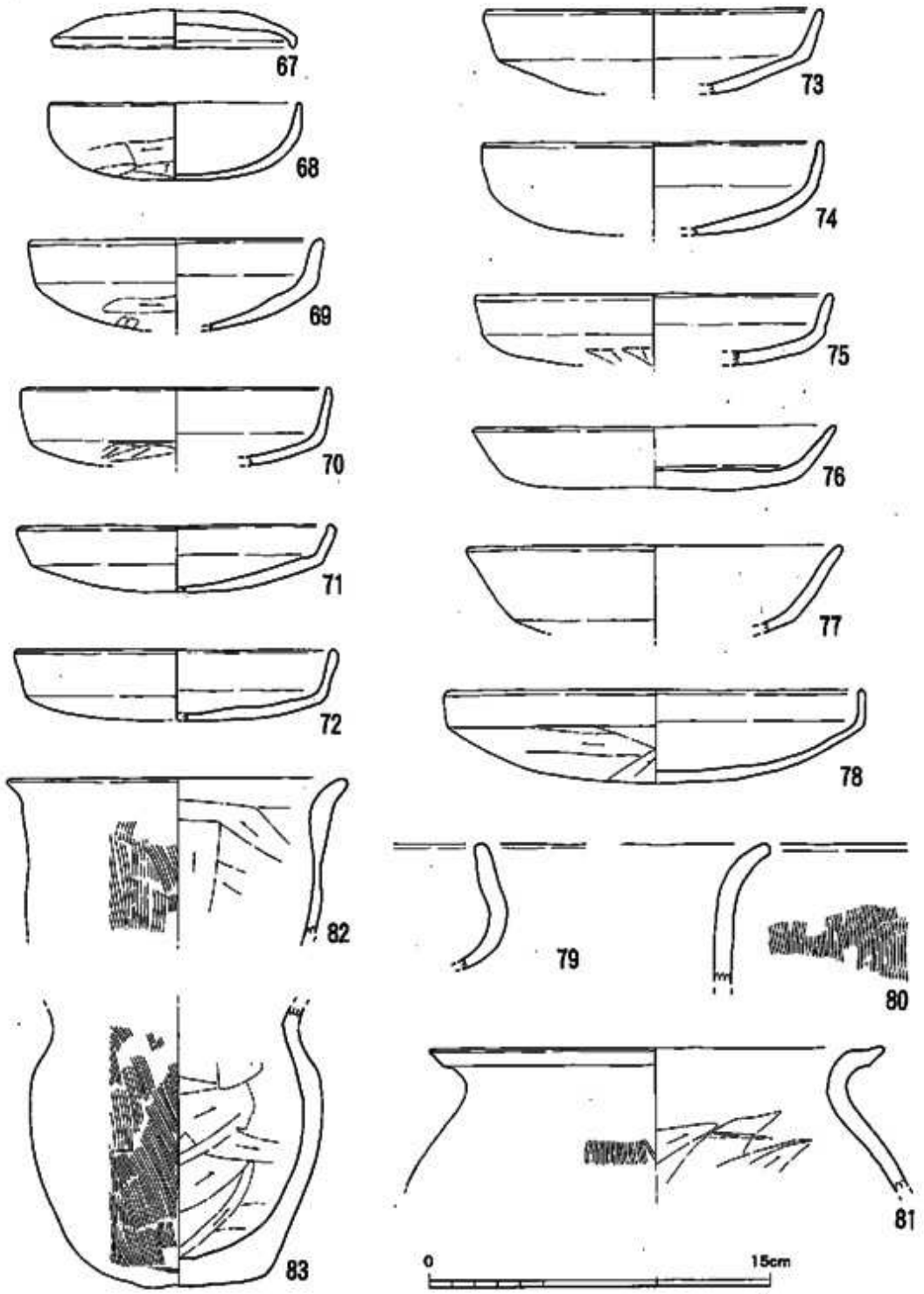
出土土器で，須恵器杯身は高台の特徴からみて８世紀前半頃とみられる。他の器種では７世紀代の可能性も無くもないが，一応８世紀の方にみておきたい。

５）柱穴状ピット出土遺物（図版44，第12・148～151図）

第149図に図示した土器のうち，53～55は前述した掘立柱建物跡の柱穴内から出土した資料である。このほか建物跡や住居跡に直接伴わない可能性が高いとはいえ，ピット内から種々の



第149図　建物跡柱穴・柱穴状ピット出土土器実測図1（1/3）



第150図　柱穴状ピット出土土器実測図２（１/３）

遺物が出土している。ここではそのうち主なものを紹介する。

土　器（第149～151図）

須恵器杯蓋（56・57）　身受けのかえりが鳥嘴状をなすが，やや退化して鈍い。56は復原口径14.3cm，残存器高2.2cmで，淡緑灰色に堅く焼成されている。p21とp33から出土した。

須恵器杯身（58～62）　58は復原口径12.7cm，器高4.0cmで，高台は径8.0cmの大きさの外開きに跳ね気味。口縁部は緩やかに外反する。p19から出土した。59～62は四角い高台を有する杯身で，器壁が薄く口縁部が外反する例（59）と，器壁が若干厚めで口縁部が直線的に立ち上がる例（60～62）がある。59は復原口径14.0cm・器高3.7cm，60は口径14.8cm・器高4.4cm，61は復原口径13.9cm・器高4.3cm，62は復原口径14.8cm・器高4.2cmの大きさである。p270・p254・p181・p287から出土し，淡緑灰色・淡青灰色などに焼成されている。

須恵器壺（63）　口頸部・底部を失うが，最大径14.7cmの大きさの胴部は稜をもって屈曲する。肩部には板小口の刺突による鍛杉状文様がみられる。p181から出土した。

須恵器甕（64）　甕の口縁部破片で復原口径24.2cmの大きさ。口縁端部は外へ肥厚気味で面をもつ。口縁部外面には波状文が描かれる。黒灰色に堅く焼成され，p79から出土した。

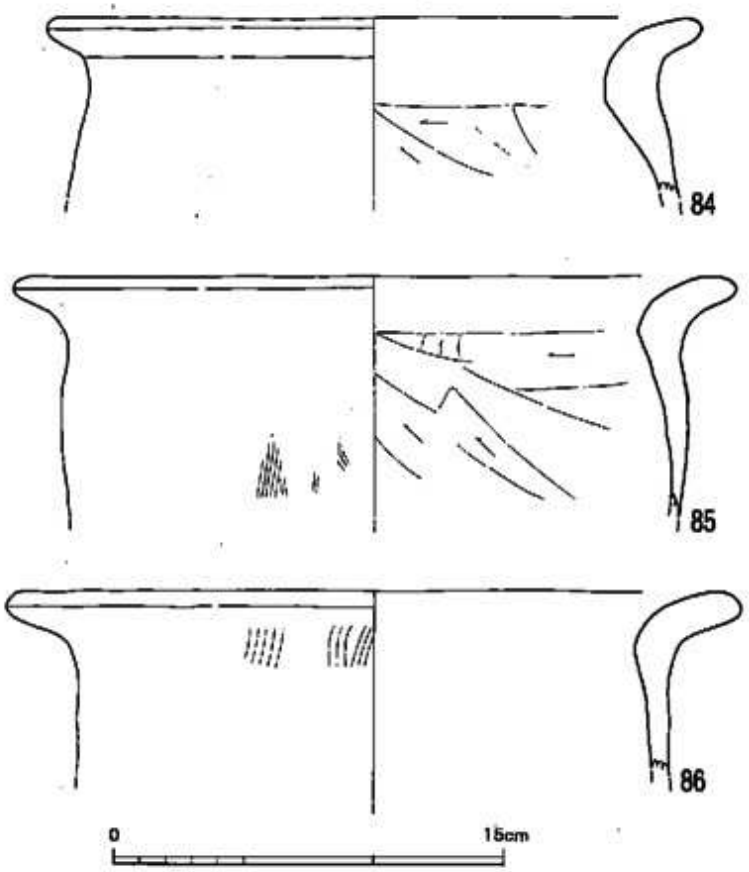
須恵器鉢（65）　復原口径22.4cmの大きさで，口縁部は内彎する。p285から出土した。

土師器杯蓋（67）　口径10.7cm，器高1.6cmの大きさで，口縁端部は鳥嘴状をなす。p65から出土した。

土師器杯（66・68～78）　66は口径13.8cm，器高3.3cmの大きさで，ヘラ削りされる平らな底部から口縁部が内彎気味に立ち上がる。内底面にはヘラ先で描いた絵がみられる。絵は十文字の交差点に十文字が立ち，上部に逆三角形が乗るように見えるが，性格は不明（図版48）。p254から出土した。68は復原口径11.0cm，器高3.4cmの大きさでp167から出土した。口縁部はヨコナデ，外底部はヘラ削りされる。69～73・75・77・78はヘラ削りされる底部から稜をなして口縁部が立ち上がる杯である。口径は順に13.0cm・13.6cm・14.0cm・14.3cm・15.0cm・15.8cm・16.6cm・18.6cmである。69・73・75・77は口縁部が外開きに立ち上がり器壁はやや厚い。71・72は口縁端部が肥厚気味で内側に凹む。78は復原口径18.6cm，器高4.1cmの大きさで口縁部は直に立ち上がり，器壁は薄めである。74・76は底部と口縁部の境に稜をもたないが，74は内彎気味に立ち上がり，復原口径15.0cm，76は外開きで口径15.9cm，器高2.9cmの大きさで皿に似た器形である。68～78は順にp167・p254・p151・p74・p179・p174・p180・p179・p190・p267・p206から出土した。

土師器椀（79）　胴部が丸く膨らみ，口縁部が内傾する口縁部破片である。底部はヘラ削りされ，淡褐色に焼成されている。p176から出土した。

土師器甕（80～86）　80は肥厚せずに如意状に外反する口縁部破片である。胴部外面はハケ目，内面はナデられる。p14から出土した。81はp134から出土した復原口径20.0cmの大きさ



第151図　柱穴状ピット出土土器実測図3（1/3）

の甕で，口縁部は強めに外反して端部は外方につまみ上げられる。胴部は膨らみ外面をハケ目，内面はヘラ削りされる。

82・83は小形甕で，p244・p76から出土した。82は口径13.9～14.9cmの大きさで，肥厚した口縁部が如意状に短く外反する。胴部外面はハケ目，内面はヘラ削りされる。83は胴最大径12.8cm，残存器高12.3cmの大きさ。底部は凸レンズ状に膨らみ，胴部外面はハケ目，内面は頸部下までヘラ削りされる。

84～86は肥厚した口縁部が如意状に外反する甕で，復原口径は25.2cm・27.8cm・28.4cmの大きさ。p216・p258・p93から出土した。胴部はあまり膨らまず，外面にはハケ目が残り，内面はヘラ削りされる。これらの甕は概ね，胎土に細砂粒・赤褐色粒・雲母を含み，淡褐色ないし淡橙色などの色調に焼成されている。

土製品（図版47，第12図）

管状土錘（18～20）　順にp117・p108・p7から出土した。18は端部を欠くが現存長4.4cm，

外径1.3cm，孔径0.3cm，重量4.3ｇの大きさだが一方が太い。19は両端を欠くが中膨らみの錘であろう。現存長3.1cm，外径1.3cm，孔径0.3cm，重量4.7ｇの大きさ。20も両端を欠くが，現存長1.8cm，外径1.4cm，孔径0.3cm，重量3.1ｇの大きさである。管状土錘は赤褐色粒などを含み，淡明褐色などの色調に焼成されている。

鉄製品（図版48，第148図）

不明鉄製品（17・18） ｐ54とｐ62から出土した。17は残存長2.4cm，太さ0.4cmの，先端が尖った破片で，鏃の基部であろうか。18は残存長6.1cm，太さ0.7cmの大きさで先端の尖る破片だが全体の形状は不明である。

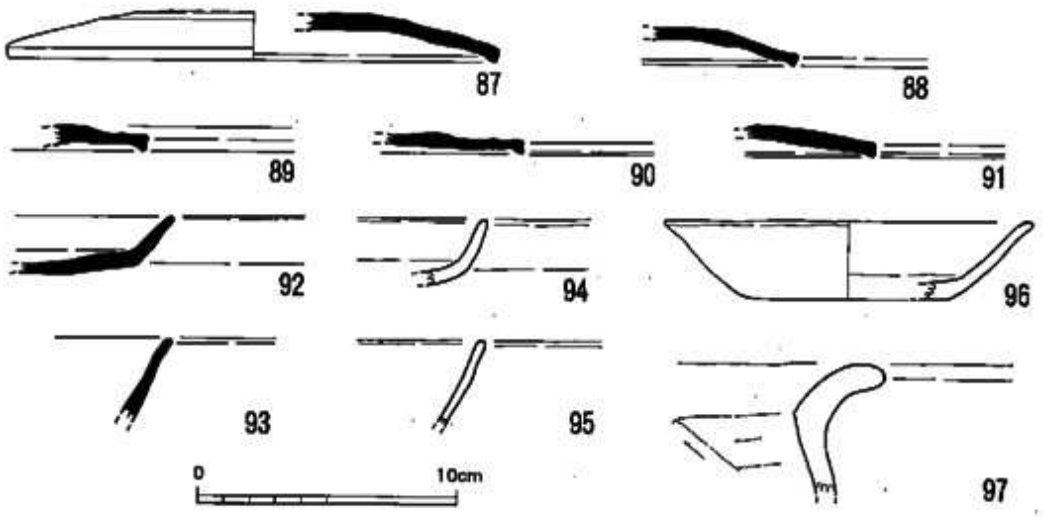
6）包含層出土の遺物（図版45・48，第152～156図）

遺構内出土遺物ではないが，遺構検出時出土の遺物をここで一括して紹介する。第152図は調査区西寄りの住居跡集中部周辺の遺構検出時出土土器，第153～155図は中央部・南寄り・東寄り部分の遺構検出時出土土器，第156図は東端調査区出土土器を取り扱った。

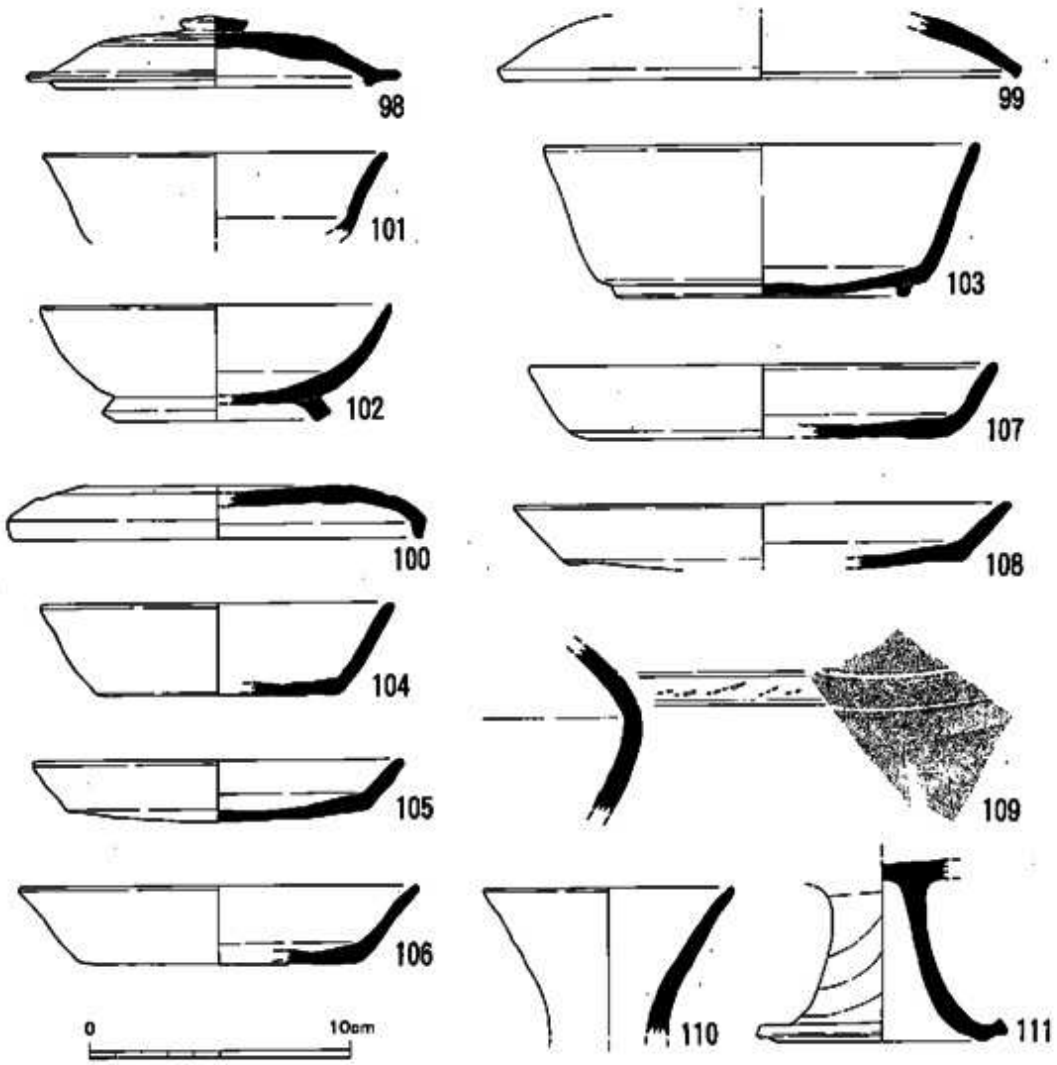
住居跡周辺包含層出土土器（第152図）

須恵器杯蓋（87～91） いずれも鳥嘴状のかえりを口縁端部にもつ杯蓋である。87は復原口径19.0cmの大きさで天井部つまみの有無は不明。91のかえりは鈍く退化し，焼成もあまい。

須恵器杯身（92・93） 92はむしろ皿であろうか。やや平らな底部から稜をなして口縁部が直線的に開く。93は底部を欠くが，高台を有する杯身であろう。口縁部は直線的に外方に立ち上がるが端部で僅かに外反する。



第152図　包含層出土土器実測図１（１/３）



第153図　包含層出土土器実測図２（１/３）

土師器杯（94～96）　94は底部と口縁部の境に稜をもつ杯で，端部は丸みをもつ。96は平らな底部から口縁部が直線的に開いて端部が僅かに外反するが，復原口径14.2cm，器高3.0cmの大きさ。95は外に開く口縁部破片で器壁は薄い。

土師器甕（97）　肥厚して如意状に外反する口縁部破片で，外面は磨滅するが胴部内面はヘラ削りされる。胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒を含み，淡褐色に焼成されている。

中央部等包含層出土土器（第153～155図）

須恵器杯蓋（98～100）　98は身受けのかえりが，断面ｙ字形の口縁端部の杯蓋で，天井部に

扁平な宝珠形つまみが付き，外天井は回転ヘラ削りされる。復原口径14.3cm，器高2.8cmの大きさで，淡灰色に焼成されている。99は鳥嘴状のかえりを有する口縁部破片で，復原口径19.8cmの大きさ。淡緑灰色に焼成されている。100は復原口径15.9cm，器高2.1cmの大きさの杯蓋で天井部つまみの有無は不明。やや長めに折れる鳥嘴状のかえりがある。

須恵器杯身（101～106） 101は復原口径13.3cmの大きさで，口縁部は緩やかに外反する。102は復原口径13.6cm，器高4.4cmの大きさの杯身で，底部から口縁部へは内彎して立ち上がり，高台は外側に開く。103は復原口径16.7cm，器高5.9cmの大きさで，断面形に丸みをもった高台が付き，口縁部は直線的に立ち上がる。104は復原口径13.7cm，器高3.5cmの大きさで，平らな底部から直線的に口縁部が外方へ立ち上がる。105・106は復原口径14.4cmと15.4cmで，器高は2.4cmと3.0cmを測るが，口縁部は外開きに立ち上がり，106はやや外反する。器面は回転ナデおよびナデで調整される。

須恵器皿（107・108） 復原口径18.0cm・19.0cm，器高2.8cm・2.5cm程の大きさで，回転ナデ調整される。口縁部は平らな底部から直線的に外へ開く。淡緑灰色に焼成されている。

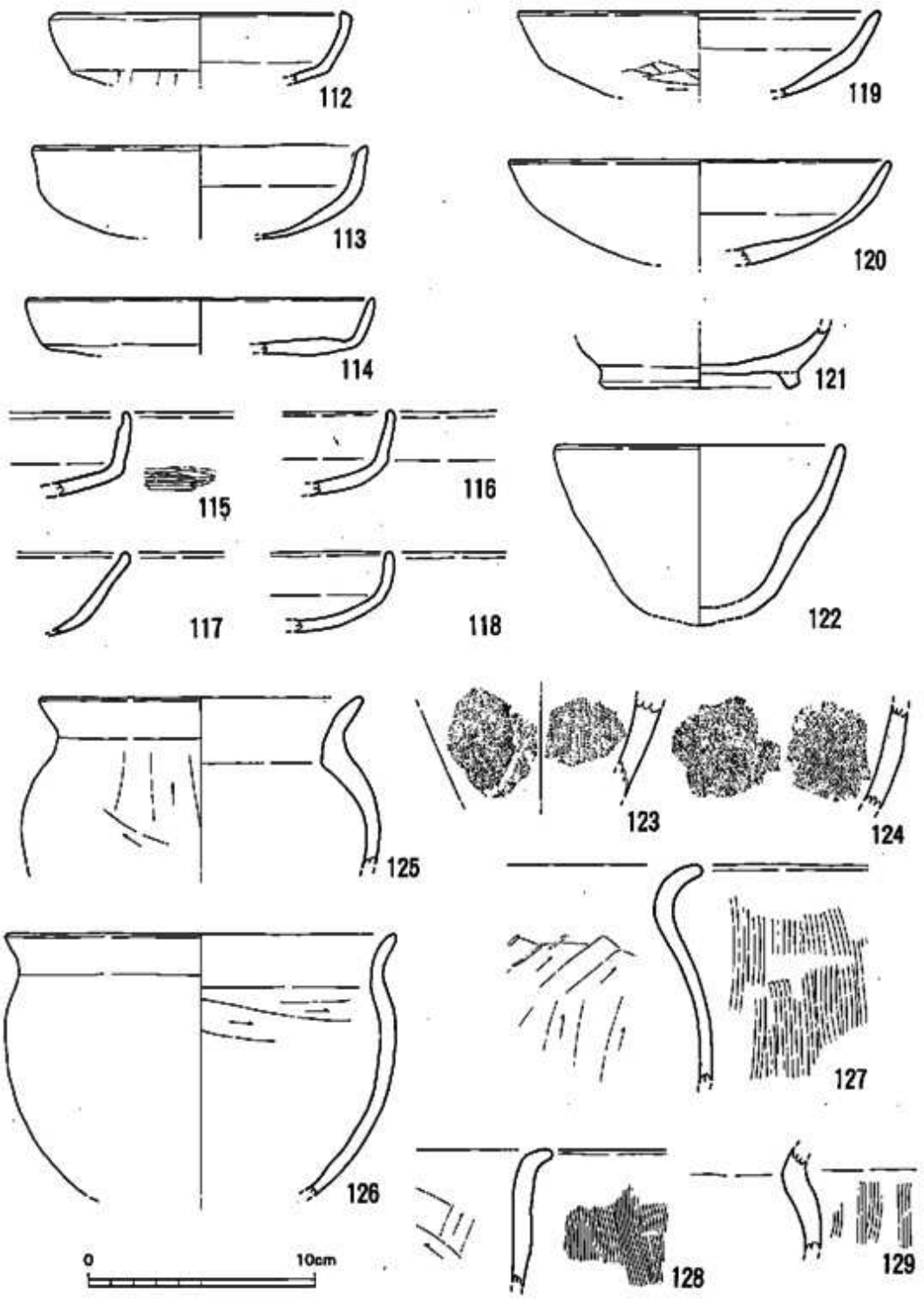
須恵器壷（109・110） 109は胴部破片で，肩部に巡る2条の沈線間に板小口らしい原体の刺突列点がみられる。110は復原口径9.7cmの大きさの，長頸壷口縁部破片で，外反する口縁部内外面とも回転ナデ調整される。

須恵器高杯（111） 杯部を欠くが，中空の柱状部から裾部は外反して，端部は跳ね上がる。内外面ともに回転ナデ調整されるが，柱状部には絞り痕がみられる。裾径9.7cm，脚裾高6.3cmの大きさで，暗灰色に堅く焼成されている。

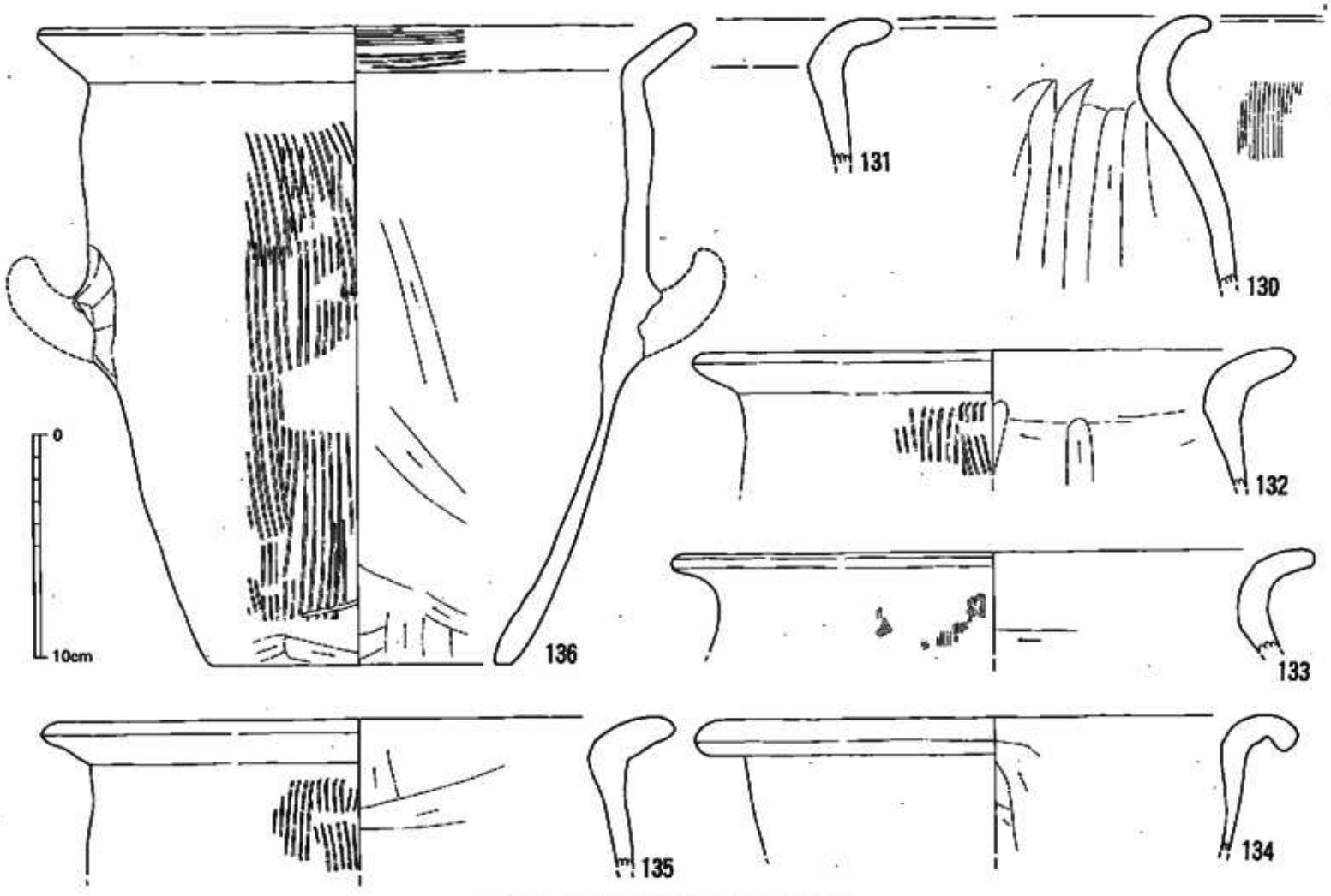
土師器杯（112～121） 112・115・116は底部と口縁部の境に稜をもち，口縁端部は内彎する。112の底部外面はヘラ削りされるが，115はヘラ磨きされる。113・110・118・120は底部と口縁部の境に稜をもたないで，内彎気味に立ち上がる器形で，口縁端部は丸く整えられる。114は底部が平坦で口縁部もやや短く，復原口径15.5cm，器高2.6cmの大きさ。119は復原口径16.0cmの大きさで，120とともにやや深い体部をもち，椀に近い器形だが，外底面はヘラ削りされる。また121は底部端に高台の付く杯で，口縁部を失う。いずれも胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒などを含み，淡褐色・橙褐色などの色調に焼成されている。

製塩土器（122～124） 復原口径12.9cm，器高8.0cmの大きさの小形鉢で，胴部で僅かに屈曲して口縁部は内彎気味に立ち上がり，器面はナデ調整される。123・124は内面に布目圧痕をもつもので，外面はナデ調整される。長胴の器形であろう。いずれも胎土に細砂粒・褐色粒を含み，二次的な火熱を受けて，淡褐色ないし明褐色の色調を呈している。

甕（125～135） 125～129は比較的小形の部類に入る破片である。125は復原口径14.3cmの大きさの，やや胴の張る器形で，胴部外面は板ナデ調整される。126は復原口径17.2cm，胴最大径16.2cmの大きさの胴がさほど膨らまない甕で，器高は13.0cm前後であろう。口縁部は肥厚せ



第154図　包含層出土土器実測図3（1/3）



第155図　包含層出土土器実測図4（1/3）

ずに僅かに外反し，外面は風化・磨滅して調整手法は分からないが，内面はヘラ削りされる。127は口縁部が肥厚せずに外反し，胴部が膨らむ器形で，胴部外面はハケ目，内面はヘラ削りされるが，頸部破片の129はやや器壁が厚い。また128は口縁部が短く如意状に外反するが胴部は膨らまない。

130～135は口径が比較的大きな口縁部破片で，甕や鉢の可能性も否定しえない資料を含む。いずれも口縁部は肥厚して強く外反し，胴部内面は頸部までヘラ削りされる。131・134は胴部外面をナデないし板ナデ調整の他はハケ目調整であるが，130・133が細かなハケで，132・135のハケ目は粗い。134は復原口径27.0cmの大きさで，口縁部は垂れるように外反し，胴部が窄まるので鉢のような器形であろうか。

甕（136） 復原口径13.7cm，器高28.8cm，底径13.7cmの大きさで，口縁部はく字形に屈曲して開く。胴部はあまり膨らまず，円筒状の底部は器壁がやや肥厚する。胴部外面と口縁部内面は粗いハケ目，内面と底部外面はヘラ削りされる。胴部に牛角状把手の剥げ落ちた痕跡がある。胎土に細砂粒・赤褐色粒を含み，茶褐色に焼成されている。

東端調査区包含層出土土器（第156図）

須恵器杯蓋（137） 口縁端部に鳥嘴状のかえりをもつ杯蓋で，復原口径13.6cmの大きさだが，天井部を欠きつまみの有無は分からない。

須恵器杯身（138） やや外開きの高台が付く杯身で，復原口径13.8cm，器高4.8cmの大きさ。口縁部は僅かに外反する。

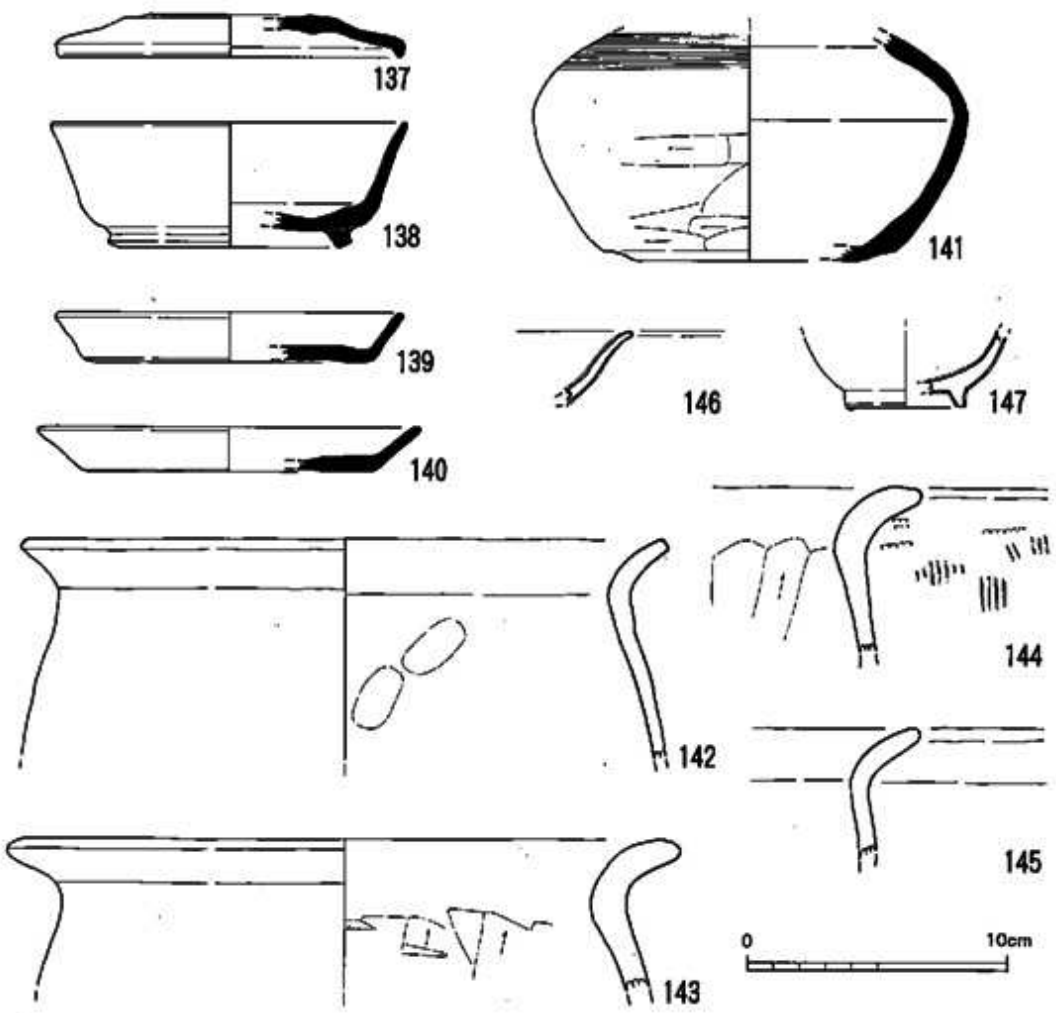
須恵器皿（139・140） 平らな底部から口縁部が直線的に開く杯で，復原口径と器高はそれぞれ，13.4cm・1.9cm，14.8cm・1.7cmを測る。外底面はヘラ切り離しの後にナデられる。

須恵器平瓶（141） 口頸部を欠くために全体の器形は分からないが，天井部に蓋の痕跡がみられるので平瓶であろう。胴最大径16.8cm，残存器高8.7cmの大きさ。平底で算盤玉状に胴部が膨らむ。外面の肩部はカキ目調整，胴下半から底部はヘラ削りされ，内面はナデ調整される。堅い焼成で暗灰色を呈している。

土師器甕（142～145） 142は復原口径25.0cmの大きさの甕で，口縁部は外反して端部は四角い面がある。内外面ともに板ナデないしヨコナデ調整され，堅めに焼成されている。弥生後期末ないし古式土師器の時期であろう。143・144は肥厚した口縁部が外反し，胴部はやや膨らむ甕で，胴部内面はヘラ削りされるが，144はやや粗いハケ目が胴部外面にみられる。145は口縁部が殆ど肥厚せずに外反する甕である。内外面ともにナデないし板ナデ調整される。

白磁皿（146） 東端部で出土したが，器高が3.0cm弱，口径が12～13cm程の大きさであろう。灰白色の胎土で淡青灰白色の釉がかかるが口唇部は露胎である。

陶磁器椀（147） 復原高台径4.7cmの大きさで，胴部が内彎する小形の椀だが，口縁部を欠



第156図　包含層出土土器実測図5（1/3）

く。白灰色の胎土で，黄茶色に染まるが淡青灰色の釉がかかり，高台底は露胎だが，焼台の一部らしい付着物が融着する。

包含層出土石器（図版48，第66図）

砥　石（8～10）　いずれも中央部包含層から出土した。8は暗青灰色を呈する粘板岩質の石材を用いた仕上げ砥石で，肌理は比較的細かい。方柱状だが使用による反りが生じている。長さ8.6cm，幅3.5cm，厚さ3.5cmの大きさ。9は雲母片岩質の砂岩製砥石で，2面が砥面に使用される。長さ7.4cm，幅3.6cm，厚さ2.1cmの大きさ。10は凝灰質砂岩製砥石で，長さ16.3cm，幅5.7cm，厚さ5.3cmの方柱状だが，4面ともによく使用されて，内1面は湾曲し，他の3面に

は刃先の擦り傷がめだつ。

包含層出土鉄製品（図版48，第148図）

鉄　釘（20）　西南部の包含層から出土した。先端を欠くが，残存長3.3cm，頭部の幅0.8cm，頭部の厚み0.3cm，軸部の太さ0.4cmの大きさの角釘である。

刀　子（21・25）　21は西南部包含層から出土した。先端・基部側とも欠くが，刃幅0.8cm，厚み0.4cm弱の先端部付近破片である。25は基部側の破片であろう。長さ3.4cm，幅0.6cm，厚さ0.3cmの大きさで，東端調査区から出土した。

楔状鉄製品（24）　東端調査区包含層から出土した。先端の一部を欠くが，残存長4.7cm，幅1.5cm，厚さ1.0cmの大きさだが，中途で折れ曲がっている。

鉄鏃？（22・26）　22は東部で出土した基部片で，残存長2.4cm，太さ0.4cmの大きさ。26は先端側の破損面がはっきりしないが残存長7.0cmのうち木質の篦被部が3.0cmを占める。やや扁平な棒状で幅0.6cm，厚さ0.4cmの大きさである。

用途不明鉄製品（23）　両端を欠くために全体の形は分からないが，厚さ0.1cm前後の板状で，低いU字形に両縁部が曲がる。残存長2.8cm，幅1.1～1.8cmの大きさをもつ。西北部包含層から出土した。

紡錘車（図版47，第62図16）　34号住居跡の南側で出土した。直径6.8cm，厚さ0.3cm，孔径0.6cmの円盤の片面中央部が直径2.5cm，厚さ0.6～0.7cmに突出し，孔に通る軸棒は長さ1.5cm分が残る。

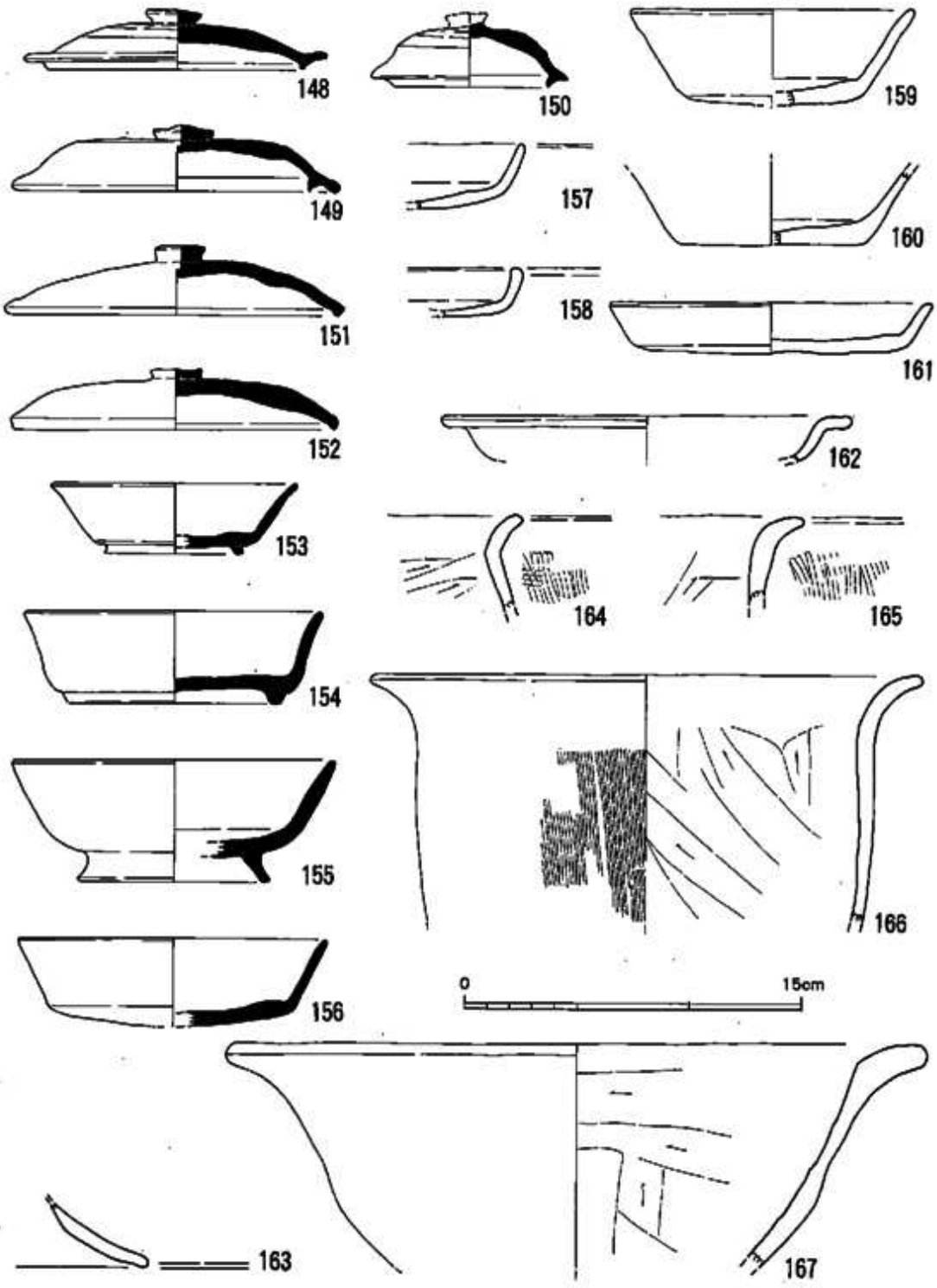
7）表採遺物（図版46，第66・157・158図）

土　器（第157図）

須恵器杯蓋（148～152）　148・149は口縁端部にｙ字形のかえりを有する杯蓋で，天井部に扁平な宝珠形つまみが付く。口縁外径と器高はそれぞれ11.5cm・2.7cm，14.6cm・3.0cmを測る。150は口径の小さな杯に対応する杯蓋で，口縁外径8.7cm，残存器高2.8cmの大きさ。天井部のつまみは剥げ落ちて失う。天井部は丸みをもち，灰緑色に堅く焼成されている。

151・152は口縁端部が鳥嘴状の退化したかえりをなす杯蓋で，天井部に扁平なつまみが付く。口径と器高はそれぞれ14.9cm・3.1cm，14.5cm・2.8cmを測る。

須恵器杯身（153～155）　153は復原口径11.1cm，器高3.2cmの大きさの杯身で，高台は外開き，口縁部は緩やかに外反する。154は復原口径13.3cm，器高4.1cmの大きさで，底部端近くに逆台形断面の高台が付き，口縁部は直に立ち上がるが端部はやや外反する。155は復原口径14.4cm，器高5.4cmの大きさで，高台は長めに外に開き，口縁部は内彎気味に立ち上がるが直線的に開く。



第157図　表採土器実測図（1/3）

須恵器杯（156） 口径13.8cm，器高3.9cmの大きさの杯でやや丸みのある底部から直線的に口縁部が開く器形である。

土師器杯（157～161） 157・158・161は低平な底部から内彎気味ないし直線的に口縁部が立ち上がるが，器高がさほど高くない杯だが，屈曲部に稜をもたない。158は口縁端部が丸みをもってやや肥厚する。161は復原口径14.4cm，器高2.3cmの大きさで，外底面は磨滅するがナデ調整であろう。

159・160は平らな底部から直線的に口縁部が開き，深みのある器形の杯である。159では復原口径12.7cm，器高4.3cmの大きさ。口縁部は端部で僅かに外反する。

土師器皿（162） 口縁部は強く外反して開くが，端部で僅か上方につまみ上げられる。復原口径18.4cm，器高2.5cm前後の大きさであろう。

土師器高杯（163） 外反して開く脚裾部破片で，端部はやや踏ん張るような形状である。柱状部の内面にヘラ削りの痕跡がみられる。

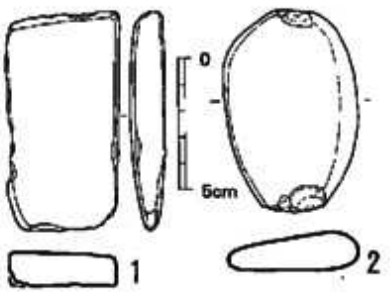
土師器甕（164～166） 164・166は口縁部が如意状に外反するものの肥厚しない甕で，胴部外面はハケ目調整，内面はヘラ削りされる。166は胴部が膨らまず，復原口径24.7cm，胴最大径20.2cmの大きさで，外面のハケ目はやや細い。165は如意状に外反する口縁部がやや肥厚気味である。

土師器鉢（167） 復原口径31.4cmの大きさで，口縁部は肥厚して如意状に外反するが，胴部はそのまま底部へ窄む。胴部外面はナデ調整，内面はヘラ削りされる。胎土に細砂粒・雲母を含み，淡褐色ないし褐色に焼成されている。

石　器（第66図）

砥　石（11） 緑泥片岩製の砥石で，長さ17.8cm，幅9.5cm，厚さ2.7cmの大きさの扁平な楕円形円礫の周縁を敲打調整し，平坦面を砥面に使用しているが，片面には刃先の傷が刻まれる。

調査区域外採集の石器（図版48，第158図）



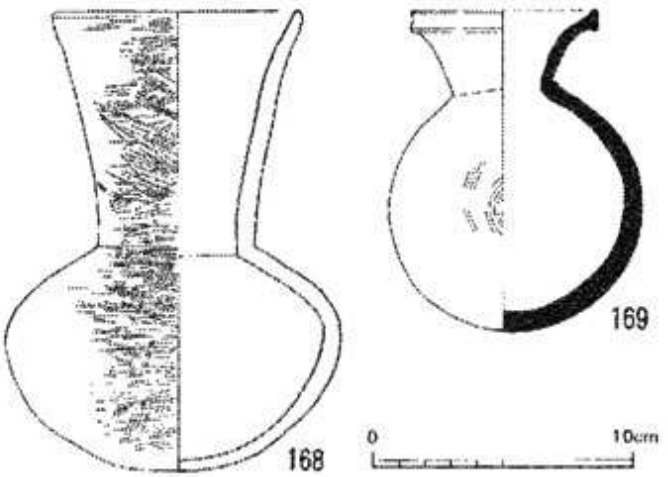
第157図　区外採集石器実測図（1/3）

C地区調査区南側の斜面下で採集したが，1はやや硬めの凝灰質砂岩製砥石，2は花崗岩質砂岩製の打欠石錘である。砥石は各面ともよく使用されるが，長さ8.4cm，幅4.3cm，厚さ1.3cmの大きさ。石錘は扁平楕円形の円礫の長軸両端を打ち欠き調整して紐掛けにするもので，長さ7.7cm，幅5.1cm，厚さ1.5cm，重量84.4gを測る。

伝長島遺跡出土土器

（図版46，第159図）

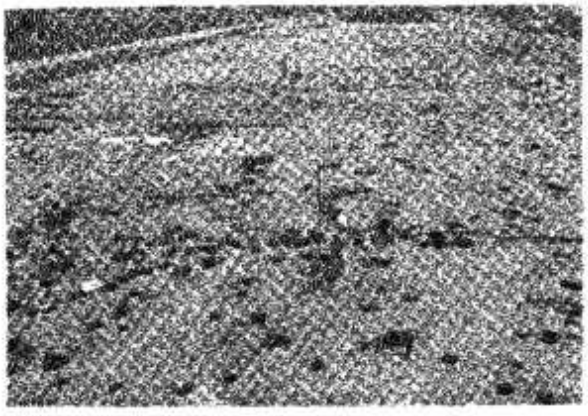
地元朝倉町上須川・尾西在住の岩下氏・星野氏宅に，長島遺跡部分の開墾時に出土したと伝わる遺物がある。出土状況や位置についての詳しいことは全く分からないが，発掘調査期間中に実見する機会があったので紹介することにする。



第159図　伝長島遺跡出土土器実測図（1/3）

長頸壺（168）　口径9.6cm，器高17.6cm，胴最大径12.9cmの大きさで，口縁部は9.1cmの高さを占める。体部は extended 球形で丸底だが，直線的で僅かに開いて立ち上がる口縁部は端部で内彎気味になる。外面は全体にヘラ磨きで調整され，内面はナデ調整される。精良な胎土で淡茶褐色に焼成されるが，外面は赤色顔料が塗布される丹塗磨研土器である。

須恵器提瓶（169）　口径7.2cm，器高12.3cm，胴最大径9.7cmの大きさで，口縁部は外反して端部は三角凸帯状に肥厚する。体部はカキ目調整，口縁部は回転ナデ調整される。　（小池）



調査風景

Ⅳ おわりに

集落について

長島遺跡C地区では，竪穴住居跡51軒を調査したが，出土遺物は7世紀前半から8世紀中頃に亘り，この時期幅の集落であろうと推定される。

長島遺跡のA～C地区全体では，竪穴住居跡は100余軒発見されていて，長島遺跡の位置する段丘上ではC地区の北から東北方向にも平坦面が続くことからみて，更に集落跡の規模は大きいと推定される。今回の報告は，このうちの一部のみで，集落の性格をみてゆくには不充分なものであるが，簡単にとりまとめておきたい。

住居跡は，それぞれ重複関係をもつものもあるが，位置分布から東西2群に分けられ，この群は50m四方程の範囲の中におさまる。また東から順に，28～34号住居跡，35～40・49～51号住居跡，5・6・41～45・48号住居跡，1～4号住居跡，7・9～17号住居跡，18～27号住居跡，8・46・47号住居跡などに小グループにも分けうる。出土遺物からは，7世紀前半からみられるものの，7世紀後半から8世紀前半ないし中頃の遺物を含む住居跡が大半である。小グループが7～10軒程度であることからすれば1軒の存続期間が小グループ1軒であれば10年前後，2軒であれば20年前後ということになろうか。北側にカマドを施設する住居跡が半数以上を占め，東群では9割以上が北側にカマドがある。西群では約2/3が北側で，次いで西側が多く，東側2軒，南側はない。

掘立柱建物跡は，時期を明確にできるだけの積極的な出土資料はないが，10軒の建物のうち1号・2号建物や3号・11号建物が重複することから，総柱建物には建て替えのあったことが明らかである。また竪穴住居跡と重複する例も幾つかあり，6号～8号建物が4号・6号・14号・16号・23号住居跡より後出する。これらの住居跡からは7世紀後半から8世紀前半頃の遺物が出土していて，掘立柱建物の構築時期は少なくとも8世紀前半以降の可能性が高いと言わざるを得なくなる。

このことは，竪穴住居が7世紀から8世紀前半頃まで盛んに用いられていたことと，この後に掘立柱建物が居住施設に変化する可能性が高い。発見された掘立柱建物跡の殆どが総柱建物ではないことと，住居跡のグループにそれぞれ伴うように位置することはこれを裏付けることになろう。

集落の開始期は7世紀前半の遺物を含む住居跡もあるが，7世紀後半の遺物を含む住居跡がかなりあることからして，7世紀後半に急増することになろう。朝倉地方は，斉明天皇の橘廣庭宮遷宮の地でもあり，白村江の戦以降の朝鮮半島での緊張と無縁ではないことを考慮すれば，

筑紫防備と朝倉も無関係ではないであろう。

一方西群の住居跡群の間で発見された不整形土坑からも7世紀後半から8世紀中頃の遺物が出土していて，東群の住居跡群では落ち込み遺構から6世紀後半～8世紀の遺物が出土している。両遺構の性格を断定出来ないが，廃棄物を伴って人為的あるいは自然に埋没した廃棄空間であったことも考えられるが，8世紀中頃以降に続かないことからみて，この集落の終焉の時期を筑紫大宰府防備の東国防人からの廃止などと関連する可能性も考えておきたい。

墓地について

土壙墓は14基発見したが，遺物を伴う例では7世紀後半と8世紀中頃がある。位置的には住居跡と重複した例もあるが，殆どは住居跡を避けた場所にあって群をなすものもみられる。集落の存続期間とほぼ対応して墓地を形成したものと考えられよう。しかし，周辺の終末期群集墳や火葬墓への埋葬が主であり，むしろ絶対量の少なさからみても，この集落の土壙墓に埋葬された被葬者は階層的に下位の者か小児であろう。

古墳は調査区の端に1号墳がある。主体部は残らず，近年筑後平野域で調査例の増加している円形周溝・方形周溝と呼称されるような遺構とも似る。しかし，周溝内から石材や6世紀後半～7世紀前半の土器片が出土することから，集落と隔絶した年代の遺構であって，古墳の可能性が高いと言えよう。また7世紀後半～8世紀の土器片が出土し，南側の墓状斜面から10世紀以降と思われる遺物も出土することから，竪穴住居跡などからなる集落形成期には周溝は完全には埋没しないで，墳丘を留めていた可能性もあり，更に時期が下った10世紀以降に削平されたものと解しておきたい。

通路状遺構について

1号墳の西側に位置する通路状遺構は，段丘下の谷部と段丘上の平坦面を繋ぐ，V字状断面の切り通しの遺構であり，階段を伴う。時期を明確にできる出土遺物はないが，1号墳周溝を避けてカーブすることと，28～34号住居跡のグループと12・13号土壙墓を避けた間の空間に向かうことなどから，集落形成期に使用された通路と判断したい。水の確保はもとより，谷・平野部への往来に使用されたのであろう。同様な遺構は，朝倉郡夜須町砥上上林遺跡（註1）や杷木町志波桑ノ本遺跡（註2）でも調査されている。

銅製丸鞆の出土について

24号住居跡からは銅製丸鞆が1点だけだが，7世紀後半から8世紀前半までの土器類などとともに出土した。裏板は出土せず，塗金の痕跡は確認できない。

丸鞆は，巡方や鉈尾などとともに革帯に取り付けられて，腰飾りとしての銙帯を構成するが，

福岡県内全体をみても出土例は比較的少なく，遠方などを含めて，大宰府史跡・海の中道遺跡・鴻臚館・多々良込田遺跡・博多遺跡群などの他では，北九州市長野A遺跡・甘木市柿原遺跡群D地区7号墳などがあげられる程度である（註3）。

大宰府出土の例は，65－2次調査や70次調査出土資料などは法量が小さく（註4），8世紀中頃ないし後半の土器を共伴する篠振遺跡のST005火葬墓出土資料は幅2.4cm，高さ1.7cmの大きさである（註5）。また銀製銙帯の出土で知られる大阪府伽山遺跡例は幅3.3cm，高さ2.6cmの大きさで8世紀第一四半期頃に考えられる（註6）。

古代の官人が官職・位階の差をもって着用された銙帯は，701年の大宝律令制定によって規定されたが，公式に着用されたのは709年から796年の廃止までとされ，以後平安期には石帯が多用される。

長島遺跡出土の丸鞆は，8世紀前半までの土器が出土する竪穴住居跡から発見されて，時期的には古い段階のものと言えるが，法量的には古いタイプがやや大型で，時期の下降に従って小型化するのであろう。また，長島遺跡の集落の中でも一際規模の大きな24号住居跡から出土したことは，銅製丸鞆を使用できる位階をもった人物が，24号住居跡の使用者に居たのか，この住居跡を度々訪ねる機会があったことを想像させうる。丸鞆の裏板がみられないことは表板が革帯から剥落した可能性が高いことになろう。（小池）

註1　福岡県教育委員会　1993　砥上上林遺跡Ⅰ　福岡県文化財調査報告書　第103集
2　九州横断自動車道建設に伴い1986年に福岡県教育委員会が発掘調査した。現在整理中で未報告。
3　九州歴史資料館　1980　大宰府史跡　昭和54年度発掘調査概報
九州歴史資料館　1982　大宰府史跡　昭和56年度発掘調査概報
福岡市教育委員会　1982　福岡市海の中道遺跡　福岡市埋蔵文化財調査報告書　第87集
福岡市教育委員会　1980　多々良込田遺跡Ⅱ　福岡市埋蔵文化財調査報告書　第53集
福岡市教育委員会　1985　博多Ⅲ　福岡市埋蔵文化財調査報告書　第118集
北九州市教育文化事業団　1987　長野A遺跡2　北九州市埋蔵文化財調査報告書　第54集
福岡県教育委員会　1990　甘木市所在柿原遺跡群の調査Ⅳ（D地区）　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－19－
4　註3の九州歴史資料館1980・1982文献に同じ
5　太宰府市教育委員会　1987　篠振遺跡　太宰府市の文化財　第11集
6　山本彰　1985　32大阪府伽山遺跡　日本考古学年報35　1982年版　日本考古学協会

図　版

長島遺跡周辺航空写真（国土地理院提供　KU-76-2X C11-35）

1　長島遺跡全景航空写真（南西上空から）　　2　長島遺跡C地区航空写真（北上空から）

1　調査区全景航空写真（東上空から）

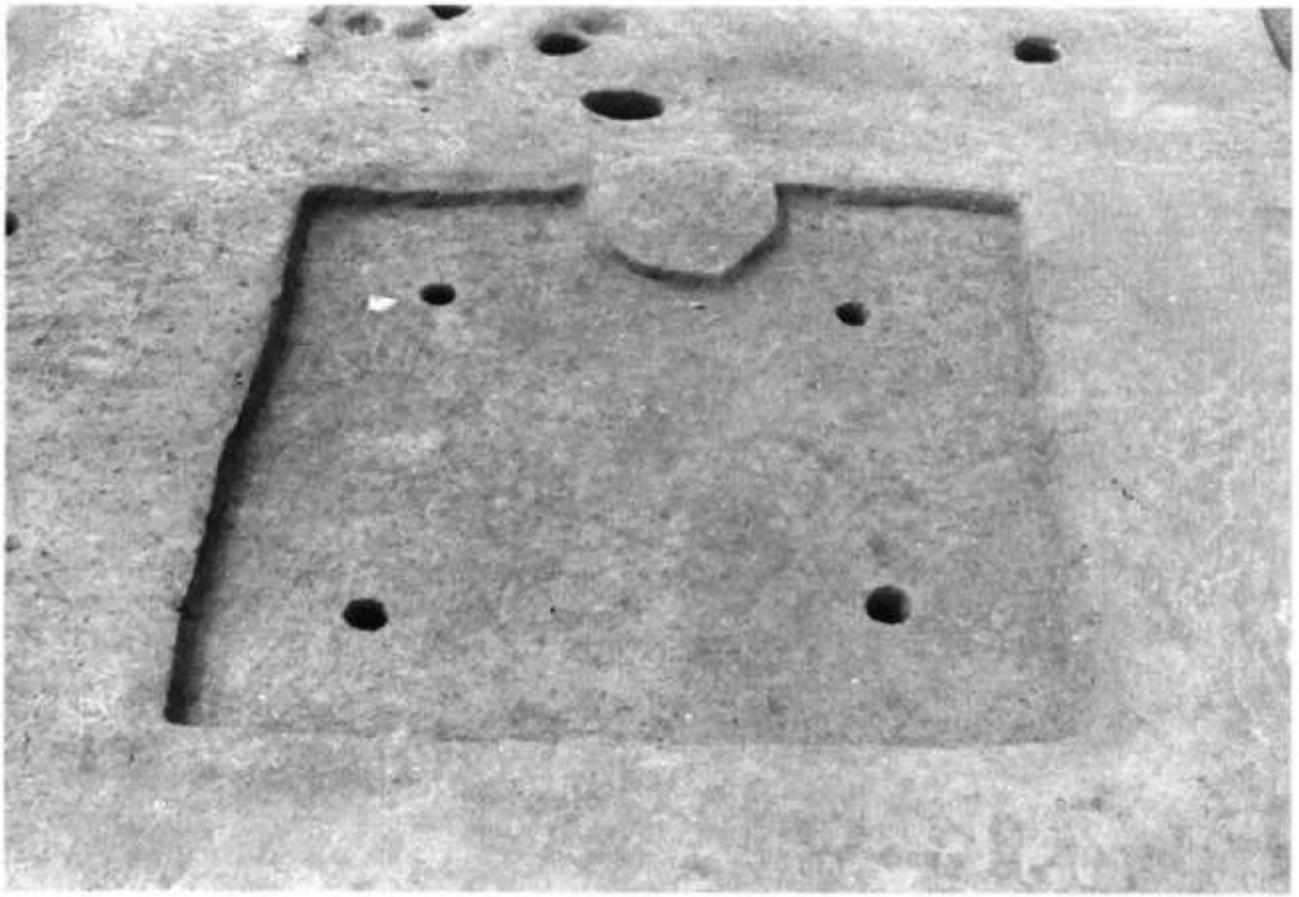
2　調査区全景航空写真（西上空から）

1

2

1　調査区東部（西から）　　2　調査区東端部（西から）

1



2

1　1号住居跡（南から）　　2　2号住居跡（南から）

1

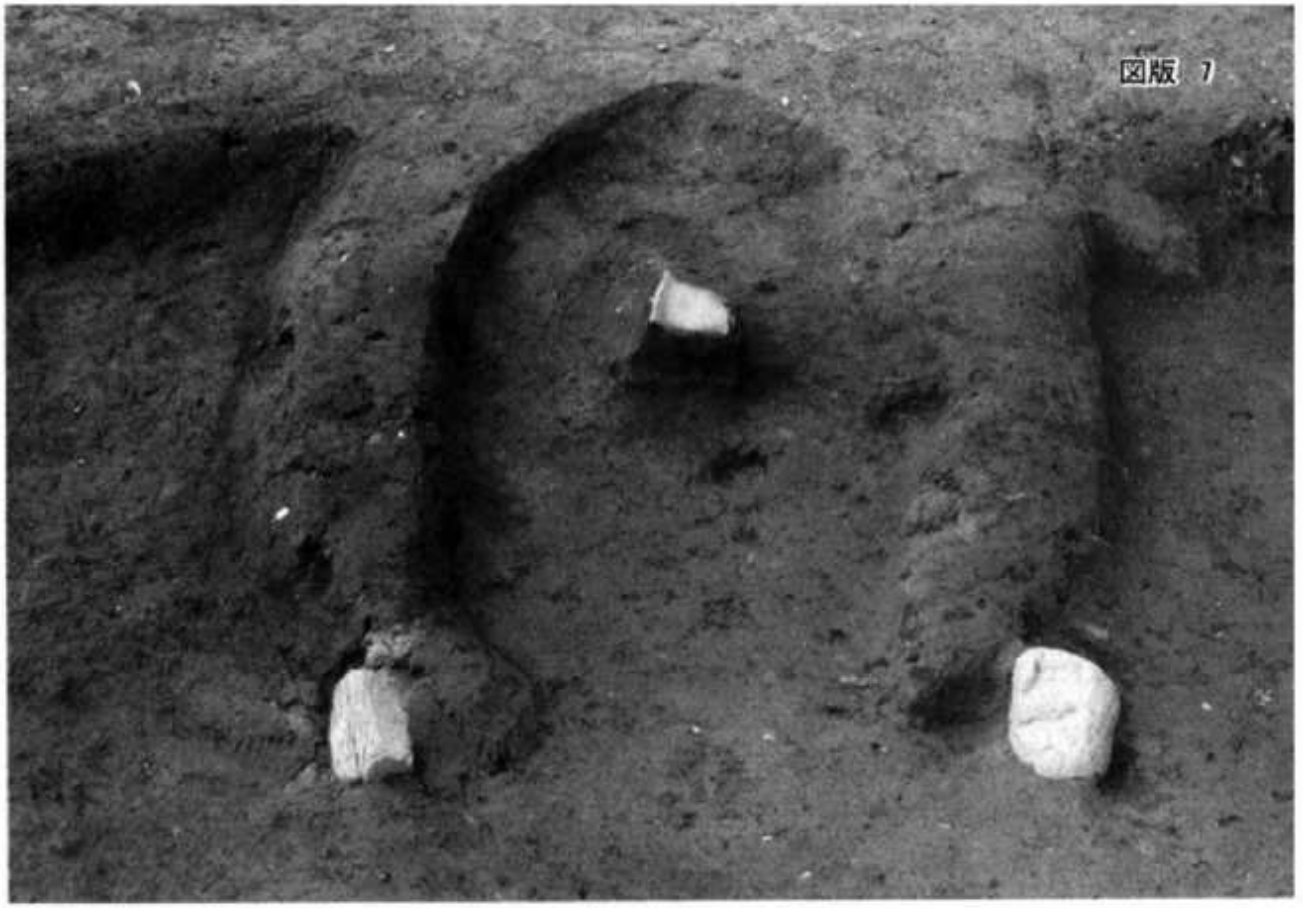
2

3

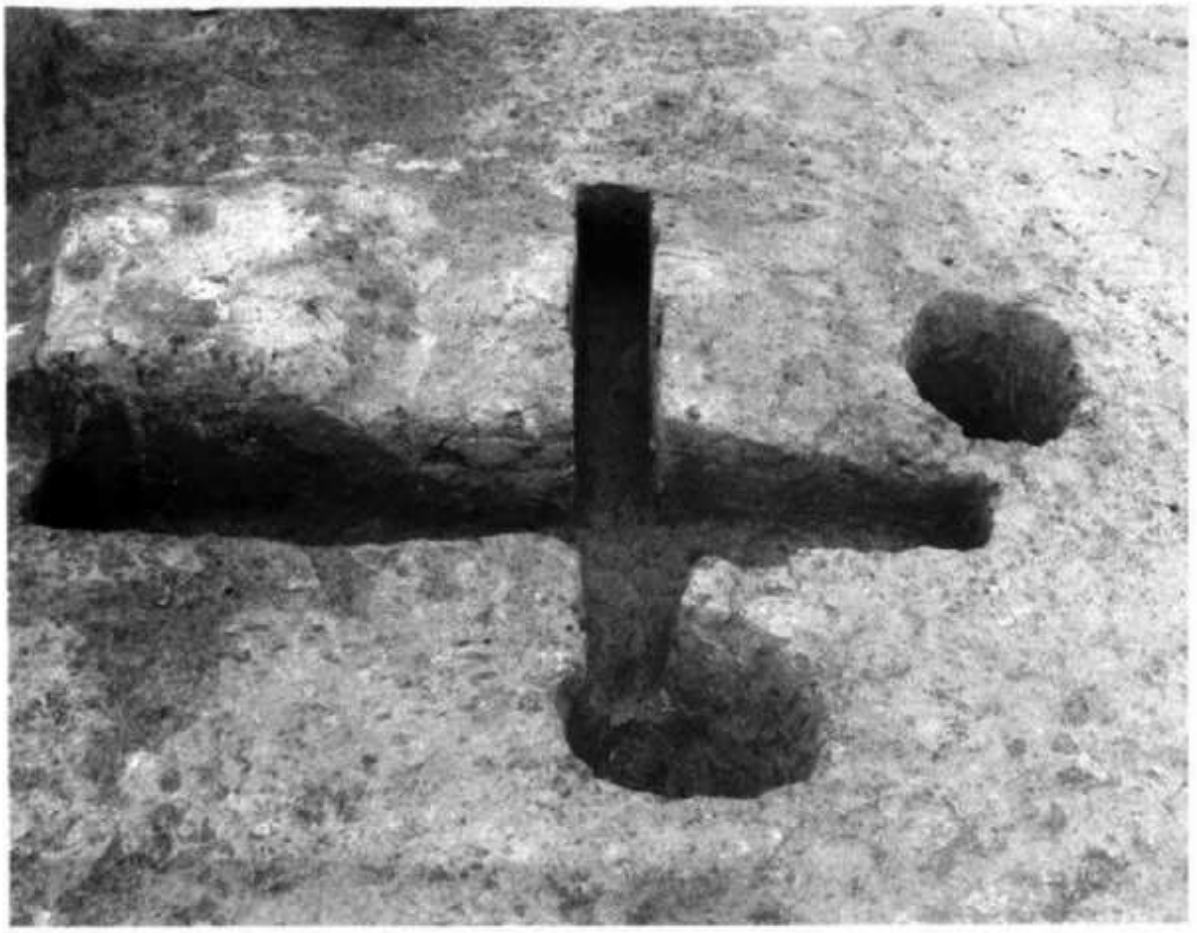
1　3号住居跡カマド（東から）

2　8号住居跡カマド（南から）

3　完掘後の8号住居跡カマド



1



2

1　11号住居跡カマド（東から）　　2　22号住居跡カマド（東から）

1

2

3

1　13号住居跡カマド（南から）

2　16号住居跡カマド（東から）

3　18号住居跡カマド（南から）

1　19号住居跡カマド（東から）

2　23号住居跡東カマド（西から）

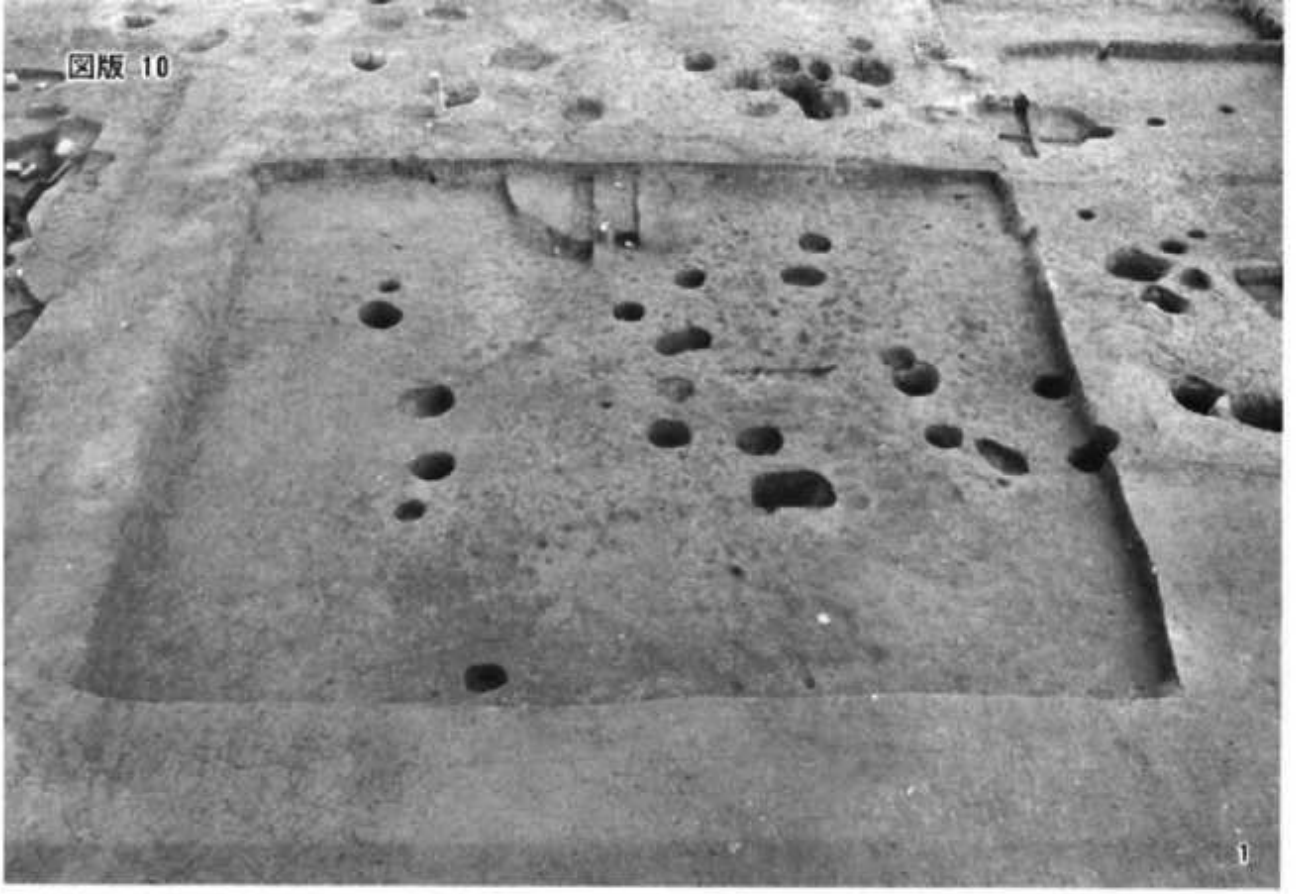
3　23号住居跡遺物出土状況

1

2

3

図版 10



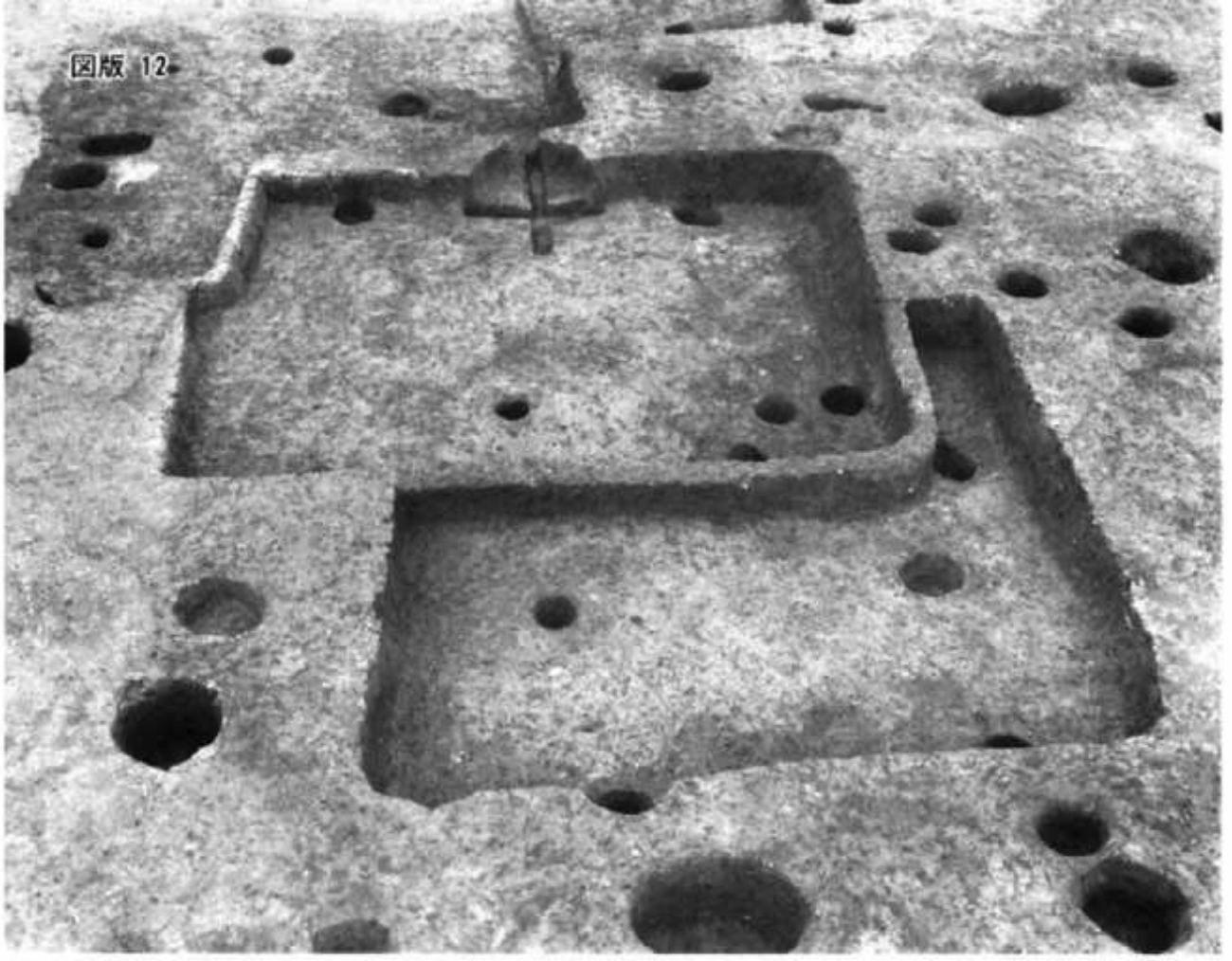
1　24号住居跡（南から）　　2　24号住居跡カマド（南から）　　3　玉帯出土状況

1

2

1　25号住居跡（南から）

2　25号住居跡カマド（南から）

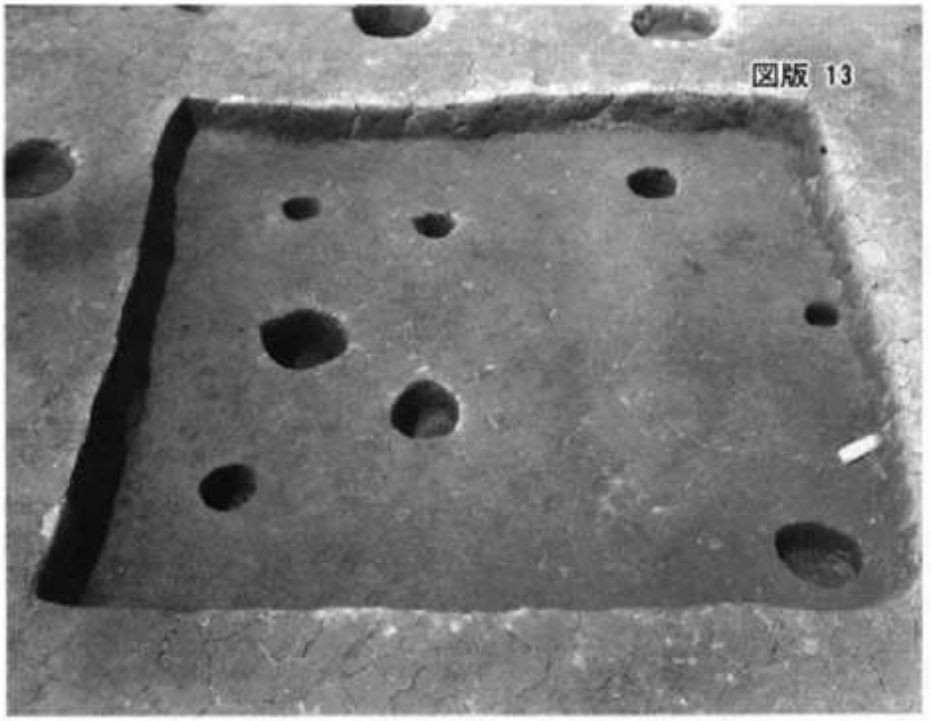


1

2

1　26・27号住居跡（南から）

2　26号住居跡カマド（南から）



1

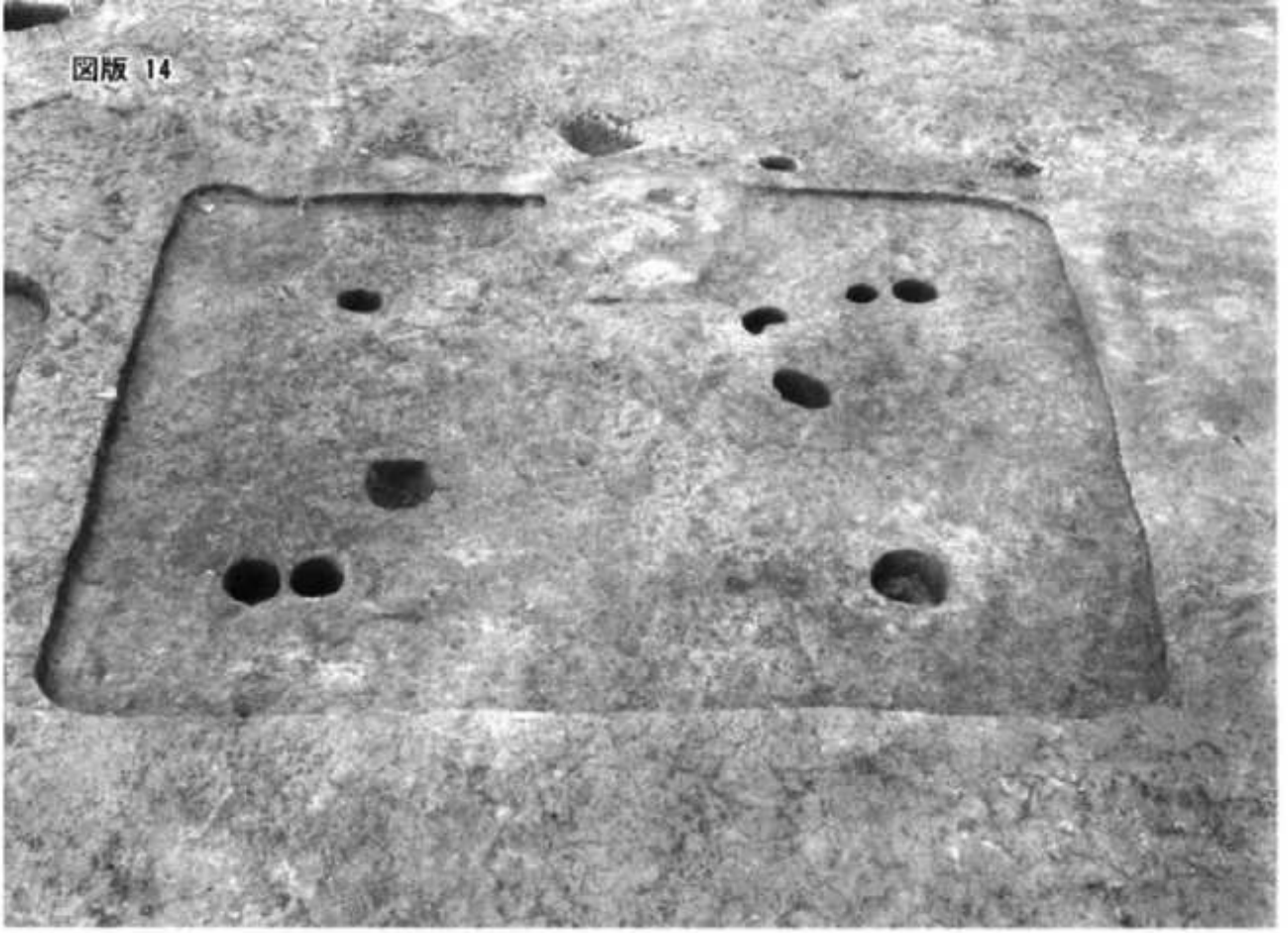
2

3

1　28号住居跡（南から）

2　29号住居跡（南から）

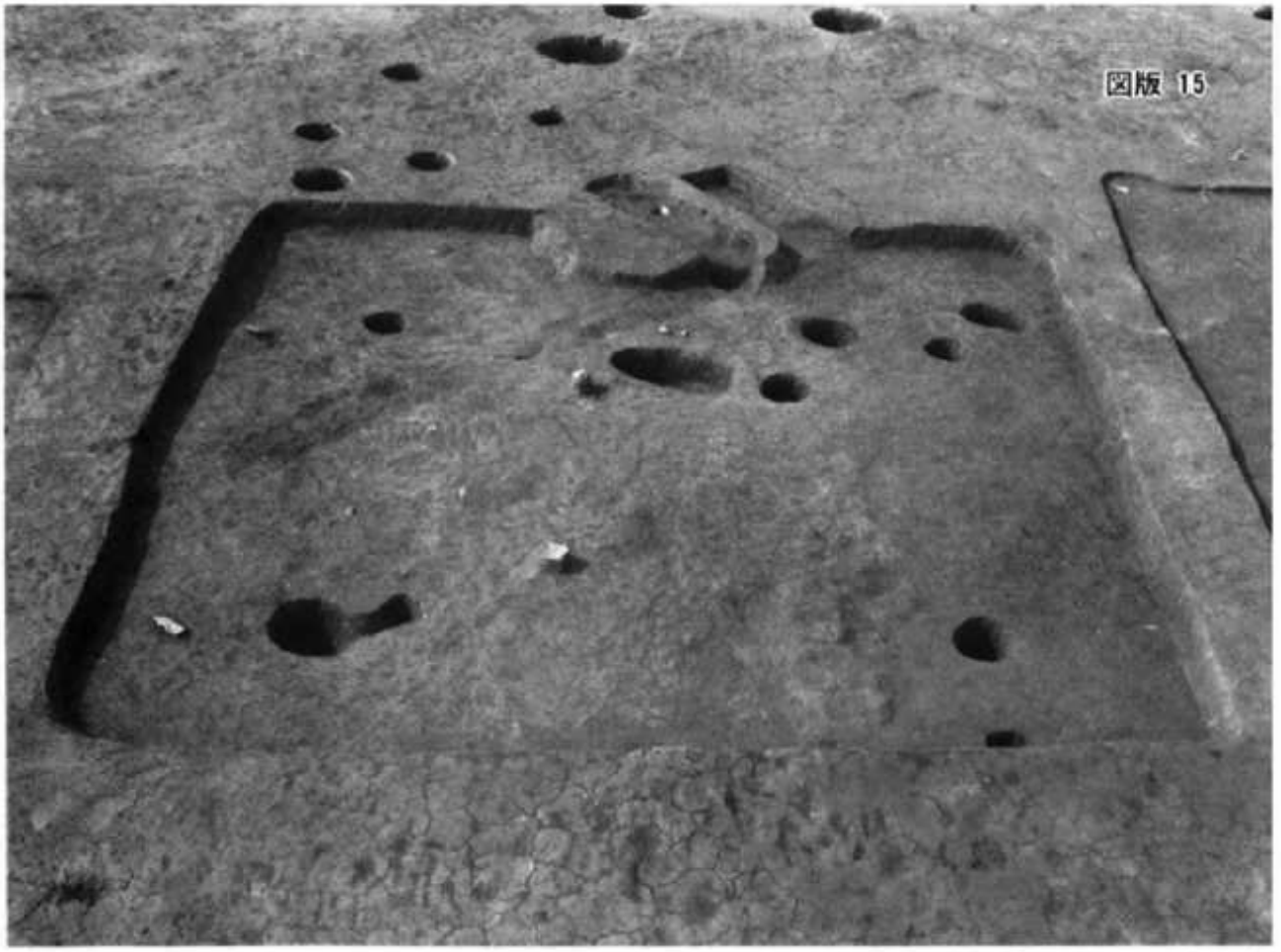
3　30号住居跡（南から）



1

2

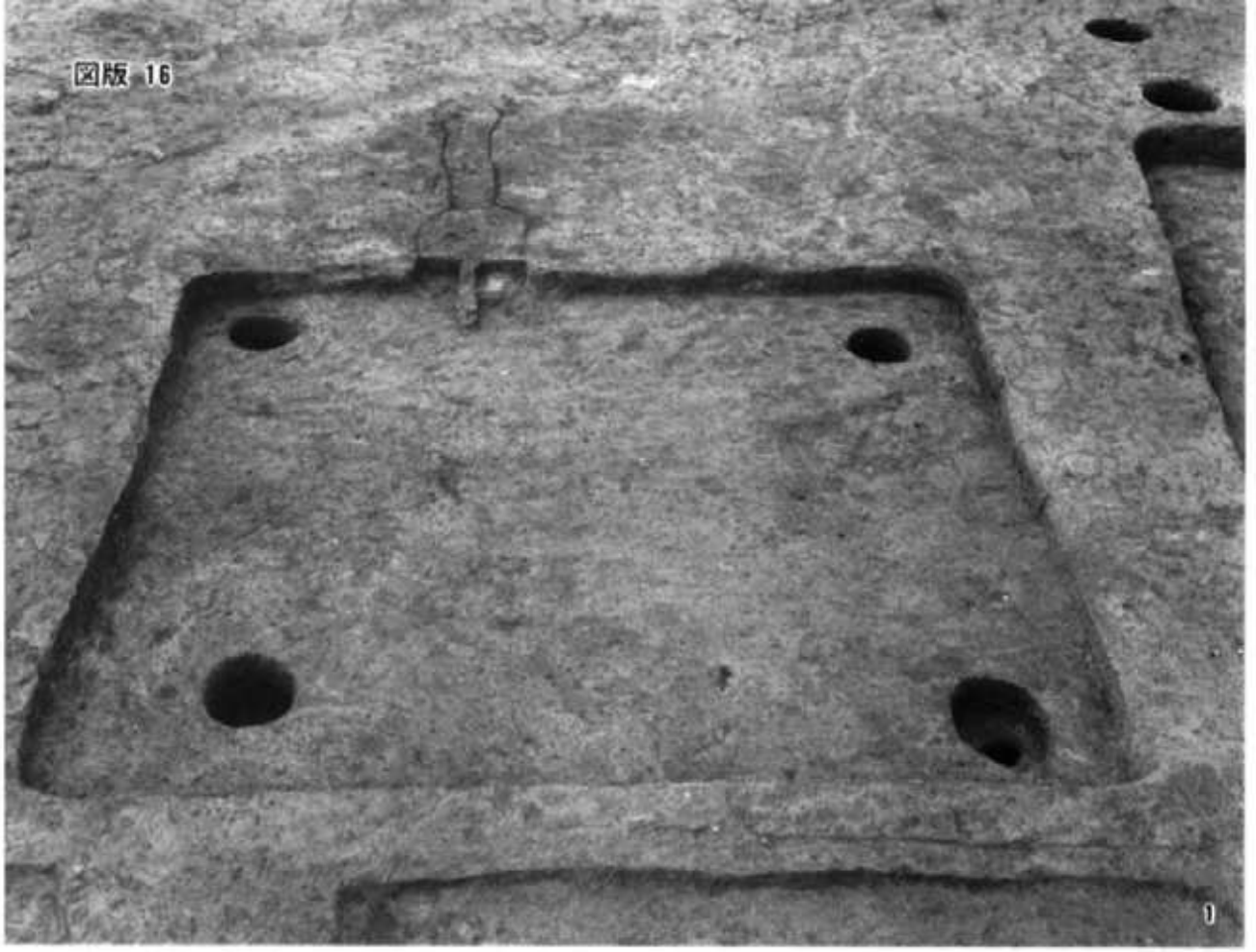
1　31号住居跡（南から）　　2　31号住居跡カマド（南から）

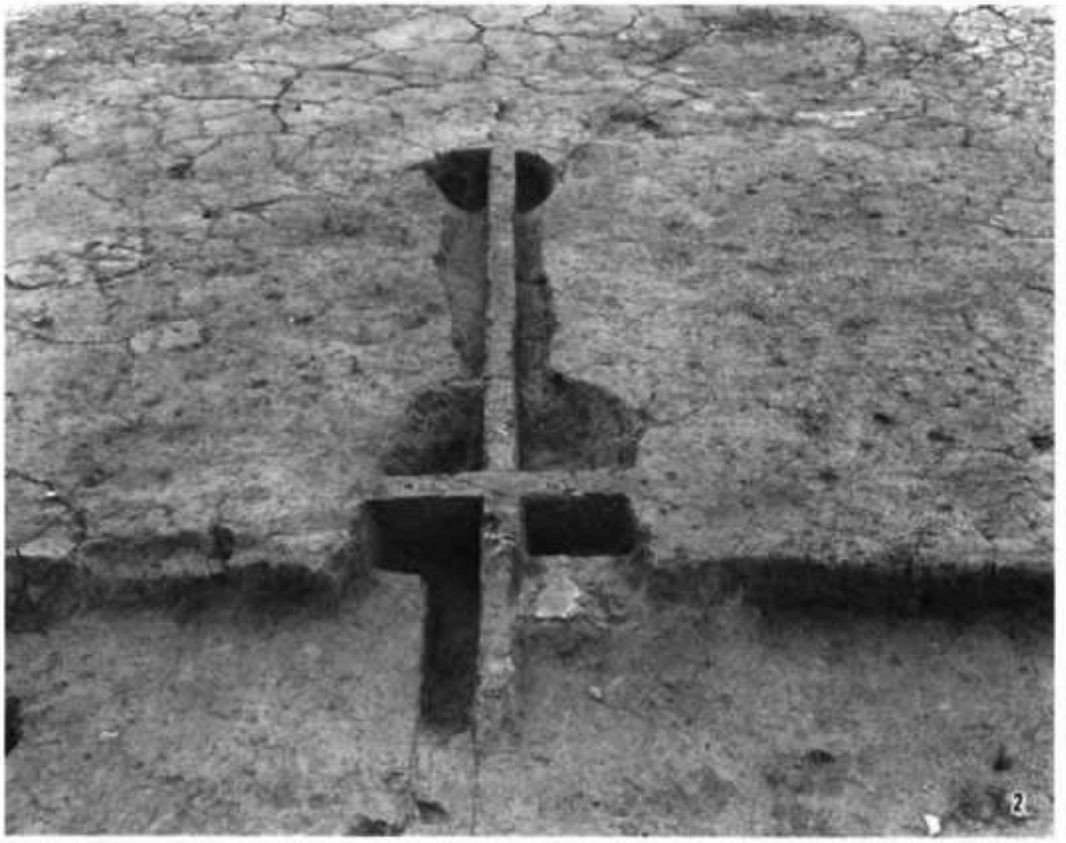


1

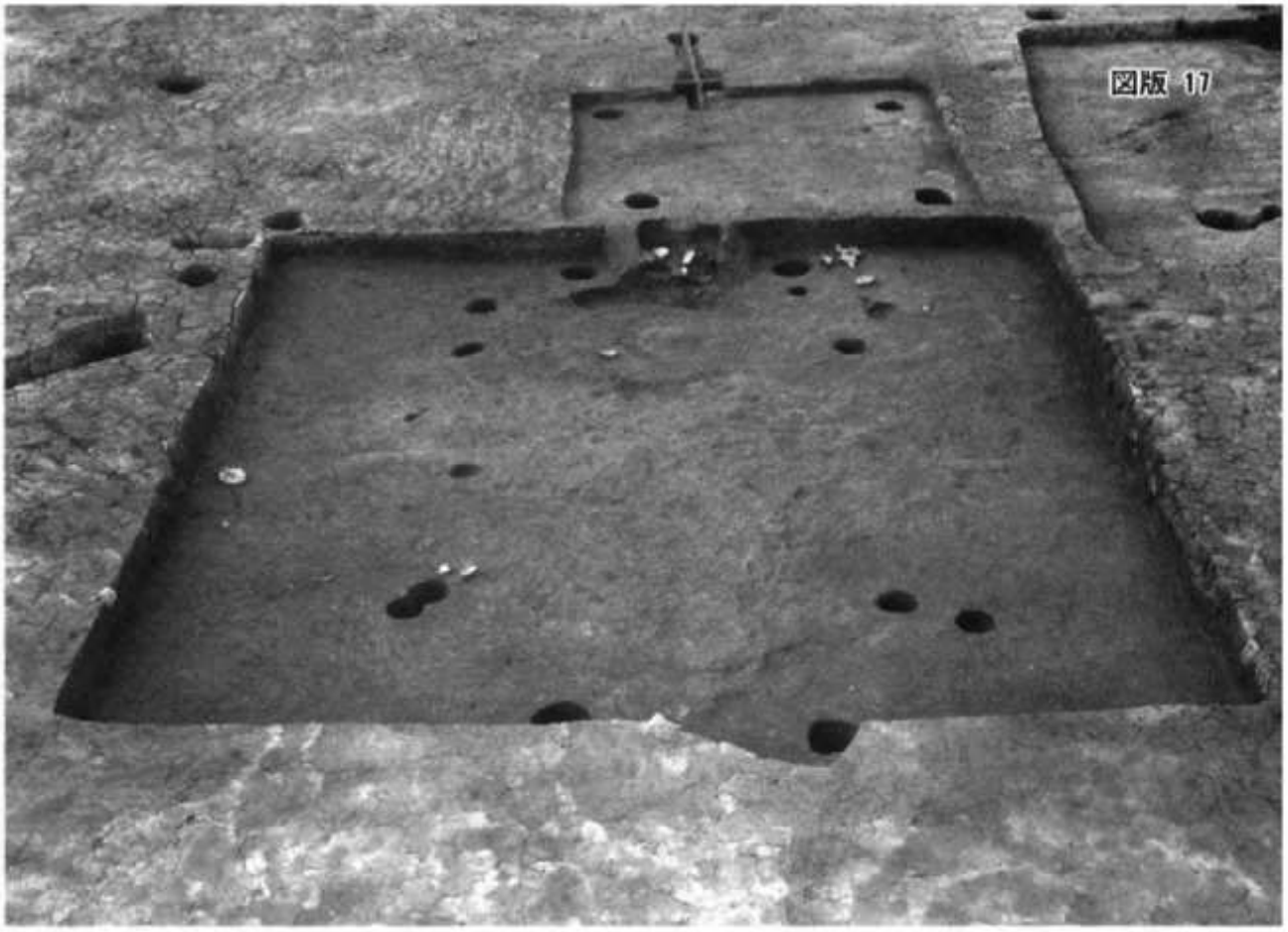
2

1　32号住居跡（南から）　　2　32号住居カマド（南から）





1　33号住居跡（南から）　　2　33号住居跡カマド（南から）



1

2

1　34号住居跡（南から）　　2　34号住居跡カマド（南から）

1

2

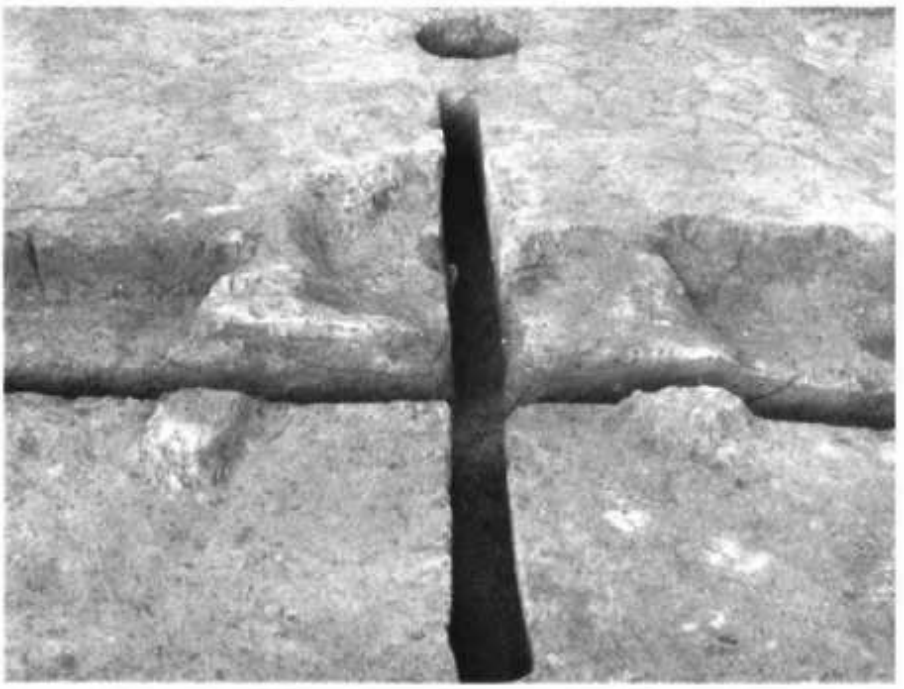
3

1　35号住居跡（南から）

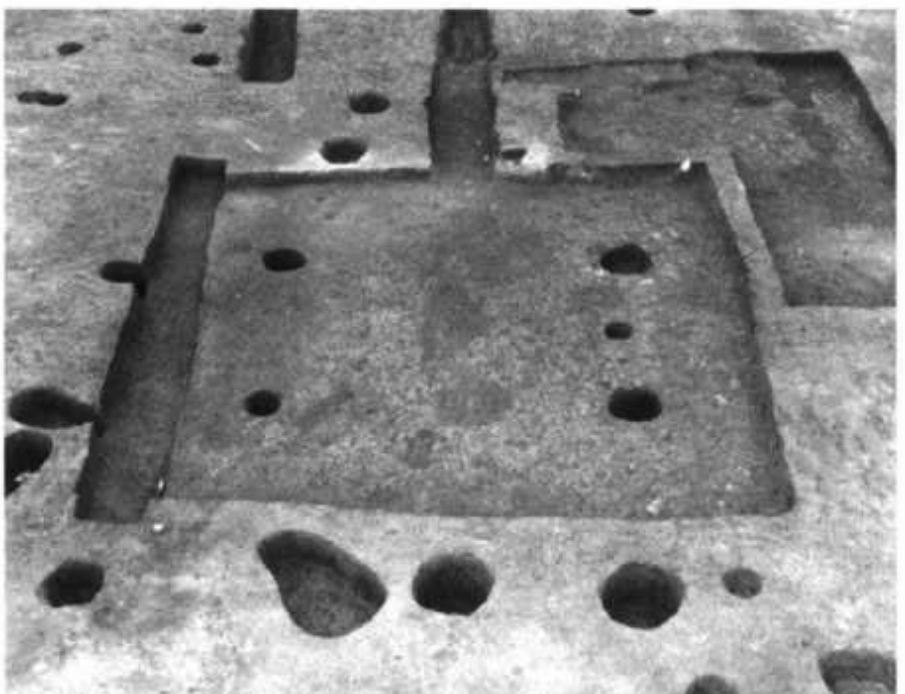
2　35号住居跡カマド（南から）

3　35号住居跡カマド（下部）

1



2



3

1　36号住居跡（南から）

2　36号住居跡カマド
（南から）

3　37号住居跡（南から）

1

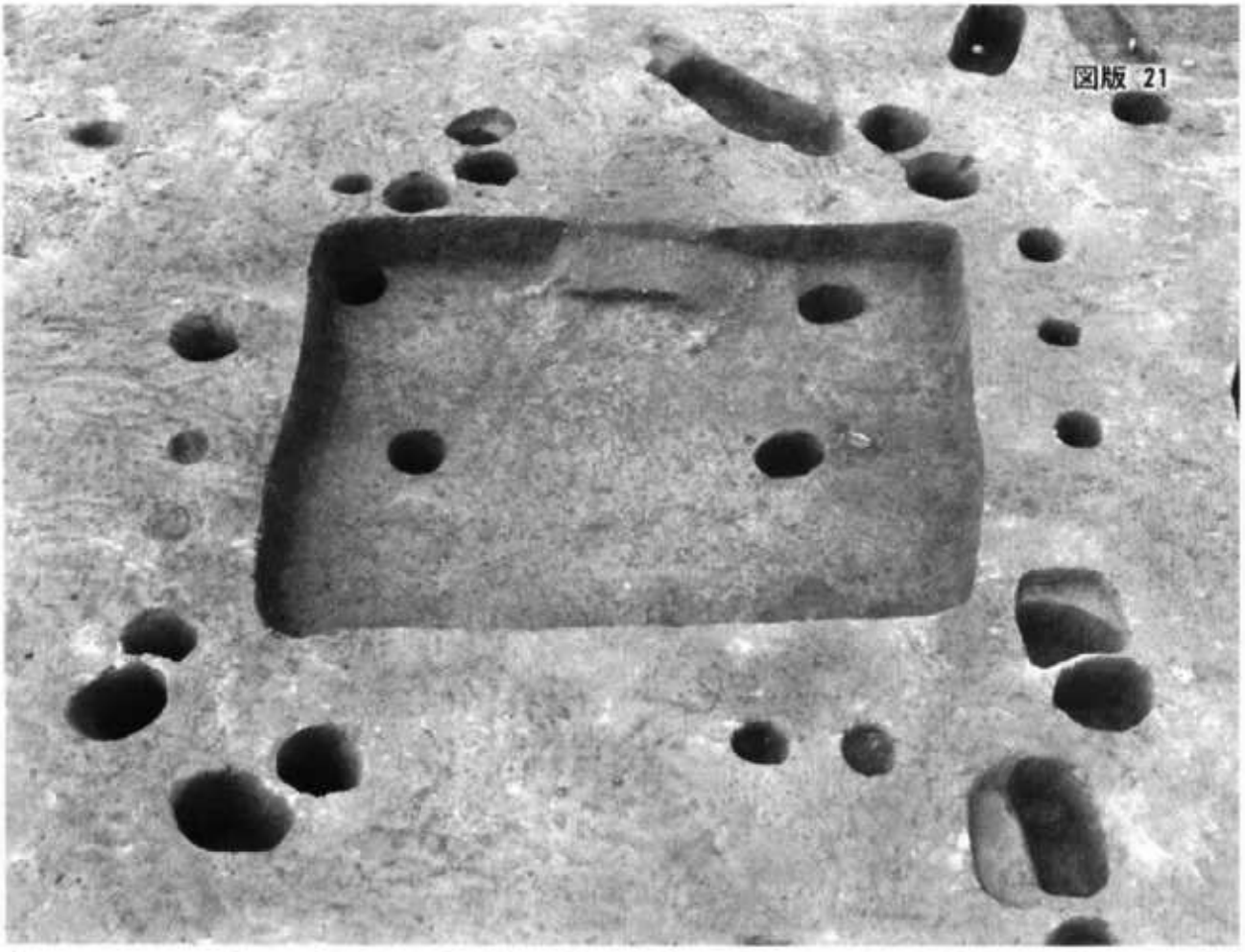
2

3

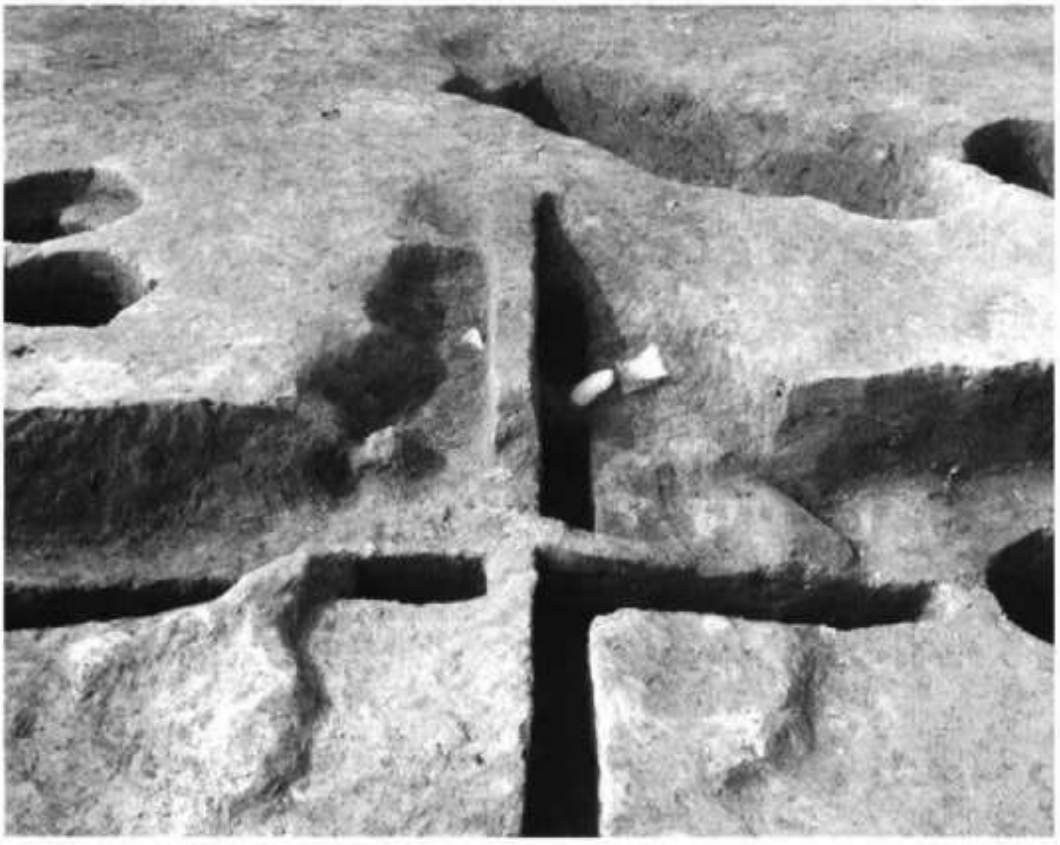
1　37号住居跡カマド
（南から）

2　38号住居跡（南から）

3　38号住居跡カマド
（南から）

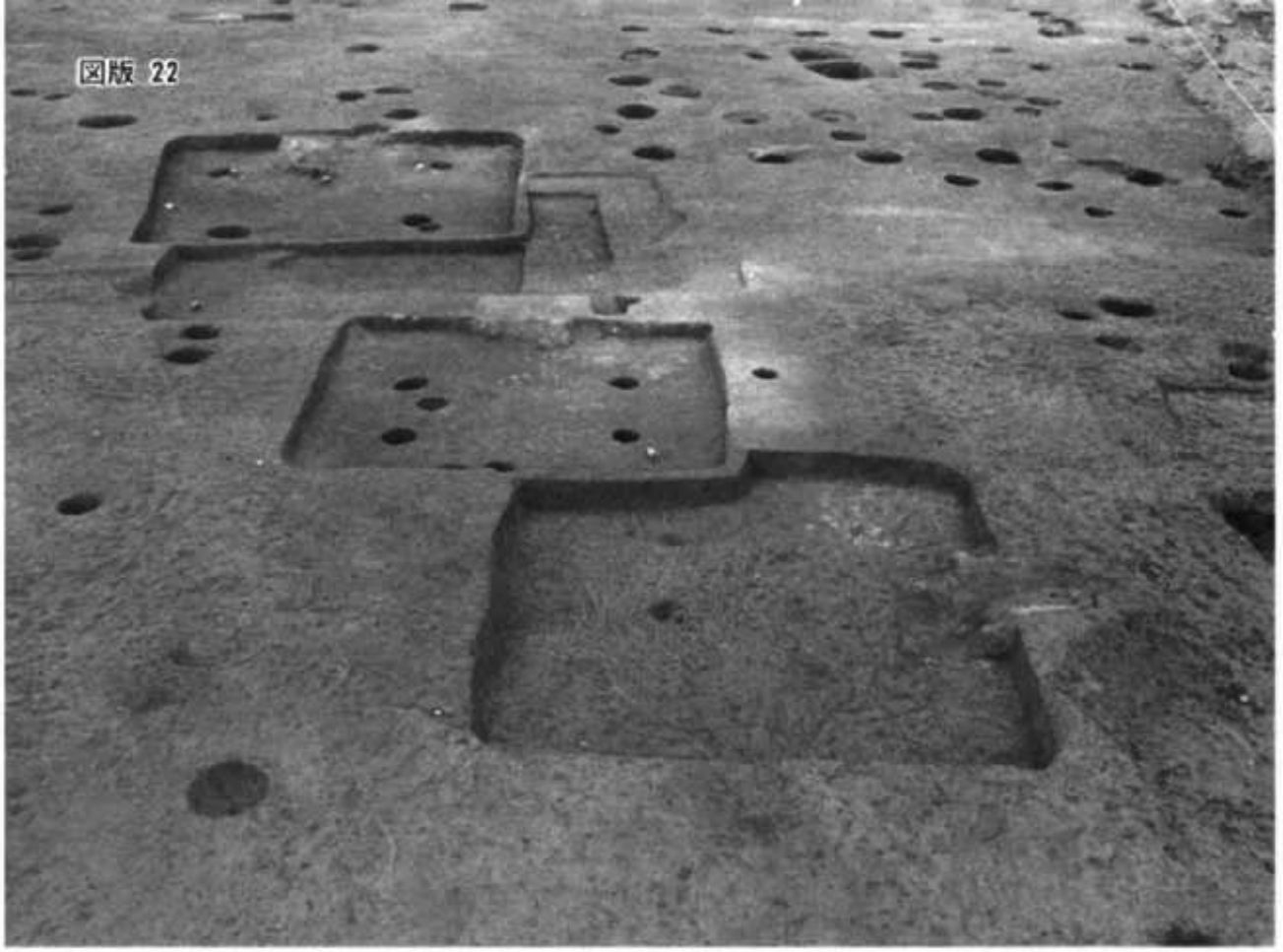


1



2

1　39号住居跡（南から）　　2　39号住居跡カマド（南から）

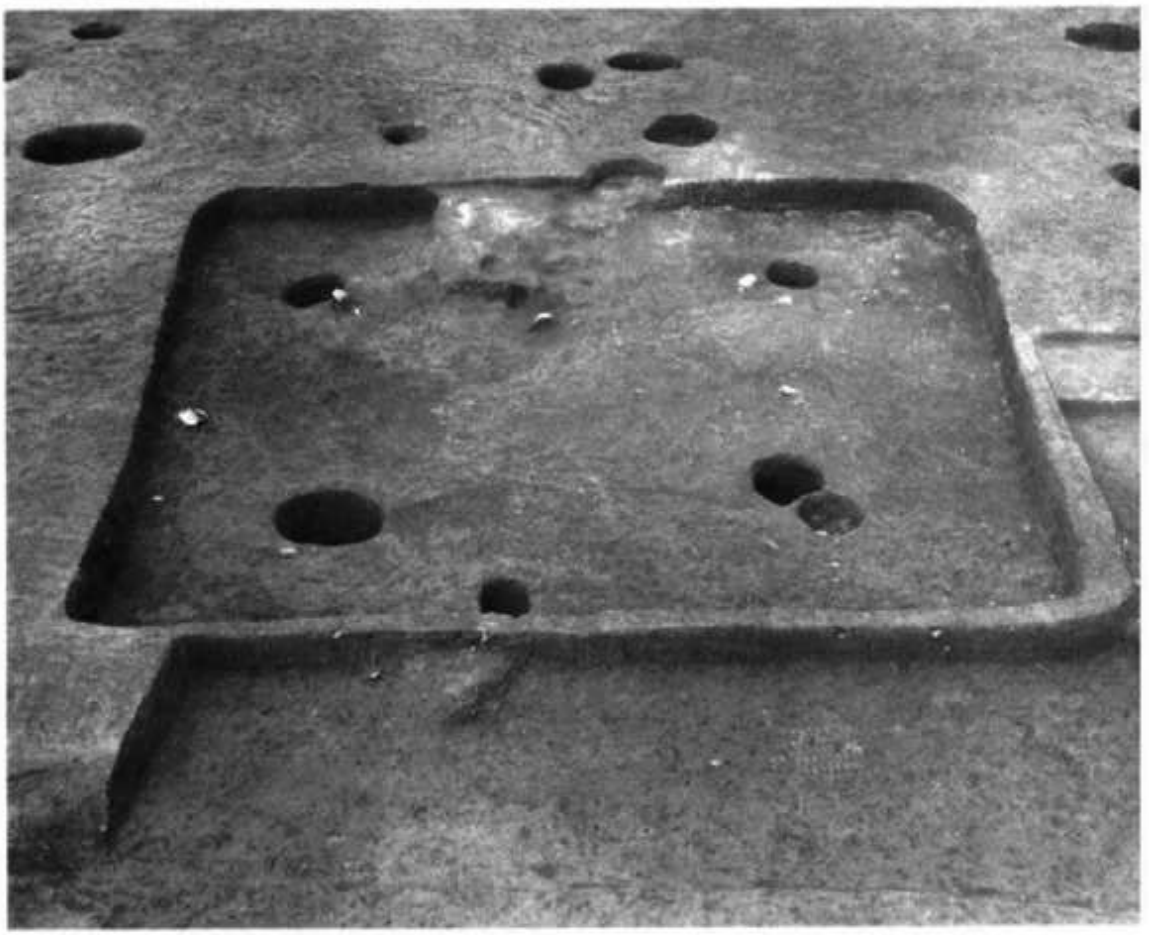


1

2

1　41～45号住居跡（東から）　　2　41号住居跡カマド（南から）

1



2

1　42号住居跡（東から）　　2　44号住居跡（東から）

1

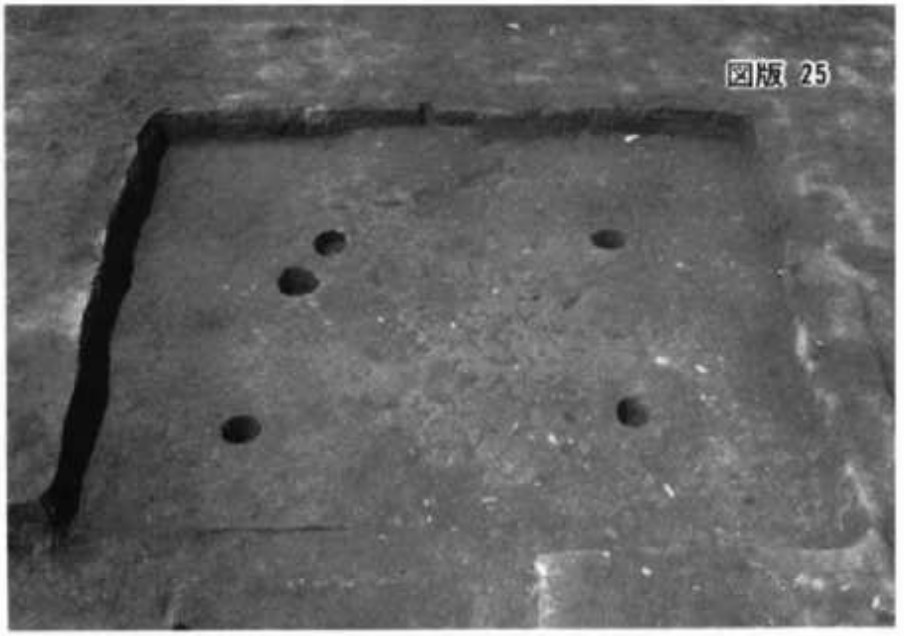
2

3

1　42号住居跡カマド
（東から）

2　44号住居跡カマド
（東から）

3　44号住居跡カマドB
（東から）



1

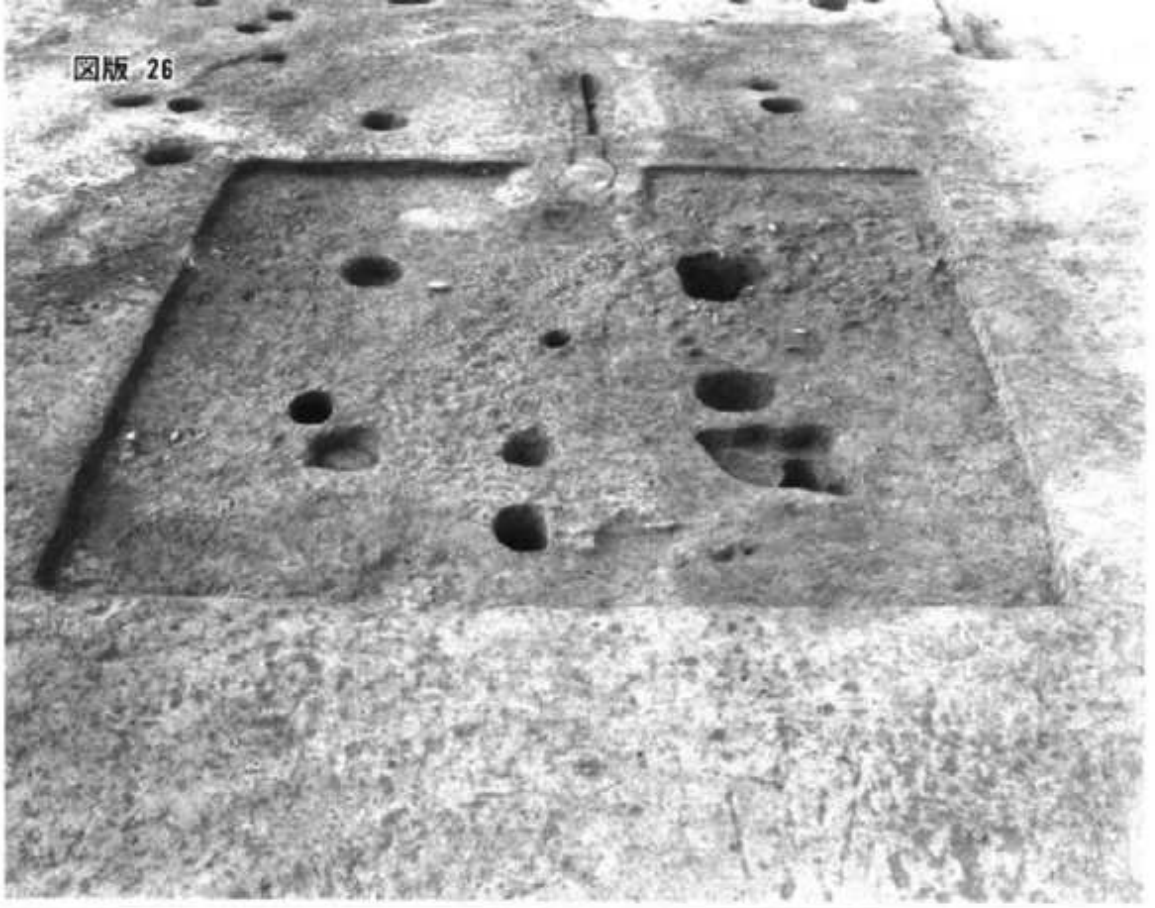
2

3

1　46号住居跡（南から）

2　46号住居跡カマド
（南から）

3　47号住居跡（南から）

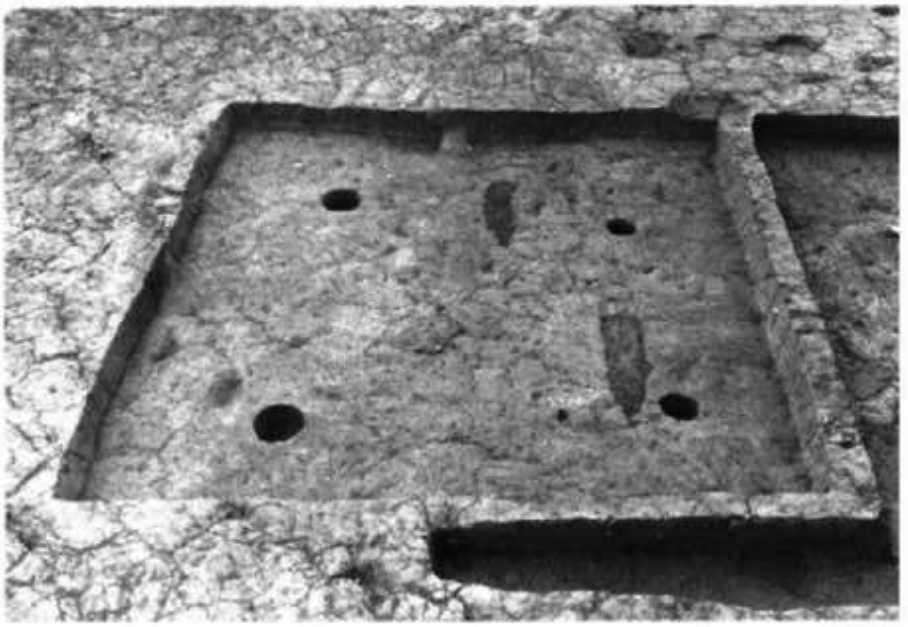


1

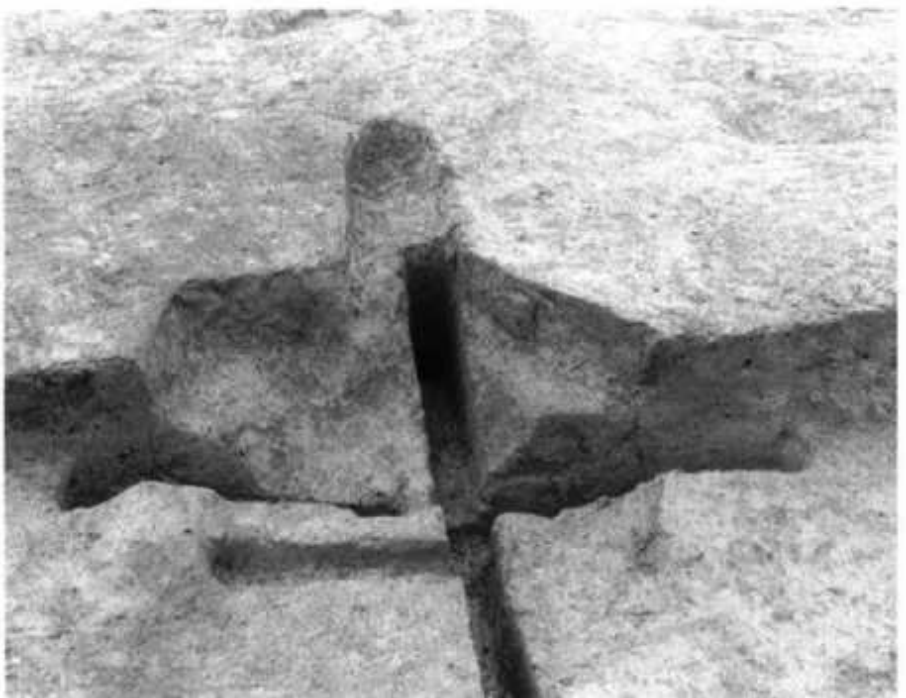
2

1　48号住居跡（南から）　　2　48号住居跡カマド（南から）

1



2

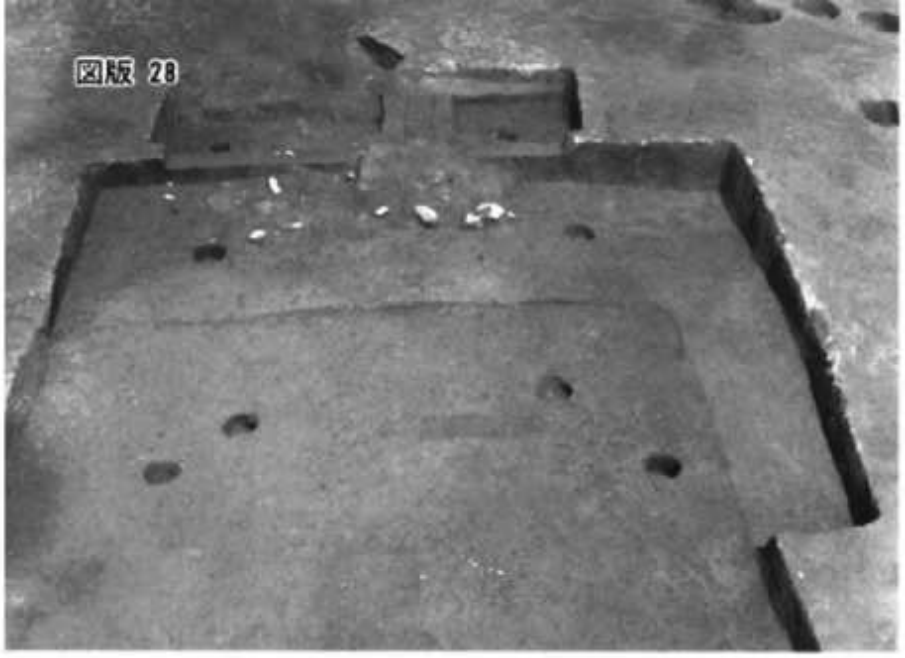


3

1　49～51号住居跡
（南から）

2　49号住居跡（東から）

3　49号住居跡カマド
（東から）



1

2

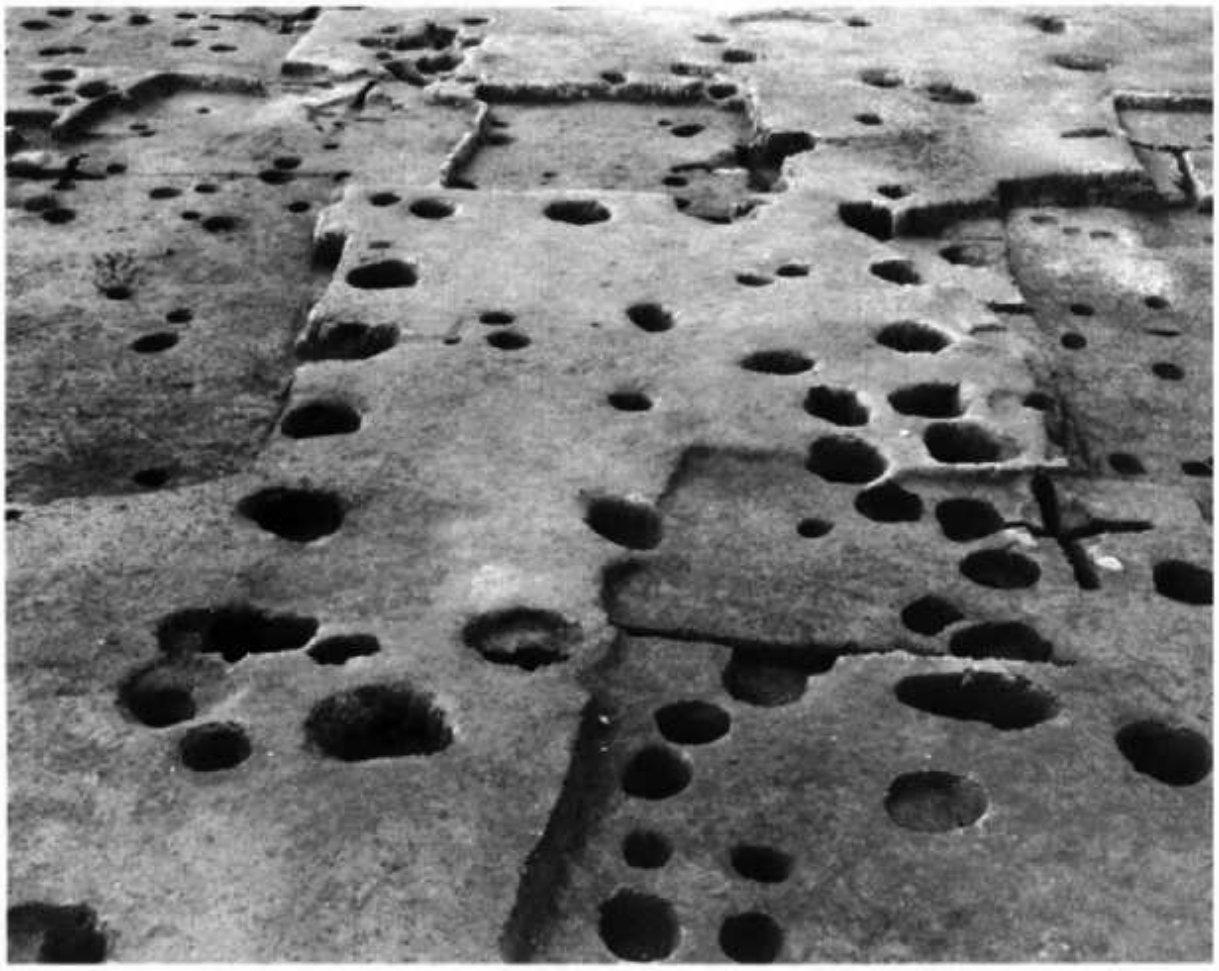
3

1　50・51号住居跡
（南から）

2　50号住居跡カマド
（南から）

3　51号住居跡カマド
（南から）

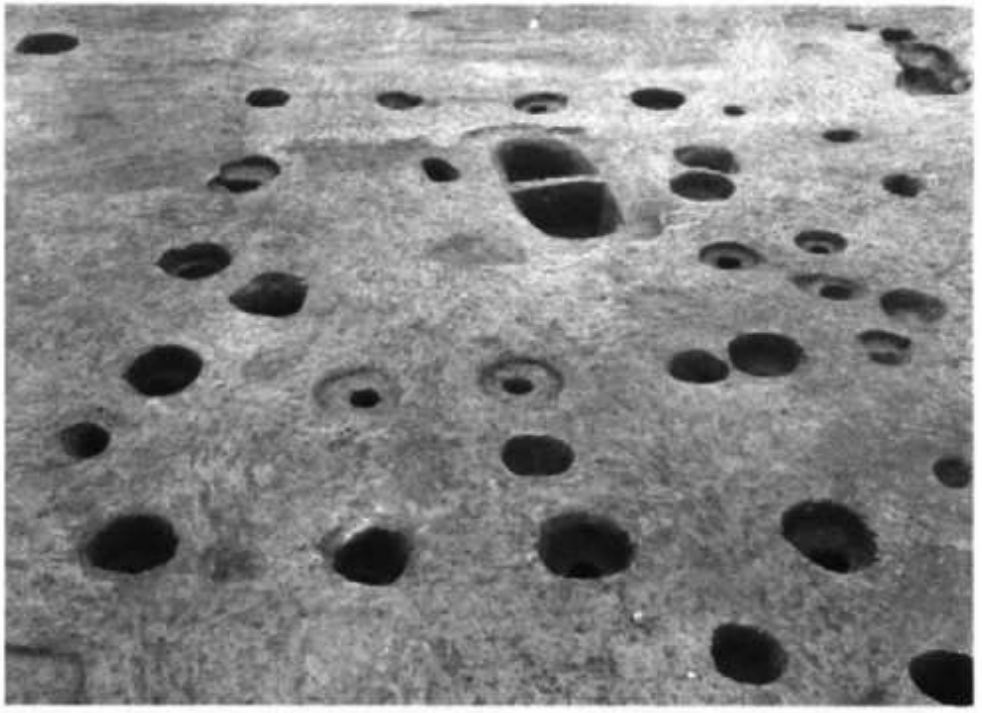
1



2

1　1・2号掘立柱建物（南から）　　2　7号掘立柱建物（東から）

1



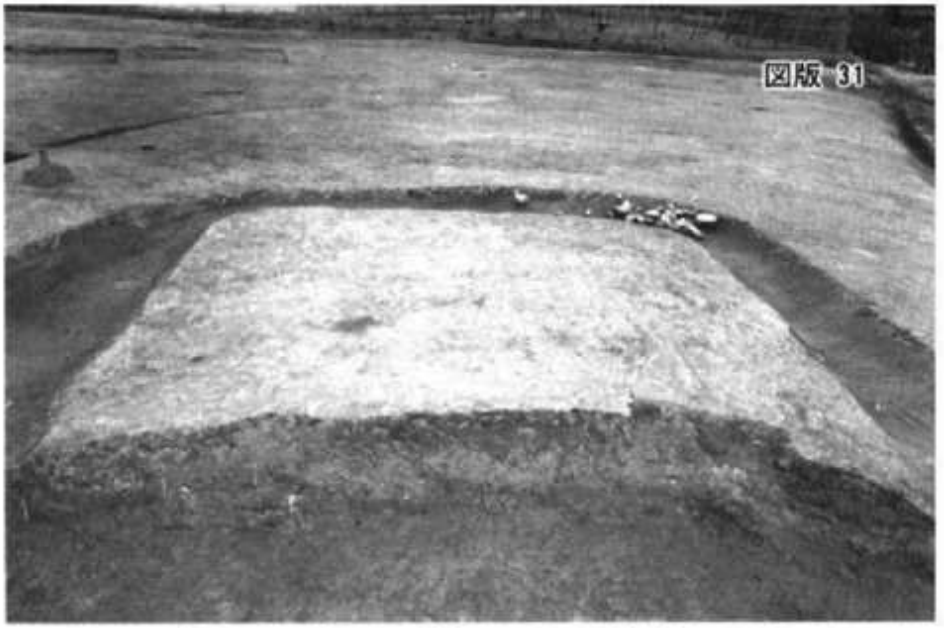
2

3

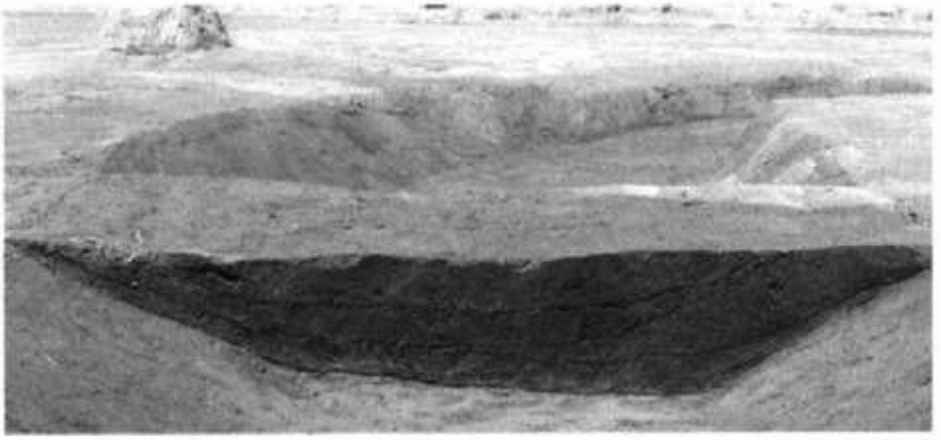
1　9号掘立柱建物
（南から）

2　9号掘立柱建物
（東から）

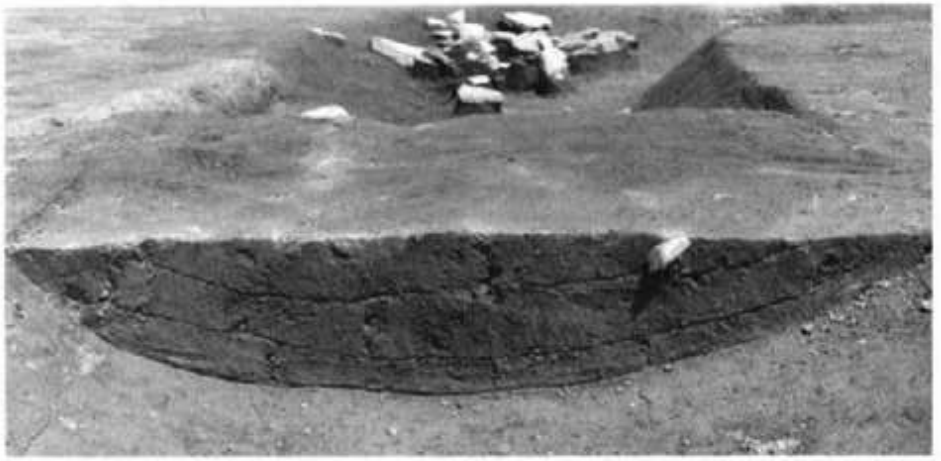
3　10号掘立柱建物
（東から）



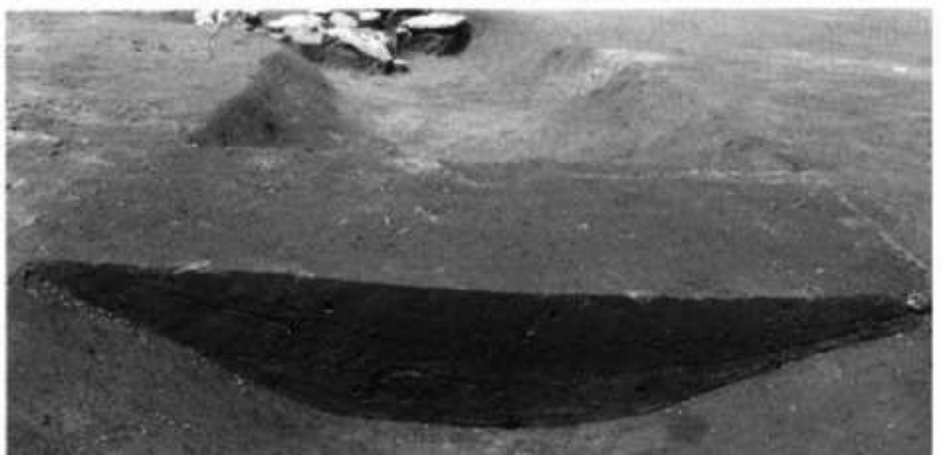
1



2



3



4

1　1号墳全景（南から）

2　周溝堆積状況1

3　周溝堆積状況2

4　周溝堆積状況3

図版 32

1

2

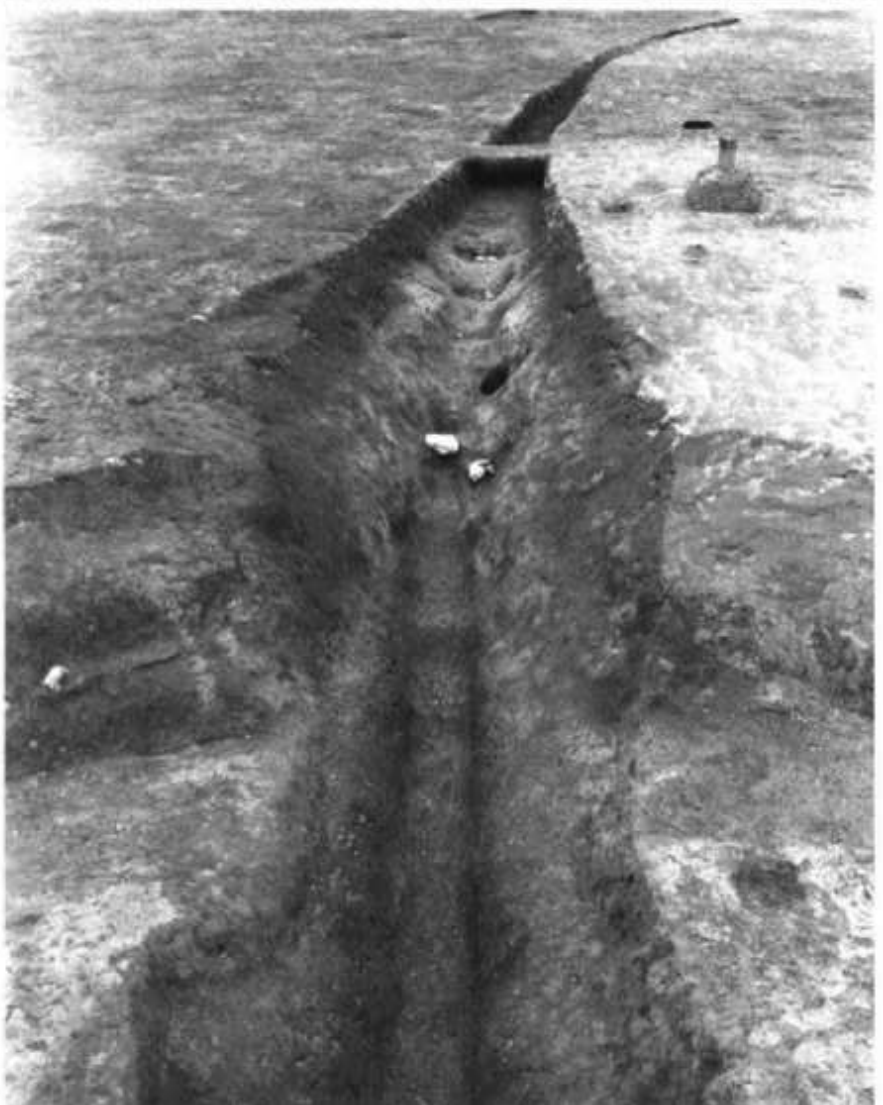
3

1　3号土壙墓（北西から）

2　3号土壙墓遺物
出土状況

3　10号土壙墓（北から）

1



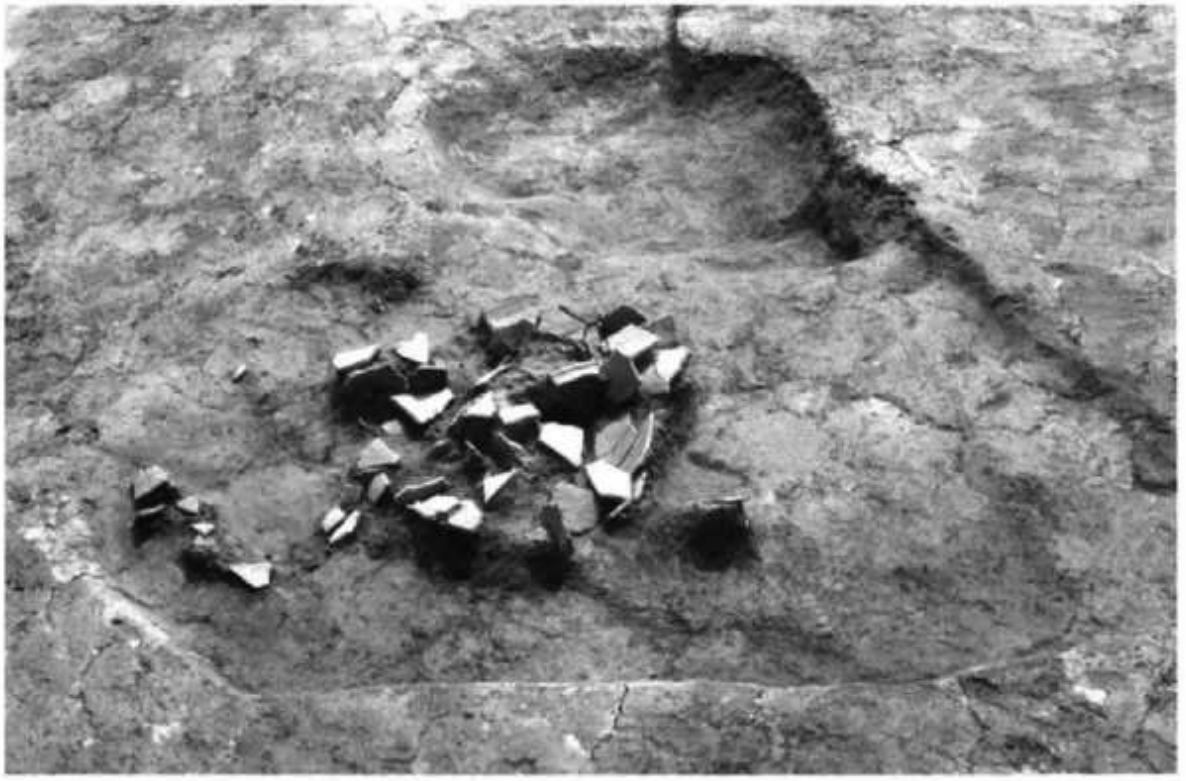
2

1　東端調査区全景と道路遺構（西から）

2　通路状遺構

1

2

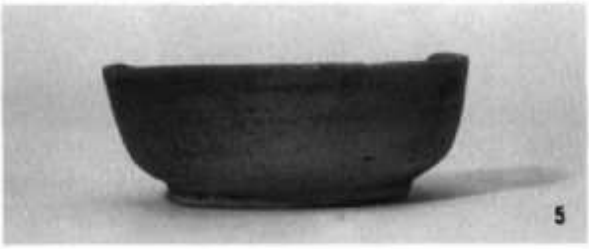


3

1　調査区北壁土層堆積状況 1　　2　調査区北壁土層堆積状況 2　　3　縄文時代甕棺墓（東から）

1

4


5

11

13

22

65

73

75

82

94

98

104

110

111

住居跡出土土器 1

119

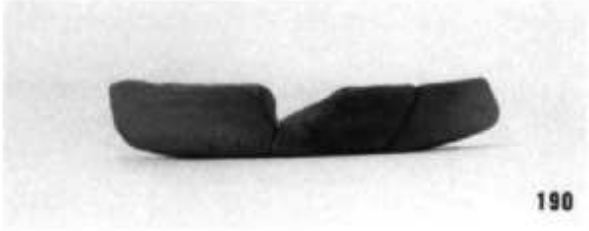
134

154

169

172

189


190

224

228

254

256

259

270

住居跡出土土器 2

283

294

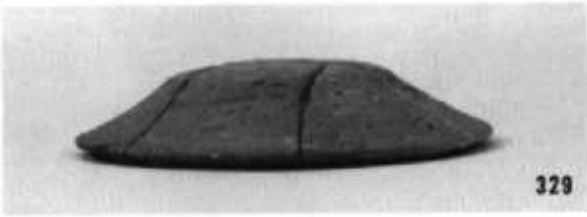
312

316

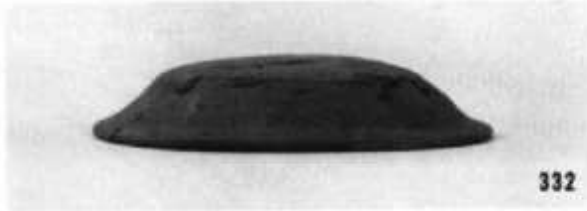
318

319

311


329

330


332

333

340

344

345

348

354

355

359

385

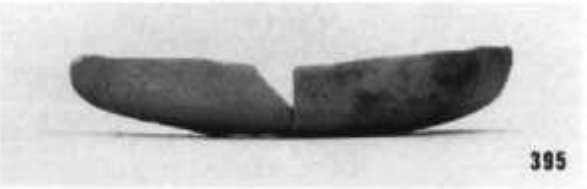
388

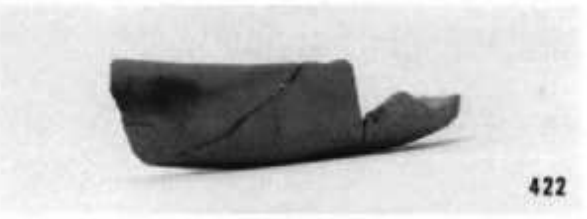
361

362

393

394


395


422

425

434

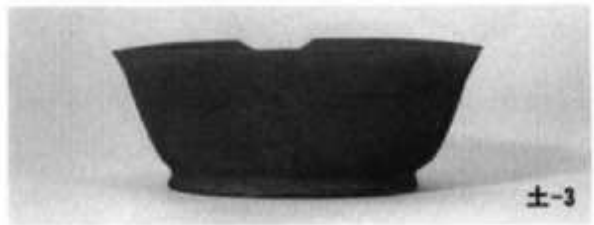
438

448

460

土-1

土-2


土-3

土-4

1

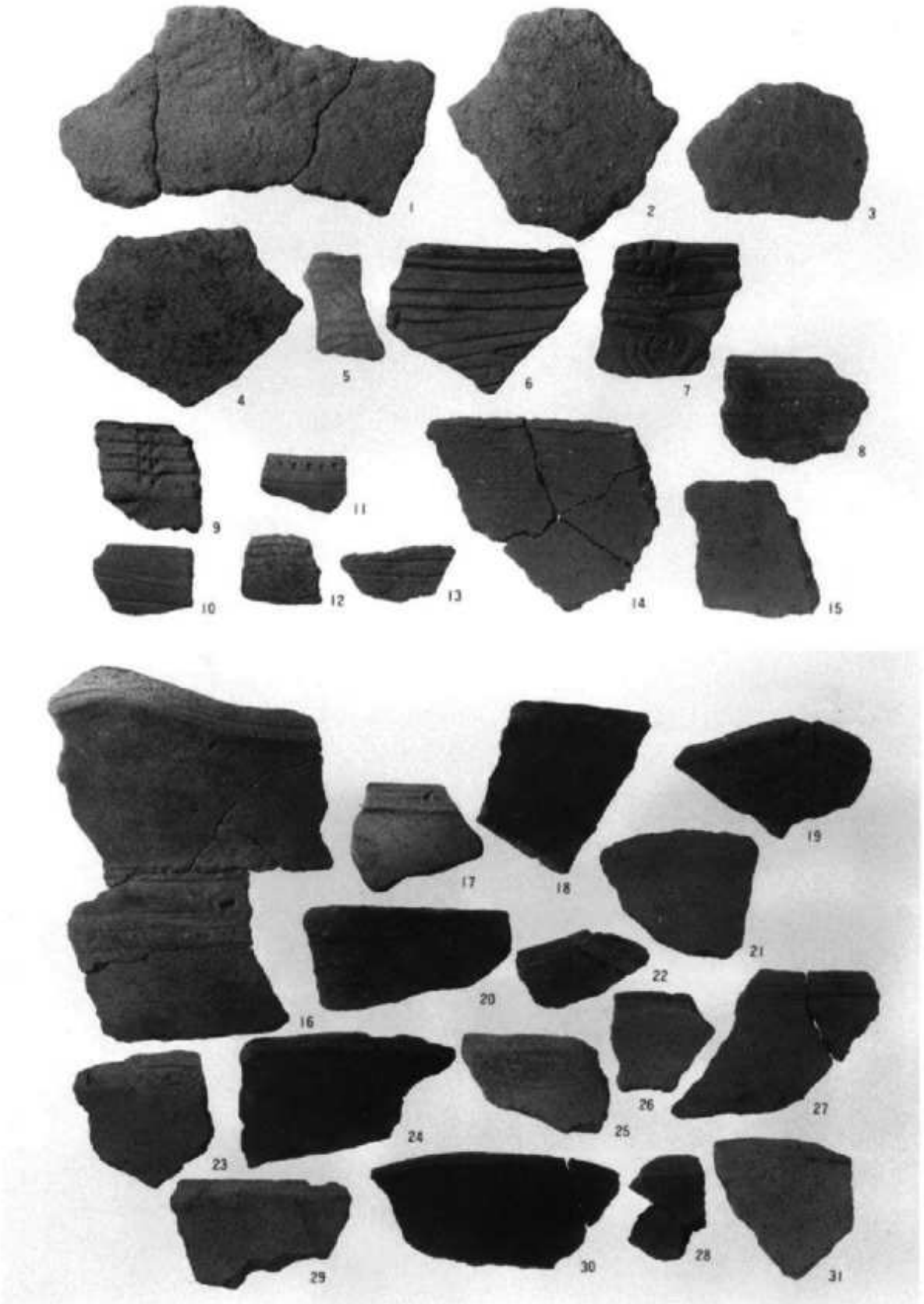
3

4

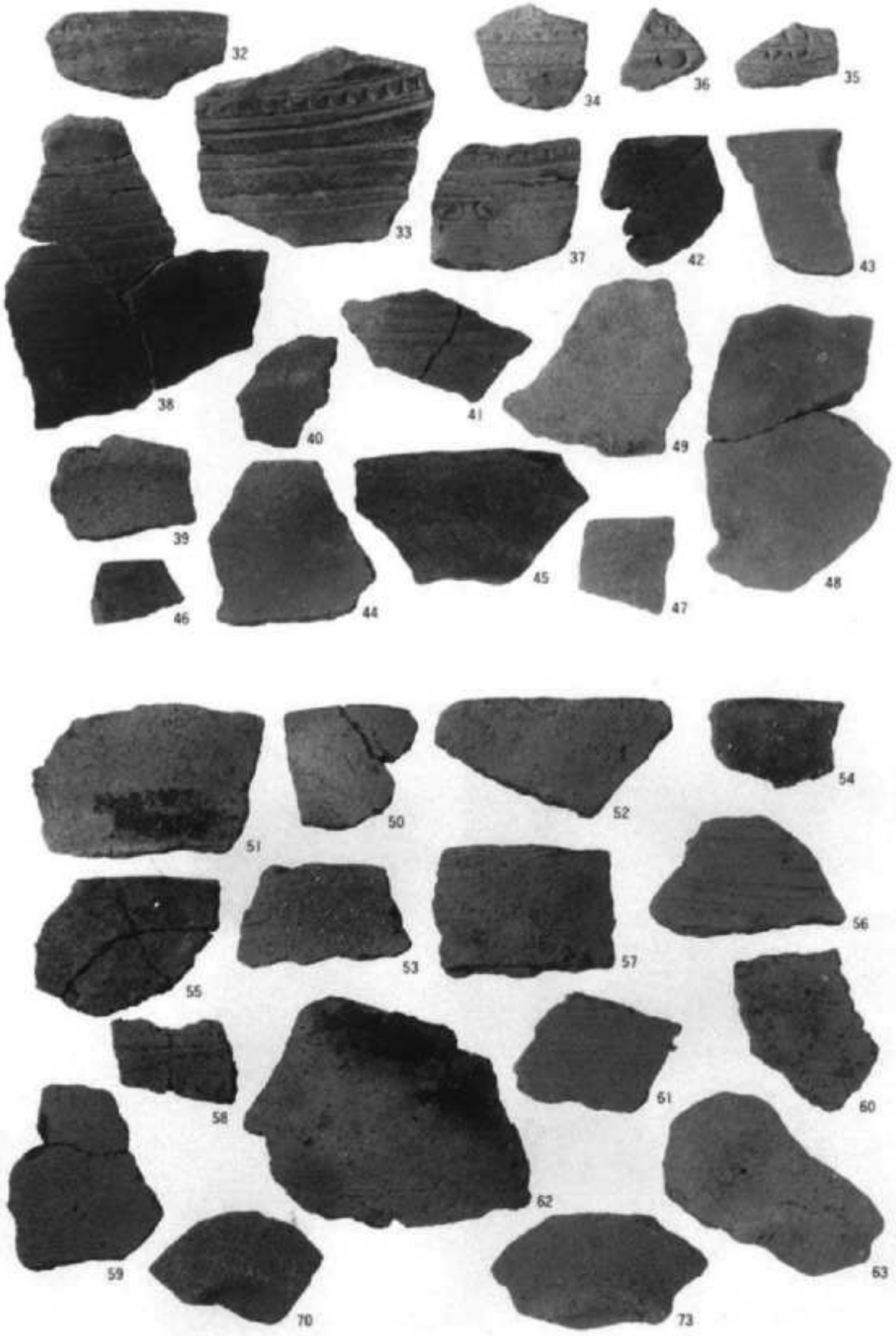
5

6

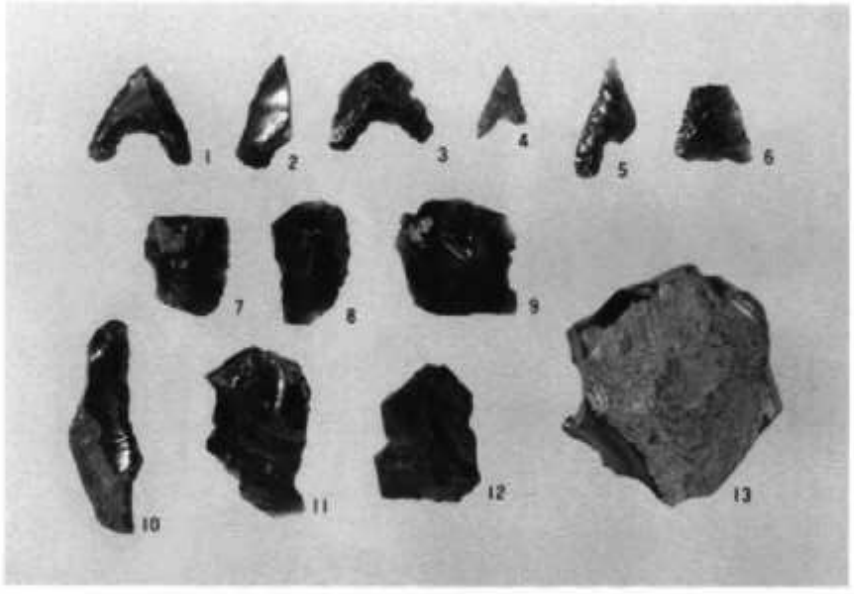
8

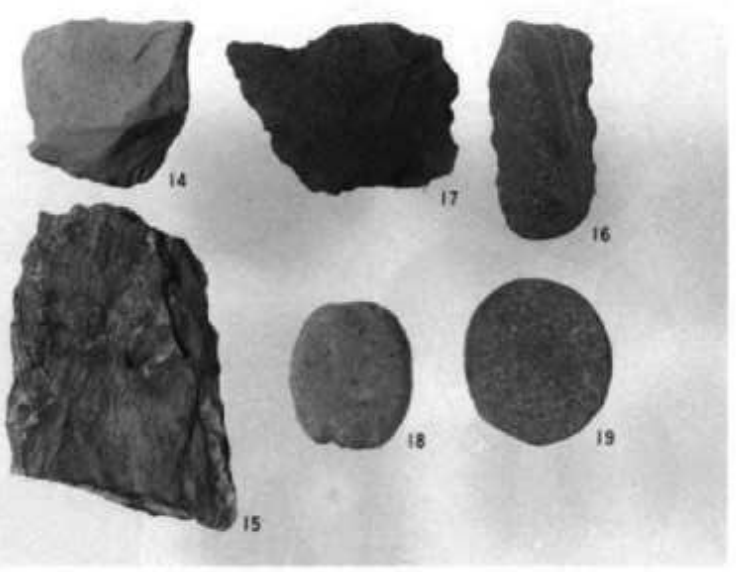


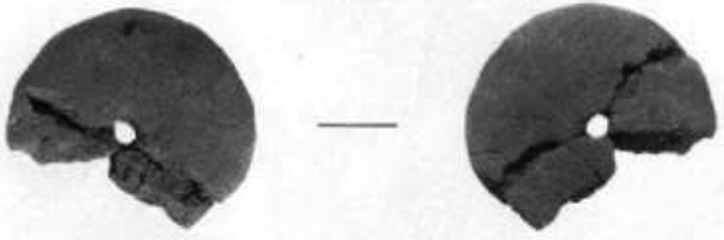
縄文土器 1

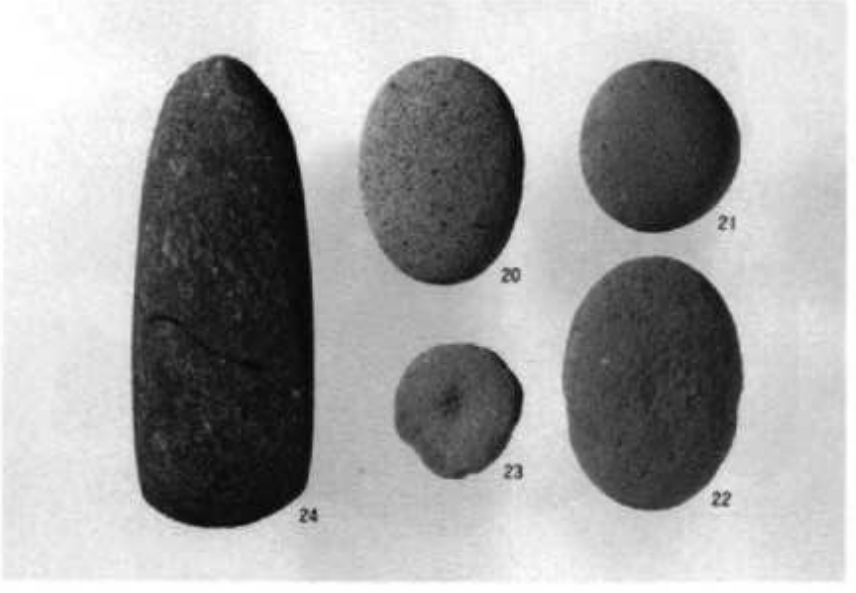

32
34
36
35
33
37
42
43
38
40
41
49
39
45
47
48
46
44
51
50
52
54
55
53
57
56
58
61
60
62
59
63
70
73

縄文土器 2


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13


14
17
16
15
18
19




21
20
24
23
22

9

10

11

13

22

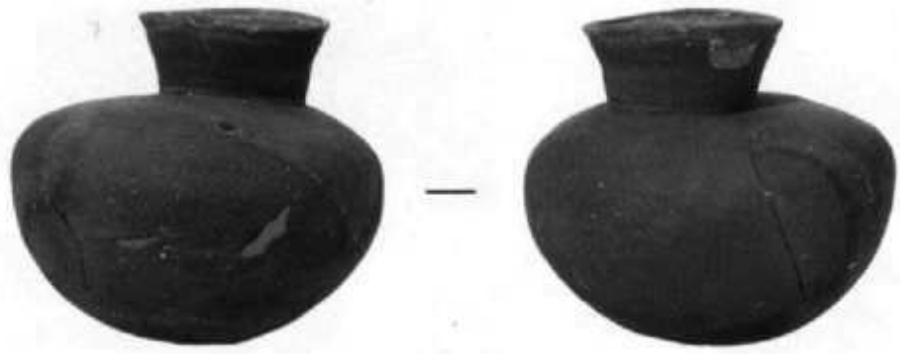
46

42

47

50

51


48

不整形土坑・落ち込み出土土器

58

60

61

66

67

68

69

70

71

72

74

76

78

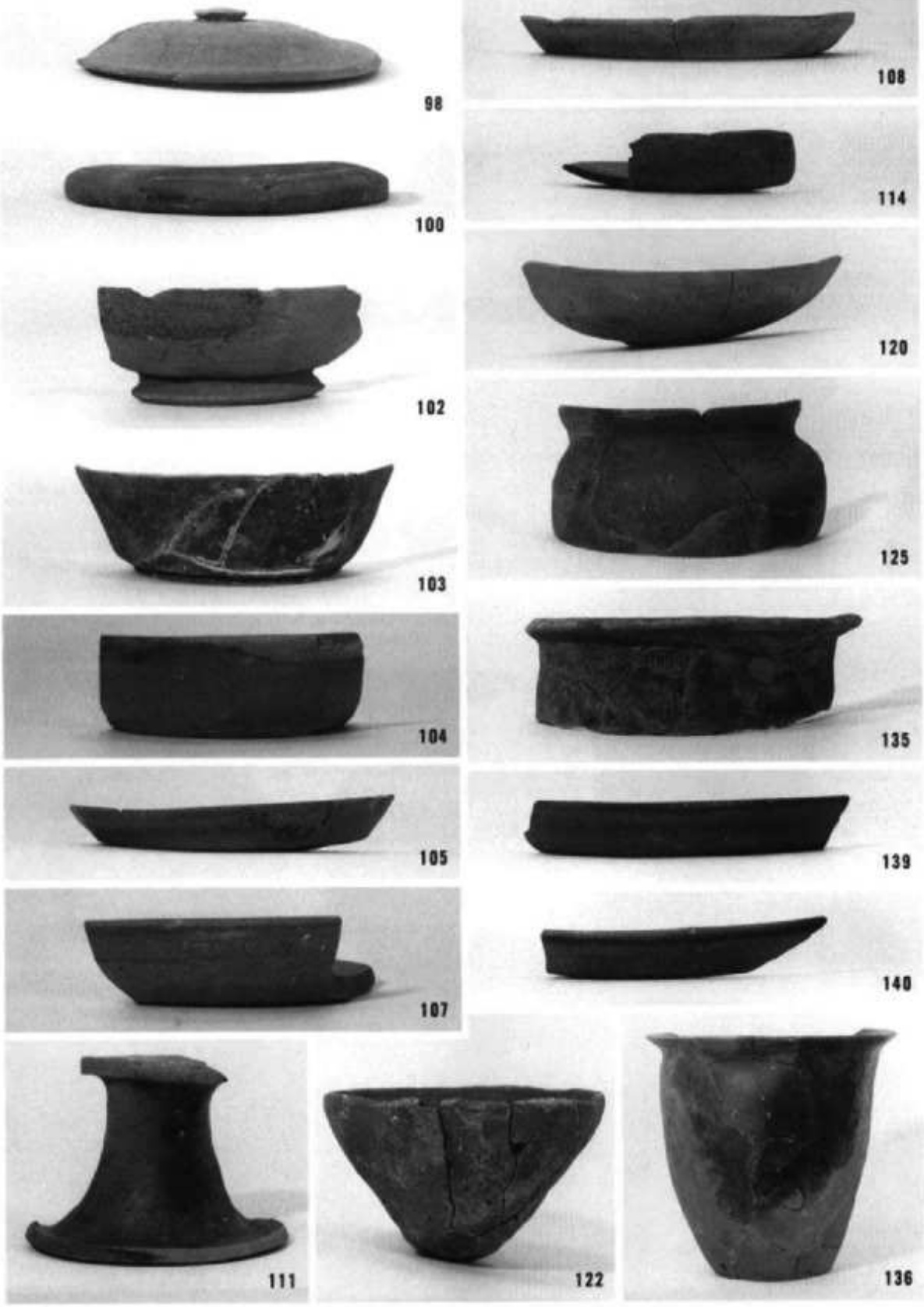
82

83

84

86

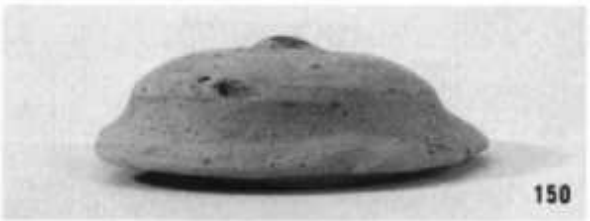
柱穴状ピット出土土器

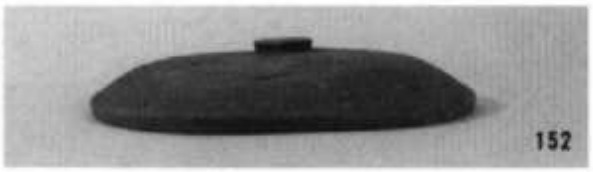

98
100
102
103
104
105
107
111
122
108
114
120
125
135
139
140
136

包含層出土土器

148

151


150


152

154

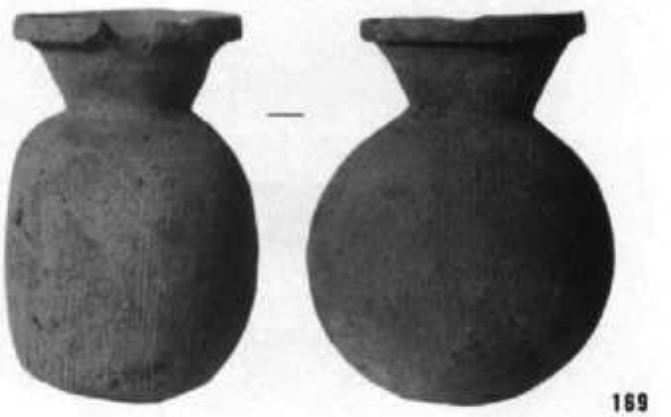
156

160

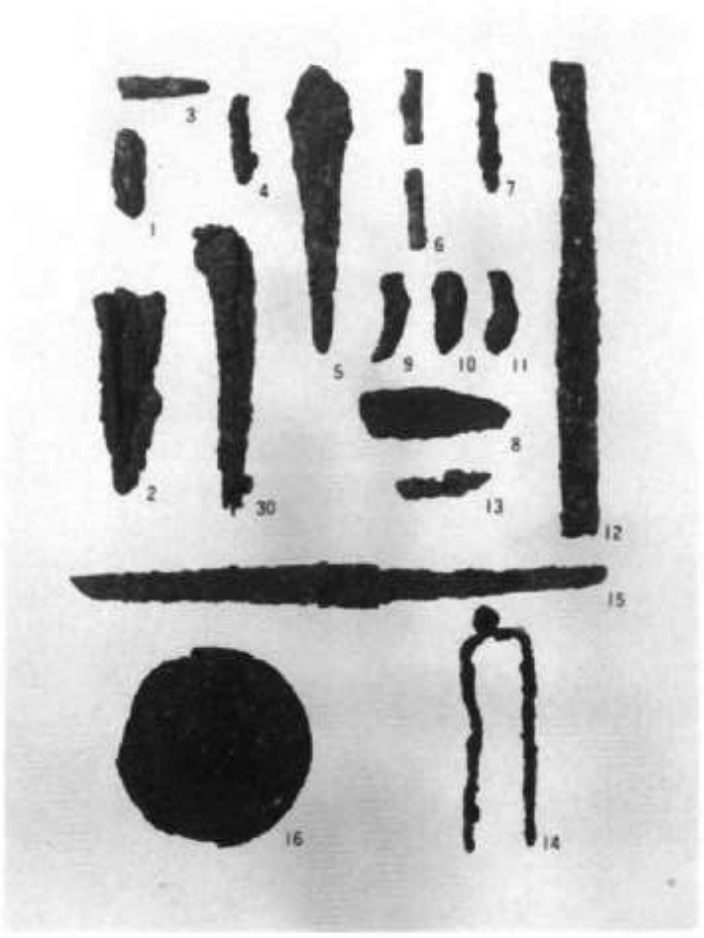
157

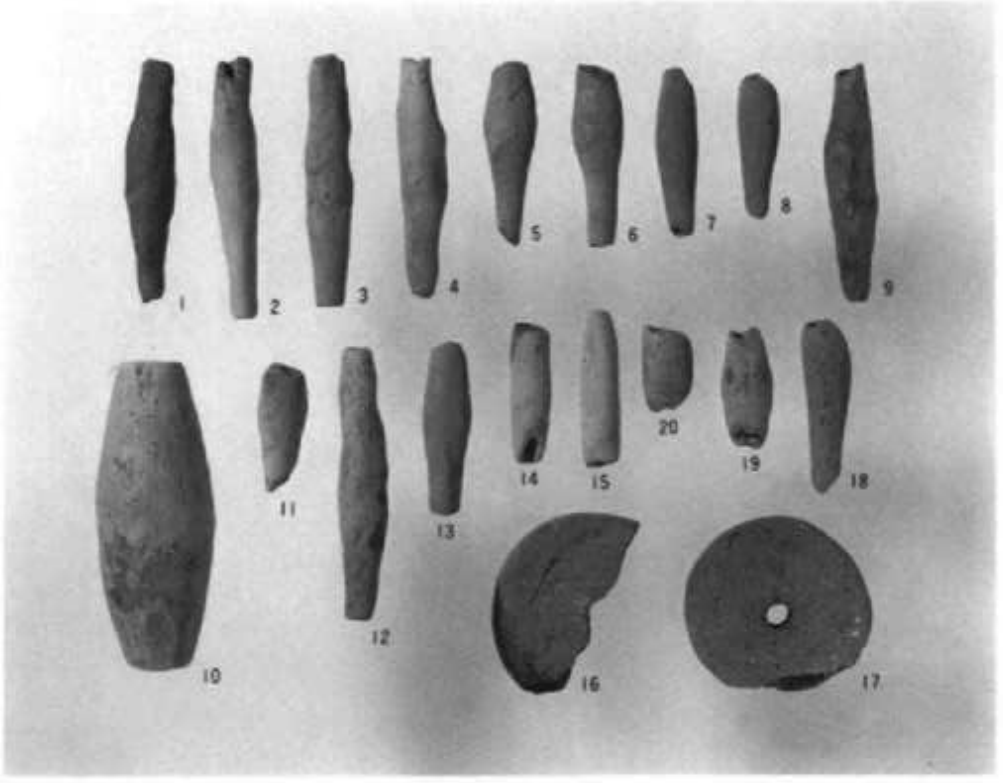
161

168

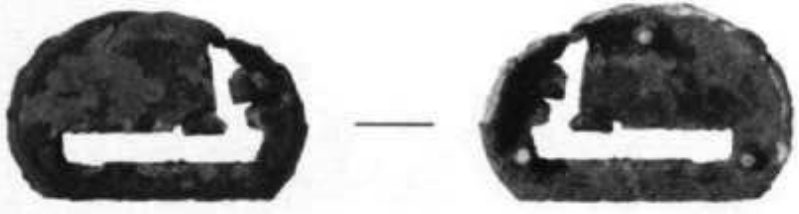

169

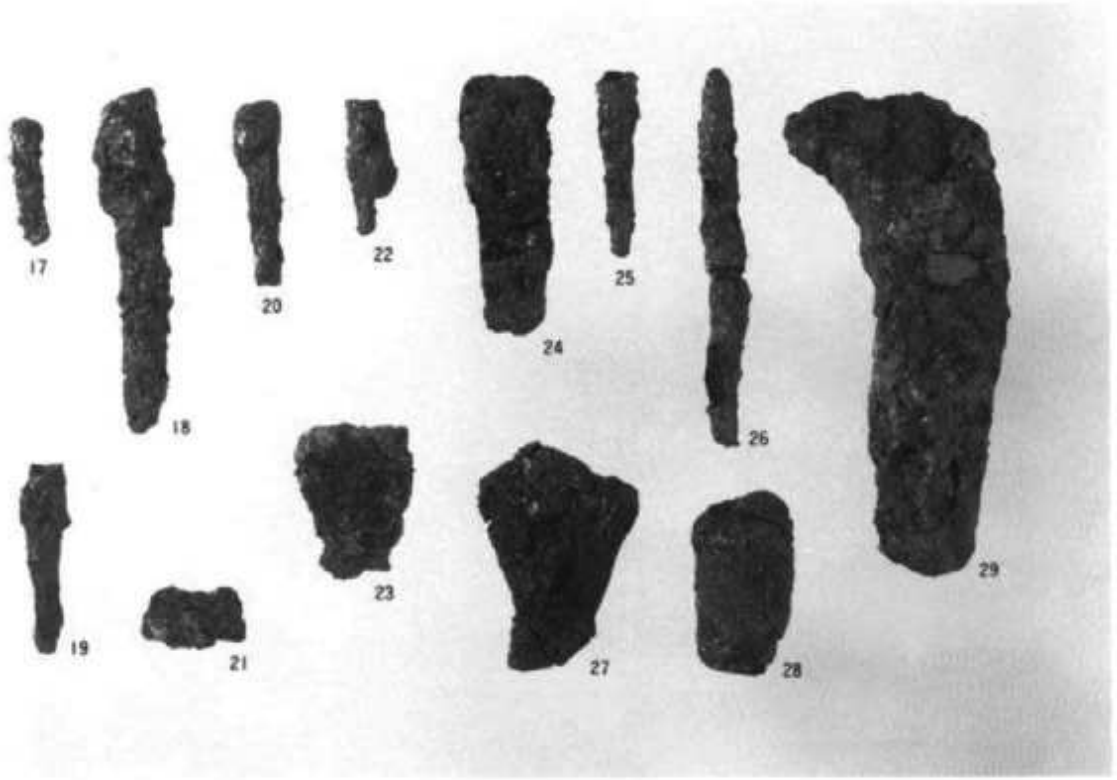
表採等の土器

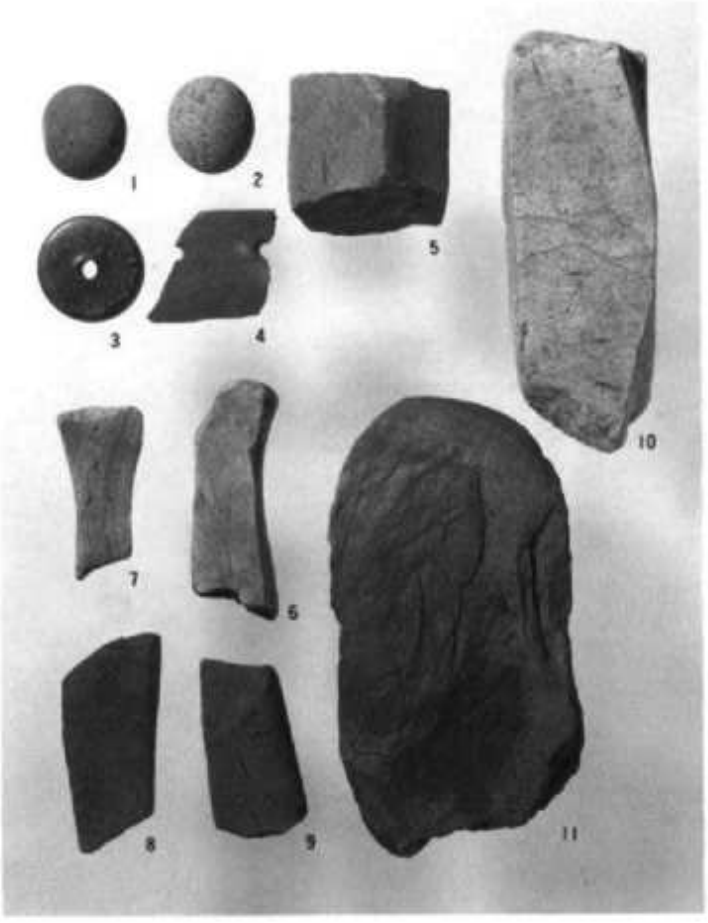

3
1
4
7
6
5
9
10
11
8
2
30
13
12
15
16
14

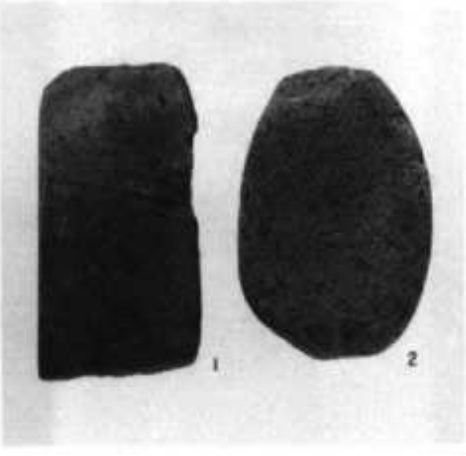

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
20
19
18
16
17

1
2









出土石器・鉄製品2・線刻文様

報告書抄録

フリガナ	アサクラグンアサクラマチシュウゼイナガシマイセキノチョウサ
書名	朝倉郡朝倉町所在長島遺跡の調査
副書名	
巻次	I（C地区）
シリーズ名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	—34—
編集者名	小池史哲
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812　福岡市博多区東公園7—7
発行年月日	西暦1995年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ナガシマ 長島 C地区	アサクラマチオオアザ 朝倉町大字 スガワアザナガシマ 須川字長島 1943～1954・ 1960～1968・ 1990・1991・1966～ 2014	404420	570366	35°22′45″	130°44′40″	19820901 ｜ 19831018	5,500㎡	九州横断 道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長島C		古墳～奈良 縄文	住居跡51 掘立柱建物跡10 古墳1 土壙墓14 不整形土坑1 通路状遺構1 道路状遺構1 甕棺墓1	縄文土器，石器 弥生土器，石器 土師器 須恵器 鉄器，玉類	

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード 2133051
登録年度 H6	登録番号 2

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―34―

平成７年３月31日

発行　福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園７番７号

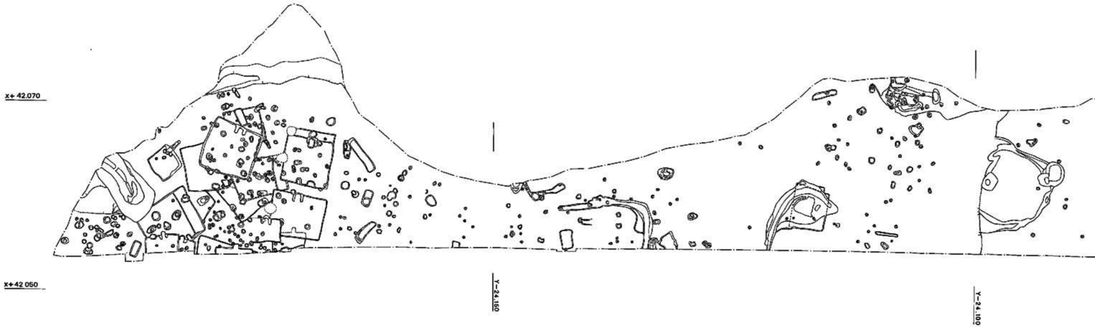
印刷　株式会社　川島弘文社

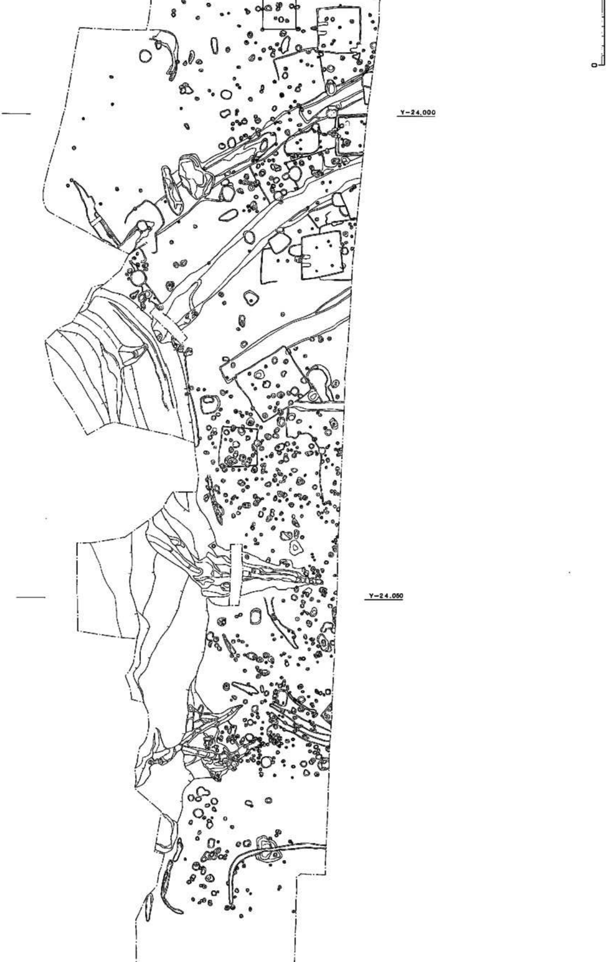
福岡市東区箱崎ふ頭６丁目６番41号

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告
—34—

朝倉郡朝倉町所在長島遺跡の調査Ⅰ
（C地区）

付　図

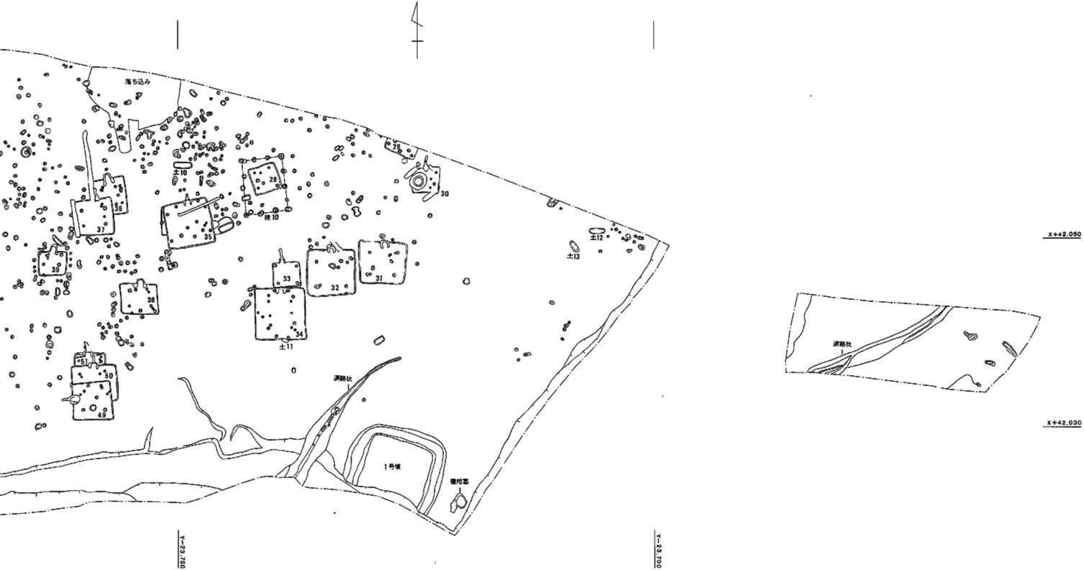

x+ 42.070
x+42 050
Y-24.150
Y-24.100


0
Y-24.000
Y-24.050

Y-23.950
Y-23.900
20
40m

付図1　長島遺跡遺構配置図（1/300）

建1
建2
建3
建4
建5
建6
建7
建8
建9
建11
土1
土2
土3
土4
土5
土6
土7
土8
土9
土14
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
40
41
42
43
44
45
46
47
48
不整形土坑
Y−23.850
Y−23.800


落ち込み
土10
28
建10
29
30
36
37
35
土12
土13
39
33
32
31
38
34
土11
51
50
49
溝跡状
1号墳
壺棺墓
溝跡状
X+42.050
X+42.030
Y−23.760
Y−23.700

付図2　長島遺跡C地区遺構配置図（1/200）